



Title	日本語接続詞の通時的研究 ―日本語接続詞の成立と展開―
Author(s)	百瀬, みのり
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/76317
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

令和元年度（2019年度）提出
大阪大学大学院 博士学位申請論文

日本語接続詞の通時的研究－日本語接続詞の成立と展開－

文化表現論専攻 博士後期課程3年
学籍番号 20B14821
百瀬みのり

目次

序章	7
1. 本研究の目的	7
2. 本論の構成	8
3. 本論の枠組み	10
日本語における「接続」	10
先行研究とその問題点	11
I. 接続詞と副詞とは別の品詞と考える立場	11
II. 接続詞を副詞と見る立場	12
III. 接続詞を誘導語と見る立場	12
IV. 接続詞を辞と見る立場	13
本章	14
1) 古代語における接続形式（第1部）	15
第1章 1. 古代語に見られる前出形式の反復による形式をもつ接続形式	17
1.1. はじめに	17
1.2. 前出形式の反復による接続の用例と特徴	17
1.3. まとめ	19
第2章 2. 「形式名詞+助詞」の形式をもつ接続形式（1）	
－「モノヲ」の形式－	21
2.1. はじめに	21
2.2. 体言とは何か	22
2.3. 名詞とは何か	23
2.4. 形式名詞とは何か	25
2.5. 形式名詞「モノ」と「コト」	30
2.6. 接続形式「モノヲ」について	33
2.7. 「モノヲ」の用例【上代語】	35
「モノヲ」の用例【中古語】	37
「モノヲ」の用例【中世語】	40
「モノヲ」の用例【近世語】	43
2.8. まとめ	46
第3章 3. 「用言活用形+接続助詞」の形式をもつ接続形式	49

3.1. はじめに	49
3.2. 先行研究とその主張	49
3.3. 順接条件について	49
3.4. 逆接条件について	55
3.5. まとめ	56
第4章 4. 「指示副詞+接続助詞テ」の形式をもつ接続形式	58
4.1. 本章の概観	58
4.2. 古典散文作品における「カクテ」と「カカルホドニ」について	60
4.2.1. はじめに	60
4.2.2. 先行研究と問題の所在	60
4.2.3. 中古散文物語作品中の「カクテ」と「カカルホドニ」の分類	61
4.2.4. 各型の用例の扱いについて	63
4.2.5. 歌物語における「カクテ」	66
4.2.6. 『源氏物語』における「カクテ」	68
4.2.7. 「カクテ」と「カカルホドニ」の「テ」と「ホドニ」	76
4.2.8. 「カクテ」と《日付》	78
4.2.9. 「カクテ」と《各巻の冒頭》	79
4.2.10. 「カクテ」と《絵詞》	82
4.2.11. 「カクテ」と「カカルホドニ」の意味・用法	87
4.2.12. まとめ	88
4.3. 「サテ」の直前文を跳び越す用法について	90
4.3.1. はじめに	90
4.3.2. 『跳び越しのサテ』について	91
4.3.3. 中古の「サテ」について	93
4.3.4. 「サテ」の直前文を承けない用法について—「サテ」と「カクテ」—	94
4.3.5. 「カクテ」の総括性	95
4.3.6. 「サテ」の階層性	96
4.3.7. 『跳び越しのサテ』の意味について	101
4.3.7.1. 「サテ」の具体的な指示対象をもたない用法について	101
4.3.7.2. 「サテ」の物語の構造化機能	102
4.3.8. まとめ	103
『跳び越しのサテ』の用例	104

4.4. 古典散文作品における談話分析	
―話者交替の位置に現れる「サテ」について―	107
4.4.1.はじめに	107
4.4.2.先行研究と問題の所在	107
4.4.3.本章での術語について	108
4.4.4.考察「引き取りのサテ」の用例数	109
4.4.5.「サテ」の分類	111
4.4.6.「引き取りのサテ」と疑問文	115
4.4.7.「引き取りのサテ」と話者交替	120
4.4.8.まとめ	120
[「引き取りのサテ」用例]	122
4.5.中古中世散文作品における転換の「サテ」について	
―接続詞の「サテ」に向かうものとしての―	127
4.5.1.はじめに	127
4.5.2.先行研究と問題の所在	127
4.5.3.『差し込みのサテ』について―「サテ」の用例数	128
4.5.4.「サテ」の分類	130
4.5.5.対話文に見られる『話題転換のサテ』	134
4.5.6.手紙文中の『話題転換のサテ』	139
4.5.7.『話題転換のサテ』から接続詞サテへ	144
4.5.8.まとめ	148
4.6.中古中世散文作品における感動詞「サテ」の成立	
―前文脈を踏まえない「サテ」について―	149
4.6.1.はじめに	149
4.6.2.先行研究と問題の所在	150
4.6.3.『差し込みのサテ』の中の、話し手の感動、情意を表す「サテ」の用例数	150
4.6.4.「サテ」の分類	153
4.6.5.『差し込みのサテ』の中の、話し手の感動、情意を表す「サテ」の機能	
―副詞の「サテ」から『差し込みのサテ』の中の、話し手の感動、情意を表す「サテ」へ―	158
4.6.6.『差し込みのサテ』の中の、話し手の感動、情意を表す「サテ」と疑問文の結びつき	160
4.6.7.まとめ	163
[第4章のまとめ]	164

2) 近代語における接続形式 (第2部)	165
第5章 5. 「形式名詞+助詞」の形式をもつ接続形式 (2) - 「ホドニ」の形式-	168
5.1. はじめに	168
5.2. 先行研究と本章の主旨	168
5.3. 本章の構成と用例採集資料について	169
5.4. 〈原因・理由〉の意味を表す「ホドニ」の特定について	170
5.5. 接続助詞「ホドニ」の成立 - 「ホドニ」の上接句 -	172
5.6. 助詞「ニ」	177
5.7. 「ホドニ」の構文的条件の変化が意味すること	178
5.8. まとめ	181
第6章 6. 「形式名詞+助詞」の形式をもつ接続形式 (3) - 「ニヨツテ」の形式-	182
6.1. はじめに	182
6.2. 先行研究と問題の所在	182
6.3. 用例採集資料と〈原因・理由〉の意味を表す例の特定について	184
6.4. 〈原因・理由〉を表す「ニヨツテ」について	186
6.5. 「ホドニ」と「ニヨツテ」の差異について	194
6.6. まとめ	195
第7章 7. 日本語接続詞「デ」の形式の成立について - 文法化の観点から -	196
7.1. はじめに	196
7.1.1. 第1章から第4章までを振り返って	196
7.1.2. 本章の目的	199
7.2. 先行研究とその問題点	199
7.3. 「ソコデ」、「ソレデ」と「デ」の通時的様相 - 通時的調査の範囲の指定 -	200
7.4. 「ソコデ」、「ソレデ」と「デ」の分類	201
7.5. 各時代の資料における「ソコデ」、「ソレデ」と「デ」について	203
[中世期の「ソコデ」、「ソレデ」]	203
[近世前期から後期の「ソコデ」、「ソレデ」]	203
[近世後期から近代の「ソコデ」、「ソレデ」]	204
[近代期の「ソコデ」、「ソレデ」と「デ」]	205
7.6. 日本語接続詞「デ」の成立 - 文法化の観点から -	208
7.7. 接続詞「デ」の成立を脱文法化の観点からは考えない理由	209
7.7.1. 脱文法化の定義について	209
7.7.2. 接続詞「デ」の成立が脱文法化で説明できない理由	212

7.7.3.日本語の接続詞は一方向性の反例であるかという問題について	217
7.8.まとめ	226
終章	227
参考文献	234
参考資料	242
用例採集資料、閲覧資料（コーパス等）	243
初出一覧	246

序章

1. 本研究の目的

本研究は日本語接続詞の成立について通時的に論じることを、その目的としたものである。日本語接続形式¹は古典語²の時代より、前出形式の反復による形式に次いで「活用語の活用形+バ」の形式、準体言を使用する形式、「形式体言+助詞」の形式、接続助詞が見られ、中世語以降に接続詞などが現れたと見られる。

接続詞の成立は中世期以降とされてきたが、その成立のしかたについては副詞に由来するとする説、接続助詞に由来するとする説³などがあり、未だ定説が見られない状態である。また、特に副詞と接続詞については、当該文中でどちらとして機能しているかの判定の方法により曖昧さが生じ、結果として接続詞の成立の時期が不明確になるという状態が常につきまとうという問題が存在した。

そこで本論では日本語接続詞成立以前の接続形式を上代から通時的に眺め、

- 1) 古代語における接続形式
- 2) 近代語における接続形式

に分けて考察し、その形式の特質を用例から実証的に調査して日本語接続形式について通時的にその意味と機能を考察することとする。

1) については、前出形式の反復による形式、「形式名詞+助詞」の形式(1)－「モノヲ」の形式－、「用言活用形+接続助詞」の形式、「指示副詞+接続助詞テ」の形式による接続について述べる。

2) については、「形式名詞+助詞」の形式(2)－「ホドニ」の形式－、「形式名詞+助詞」の形式(3)－「ニヨツテ」の形式－、接続詞「デ」の形式について述べる。

¹ 以下、本論では形式に関わらず、その前後の語、句、文などを接続する機能を有する形式を接続形式とし、この中に近代語以降成立したと考える「接続詞」も含めることとする。

² 以下、本論では上代語、中古語を併せて古代語、中世期以降に資料に現れた語を近代語とする。

³ 永山勇(1970)「接続詞の誕生と発生」(『月刊文法』、明治書院、19-27頁)

これについて用例と共に実証的に日本語接続形式について考察し、

- 日本語接続詞の成立は近代語以降と考えられ、古代語にはまだ接続詞の成立は見られないこと。
- 特に指示副詞由来の接続詞の場合、金水（1999）が述べる「カクテ」を構成する指示副詞「カク」と、「サテ」を構成する指示副詞「サ」の指示副詞としての用法の差異が接続詞としての展開の差（「カクテ」よりも「サテ」が接続詞として発達した原因と考えられること。
- 特に近代語の接続詞の発達については、Traugott（1995）などが述べる文法化の観点を採用することで、統一的な説明ができること。

以上について述べることを本研究の目的とする。

2. 本論の構成

本論は、1) 古代語における接続形式、2) 近代語における接続形式の2部構成、全7章にて構成されている。1)では第1章から第4章、2)では第5章から第7章を扱う。各章で扱う問題について述べる。

第1章は前出形式の反復による形式をもつ接続形式を扱う。上代より見られる前出の語、句などを反復することでその前後を関係付けるという、基本的な接続関係の示し方をした例を、上代と中古の韻文、散文から見ていく。

第2章は「形式名詞+助詞」の形式（1）として、「モノヲ」の形式をもつ接続形式を扱う。体言、名詞、形式名詞について定義した後に「モノヲ」の形式によってその前後を関係付けた例を上代、中古などの韻文、散文から見ていく。

第3章は「用言活用形+接続助詞」の形式をもつ接続形式を扱う。用言の活用形に接続助詞「バ」、「ト」、「トモ」、「ド」、「ドモ」などが付いて順接や逆接の仮定条件・確定条件を表す形式の例を見ていく。

第4章は「指示副詞+接続助詞テ」の形式をもつ接続形式を扱う。指示副詞「カク」、「サ」は上代より日本語に見られた形式であるが、それに接続助詞「テ」が付いた「カクテ」、「サテ」は古代語からまともに見られた形式であり、副詞や接続詞として用いられた。また、

「サテ」については主に中世期以降に感動詞としても用いられた。それらの文の中での機能の変化とその様相をこの章では見ていく。

第5章は「形式名詞+助詞」の形式(2)として、「ホドニ」の形式を持つ接続形式を扱う。名詞「ホド」はその意味の抽象性の高さから古代語より抽象名詞としての用例が多く見られた語である。それが助詞「ニ」と結びつき、「ホドニ」の形式となって時間を表す意味から中世期になって原因・理由を表す意味へと変化したと考えられる。その変化の様相と原因をこの章では見ていく。

第6章は「形式名詞+助詞の形式」(3)として、「ニヨツテ」の形式を持つ接続形式を扱う。これは、「助詞+動詞連用形+接続助詞」の構造を持つことから第4章で扱った「カクテ」、「サテ」と類似した構造の接続形式であると考えられるが、第5章で扱った「ホドニ」の次に中世期の資料において原因・理由を表す形式として見られたのがこの「ニヨツテ」であるために第6章に置き、その様相を見ていく。

第7章は接続詞「デ」の成立について扱う。接続詞「デ」は近世末期から近代初期に成立したと考えられるが、「指示代名詞ソコ・ソレ+格助詞デ」の形式が副詞「ソコデ」、「ソレデ」、接続詞「ソコデ」、「ソレデ」となり、そこから「ソコ」、「ソレ」が取れて接続詞「デ」が成立した過程と原因を述べることで、一つの接続詞が成立する型を見ていく。

全章を通し、本論では接続詞の成立に関わる根幹的な理論として Traugott(1995)などによる文法化の理論を用いる。日本語接続詞の副詞や接続助詞からの成立は文法化の理論によって統一的に説明できる型を取る場合が多いと考えられることによる。この文法化の理論、特に論者自身が考える文法化については、論文中の特に第7章で詳しく述べることにする。

なお、1)と2)で古代語、近代語と分けて考察をする際に、古代語から近代語までまとまって用例が見られ通時的にその様相について詳しく分かるものであれば、古代期のみでなく近代期の資料にある用例も見ていく。第2章の「モノヲ」などはその例である。

また、論文第4章については、平成三十九年度(2018年度)大阪大学大学院 文化表現論専攻に博士予備論文として提出した「日本語古典文学作品における「カクテ」と「サテ」の意味機能と用法についてー日本語接続詞の通時的研究の第一歩としてー」を加筆修正したものである。

3. 本論の枠組み

・日本語における「接続」

—先行研究中の日本語における「接続」の意味の確認と、本論における「接続」の定義—

まず、本論での日本語の「接続」とは何かを確認しておく。

日本語で接続の問題を扱ったのは山田（1908）に始まる。山田（1908）は接続を直接定義づけてはおらず、「接続詞」として「接續詞とは二個以上の思想又は観念を結ぶために用ゐる語の総称なり。」（山田（同）、102頁）としている。また同じく山田（1936）でも接続について直接述べた箇所はなく、接続助詞について「接續助詞とは同等の資格を以て對立せる句を結合して一體たらしむる用をなすを本體とするもの」（山田（同）、531頁）、「かくてこの類の助詞はこれによりて句と句とを相結合して一體とせるが、各句がその互に同等の資格を以て相合してその混一せる思想を表白したる文の連結をなすものなり。」（山田（同）、531頁）とする。また、佐久間（1952）も接続についての直接的な定義はなく、それについての考えに触れたものとして「（論者注：節と節を関係付ける中止法について）文句を中止するというのは、そこでいいさして止めるというのではなく、後の節へ続けるというはたらきを主眼とするもので、その接続という点で、「文つなぎ」を営む接続助詞と同じ役目をするものとして、機能的な共通性を認めさせるところがあります。」（佐久間（同）、281頁）と述べる。これらをまとめると、「思想又は観念を結ぶ」（山田（1908））、「同等の資格を以て對立せる句を結合して一體たらしむる」、「句と句とを相結合して一體とせる」（山田（1936））、「文つなぎ」を営む（佐久間（1952））といった、その前後部を結合させることを指して「接続」とするという結論が帰納されてくるかと思われる。

そこで本論では上記の結論を鑑み、上記の先行研究を承けた山口（1980）の、「文と文、または、文相当の句と句を、ほぼ対等の資格で相關させること」（山口（同）、1頁）という「接続」についての定義を踏襲することとする。さらに山口（同）は上記の自身の定義内の「文」と「句」について、山田（1936）の「文法学上、文の素たるものを句といひ、その句が運用せられて一の体をなせるものを文といふ。（中略）今上にいへる如く、文の構成の基礎たるものを句といひたるが、實際上あらはるる文はその句一より成るか、若しくは多くの句よる（ママ）なるべきことは明かなりとす。こゝに於いて文の構成上一の句よりなる文をば単文といひ、二以上の句よりなる文をば複文と稱すべし。即ち吾人は文法学上の文をばその構成によりて単文複文の二に大別することの根拠をこゝにおくものなりとす。（山田（同）、904～905頁）という定義に従うものとしており、それも併せて踏襲する。

これは、論者が山口（1980）、（1981）（1993）を日本語接続形式⁴の歴史について踏むべき

⁴ なお、「接続」を「条件表現」の一つとして考える立場もある。佐久間（1940）、森重（1955）、阪倉（1958）、塚原（1969）益岡（1993）、有田（2001）、（2007）などである。これらの研究は本論で指すところの接続詞や接続助詞などの接続形式による「接続」

先行研究と考へ、本論をそれらの先行研究を承けた上で、日本語の接続に携わる接続詞の成立と展開を述べることで補完する研究であると考え、日本語接続形式の歴史の研究中に位置付けようとする考へに基づく。

なお、先述したように論者は日本語接続詞の発生を近代語以降と見る立場を取るが、論じていく便宜上、近代語以前のものについても「接続関係」、「接続形式」などのことばで表し、また日本語の接続の考へ方についても、この山田（1908）が示した近代以降の接続の考へ型を基にして時代を遡りそれに連なるものとして位置付けられることばによって表される関係を指すものとする。

上記を承けて日本語の接続に関わる形式を「接続形式」とし、論中ではそれについて述べることとする。

なお、本論では特に断らない限り、用例や先行研究の引用部分に付した下線は全て論者によるものとする。

・先行研究とその問題点

次に、これまでになされてきた日本語接続詞についての四つの立場を示し、本論の全章に関わってくると思われる先行研究とその問題点を挙げる。

接続詞については大きく四つの立場がある。

- I. 接続詞と副詞とは別の品詞と考える立場
- II. 接続詞を副詞と見る立場
- III. 接続詞を誘導語と見る立場
- IV. 接続詞を辞と見る立場

の四つの立場である。以下、それについて説明する。

I. 接続詞と副詞とは別の品詞と考える立場

「接続」という名称を日本語の品詞の名称として初めて適用したのは鶴峯戊申『語学新書』（天保4・(1833)）とされる。鶴峯は日本語の品詞をオランダ語文典に基づき、「実体言・虚体言・代名言・連体言・活用言・形容言・接続言・指示言・感動言」の九品詞に分けたが、この中の「接続言」が現在の接続詞に相当すると考えられる。時代が江戸から明治へと変わ

を、文中の用言活用形に接続に寄与する接続辞としての「バ」、「トモ」、「ドモ」などが付いた形などで表される「接続」とし、その諸形式と機能を考察している。本論は、これらの研究で述べる「条件表現」の中で、その前後の語、句、節、文、文章等の単位を関係付ける形式として、自立語である接続詞と付属語である接続助詞といった形式を以てそれを行い、さらに、特に文の構成や文の表現者の心的態度をも表すこともある接続詞に注目するものとしてそれを「接続」として考へることとする。本論での「接続」と上記中の「条件表現」との関連については第3章で詳しく述べる。

ると、文法書でも西洋語の文法についての実用的な教本、教科書に当たる文典、つまり西洋文典が用いられた。中金正衡『大倭語学手引草』(明治4・(1871))、田中義廉『小学日本文典』(明治7・(1874))、中根淑『日本文典』(明治9・(1876))、チャンブレレン『日本小文典』(明治20・(1887))等である。これらは明治政府の文部省が奨励した文典であり全て洋式文典の流れを継いだものである。

明治の半ば以降になりこれまでの流れを継いだ洋式文典と和式文典が折衷した文典が編纂されるようになる。大和田建樹『和文典』(明治24・(1891))、関根正直『普通国語学』(明治29・(1896))、大槻文彦『広日本文典』(『別記』)(明治30・(1897))等である。この『広日本文典』は当時広く普及しその影響も大きく、この書の普及に伴い接続詞の名称も世に広まった。明治から昭和初期にかけての文法学説の主流は、実にこの大槻文法の流れを汲んだものであった。続く三矢重松『高等日本文法』(明治41・(1908)刊行、大正15(1926)増訂)、橋本進吉『国語法要説』(昭和9・(1934))、木枝増一『高等国文法新講品詞篇』(昭和12・(1937))も含め、ここまでに挙げた文法書は全て、接続詞と副詞とは別の品詞と考える立場を取っている。

II. 接続詞を副詞と見る立場

山田孝雄『日本文法論』(明治35・(1902))は、西洋文典が説く **Conjunction** (接続詞) は日本語の接続詞というよりはむしろ接続助詞であり、日本語で接続詞としているのは西洋文典で言うところの **Conjunction Adverb** と似たもので、それは純粋な **Conjunction** ではないということを述べた。また、松下大三郎『標準日本文法』(大正13・(1924)刊行、昭和5・(1930)改撰)、『標準日本口語法』(昭和5・(1930))、安田喜代門『国語法概説』(昭和3・(1928))、宮田幸一『日本語文法の輪郭』(昭和23・(1948))、森重敏『日本文法通論』(昭和34・(1959))等、これらの文法書は全て、接続詞を一品詞とは認めず、これを副詞と見る立場(接続詞を副詞(副用語)の一種と考える立場)を取っている。

III. 接続詞を誘導語と見る立場

佐久間鼎『現代日本語法の研究』(昭和15・(1940))は日本語の接続詞を認めるか否かにかかわらず、この語が日本語において独特の職能をもつということを指摘し、『日本語の特質』(昭和16・(1941))〈改題再販『日本語のかなめ』(昭和30・(1955))〉中で後に続く構文に先行してその雰囲気や予め提供し、それを「誘導」する役割をするのが接続詞であるとした。三上章『現代語法序説』(昭和28・(1953))、渡辺実『国語構文論』(昭和46・1971)もそれを踏襲した考え方である。これらの文法書は、副詞とは異なる接続詞という品詞を認めた上で、これが前部の文を承け後に続く文の先触れのようにはたらく、つまり接続詞を誘導語と見る立場を取っている。

IV. 接続詞を辞と見る立場

時枝誠記『国語学原論』(昭和 16・(1941)) は日本語の句(橋本の言う「文節」に当たる。)は「詞」を「辞」が包んで結合した「入れ子型構造」であると説き、ことばを「客体的事実を表現する、概念過程を含む」ものである「詞」と、「話手の意志や感情などの主体的なものの直接表現で、概念過程を含まない」ものである「辞」に分けた。その上で「『また・かつ・しかし』のような語は、「第一に話手の立場の表現として辞に所属させるべきものであることが分ると同時に、そのやうな立場が、二つの事柄に関係して生じたものであることから、結果として、語・句・文を接続するといふことになり、これらの語が接続詞と云はれることになるのである。」とした。

Ⅲ、Ⅳの立場は接続詞が副詞とは異なることを認めた上でその機能(Ⅲ. の立場)や分類(Ⅳ. の立場)を考えたものであるので、これらは広い意味ではⅠ. の立場に与すると考えられる。よって以下にⅠ. とⅡ. の問題点を述べる。

Ⅰ. の立場については、まず日本語の接続詞がどのような語であるのか、副詞や接続助詞などの他の品詞との差異がどこにあるのかという議論が十分になされないままに、その名称が先行する形で文典に挙げられ、それが議論が未成熟なまま現代まで踏襲されてしまったこと、また接続詞の名称が教科文典、つまり教本に記載され、それが公教育を通して世間一般に広まってしまったことが挙げられると思われる。接続詞という名称がその内容についての充実を見ないままに教育の現場から世間一般に流布し浸透してしまったことは、後の接続詞の存在、特に接続詞と副詞の差異を不安定、不明確なものにしてしまったと考えられる。

また、Ⅱ. の立場については、接続詞が持つ副詞とは異なる構文上、機能上の性質について考慮していない点に問題があると思われる。接続詞は通常文頭に位置し命題から外れるが、副詞は通常文中に位置し修飾語として被修飾語と関わる。また接続詞は「誘導語」という言い方にも見られるように、その前部と後部を関係付けて、文よりも大きな単位である文章から成る段落を構成し文の結束性や話題の一貫性などを語として示して文を束ねてまとまりを作るが、このような機能は副詞には見られない。接続詞のこのような機能を省みずに副詞と同じ品詞であると見ることは問題であると考ええる。

このように見てみると、Ⅰ. の立場もⅡ. の立場も全面的に賛同できるものではないと思われるが、本論は接続詞は副詞が文法化した結果成立したものであり、原理的には副詞(副用語)の一種であることから根元的にはⅡ. の立場を取ることにし、論中の概念として、接続詞の名称と機能を副詞のそれとは独立的に扱うものとする。

以上を踏まえ、次に本章に入る。

本章

1) 古代語における接続形式（第 1 部）

1) 古代語における接続形式（第1部）

第1部は古代語における接続形式を扱う。ここでは第1章から第4章までを述べる。この第1部で扱う古代語における日本語の接続形式は、前出形式の反復による形式（第1章）、「形式名詞+助詞」の形式（第2章）、「用言活用形+接続助詞」の形式（第3章）、「指示副詞+接続助詞」の形式（第4章）などの形式を採っている。これらは既出の形式そのもの（第1章）や既出の事項を語や形式名詞、指示詞といった形式を使って指して、それに関係付けを行う形式で（第2～4章）接続関係を表しているという特性がある。

これらより古代語における日本語の接続形式は、その前後を関係付けることそれ自体のための形式であり、その接続関係の詳しい意味までは形式に対応する形では表すものではなかったようである。従ってその接続関係の意味は、接続形式の前後部の関係によって照応的に表されるものであったように見える。

つまり、古代語における日本語接続形式はその前後の関係付けを行うことが主機能であり、その接続関係の意味を形式に対応的に表すものではなかったと考えられる。

以下、既に述べた内容と重複するところもあるが、挙げておく。

第1章は前出形式の反復による形式をもつ接続形式を扱う。上代より見られる前出の語、句などを反復することでその前後を関係付けるという、基本的な接続関係の示し方をした例を、上代と中古の韻文、散文から見ていく。

第2章は「形式名詞+助詞」の形式（1）として、「モノヲ」の形式をもつ接続形式を扱う。体言、名詞、形式名詞について定義した後に「モノヲ」の形式によってその前後を関係付けた例を上代、中古などの韻文、散文から見ていく。

第3章は「用言活用形+接続助詞」の形式をもつ接続形式を扱う。用言の活用形に接続助詞「バ」、「ト」、「トモ」、「ド」、「ドモ」などが付いて順接や逆接の仮定条件・確定条件を表す形式の例を見ていく。

第4章は「指示副詞+接続助詞テ」の形式をもつ接続形式を扱う。指示副詞「カク」、「サ」は上代より日本語に見られた形式であるが、それに接続助詞「テ」が付いた「カクテ」、「サテ」は古代語からまともに見られた形式であり、副詞や接続詞として用いられた。また、「サテ」については主に中世期以降に感動詞としても用いられた。それらの文の中での機能の変化とその様相をこの章では見ていく。

第1章

1. 古代語⁵に見られる前出形式の反復による形式をもつ接続形式

1. 1. はじめに

古代語の接続詞について述べた先行研究には池上（1947）の「中古文と接続詞」が挙げられる。この中で池上は接続の様式について、「一つの文章が形の上で一往終結して、次に文章がつづく時、如何なる様式があり得るかを調べる」（池上（同）、3頁）として、「A、前文と同じ方向に話をすすめる。B、前文から話題を轉ずる。」（池上（同）、3頁）に大別し、「その各について形式上前文と後文との接続を示す要素の有るか無いかの二つに分ける。Aについて接続を示す要素の著しい場合として 1 前文の中の語を繰り返す（略）2 前文の内容又は語を指示する語を後文に用ゐる の二つは直ちに見出されよう。Bについて接続を示す要素としては話題の轉ずることを明言する慣用語を用ゐるわけで「話かはつて」とはいはないまでも現代ならば「さて」などの一群の接続詞、場合によつては「一方」などいふ副詞の若干もこの用に供されてゐる。（この場合を以下4とする）次に接続を示す要素がなくてAに属するものは色々に細分もできさうだが、全體を3としておく。Bに属して、語形上も接続を示さないものは論外である。（5）」（池上（同）、3頁）と述べる。

これをまとめると、池上（同）中のAは順接・継起、Bは逆接・轉換の機能を示していると考えられ、順接・継起では前出の形式の反復と指示語、逆接・轉換では副詞を用いた接続の様式が考えられるということを述べていると理解できる。上記の指示語と副詞を用いた接続については本論では後章で述べるものとし、ここでは前出形式の反復形式を考えてみることにする。

1. 2. 前出形式の反復による接続の用例と特徴

前出形式を反復する形式で接続を表した例は、古代語から見られる。

- (1) 八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を（『古事記』上巻、73頁）
- (2) 春日野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれり我もこもれり（『古今和歌集』十七番歌、37頁）

⁵本論ではこれ以降、諸先行研究に鑑み、上代から中古に成立したとされる文献中に見られる日本語を「古代語」、中世に成立したとされる文献中に見られる日本語を「中世語」、近世に成立したとされる文献中に見られる日本語を「近世語」、近代（明治維新後から第二次世界大戦まで）に成立したとされる文献、音声資料中に見られる日本語を「近代語」、現代（第二次世界大戦終了後～現在）までに成立した文献、音声資料中に見られる日本語を「現代語」とする。この時代区分と日本語の対応は『日本語学研究事典』（2007）に依る。また「上代語」と「中古語」を合わせて「古代語」と称することとする。

(1) は上代、(2) は中古の和歌の用例であり、前出の形式を反復することで接続を表したものと考えられる。この接続は、和歌の上の句と下の句((1)の用例)や、下の句中の四句と五句((2)の用例)に結束性を持たせるものであると思われる。和歌であるこれらの例において見られる接続は、先述したように同形式を反復することで結束性を表すと共に、韻文として定まった文字数の中で一つの世界を構築する必要からの音数律の調えや口唱に際しての唱和の容易さの獲得、さらに「反復する」という行為による情意の強調⁶などの和歌特有の意義があったものと考えられる。

(3) 天皇、即ち道臣命を遣して、其の逆状を察しめたまふ。時に道臣命、審に賊害之心有ることを知りて、大きに怒り誥び嘖ひて曰く、『日本書紀』卷第三、神武天皇、207頁) (※章末補足)

(4) この子いと大きになりぬれば、名を、御室戸齋部の秋田をよびて、つけさす。秋田、なよ竹のかぐや姫と、つけつ。このほど、三日、うちあげ遊ぶ。よろづの遊びをぞしける。男はうけきはらず招び集へて、いとかしこく遊ぶ。世界の男、あてなるも、賤しきも、いかでこのかぐや姫を得てしかな、見てしかなと、音に聞きめでて惑ふ。そのあたりの垣にも家の門にも、をる人だにたはやすく見るまじきものを、夜は安きも寝ず、闇の夜にいでても、穴をくじり、垣間見、惑ひあへり。さる時よりなむ、「よばひ」とはいひける。(『竹取物語』、19頁)

(3) は上代、(4) は中古の散文の用例である。これも先述の(1)、(2)の用例と同じく、先述された語を反復することで結束性を表していると思われる。同時に、『日本書紀』、『竹取物語』が初めは暗誦されていて後から文字を使用して表記したものであるという成立上の理由から、口承文学の特性として語の反復の多さを見ることもできると考えられる。

⁶ 古代日本語から見られる「豊語」も語の繰り返しによってできた語であるが、「動詞が、(略)くり返して用いられると、その意味は、動詞のもつ時間性の結果として、時間的な連続性が強調され、単独で用いられる場合とは違つて、継起的に進行してゆく、状態としての意味が強くなる。」(山口堯二(1960)「動詞の重複形式について—「に」「と」を介する形式を主に—」、46頁)や、「豊語が、同一語の複合であつて、複合語の特殊な場合と考へられ(略)そのなかには、トコロドコロ(他の語例略)のごとくに、名詞(乃至は體言)をかさねて構成し、名詞的機能をもつものもあるが、これらのおほくは、同語のかさねあはせによつて、(略)一種の情態言的性格をおびてゐる。それは、たとへば、ココロノキダキダ(略)のごとく、連體修飾語をうけてもちゐられてゐる點で名詞的な性格を思はしめるキダキダといふ語が、副詞的に機能してゐるところからも考へられよう(略)。」(阪倉篤義(1966)『語構成の研究』「第四節 複合形容動詞・複合副詞の研究—附、豊語」、446~447頁)とあるように、同語の繰り返しだが、語の強意から語の持つ情態性の抽出を導き、それが副詞のような性質を以てはたらくことは、韻文、散文を問わず同様に生じることであると考えられる。このような豊語についての言及は山田孝雄(1908)『日本文法論』712頁にも見られる。

結束性はハリデイ（1997）も述べるように⁷ 語、句、節、文などを接続させまとめる際に不可欠の要素であるが、同語反復は前出の形式を再度繰り返すことで前後部の結束を強め、結果としてそれを接続させる形を取る。その接続の際に、副詞や指示詞等の形式ではなく同語をそのまま使用するために文の内容が辿りやすく理解しやすくなり、また特にそれが韻文である場合には同語の反復によるリズムやテンポの良さが生じるという利点も表せる。

副詞の語彙数や指示詞の用法は中世に前代より増加したことが知られる⁸。古代語、特に上代語による資料中では、未だ未発達である副詞や指示詞を使う接続以上に上代以前からあったであろう同語反復による接続の方が、資料自体が口承文学の名残の要素が未だ強く残る性質を有していたという特性とも相まって、よく見られるものであったということが言えるかと思われる。

このような同語反復による接続は、接続の表し方としては最も古くからある基礎的な形式であると考えられるが、反復する語の音韻数が多かったり、それが一単語では表せないものである場合、理解しにくい不適切な方法となる。そのような際には同語反復の方法ではなく、形式名詞「もの」を使用する形式などが採られるようになると考えられる。

1. 3. まとめ

第1章では前出形式の反復による形式をもつ接続形式を扱った。ここでは上代、中古に成立したとされる資料に見られる形式について見たが、これらの形式は既出の形式を反復させるためにその前後の結束が強まり、また独特のリズムやテンポが生じるものであったため、その表す接続関係が直接的でたどりやすく、その韻律の良さからも散文だけでなく韻文にも適した形式であったと考えられる。

しかし一方では表す接続関係が直接的でたどりやすく理解されやすいのはそれが発せられる場面の助けがある上での発話であったであろうという状況も考えられ、そのような発話場面の助けが望めないような複雑な発話状況の下での接続関係や、反復という方法に向かない語や句の接続を表す場合には、前出形式の反復による形式をもつ接続形式で行う接続には限界や不適切さが生じてきたことも考えられる。

そこで接続関係を表す別の方法として、形式名詞を用いた方法が次に考えられるように

⁷ 結束性が生じるのは、談話のある要素の解釈（INTERPRETATION）が別の要素の解釈に依存する場合である。一方を効果的に解読するためには他方に頼らなければならないという意味で、一方は他方を前提（PRESUPPOSE）とする。こういうことが生じるとき、結束関係が成立する。」（M.A.K.ハリデイ ルカイヤ・ハサン（1997）『テキストはどのように構成されるか』、5頁、下線はママ。）

⁸ 『日本語学研究事典』（2007）「副詞」464～467頁（安部清哉執筆担当）、「代名詞」200頁（西尾寅執執筆担当）、「代名詞」467～468頁（佐藤宣男執筆担当）。藤本真理子（2008）「ソ系列指示詞による聞き手領域の形成」『語文』第九十輯など。

なったことが推定される。次にそれについて、第2章で見ていく。

(※章末補足) (18頁(3)の用例について)

上記用例が『日本書紀』のものであり、『日本書紀』は漢文体で書かれたものである。その記載を用例とすることの適切性について問題とする見方もあろうが、本論ではそれは問題ないとする。

①『日本書紀』は漢文体で書かれてはいるが、「漢文体」はあくまでも日本語を表記する時の一つの文体なのであり、『日本書紀』は「漢文体」という文体を採用して日本語を書いた日本の文献であると考えられること。

②用例で考察対象とする該当箇所が固有名詞(人名)であり、文体の差違が現れるところではないこと。

③18頁の(3)の用例は、本論第1章で述べた、「前出形式の反復による形式」の一部が後代の接続関係に連なる、という論旨の例として挙げたものであり、その論旨には文体の差異は関わらないこと。

以上による。

(参考)

『古事記』はやさしい漢字を使って書いている。(略) それに対して『日本書紀』は、「漢文体」を用いた。この文体は、元来中国語文であったが、日本上代では漢字の意味がわかり、「鬼と会えば返る」式の漢文訓読といわれる方法を知っていれば読める文体となった。したがって、固有名詞や翻訳不能な日本語また和歌の表記(これらは、仮名が用いられる。借音のみならず借訓もある)を除けば、訓字(意味を表す文字)を用いて「漢文体」で日本語文を書くことができた。このように、「漢文体」は日本語文が書ける文体であり、日本語として読める文体となったから、日本での公用文体として用いられたのである。」(『日本書紀①』(『新編日本古典文学全集 2』(1994)小学館、「■古典への招待『日本書紀』を読む」の項、七頁「西宮一民執筆」より引用。) 下線は論者による。)

第2章

2. 「形式名詞+助詞」の形式をもつ接続形式（1）－「モノヲ」の形式－

2. 1. はじめに

古代語の接続の形式の一つである「形式名詞『もの』+助詞」の形式について、山口（1981）から引用する。

古代語の接続助詞「を」や、体言から助詞に転じて接続にも関与した「から」（「から」を基幹とする「ながら」「からに」を含めて考える）「ゆゑ」は、体言下接の形でも接続に関与しうるものであった。また、体言に下接してのみ用いられた主格・同格表示の「の」にも、意味の上でその上下成分に句的緊張関係が表面化する場合は、接続への関与が両立的に認められる。そういう接続機能ないしは接続への関与を前提に、「を」「の」「から」「ゆゑ」には、形式名詞「もの」との相関を通じて前句の判断をより強力に分析的に対象化する次のような「ものを」「ものの」「ものから」「ものゆゑ」形式が構成された。

ま幸くと言ひてしものを（物能乎）白雲に 立ちたなびくと聞けば悲しも（万葉・十七・三九五八・家持）

君来むといひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬ物の恋ひつゝぞふる（伊勢・二十三）
うらみおこせなどするを、返りごとはさかしらにうちするものから、よりつかず、（枕・二六八・男こそ、なほいとありがたく）

人数にもおぼされざらん物ゆへ、われはいみじき物思ひをやそへん（源氏・あかし）

これらの形式の構成要素となり、「を」「の」「から」「ゆゑ」と熟合した「もの」は、「ものならば」形式などでも接続形式の分析化に利用された、あの形式名詞「もの」である。「もの」は句的判断を対象化するという作用的な役割を担うにふさわしい意味上の抽象性と体言としての対象性とを、古代語において最も典型的にそなえるに至っていた形式名詞だったと見てよさそうである。

（山口（1981）、40頁より抜粋。）〈下線は論者による。〉

上記引用部を見ると、山口は形式名詞「もの」を、「句的判断を対象化するという作用的な役割を担うにふさわしい意味上の抽象性と体言としての対象性とを、古代語において最も典型的にそなえるに至る語である」と見ている。しかし、その具体的などころについては特に述べてはいない。そこで本章では山口の指摘を踏襲し、「ものを」の形式について取り上げ、これがどのように接続形式として機能しているのかを用例を挙げて実証的に見ることとし、「形式名詞『もの』+助詞」形式による接続の具体的などころを述べ、先行研究を補うこととする。なお、形式名詞について述べるためには、名詞とは何か、体言とは何かに

についても定義する必要があると考えることから、事項からはまず、体言とは何かについて述べていくこととする。

2. 2. 体言とは何か

「形式名詞『もの』+助詞」形式による接続について考えるに先立ち、用語を定義することとする。形式名詞は名詞の一種であり名詞は体言であることから、まず始めに本項では体言をどのように考えるかについて述べたい。

『日本国語大辞典』(第二版)(1972)には「体言」の初出例として、東条義門が著した近世の資料である『玉能緒繰分』(1851)波ノ巻の「躰言用言ともに、凡其詞は玉緒の序弁の如く、あがれりし世に人の身、物のかざりに物しけん玉のよそひのようにぞあらまほしきものなる」が挙げられている。また、近代以降に文法の用語として「体言」の語を用いたものには、権田直助が「「体言・用言・体辞・用辞」の四分類を試み」(『国語学大辞典』(1980)国語学会編、東京堂出版、「用言」の項、田中章夫執筆担当、894～895頁)た、『語学自在』(1894⁹)が見られる。ここで権田は日本語について、「一つの^{ことわり}理をもち、そのまにまに^{はたらき}用きをなす」ものを「詞(=詞)」、^{ことば}「詞に附きて、その用きを助くる」ものを「辞」とし、それらを活用の有無によって、「体言・^{みことば}用言・^{はたらきことば}体辞・^{すわりでは}用辞」の四種に分類する。(同項、369頁、ルビママ)とし、「体言」の語を「^{はたらき}みことば」として日本語の類別のための用語として用いている。

それらを踏まえ、山田孝雄は『日本文法論』(1908)で日本語の文法の用語として「体言」の語を用いてそれについて述べた。

體言は、吾人が或實在と認めたる場合の事物を代表する詞なり。他の語にていへば概念の言語にあらはれたるものこれ體言なり。こゝに概念といへるは論理學上にいふ嚴密なる意義にていふものならず、大抵左の意義にて云ふ概念に該當するものなり。スタンダード英辭書 Concept の條に曰はく 2. In a looser and less proper use, any notion in which elements are combined into the idea of one object.

この故に體言の定義を左の如くせんす。

體言とは或概念を代表せる自用的觀念語たる單語なり。

さて吾人の體言は嚴密に、ある概念を代表するもあれば、直接ならで間接にある觀念を指示するもあり。

⁹ 権田は「平田派の国学者」(『国語学大辞典』(1980)上記本文に同、「語学自在」の項、古田東朔執筆担当)で、『語学自在』は自身の「旧著『詞の真澄鏡 詞の経緯 図解』(明治四年(1871))の内容を増補しているところがある。」(同項、369頁)とある。この『語学自在』の成立年については、「明治一八年稿成り、写本として伝えられたものを、門弟の井上頼園・逸見仲三郎が校訂して明治二七年刊行。」(『日本語学研究事典』(2007)飛田良文編、明治書院出版「語学自在」の項、永野賢執筆担当、922頁)ともあり、これによればその成立は明治四年(1871年)を遡るものと考えられる。

然れども其の究竟する處はとにかくに一の概念に止まるものなり。吾人の體言の意義右の如し。この故に宇宙の森羅萬象如何なる事物にてもあれ吾人の意識に於いて、一の箇體として認識せらるゝものは、之を單語にてあらはず時皆體言の資格を有す。されば用言にても、副詞にても助詞にても、之を吾人思想の對象とする場合には直に體言の資格を具す。 (山田孝雄『日本文法論』(同上)、176～177 頁より抜粋。)

これらを踏まえ本論では、上記山田が述べた、「體言は、吾人が或實在と認めたる場合の事物を代表する詞なり。他の語にていへば概念の言語にあらはれたるものこれ體言なり。」との説明に従い、これを體言の定義とすることとする。この、山田の述べた「概念の言語にあらはれたるもの」を體言と考え、次にこれを踏まえて「名詞」をどのように考えるかについて述べる。

2. 3. 名詞とは何か

前項と同じく『日本国語大辞典』(第二版)で「名詞」を確認すると、その初出例として明治期の西周が著した『百学連環』(1870～1871 頃)一の、「Derivation なるものは語の變化にして、名詞より變して形容詞となり、形容詞より變して副詞となる等のものなり」という記載がある。またそれに続いて、J. C. Hepburn による『和英語林集成』の再版(1872)からの「Mei-shi メイシ、名詞(ナ-コトバ)」の記載がある。さらに、田中義廉による『小学日本文典』(1874)二・八の「名詞は、有性・無性の別なく、万物の名目を示す詞なり。又無形のものとも雖ども、人意中に、事物となして示す詞を名詞と云ふ」とある。

文法用語としての名詞についての早い説明は、前項でも触れた山田の『日本文法論』(1908)中の「こは事物の概念を直接に代表せるものにして、所謂名目の詞と稱せらるゝものこれなり。名詞は概念其の者を直接にあらはしたるものなり。」(同、181 頁)が確認できる。これを承け、「具体的なモノを中心に、いろいろのモノゴトをモノ的な性格をもつものとして指し示し、文中で主語・対象語(目的語)となりうるもの。」(『国語学大辞典』(1980)国語学会編、東京堂出版、「名詞」の項、高橋太郎執筆担当、859～860 頁)、「物・人・動作・性質・関係など、すべて対象として考え得るものを表し、自立語で活用がない。主に「が・を・に・で・のは・だ・です」などの助詞・助動詞を伴って。主語・述語・修飾語などになって文中で働く。」(『日本語学研究事典』(2007)飛田良文編、明治書院出版「名詞」の項、西尾寅弥執筆担当、199 頁)などの記述も見られる。これらを見ると、「万物の名目を示す」(上記田中)、「事物の概念を直接に代表せるもの」、「概念其の者を直接にあらはしたるもの」(上記山田)、「具体的なモノを中心に、いろいろのモノゴトをモノ的な性格をもつものとして指し示すもの」(上記高橋)、「物・人・動作・性質・関係など、すべて対象として考え得るもの」(上記西尾)が、名詞の表すところとして帰納されてくる。

それらを踏まえ、本項では上記山田の「こは事物の概念を直接に代表せるものにして、所

謂名目の詞と稱せらるゝものこれなり。名詞は概念其の者を直接にあらはしたるものなり。」
(再掲)を名詞の定義としたい。これは、上記の先行研究中で、山田は、その機能ではなく概念的な説明を名詞に与えているからである。また、山田のみが体言と名詞の関係について詳述していると考えられるからである。山田は体言と名詞の関係について以下のように述べている。

體言はかくの如く、其の内容の廣汎なるものなるが、吾人は其の概念の特異なる性質、其の用法の差異よりして、又このうちに區分を施しうべし。こゝに於いて體言を左の如く分つ。一. 實體言(名詞) 二. 形式體言」
(山田(同)、177頁より抜粋。)

即ち、山田は体言を「實體言」と「形式體言」の二種に分け、そのうちの「實體言」を「名詞」としている。そしてそれに続けて、

この二の區別は、其の語が具體的な概念を直接にあらはすか、廣汎なる形式的概念を以て一定の概念を間接にあらはすかによりて生じたるなり。即實體言は或一の概念が其の本體を直接にあらはすもの、即、實體を直接に代表せるものなれば、其の實質の異なるものには應用すべからざる性質を有する體言なり。
(山田(同)、177頁より抜粋。)

と述べる。山田の述べるところの實體言を名詞と考え、上記の名詞の定義はさらに妥当であると思われる。山田の名詞についての主張をさらに見ておく。

この故に、其の概念は思想の對象として立ちうべく、従つて實在し、又は實在せるものなりと思惟する簡體的觀念ならざるべからず。其の實在すと思惟せらるゝものは想像的のものにても、理想的のものにても、空想的のものにても、事實的のものにても、具象的にても抽象的にても形而上にても形而下にてもともかくにも或る實在をあらはすものならば、之を實體言即名詞と稱す。されば、

天帝、神、天堂、寂光土、夜見、常世、美、眞、善、道德、權利、勢力、鬼、幽靈、
雷獸、學問、苦勞、運動、人、馬、鳥、魚、山、川、大洋、草木、梅、藻、石英、玉、
金、鉛、元素、原子、量、數、關係、進化、退歩、罪、惡、などみな名詞たるなり。(中略) 其の例左の如し。「既に」は所謂副詞なり。「ば」は接續をなす助詞なり。「咲く」は動詞の終止法なり。「散れば」は接續助詞を有する用言なり。「かな」は感動をあらはす詞なり。かゝるものなれば、いかなる詞にても思想の對象として即一の概念として取扱はれたるものは皆名詞たる資格を與へられたるなり。

(山田(同)、181~182頁より抜粋。)

山田の名詞の定義として重要なのは上記に表されているように、いわゆる具体名詞だけではなく抽象名詞や、名詞以外の品詞についてもそれを対象として説明するなどの場合の、その対象自体も含めて名詞であるとした点にあると思われる。本項でも上記の「いかなる詞に

でも思想の対象として即一概念として取扱はれたるものは皆名詞たる資格を與へられたるなり。」という、品詞に関わりなく、「思想の対象」、「一概念」として扱われたときには、それは名詞であるとするところを、踏襲するものとする。

さらに、山田のこの定義は、山田自身が日本語の品詞についてその特定に際し、形態よりも構文上の機能を以て考察していることを意味すると思われる。この考え方は本論にとっても重要であるので、この考え方も併せて本論を通して踏襲するものとする。

2. 4. 形式名詞とは何か

形式名詞については、山田孝雄（1908）、松下大三郎（1924）、佐久間鼎（1952）、吉川泰雄（1964）、井手至（1967）が言及している。以下、それら先行研究における形式名詞についての説明を確認しておく。以下、先行研究から必要箇所を適宜引用するが、太字箇所は先行研究自体が太字で記述されている箇所であり、下線箇所は論者によるものである。

山田は『日本文法論』（1908）で「形式名詞」という用語を用いていない。前項で述べたように『形式體言』という用語を使って、そこに代名詞と数詞を分類しており、ここで問題とする「もの」などの名詞については『實體言』に分類して、その中の「二 名詞中特別の注意を要するもの」（山田（同）、183頁）で扱っている。これについては後で詳述する。

「形式名詞」の名を与えたのは松下大三郎に始まる。（『日本語学研究事典』（2007）、明治書院出版、「形式名詞」の項、西尾寅弥執筆担当、199頁。）であり、松下は『改選標準日本文法』（1924）で

「形式名詞は名詞としての形式的意義が有るばかりで實質的意義の無い名詞である。」（松下（同）、241頁）

として、それを「第一種の形式名詞」、「第二種の形式名詞」の二種に下位分類する。また

「第一種の形式名詞は連體語の下に用ゐられる形式動詞」（松下（同）、241頁）、「第二種の形式名詞は名詞と並列的に用ゐる形式名詞である。」（松下（同）、249頁）

として、「もの」を「第一種の形式名詞」に分類¹⁰し、その意味について、

「1 人を指す。2 事物を指す。3 事件を事物として指す。4 名詞性動詞（略）の名詞部（略）とな

¹⁰ 「第二種の形式名詞」には「など」「なぞ」「なんど」「なんぞ」「なんか」「等」の五つが有る。」（松下（同）、249頁）

つて意志的當然（命令、決心）を表す。5 名詞性動詞の名詞部となつて自然的當然（性質、傾向）を表す。6 口語で名詞性副詞（略）の副詞部になり、理由をあらはして結果の免れ難いことを人の感情に訴へる。」（松下（同）、242～243 頁）

と整理した。

佐久間（1952）は形式名詞を「名詞的な吸着語」（佐久間（1952）、324・326 頁）とし、単語を「詞」と「辭」に下位分類した上で、

「「詞」として取扱われるものにしても、まったく自立することができるものではなくて、何かの補充の語または句を求めるものなのです。「文節」を形づくるというだけのことではなくて、一つの句または節を承けることができるというはたらきに特に留意したいものです。こういう種類の語を一つにまとめて、「吸着語」ということにしましょう。」（佐久間（同）、325 頁）とし、「かの「形式名詞」は、（略）主として體言の資格を與えるもの、いわば名詞的な吸着語といえるようなものです。」（同、326 頁）

と述べ、さらに

「それ自身は限定されていない或種のわくを示す語で、それはやがて限定（装定）をまっているものなのです。」（同、327 頁）

として、ここに「もの」が分類されることを示している。

吉川（1964）は

「名詞のうち、意味が抽象的であつてかならず修飾語を受けて用いられるような語を、一般に形式名詞と呼んでいる。」（吉川（1964）、210 頁）

と定義し、

「形式名詞のうち、もっとも多方面に使われるのは、「こと」と、ほぼ「こと」の意味をなす「もの」とである。（略）それは連体語の形式で述べられる内容を受けて、それぐるみ名詞句化するのである。」（同、215 頁）

と説明した。

井手（1967）は、

形式名詞は、(略) つねに連体修飾語を必要とする名詞で実質的意味が抽象的なものであるとのみ定義するのでは不十分であって、むしろそれは、連体修飾する先行の語句を体言資格のものに転換すると同時にそれに一定の範疇を与える機能をもつ語詞であるとしなければならないのである。」（同、42～43 頁）

さらに、

これらの形式名詞においては、もはやその意味が稀薄化、形式化して一定の範疇を表示しえなくなっていると思われる。」（同、50 頁）

とする。

以上、先行研究を確認すると、松下が命名した形式名詞のはたらきについて、佐久間、吉川は、名詞の上接部をまとめてそれに資格を与え（佐久間）、まとめて名詞句化する（吉川）ことであるとまとめた。また、井手は、形式名詞の使用範囲が拡大してその意味が形式化し、結果、その形式名詞が一定の範疇を表示しなくなり、句同士の関係を表す表現に転換して助詞化していく（井手）と、上接部を名詞句化した形式名詞の転換の方向性を示した。

名詞句化するということが、「範疇を与える」ということになるという吉川の指摘は極めて重要であると思われる。また、形式名詞が助詞化していくという変化の方向を示した井手の指摘も注目すべきであると思われる。

これら先行研究での形式名詞についての考察は、その言わんとするところが山田（1908）が述べていることにその端緒を求められると考えられる。以下にそれについて記述する。

山田が『日本文法論』（1908）で、「體言」の二種の下位分類のうち、「實體言」（名詞）と共に挙げていたのが「形式體言」である。

形式體言とは實體言と異にして、其のさす所の意義は互に相犯すべからずといへども其の意義に對しての一定の實在は存せず。吾人の思想によりて或は甲をも乙をも、或は丙をも丁をも思惟しうる一の形式を抽象的に發表したるものなり。これらは間接に實體をさすことありといへども、直接に其に固有したる實體は存在せぬなり。

我、汝、彼、此處、一、二、百、千、皆、悉、
等これなり。かくて、この類の體言は、又其のさす所の意義の差によりて左の二つに分たる。

一．主觀的形式體言（代名詞）

二. 客觀的形式體言（數詞）

主觀的形式體言とは説話者自身の主觀と特別の關係を生じたる場合に於いて客觀其のものを區別して之を指示するものなり。而して其の實質は説話者の觀察の場合によりて補填せらるべきものなり。

我、汝、彼、是、其、誰、此處、

等これなり。これらに對する實質は皆説話者の見地次第にて其の指示する所の實質一定せざるなり。

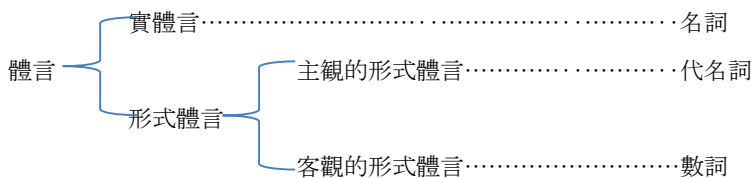
客觀的形式體言は專客觀其の者の存在の形式をあらはしたるものなり。即、事物存在の形式を箇體的に計算したる結果をあらはす一の形式體言なり。而して、これらも又其のさす實質は存在するものにあらず。如何なるものにも應用せらるゝこと即、形式體言の一般に通ずる性を有す。これに數を分明にあぐるものと概括的に大まかに量を示すものとあり。

明白に示すもの、 一、二、五、十、百、千、萬

大まかに量を示すもの、みな、悉、そこばく、

以上述べし所にて體言の分類は終れり。之を表示すれば左の如し。

従来の名目



吾人は便宜の爲に、下に示せる従来の名目を以て、これらの體言をさすべし。

(山田 (同) 178~179 頁より抜粋。)

上記より、山田は「形式體言」を「主觀的形式體言」と「客觀的形式體言」の二種に下位分類しており、それぞれに「代名詞」と「數詞」があたると述べている。これを見ると本章で扱う「形式名詞『もの』+助詞」形式の「もの」は、「形式體言」よりもむしろ「實體言」に分類されると考えられる。

そこで、山田 (同) の「實體言」(名詞) についての記述中にある「もの」についての記述を見ると、「名詞」についての記述の中の「二 名詞中特別の注意を要するもの、」の項に以下が確認できる。

二 名詞中特別の注意を要するもの、

従來文法家によりて或は副詞の如しと唱へられ或は接續詞と稱せられ、又は接辭と稱せられたるものにして、しかも名詞なるものゝ、頗多きなり。吾人は今この誤を正さむとす。

かくの如きものは皆名詞中にありても特別なる性質を有せるものにして、自然かゝる誤認も出で来るなり。即その特別なる性質を有せるものとは、一は其の意義頗廣汎にして單獨にては如何なる意義なるかを仔細に捕捉し難きまで見ゆるものなり。一は事物の間の關係を抽象的にあらはせるものなり。この二つのもの、これ往々世人の誤認を蒙りたるものなれば、吾人は聊之につきて言を立てて以て其の本性を説明せむ

とす。

其の意義廣汎なるものとは事物の理としては、「故」「爲」普通の形式としては、「時」「間」「處」「事」「物」なり事物の程度にては「ほど」「位」「ころ」事物の列舉的形式には「條」「件」の如し。これらは皆其の概念をあらはし文の主となり、客となり、補充となり、又添加語となる等は他の體言と異なる點なけれども、其の意義甚廣汎なれば必ず之を制限せしむるが爲に他の語を上に加へざるべからず、しかれども又まゝ單獨に用ゐられたることなきにしもあらず、之を接辭とし、又接續詞なりといふ人あれど、そは皆本義をあやまれるものなり。(文例略)

かくてこれらの上に来れる文はこの體言を修飾すること、勿論なれど、其の體言の意義廣汎にして唯上に來る文を結束して體言の資格を有せしむるのみに止まるが如くなれば、上下二文の意義のみ著しく見え、従つてこの體言が接續詞なりと誤解せらるゝことあり。又單語が之を修飾せる場合にも、なほ其の意義廣汎たるが爲に修飾せる語の意義が強く聞ゆるによりて、接辭の如く見らるゝこともあれど、そはなほ體言たるなり。

(山田(1908)183~185頁より抜粋。下線は論者による。)

上記より、山田は「故」、「爲」、「時」、「間」、「處」、「事」、「物」、「ほど」、「位」、「ころ」「條」、「件」といった語例を挙げ、これらについて、「其の意義甚廣汎なれば必ず之を制限せしむるが爲に他の語を上に加へざるべからず、しかれども又まゝ單獨に用ゐられたることなきにしもあらず」と、これらの語は意味が廣汎であるので、それを限定する部分が必要とすること、しかしまた、そのような限定する部分をもたずに單獨で用いられることもあること、そして、「唯上に來る文を結束して體言の資格を有せしむるのみに止まるが如くなれば」と、(上接部なしで)單獨で用いられることもあるが、その機能として注意すべきは、上接部をまとめてそこに體言の資格を付与するというはたらきであると述べている。

つまり山田はこれらの名詞群について、「體言」中の「實體言」つまりは「名詞」なのではあるが、そしてだからこそ、單獨で用いられることもあるのだが、その意味するところが廣汎であるためそれを限定する部分が必要なのであり、むしろその限定する部分である上接部をまとめてそこに體言の資格を与えること、言い換えれば名詞を限定する上接部を體言化することがその意義であると述べていると読める。

前項に先述したように、山田は「體言」を「實體言」と「形式體言」に分け、「實體言」には名詞を、「形式體言」には代名詞と数詞を分類する考え方であるので、「其の意義甚廣汎」ではあるが、「又まゝ單獨に用ゐられたることなきにしもあらず」と、通常の名詞としての意味をもちつつも、「唯上に來る文を結束して體言の資格を有せしむるのみに止まるが如く」という機能を有する上記の語群を「形式體言」に入れることはせず、「實體言」の「名詞中特別の注意を要するもの」に分類している。

山田はこれらについて「其の意義甚廣汎なれば必ず之を制限せしむるが爲に他の語を上に加へざるべからず」と、これらの名詞を「制限せしむるが爲に」上接部が必要であったとするが、これは、言い換えればこれらの名詞が、名詞それ自体のみで特定できる実質的な意

味を有していなかったからこそ、その上接部によって「制限せし」められる形式を採って、名詞を「制限せし」めた上接部そのものを、名詞を制限、限定させる部分として名詞に取り込む形で名詞化することが可能になったとも言えると思われる。この、一語で表すことが難しい出来事や状態、経緯などの事柄についても、「名詞化するという」形式を採って、ことばの上で名詞として表すことができるようになったということは、日本語の表し方において大きな意味のあることであり、山田の「名詞中特別の注意を要するもの」の指摘の意義も、一つにはここにあったのではないかと考えられる。

また、山田は上記引用部中で、これらの名詞は接続詞や接辞ではなく、「なほ體言たるなり。」と名詞であることを主張している。これは本論が考察する接続詞の定義とも一致している。山田のこの主張に留意していることを改めて述べることで、論者自身の接続詞についての考えの一端をここに改めて示す。

さらに、日本語において上代から見られた前出部を反復する形に加え、形式名詞を用いて名詞の上接部を名詞に取り込む形で名詞化した形式、つまり名詞に依存した形式が、日本語接続形式の始まりの形の一つであったことをここでは押さえておく。

これらを踏まえ、形式名詞を用いた接続について、本論では基本的には山田（1908）の考えを踏襲することとし、以下に論を進める。

2. 5. 形式名詞「モノ」と「コト」

本章では形式名詞のうちの「モノ」を使った接続形式について考えていることから、「モノ」と、それと対峙されることが多い「コト」について考察する。なお、接続形式として用いられる「形式名詞『モノ』+助詞」形式に使用されることばの単位を意味するものとして、本項では形式名詞の「モノ」と「コト」とカタカナ表記をすることとする。

「モノ」と「コト」について述べた先行研究には寺村秀夫（1981）、佐治圭三（1993）、柏木成章（2003）などがある。

寺村（1981）は「こと（事）」と「もの（物）」というのは、おそらく世界像を組み上げる際の最も基本的な概念であろう」（寺村（同）、744頁）「モノが名詞で表わされる対象を、コトが「文章態」で表わされる対象を指すというようにはいえない」（同、752頁）として、「モノ」と「コト」の区別として、「モノ」は「五官によって知覚される物理的な存在物ではないが、個別的にそこに存在することが確かめられるという意味では「具体的」な対象である。眼に見えたり舌でなめたり指でさわったりできるのではないが、あたかも眼に見え、指でさわることのように心理的な存在感のあるもの」（同、753頁）、「コト」は「命題で表わされるような内容や、動詞、形容詞で表わされる動作、作用、変化、状態、属性などを一般的に概念として表わしたもの」（同、754頁）とし、「モノが個別的であるのに対してコトは

一般的、モノが感覚（五官）ないしそれに感ずる心理作用によって把握される対象であるのに対して、コトは思考によって把握される対象、発話や知識の内容である」（同、754頁）とする。

佐治（1993）は、「形式名詞はその類の最上位を占める極めて抽象度の高い名詞であり、極めて外延が広く、内包の狭いことばである。その中にあって、「あらゆるものごと」とか「総ての事物」とかいうことばがあるように、「もの」は、具体的、抽象的な存在の総てを含み、「こと」は事件、現象、生起消滅、変化、作用、行為、動き、表れの総てを含んでいて、それらの語の上位語として用いられる。」（同、8頁、下線ママ）と述べる。

柏木（2003）は、「「ものだ」は当該対象をいわば「手の届かない対象」として、「動かし難くそのようである」という性質をそれに賦与する語法と考えられる。（略）「ことだ」の該用法は「ものだ」のそれに比べ安定的でない。（略）「こと」は「もの」のように「不動の対象＝存在性」を示す点において遜色性のあるものなのであろう。」（同、123頁）、「ものだ」がその「背景」として一般的性質を示すそれを有するのに対し（略）、「こと」は「もの」と異なり、（永続的な）「存在」ならぬ、（一回的な）「行為」・「出来事」を示す語である。（同、124頁）」とする。

これらの先行研究を見ると、「モノ」とは状態性を基盤にした存在、本質、一般的性質そのものを指し、「コト」とはその時その場での、即時的、即場的な行為、出来事、状態などのありようを指しているのだと考えられる。¹¹ そのため、「モノ」は「コト」を包含する。山口（1981）が「体言＋助詞」形式による接続を考えた際に、その代表的な形式として、「形式名詞『モノ』＋助詞」形式を考えたのも、これが理由であると考えられる¹²。

寺村（同）には「モノ」が接続形式として用いられるようになる課程と関連すると思われる言及が見られる。

「モノはダといっそう強く一体化して、先行する句全体に対する話し手の主観を表わすものとなっている。このように使われるモノダは、同類のハズダ、ワケダ、トコロダ、ノダなどと「ある叙述内容（コト）に対

¹¹ 「モノ」と「コト」については他にも、安達（1998）が「何らかの具体的な根拠があり、ここから論理的思考を経て得られた帰結として提示された事態が「ものママ」として把握される（同、207頁）、「話し手にとって真偽が不明であり、想像的に捉えられている事態が「こと」として把握される」（同、212頁）といった指摘や、「ものだ」と「ことだ」を比して、「ものだ」は「世間一般という客観界における既定的真理」（揚妻（1990）、83頁）、「ことだ」は「話し手個人の主観的判断」（同、83頁）という指摘などがある。これらはいずれも寺村（1981）の「モノ」と「コト」についての指摘を踏襲していると思われる。

¹² 同型の接続形式に使用される形式名詞としては、「コト」のほかに「ノ」なども考えられるが、接続形式として使用される際には「モノ」に包含されるという事情は、「ノ」も同じと考えて良いと思われる。

する話し手の主観を強く表わす」性質を共有している。(略)「…モノダ」は、本来は前節で見たようにある対象を大きくモノに属するものと類別し、修飾部「……」でそれを特定するという形であるが、その修飾部が単なる特定・限定という範囲を越えて、「一般に(主題となっているある特定の対象が)、こういう性格、本性をもっている」という主張の、その性格、本性を表わすように使われることが多い。(同、756頁、)

上記は「モノ」を使用した形式「…モノダ」の修飾部が特定・限定の範囲を越え、話し手の主張を表すように使用されるようになることを説明している。これに加えて寺村は、

モノは、また、モノノ、モノヲ、モノダカラなどといった形で、前後二つの叙述内容を関連付ける、接続助詞のような働きをすることがある。いずれも、ガ、ケレドモ、ノニなどと似た部分があるが、話し手の、聞き手に対する心理的な働きにおいてモノノ等の方が複雑である。(同、761頁)

と述べ、「モノ」に助詞等が付いた形式が、その前後の叙述内容を関連付ける、接続助詞のようなはたらきをする場合があることを指摘している。

この寺村の指摘が本章で扱う「形式名詞『モノ』+助詞」形式で接続を表すものと関わってくるのだと思われる。

以上、「形式名詞『モノ』+助詞」形式が接続を表すようになる経緯について見た。これを踏まえ次項以降は、この形式を持つ具体的な接続形式、「モノヲ」、「モノノ」、「モノカラ」、「モノユエ」の形式(山口(1981)、40頁)について考える第一歩として、「モノヲ」の成立と意味について見ることにする¹³。なお、本章では近代以前に成立、運用されていた日本語(古代語《上代語、中古語》、中世語、近世語)を考察の対象とする。日本語接続詞の成立とその運用について考える本論の主旨を考えた際、近代語、現代語の接続詞については音声資料等別種の資料からの用例も視野に入れて考えるべきであり、それは文献資料のみから用例を採っている近代以前に成立、運用されていた日本語と一括して扱うことは問題があると考え、また、近代語以降の日本語を使用して表された日本語文が、それ以前のいわゆる「古語¹⁴」を使用して表された日本語文とは則る文法が異なる¹⁵と考えられること

¹³ これは、古代語、中世語、近世語の「モノヲ」、「モノノ」、「モノカラ」、「モノユエ」の四形式を通覧した際に、この各時代に最も安定してまとまった数の用例数が見られ、考察できる形式が「モノヲ」であることによる。

¹⁴ 「古語」は「現代の共通語・中央語に用いられていない語。一般に上代から近世までの日本語を指す。」(飛田良文編(2007)『日本語学事典』、「古語」の項、佐藤武義執筆担当、148頁)に依るものとする。

¹⁵ 本論では、近代語以降の日本語を使用して表された日本語文はいわゆる「口語文法」に則り、いわゆる「古語」を使用して表された日本語文はいわゆる「文語文法」に則ると考えるものとする。「口語文法」は「近代・現代(大体、明治時代以降)の共通語の文法。」、「文語文法」は「現代語の文法としての口語文法に対して、いわゆる文語(古典の言語を模範として発達した擬古的・雅語的文章語)の文章にみられる文法。」(両項目と

などから、同じく一括して扱うことは問題があると考えることによる。

2. 6. 接続形式「モノヲ」について

接続形式「モノヲ」（以下、「モノヲ」と称する。）は、形式名詞「モノ」に格助詞「ヲ」が付いた形式を持つ。この「ヲ」は初め格助詞であったものが接続助詞となったものと通時的には考えられている¹⁶。

以下、ここでは先行研究の山口（1975）の「第九章 「ヲ・モノヲ」による接続」（山口（同）、132頁）に挙げられている例を使い、その述べるところをまとめ直すこととする。

始めに、実質名詞が助詞「ヲ」に上接する例から見ていく。

(1) かくのみにありける君を（乎）衣ならば下にも着むと吾が思へりける（『万葉集』・卷十二・2964番歌、③320頁）

(2) 思ほえず来ましし君を（乎）佐保川のかはづ聞かせず帰しつるかも（『万葉集』・卷六・1004番歌、②147頁）

(1)、(2)の「を」は格助詞とも接続助詞とも考えられるが、を格成分について目的語の成分として後句と関係付けることができる。それが、

(3) 明日香川行く瀬を速み早けむと待つらむ妹を（乎）この日暮らしつ（『万葉集』・卷十一・2713番歌、③254頁）

(3)になると、を格成分を目的語の成分として、後句と関係付けることはできにくい。これは、を格で後句の目的語ではない成分も関係付けられるようになった例であると考えられる。

(4) ねもころに思ふ我妹を人言の繁きによりて淀むころかも（『万葉集』・卷第十二・3109番歌、③354頁）

(4)のを格は「～ではあるのですが」という逆接の意味を表しており、を格成分と後句とは格関係では関連付けられない。この「を」はかなり接続助詞のようにはたらいっている。また、(1)、(2)と比して(3)、(4)と格助詞よりも接続助詞としてより考えられる例になるほど、強い情意性も表されるようになってきていると思われる。これら(1)～(4)の

も、飛田良文編（2007）『日本語学研究事典』、「口語文法」、「文語文法」の項、林巨樹執筆担当、184～186頁）に依るものとする。「共通語」は、「国内に方言差があっても、それを越えて異なった地方の人々が意志を通じあうことのできる言語。これは標準語のように必ずしも規範性を持たず、実用的・現実的なものである。」（同、「共通語」の項、加藤正信執筆担当、541頁）に依るものとする。

¹⁶ 接続助詞「を」の成立については、間投助詞にその起源を求める説と格助詞「を」がその起源であり、これが転成したのちと考える説がある。前者には佐伯（1942）、（1950）、此島（1966）などが、後者には山田（1913）、松尾（1970）、木之下（1967）などがある。

を格成分は喚体句¹⁷であり「対象指示性」(山口(同)、136頁)を表していると考えられるが、

- (5) 出でて去なむ時しはあらむを(乎) ことさらに妻恋しつつ立ちて去ぬべしや(『万葉集』・卷第四・585番歌、①314頁)

になると、前句から「分析的は判断に対応する通常の主語述語形式を採ることが多くなる」(山口(同)、136頁)、つまり、語とその表す意味が対応的になり、「これまでの対象指示的形式の前句は、直観的な判断に結びつく主述一体の喚体句であったが、判断の分析化に伴い、前句はおのずから(略)主述形式の述体句としてあらわれるようになる。」(136～137頁)

また、形式名詞「モノ」が格助詞「ヲ」に上接した形式「モノヲ」によって前句と後句が関係付けられる例も見られるようになる。

- (6) 隠り沼の下に恋ふれば飽き足らず人に語りつつ忌むべきものを(物乎)(『万葉集』・卷第十一・2719番歌、③255頁)
- (7) 魂合へば相寝るものを(物乎) 小山田の鹿猪田守のごと母し守らすも(『万葉集』・卷第十二・3000番歌、③329頁)

山口(1975)はこの「モノヲ」の形式について、以下のように説明する。

接続助詞「を」は前句の述体化によって接続形式としての安定を得たといえるが、それとともに、一方では述体化した前句の判断を再び対象化することによって、両句の意味関係をいっそう顕示・強調する形式をも迎え入れた。それが形式名詞「もの」との熟業による「ものを」である。「もの」と「を」の最初のむすびつきは、(略)「もの」が前句の判断の一般性を卓示する役割を担うかたちで現れたものではないだろうか。(例歌略)これらの前句における事態・判断は常識・伝説・諺など、人みな承知している事柄についてのそれである。これらの例の「もの」には、素材的な事柄自体の一般性・観念性に対応するかたちでその判断の一般性を卓示する意味あい認められよう。その意味でこれらの「ものを」は「ものなるを」の意に解せる。が、結果的にはそれがまた両句の意味関係を顕示・強調する役割をも果たしていると見てよからう。そういう役割を担いえたことから、次のように素材的に格別一般性のない、むしろ特殊で現実的な判断を前句とする場合にも、「もの」はその判断をいわばより強力に対象化することによって、「を」による両句の意味関係を顕示・強調する役割を与えられたのであろう。(歌例一部略)

思はじと言ひてしものを(物乎) はねず色の移ろひやすき吾が心かも(万葉・四・657・坂上郎女)

かくのみにありけるものを(物乎) 妹も吾も千歳のごとく頼みたりけり(万葉・三・470・家持)

「ものを」は、このようにして両句の矛盾対立する意味関係を顕示・強調し、接続助詞「を」が本来そうい

17 「喚体句」は「喚體の句は常に一の體言を骨子として、それを呼格とし、それを思想の中心點として構成せらるゝものなり。」(山田孝雄((1936)『日本文法學概論』、936頁)、「述体句」は「喚體の句が情意を投射して他の直観に訴ふるに對して述體の句は理性的發表にして他の理解に訴ふるものにして、この類の句はすべて述格を中心として構成せらるゝものなる」(同、963頁)という説明に依るものとする。

う意味関係を担う方向に成立したその関係をさらに明確化する役割を果たしたといえる。「ものを」が接続助詞として一語的な意味のまとまりを持ち得るのも、まさにその意味においてであろう。本居宣長は接続助詞「を」を「ものをの意のを」と言っているが、そのように「ものを」がかえって接続助詞「を」の意味の指標になりえたのも同じ事情によると考えられる。(山口(同)、137~139頁より抜粋。)

上記山口の説明の、「モノヲ」がその前後句の対立する意味関係を顕示・強調し、その関係をさらに明確化して接続助詞として一語的にまとまるということは、前々項の佐久間、吉川、井手の形式名詞についての説明、前項の寺村の形式名詞「モノ」についての説明とも合致すると思われる。「モノヲ」は、その前後句を関係付け、その前後句の意味関係について形式を伴って表す形式なのであり、これは日本語の接続の表し方が、現代日本語の複文の形での接続形式に近い形になったということであると考える。古代語に多く見られた喚体句は体言主体の形を採って主述関係などの格関係や接続関係などをことばで明示的には表していなかったが、述体句は用言主体の形を採って、同じく格関係や接続関係などをことばと対応させるようにして明示的に表している。山口(1975)が説明する「判断を対象化する」、「意味関係を顕示・強調」というのは、具体的にはこの、日本語の構文の情報をことばで明示的に表すようになることについて述べていることを指すと考え、以下、各時代の用例でそれを確認することとする。なお、それが接続形式としての「モノヲ」であるか否かという判断については、「モノヲ」の前部と「モノヲ」に、修飾語と被修飾語の関係があるか否かをその判断の基準とする。

例)

- ・(論者によるによる作例)「試験なので、机上のものを片づけてください。」
→「モノヲ」の前部である「机上の」と「モノヲ」に、修飾語と被修飾語の関係があるので、これは名詞「モノ」+格助詞「ヲ」の例とする。
- ・(論者による作例)「あれほど言っておいたものを鍵をかけ忘れて来たとは。」
→「モノヲ」の前部である「あれほど言っておいた」と「モノヲ」に、修飾語と被修飾語の関係がないので、これは接続形式「モノヲ」の例とする。

2. 7. 「モノヲ」の用例

【上代語】

上代語を見る資料として、本項では『万葉集』を取り上げることとし、そこから「モノヲ」の用例について考察する。『万葉集』中に「モノヲ」の用例は全138例ある。それらは

〈順接〉

- (8) 今更に何をか思はむうちなびく心は君に寄りにしものを (『万葉集』巻第四、505番歌、①283頁)

〈逆接〉

- (9) 心には忘れぬものをたまさかに見ぬ日さまねく月そ経にける (『万葉集』 卷第四、653 番歌、①334～335 頁)

上記二種の意味を基に、それが情緒性を帯び、

〈詠嘆〉

- (10) 我が身こそ関山越えてここにあらめ心は妹に寄りにしものを (『万葉集』 卷第十五、3757 番歌、④75 頁)

〈当為〉

- (11) なでしこは秋咲くものを君が家の雪の巖に咲けりけるかも (『万葉集』 卷第十九、4231 番歌、④336 頁)

などがある。〈詠嘆〉に分類される例の「モノヲ」は終助詞と考えても良いと思われる。

また、これらをさらに踏まえて、極端な例を示し「こういうときは、またはこういうものは～であるのに」と一般を類推させる、

〈類推〉

- (12) たらちねの母がその業る桑すらに願へば衣に着るといふものを (『万葉集』 卷第七、1357 番歌、②261 頁)

に分類できる。しかし、上記の〈逆接〉の例「心には忘れぬものを～」の「モノヲ」が和歌中にあるとはいえ、詠嘆の意味も帯びているとも考えられることから、複数の分類項目にまたがるような用例も多い。

また、いわゆる〈順接〉、〈逆接〉等の意味を表す接続助詞であるか、名詞であるかの判断が付きにくい例も存在する。上記で〈当為〉に分類した、

- (13) (再掲) なでしこは秋咲くものを君が家の雪の巖に咲けりけるかも (『万葉集』 卷第十九、4231 番歌、④336 頁)

の例などである。現代語訳を見ると、「なでしこは秋咲くものだがあなたの館では雪の巖に時ならず咲いていますね。(上記同、336 頁)」とある。「モノヲ」の「モノ」を名詞と取り「なでしこというものは、秋に咲くものだ」の意味で解釈する考え方もあれば、「モノヲ」を接続助詞と取り「なでしこというものは秋の咲くものなのに」の意味で解釈する考え方もある。この歌の場合はどちらとも取れ、故に「モノヲ」を名詞「モノ」+格助詞「ヲ」と取るか、「モノヲ」という接続助詞と取るかは判然としない。

また、「モノヲ」が明らかに名詞「モノ」+格助詞「ヲ」であり、接続助詞「モノヲ」ではない例も見られる。

- (14) ねもころに物を思へば言はむすべ (略) 見るごとにまして偲はゆいかにして忘る

るものそ恋といふものを（『万葉集』巻第八、1629番歌、②366～367頁）

現代語訳では「(略) 見るたびにますますあなたのことが偲ばれる どうやったら忘れられるものなのか 恋というものは」（上記同、367頁）とある。

『万葉集』の「モノヲ」は上記の分類で示したように、名詞「モノ」の意味が認められる例と、それが認め難く接続助詞「モノヲ」の意味が認められる例が混在している。先述したような、名詞「モノ」に格助詞「ヲ」が付いた例と、接続助詞「モノヲ」の例とのどちらとも取れる例は数えず、接続助詞「モノヲ」としての意味が認められる例を数えたところ、81例が確認できた¹⁸。

[上代の接続助詞「モノヲ」の比率]

「モノヲ」の用例数 (A)	左記中、接続助詞「モノヲ」 としての意味が認められる 用例数 (B)	全「モノヲ」の用例数中の、 接続助詞「モノヲ」としての意味が 認められる用例数 (B/A×100%)
138	81	81/138×100=約 58.7%

上記より、上代から既に約 58.7%と全「モノヲ」の形式のうち半数以上は接続助詞としての意味が認められていたことが分かる。

【中古語】

中古語を見る資料として、本項では『古今和歌集』と『源氏物語』を取り上げることとし、そこから「モノヲ」の用例について考察する。両資料中に「モノヲ」の用例は全 289 例（『古今和歌集』36例、『源氏物語』253例）ある。それらは
〈順接〉

- (15) 大将の君は、ことわりぞかし、ゆゑは飽くまでつきたまへるものを、もし世の中に飽きはてて下りたまひなば、さうざうしくもあるべきかな、とさすがに思されけり。（『源氏物語』葵、②53～54頁、〈源氏の心内話。〉）

¹⁸ 判断の基準として、構文上の接続の形として「用言連体形+モノヲ」の形式を持ち、資料に記載されている現代語訳を参照して本文上記の〈順接〉、〈逆接〉、〈詠嘆〉、〈当為〉、〈類推〉のいずれかに分類できる例を該当する例として数えた。複数の分類項目にまたがるような例は、一例として数えた。

〈逆接〉

- (16) 裁ち縫はね衣着し人もなきものをなに山姫の布さらすらむ (『古今和歌集』926番歌、350頁)
- (17) 「年ごろ、うれしく面だたしきついでにて立ち寄りたまひしものを、かかる御消息にて見たてまつる、かへすがへすつれなき命にもはべるかな。(『源氏物語』桐壺、①30頁、〈桐壺更衣の母君が勅使鞆負命婦を相手に故更衣を偲ぶ発話。〉)

〈詠嘆〉

- (18) 住吉の岸の姫松人ならばいく世か経しと言はましものを (『古今和歌集』906番歌、343頁)
- (19) いといたうさだ過ぎたまひにける御けはひにも、故宮を思ひ出できこえたまひて、かく長くおはしますたぐひもおはしけるものをと口惜しう思はず。(『源氏物語』少女、③74頁、〈弘徽殿太后と対面して、故藤壺の宮を思い出す源氏の心内話。〉)

など、上代語の「モノヲ」と同じ意味で使用されている例が見られる。また、

- (20) 口つきうつくしうにほひ、まみのびらかに恥づかしくかをりたるなどは、なほいとよく思ひ出でらるれど、かれはいとかやうに際離れたるきよらはなかりしものを、いかでかからん、宮にも似たてまつらず、今より気高くものしうさまことに見えたまへる気色などは、わが御鏡の影にも似げなからず見なされたまふ。(『源氏物語』横笛、④349頁、〈源氏は薫の姿に柏木を見、『あの人にはこれほどまでぬきんでた気高い美しさはなかったものを、なぜこうもすぐれた若君の器量なのだろう¹⁹、』と考える。源氏の心内話。〉)
- (21) 大殿、かかることを聞きたまひて、人笑はれなるやうに思し嘆く。「しばしはさても見たまはで。おのづから思ふところものせらるらんものを。」(『源氏物語』夕霧、④486頁、〈致仕の大臣は雲居雁が父大臣の邸に帰って来たことについて「どうしてしばらくはそのまま様子を見ていようともなさらなかったのです。大将も、しぜんそのうちに思うところがおありであるう²⁰。」と不満を述べる。致仕の大臣の発話。〉)

と、〈順接〉とも〈逆接〉とも取れ、かつ〈詠嘆〉や〈類推〉の意味も含まれたような例もある。このような「ものを」は終助詞のようにも取れ、そこから、

¹⁹ 現代語訳は『源氏物語』横笛、④349頁に依る。

²⁰ 現代語訳は『源氏物語』夕霧、④486～487頁に依る。

(22) 「かの母も、いかにあはあはしくけしからぬさまに思ひたまはんとすらむ。うしろやすくと、かへすがへす言ひおきつるものを」と、いとほしく思せど、(『源氏物語』東屋、⑥64頁、《『あの母君も、どんなに宮のことを軽々しく不届きな方とお思いになるでしょう。これで安心と、何度も何度も言い置いていったものをと、気の毒にお思いになるけれど²¹、』と中の君は右近から聞いた話に不安を覚える。中の君の心内話。))

「モノヲ」の直後に引用を表す助詞「ト」が付いた例も見られる。これは、「モノヲ」が終助詞のようにはたらき、一つの文末のように解されるようになった故の例であると思われる。ここからさらに、

(23) 顔隠したまへる御袖をすこしひきなほして、「かくはかなかりけるものを、思ひ隈なきやうに思されたりつるもかひんかりければ、このとまりたまはむ人を、同じことと思ひきこえたまへとほのめかしきこえしに、(『源氏物語』総角、⑤327頁、《『こんなにもはかなかった命でございましたが、情け知らずの女のようにお取りになられましたのをどうすることもできませんので、²²』と臨終の大君は妹中の君のことを薫に話す。大君の発話。))

のような、現代語の複文²³に近い構造の用例も見られる。

中古語の「モノヲ」は上代語の「モノヲ」と同様、名詞「モノ」の意味が若干認められる例もある。

(24) なかなか何ばかりのおもしろかるべき拍子も聞こえぬものを。(『源氏物語』初音、③160頁、〈「ものを」は「曲節」の意味。))

(25) 「いたうな過ぐしたまひそ。にこやかなる方のなつかしきは、ことなるものを。」(『源氏物語』梅枝、③416頁、〈「ものを」は「筆使い」の意味。))

上記(24)、(25)の用例は「モノヲ」が、名詞「モノ」の意味と、終助詞のようにも解せる接続助詞「モノヲ」の意味の両方にとれる例であると言えよう。上代語の例と同じく、名詞「モノ」に格助詞「ヲ」が付いた例と、接続助詞「モノヲ」の例とのどちらともとれる例は数えず、接続助詞「モノヲ」としての意味が認められる例を数えたところ、172例(『古今和歌集』33例、『源氏物語』139例)が確認できた。

²¹ 現代語訳は(『源氏物語』東屋、⑥65頁に依る。

²² (『源氏物語』総角、⑤327頁に依る。

²³ 「複文とは、構成要素として節を二つ以上含む文。」(飛田良文編(2007)『日本語学研究事典』、「複文」の項、仁田義雄執筆担当。251頁。)

[中古の接続助詞「モノヲ」の比率]

「モノヲ」の用例数 (A)	左記中、接続助詞「モノヲ」 としての意味が認められる 用例数 (B)	全「モノヲ」の用例数中の、 接続助詞「モノヲ」としての意味が 認められる用例数 (B/A×100%)
289	172	172/289×100=約 59.5%

[上記の内訳]

資料名	(A)	(B)	(B/A×100%)
『古今和歌集』	36	33	約 91.7%
『源氏物語』	253	139	約 54.9%

上記より、中古では約 59.5%と全「モノヲ」の形式のうち上代と同じく半数以上に接続助詞としての意味が認められていたことが分かる。

【中世語】

中世語を見る資料として、本項では『新古今和歌集』と『平家物語』覚一本と『天草版平家物語』を取り上げることとし、そこから「モノヲ」の用例について考察する。これらの資料中に「モノヲ」の用例は全 178 例（『新古今和歌集』50 例、『平家物語』覚一本 16 例、『天草版平家物語』112 例）ある。それらは

〈順接〉

(26) 今よりはまた咲く花もなきものをいたくな置きそ菊の上の露（『新古今和歌集』509 番歌、155 頁）

(27) 家わあれども、羅文も破れ、葎、遣戸も絶えてなし。ここにわ大納言殿こそござったものを、この妻戸をばかうこそいでさせられたが、あの木をばみづからこそ植えさせられたが、などとゆうて、（『天草版平家物語』巻第一第十一、80 頁）

〈逆接〉(28) 思ひやる心は空にあるものをなどか雲居にあひ見ざるらん（『新古今和歌集』1249 番歌、365 頁）

(29) 入道出であひ対面して、「今日の見参は、あるまじかりつるものを、祇王がなと思ふやらん、余りに申しすすむる間、か様に見参しつ。」（『平家物語』覚一本、巻第一、37 頁）

(30) 大臣これを御覽ぜられて、源氏わ多うもなかつたものを、内裏や御所を焼かせたこそ安からね：（『天草版平家物語』巻第四、第十六、332 頁）

また、

- (31) 夜の間にも消ゆべきものを露霜のいかに忍べと頼め置くらん（『新古今和歌集』1341 番歌、巻第十五）
- (32) 身に近く来にけるものを色変る秋をばよそに思ひしかども（『新古今和歌集』1352 番歌、392 頁）
- (33) 御所にてひき給ひしには、仲国笛の役に召されしかば、其琴の音は、いづくなりとも聞き知らんずるものを。（『平家物語』覚一本、巻第六、434 頁〈高倉帝から小督を探すように命ぜられた源仲国の心内話。〉）
- (34) 白玉かなにぞと人の問ひしとき露と答へて消なましものを（『新古今和歌集』851 番歌、252 頁）

のような、古代語と同じく「モノ」に名詞性が認められ、名詞「モノ」に格助詞「ヲ」が付いた形式と、接続助詞「モノヲ」のどちらとも取れる例（(31)、(32)）や、接続助詞「モノヲ」に詠嘆の意味が強いがためにこれが終助詞のように取れる例（(33)）、さらにその終助詞の意味が強くと表れ、反実仮想の意味と取れる例（(34)）も見られる。

またさらに、以下のような用例も見られる。

- (35) あッばれみかたにはかねつけたる人はないものを。平家の君達でおはするにこそと思ひ、おしならべてむずとくむ。（『平家物語』巻第九、227 頁）
- (36) 「君はかやうの事をまづさとらせ給ひて、兼ねて仏神三宝に御祈誓あつて、御世をはやうせさせましましけるにこそ、ありがたうこそおぼえ候へ。其時貞能も最後の御供仕るべう候ひけるものを、かひなき命をいきて、今はかかるうき目にあひ候。」（『平家物語』覚一本、巻第七、89 頁）

(35) は猪俣党の岡部六野太忠純が薩摩守忠度に戦場で会い味方だと言われ、『ああ、味方には（論者注：齒を）黒く染めている人はいないのに。平家の公達でいらっしやるにちがないと思ひ、馬を並べてむずと組みつく²⁴。』場面、(36) は肥後守貞能が重盛の遺骨に向かい『殿はこのようなことをまずお悟りになって、前もって仏神三宝にご祈願なさり、ご寿命をお早めになったのでしょ。ご立派なことと存じます。その時貞能も最後のお供をいたすべきでございましたのに、生きてかいない命を生きて、今はこんな悲しい目にあっております²⁵。』と東国に落ちる前に別れを述べる場面である。共に、「ものを」が接続助詞のようにも終助詞のようにも取れ、「モノヲ」前後を別の文とも一つの文とも考えることができ、現代語の複文に近い構造の用例であると見て良いかと思われる。このような現代語の複文に近い構造をもつ例は『天草版平家物語』にも多数見られる。

²⁴現代語訳は『平家物語』覚一本巻第九、227 頁に依る。

²⁵現代語訳は『平家物語』覚一本、巻第七、88～89 頁に依る。

- (37) 西八条え出た時、この子がわれも行かうと慕うたを、やがて帰らうぞと、すかいてをいたが、今のやうに覚ゆる：それを限りと思うたならば、今しばしも見うものを！(『天草版平家物語』巻第一、第十二、91頁)〈俊寛が島に来た有王に、都での我が子との別れの辛さを述べる場面。〉
- (38) 年ごろわがこのあたりを出入するをあわれ召し使わうずるものをと、つねに思うたに、さてわ幸ぢゃ：(『天草版平家物語』巻第二、第三、118頁)〈宗盛が競に謀られ召し使おうとする場面。〉
- (39) 鳥羽殿を過ぎらるるにもこの御所え御幸なされたにわ一度もを供にわはづれなんだものをとて通られた：(『天草版平家物語』巻第一、第七、54頁)〈成親卿が謀叛発覚の為、護送される場面。〉
- (40) 急ぎ下向あつて若君を呼びくだしまらし、見させられても、ただ夢の心地をさせられた。しばしここでいたわりまらしようずるものをとわ仰せらるれども、世のきこえもをそろししとあつて、急ぎ高雄え送り奉られた。(『天草版平家物語』巻第四、第二十六、393頁)〈六代御前の顛末を述べた場面。〉

これらは「モノヲ」が終助詞のように取れる例((37))、「モノヲ」に「ト」、「トテ」、「トワ」と、引用の助詞「ト」やそれに他の接続助詞や係助詞等が付いた形式を持った例((38)、(39)、(40))である。いずれも文中の「モノヲ」でまとめられた部分が主語と述語の構造を持つ一つの節のようになっており、やはり現代語の複文に近い構造をもっていると考えられる。

これらを踏まえ、「モノヲ」に接続助詞「モノヲ」としての意味が認められる例を数えたところ、110例(『新古今和歌集』48例、『平家物語』覚一本12例、『天草版平家物語』50例)が確認できた。

[中世の接続助詞「モノヲ」の比率]

「モノヲ」の用例数 (A)	左記中、接続助詞「モノヲ」 としての意味が認められる 用例数 (B)	全「モノヲ」の用例数中の、 接続助詞「モノヲ」 としての意味が 認められる用例数 (B/A×100%)
178	110	110/178×100=約 61.8%

[上記の内訳]

資料名	(A)	(B)	(B/A×100%)
『新古今和歌集』	50	48	96.0%
『平家物語』 覚一本	16	12	75.0%
『天草版平家物語』	112	50	約 44.6%

上記より、中世では約 61.8%と全「モノヲ」の形式のうち上代、中古と同じく半数以上に接続助詞としての意味が認められていたことが分かる。

【近世語】

近世語を見る資料として、本項では『近世和歌集²⁶』と浅井了意『浮世物語』、近松門左衛門『出世景清』、上田秋成『雨月物語』十返舎一九『東海道中膝栗毛』、式亭三馬『浮世床』を取り上げることとし、そこから「モノヲ」の用例について考察する。これらの資料中に「モノヲ」の用例は全 139 例（『近世和歌集』 4 例、『浮世物語』 9 例、『出世景清』 9 例、『雨月物語』 15 例、『東海道中膝栗毛』 97 例、『浮世床』 6 例）ある。それらは

〈順接〉

- (41) さればこそ慈鎮和尚の哥に、 人により一つの癖はあるものを我にはゆるせ
敷島の道 まことに癖も癖によりて、良きもあり悪しきもある。（『浮世物語』
巻第二、十、144 頁）
- (42) 弥次「それに聞なせへ。今の一ぱいやらかしてゐたとき、なにか、ふところ
のうちで、ふつつりといふおとがしたから、さぐつて見たら、ゑつちうふん
どしのひもが、きれくらゐに、腹がはりきつてきたものを、もふ / \ おゆる
し / \」（『東海道中膝栗毛』七編下、430 頁）

〈逆接〉

- (43) 阿古屋は読みも果て給はず、はつとせきたてる気色にて。恨めしや、腹立ち
や、口惜しや、妬ましや、恋にへだてはなきものを、遊女とは何事ぞ。（『出
世景清』、29 頁）
- (44) なびくだに涼しきものを夏河の玉藻を見れば花咲きにけり（『桂園一枝』〈『近
世和歌集』香川景樹、59 番歌、330 頁）

などがある。また、〈順接〉とも〈逆接〉とも取れる例もある。

²⁶ 久保田啓一（2002）『近世和歌集』（『新編日本古典文学全集』小学館発行）の凡例「近世和歌の中から、二十二名の歌人を選び、その作品を作者ごとにまとめ、収録した」（11 頁）ものを指す。

- (45) 阿古屋はしばし返事もせず。涙にくれてみたりしが、なう兄上、そもや御身は本気にてのたまふか。(略) 平家の御代にて候はば、誰かあらう景清と、飛ぶ鳥までも落ちし身が、今この御代にて候へばこそ、数ならぬ我々を頼みて御入り候ふものを。たとへば日本に唐をそへて給はるとて、そもや訴人がなるべきか。(『出世景清』、27 頁)〈我々を頼りにしてお出でになったのだから。／なったのに。〉

このような例は古代語にも見られる。接続助詞「モノヲ」自体には〈順接〉、〈逆接〉の別はなく、その前後を関係付けるはたらきがあるということであり、その意味関係は「モノヲ」の前後の意味関係によって決まってくると思われる。

また、

- (46) その国の主一人、みづから井を掘りて水を飲みけるほどに、狂気せざりけるを、国民かへつて、『国の守物に狂ひ給ふ』とて、灸をいたし鍼を立て、いやがるものを無理に押しふせ、大勢とりかかり養性さするゆへに、(『浮世物語』巻第二、148 頁)
- (47) 弥次「おいらは旅のもので、今宵は三条にとまろうといふのだから、はしごをかつてもしかたがねへ」女「なにははんずぞいな。いらんものを、つけさんすことはないわいな」(『東海道中膝栗毛』七編上、403 頁)
- (48) 言ひもはてぬに、「佐々木四郎つゝと出で。いやこれ、畠山殿。筋なきことな申されそ。その景清は某仰せを承り。高綱が手にかけ首を刎ね、我が君の実検にそなへ。三条縄手に獄門にかけて候ふものを。景清が二人あるべきか。ちかごろ粗忽千万とあざわらつて申さるゝ。(『出世景清』54 頁)
- (49) 萩が花ちりそめにけり村雨はぬらすばかりと思ひしものを(『類題亮々遺稿』『近世和歌集』木下幸文、8 番歌、354 頁)
- (50) 浮世房思ひけるは、「口惜しき事かな。われ男ならば、かやうにはとがめじ。あらむつかしの出家や。身持もままにならず、とかく房主はよからぬものなり。剃るまいものを、くやしくも剃り下しけるものかな」(『浮世物語』巻第一、117 頁)
- (51) そも平生の行徳のかしこかりしは、仏につかふる事に志誠を尽せしなれば、其の童児をやしなはざらましかば、あはれよき法師なるべきものを。(『雨月物語』巻之五、「青頭巾」、393 頁)

のような、古代語と同じく「モノ」に名詞性が残存しており、名詞「モノ」に格助詞「ヲ」が付いた形式と、接続助詞「モノヲ」のどちらとも取れる例((46)、(47))や、「モノヲ」が終助詞のように取れる例((48)、(49))、終助詞の意味が強く表れて反実仮想の意味と取れる例((50)、(51))なども見られる。

またさらに、【中世語】のところで『天草版平家物語』に多数見られた、現代語の複文に

近い構造をもつ例も多数見られる。

- (52) 無理に隙をもぎとり、余所をかせげども、ありつきかねて迷惑する時は、ただ元の家がましぢやものをと、くやむ事、千度百度なれども甲斐なし。
〔『浮世物語』巻第五、208頁〕
- (53) 秋の嵐に、散る紅葉むら / \ ばつとぞ逃げにける。オゝさもさうず、さもあらん。この度は仕損ずとも、この景清が一念の、劍は岩を通さんものをと。(『出世景清』、23頁)〈この度は失敗したが、この景清の覚悟のほどは、劍が岩さえ突き通すと同じ〉と、²⁷⁾
- (54) 五十あまりの武士、廿あまりの同じ出立なる、「日和はかばかりよかりしものを、明石より船もとめなば、この朝びらきに牛窓の門の泊りは追うべき。」〔『雨月物語』巻之一「菊花の約」、298頁〕〈海面はこんなに穏やかではないか。明石から船に乗っていたら、この早朝に船出して、今頃は牛窓の港に向っていただろうに一。²⁸⁾
- (55) 国 / \ の名山勝地をも巡見して、月代にぬる、聖代の御徳を、薬罐頭の茶呑ばなしに、貯へんものをと、玉くしげふたりの友どちいざなひつれて、〔『東海道中膝栗毛』初編、51頁〕
- (56) 弥次「イヤこれはそつちへやろふ。火吹竹になろふから」北八「エゝおめへが小便したものを、ナニ火ふきだけになるものだ。はやくふきなせへ。らちのあかぬ」〔『東海道中膝栗毛』四編下、230頁〕
- (57) 土龍「毎日の家業に追はれてゐる若者が死ぬのだものを、功も修業も所詮ある筈がねへ」〔『浮世床』二編下、340頁〕

これらは、「モノヲ」を終助詞のようにして、人物の心内話をまとめてそれを引用の助詞の「ト」で地の文に関係付けた例((52))、同様の例に類推の意味が加わった例((53))、順接の意味の「モノヲ」を用いて人物の発話から地の文に関係付けを行った例((54))、人物の心内話を地の文に「モノヲ」と引用の助詞「ト」で関係付けた例((55))、発話中の「モノヲ」が名詞(「小便した、その『もの』を」の意味)、接続助詞の順接(「お前が小便したのだから」の意味)、接続助詞の逆接(「お前が小便したのに」の意味)、終助詞(「お前が小便したものを。」の意味)のどれとも取れ、同一人物の発話の次句に関係付けた例((56))、人物の発話中で格助詞「ノ」に断定の助動詞「ダ」が付いて「ノダ」となった形式で説明された部分に「モノヲ」が付き同一人物の発話の次句に関係付けがなされた例((57))などである。

²⁷⁾ 現代語訳は「出世景清」〔『近松門左衛門集』③〕、23頁に依る。

²⁸⁾ 現代語訳は「雨月物語巻之一、菊花の約」〔『英草紙、西山物語、雨月物語、春雨物語』〕、297頁に依る。

これらはいずれも現代語の複文に近い構造をもつ例であると考えて良いかと思われるが、特に(56)、(57)は、かなり現代語の複文とかなり近似した形式であると観察でき、特に(57)については「モノヲ」の直前に助動詞「ダ」が付いており、「モノヲ」でまとめられる部分を従属節、「功も修業も～」から始まる部分を主節として考える、現代日本語の複文と同じ構造をもつ文であると見て良いかと思われる²⁹。

これらを踏まえ、「モノヲ」に接続助詞「モノヲ」としての意味が認められる例を数えたところ、71例(『近世和歌集』4例、『浮世物語』6例、『出世景清』7例、『雨月物語』15例、『東海道中膝栗毛』33例、『浮世床』6例)が確認できた。

[近世の接続助詞「モノヲ」の比率]

「モノヲ」の用例数 (A)	左記中、接続助詞「モノヲ」 としての意味が認められる 用例数 (B)	全「モノヲ」の用例数中の、 接続助詞「モノヲ」としての意味が 認められる用例数 (B/A×100%)
139	71	71/139×100=約 51.1 %

[上記の内訳]

資料名	(A)	(B)	(B/A×100%)
『近世和歌集』	4	4	100.0%
『浮世物語』	9	6	約 66.7%
『出世景清』	9	7	約 77.8%
『雨月物語』	15	15	100.0%
『東海道中膝栗毛』	97	33	約 34.0%
『浮世床』	6	6	100.0%

上記より、近世では約 51.1%と全「モノヲ」の形式のうち上代、中古、中世と同じく半数以上に接続助詞としての意味が認められていたことが分かる。

2. 8 まとめ

以上、この章で述べたことをまとめる。

形式名詞「モノ」に格助詞「ヲ」が付いて接続助詞として機能するようになった「モノヲ」の形式は、上代語から近世語まで日本語資料の中に見られる。それが各時代の資料中の全「モノヲ」の用例に占める割合は上代語で約 58.7%、中古語で約 59.5%、中世語で約 61.8%、

²⁹ なお、この「モノヲ」の句は「若者が死ぬのだから」と順接とも、「若者が死ぬのに」と逆接ともどちらとも取れる例であると考えられる。

近世語で約 51.1%と、古代語から近世語まで常に 50%以上であった。古典語の中で、「モノヲ」は用例の半分以上が既に接続助詞として機能してきたものと考えて良いか³⁰と思われる。また、このような接続助詞「モノヲ」の使用が上代から既に約 58.7%見られたということ、上代から近世にかけて全「モノヲ」の使用に対しての接続助詞「モノヲ」の使用率が普遍的に 50.0%以上であることから、接続助詞「ものを」は上代から既に成立、使用されており、古代語の使用の中で通時的な意味用法の変化を見たものではないと考えた方が妥当であると思われる。

また、その表す意味機能を見ると、〈順接〉、〈逆接〉、〈詠嘆〉などの上代から近世にかけて普遍的に見られる意味機能に加え、中世期以降には現代語の複文に近い構造が「モノヲ」によって作られるようになることも観察できる。

中世期には「モノヲ」が終助詞のように取れる例や、「モノヲ」に「ト」、「トテ」、「トワ」と、引用の助詞「ト」やそれに他の接続助詞や係助詞等が付いた形式を持った例なども見られるようになる。これらは「モノヲ」に引用の助詞「ト」(+助詞)の形式が付いて、「～モノヲ+ト/トテ/トワ」の形式で、文中の「モノヲ」の前の部分をまとめる。そしてこのときまとめられた部分は主語と述語の構造を持つ一つの節のようになっており、現代語の複文に近い構造をもっているように見える。

さらに近世期には人物の発話中で格助詞「ノ」に断定の助動詞「ダ」が付いて「ノダ」となった形式で説明された部分に「モノヲ」が付き同一人物の発話の次句に関係付けがなされた例も見られるようになる。この「～ノダモノヲ…」の形式などはかなり現代語の複文の構造に近いものだと思われる。

形式名詞「モノ」に格助詞「ヲ」が付いた形式の「モノヲ」が接続助詞「モノヲ」として文中ではたらいっている証左として、上記の近世の用例は見ても良いと考えられる。これを

³⁰ 近世語の「モノヲ」の接続助詞の率が約 51.1%と古代語中で最も低いことについては、今回用例採集資料とした『東海道中膝栗毛』で「モノヲ」が接続助詞としてはたらく比率が低かった(約 34.0%)ことが要因であると思われる。全資料の全「モノヲ」の用例のうちそれが接続助詞としてはたらく比率は本文中に挙げたとおりであるが、『東海道中膝栗毛』のそれは他資料に比して低い率(約 34.0%)であり、散文資料ではあるが本文が対話文主体で構成されていると考えて良いと思われる、ここでは中世語の資料として用いた『天草版平家物語』における接続助詞「モノヲ」の率が約 44.6%であるのに比しても、それはさらに低い率である。『東海道中膝栗毛』の「モノヲ」には、接続助詞としての用例よりも、「(地の文) 向ふよりつゞいてくるお大名の長持、引もきらず 人足「はこねさア引八里イはアなあんあへアツ / \ どうだか / \」北「弥次さん見ねへ。おもそふなものをよくかつぐぜ。」(『東海道中膝栗毛』初編、64 頁)などの、名詞「モノ」に助詞「ヲ」が付いた用例が多く見られたということであるが、これは資料の話の内容によるものであると思われる。また、「主人公二人の道中滑稽見聞譚は仮名草子の『竹斎』『東海道名所記』などにも見られたが、これをより狂言のシテ・アドに似せ、多くの道中記や『都名所図会』などを参照し、」(「道中膝栗毛」の項(『日本古典文学大辞典 第四巻』(1984) 岩波書店刊、小池正胤執筆担当箇所)とあるように、この資料の本文が文語文から採られたものであるという事情も考えられよう。

図示すると、

(中世期以前の形式) 節{ (主語+述語の構造) (+助詞/助動詞) }+モノヲ+次句



(中世期以降の形式) 従属節+接続助詞「モノヲ」+主節

のようになり、現代語の複文の構造に近い接続の形式が「モノヲ」によって作られていると思われる。

山口(1975)が説明する「判断を対象化」する、「意味関係を顕示・強調」するということは、これまでに述べたように、接続助詞「モノヲ」の形式を用いて構文としてことばでその意味機能—〈順接〉、〈逆接〉など—を明示的に表すことを指すこと、またさらに、複文の形式を作り、ことばで表すことであると考えられる。

以上、この第2章では接続助詞「モノヲ」の形式は上代語、中古語、中世語、近世語と古典語になべて見られ、全「モノヲ」の用例に対し、各時代50.0%以上の接続助詞としての使用率が見られたこと、またここから、接続助詞としての例は上代に既に見られており、古典語の中での通時的な意味用法の変化を見たものではないと考えられること、さらに、中世期以降は(主語+述語)の構造をもった節に接続助詞「モノヲ」が付き、それに次句が続く形式が見られるようになり、これがさらに従属節に接続助詞「モノヲ」が付いて主節が続く、現代語の複文に近い構造を持つ形式も見られることから、中世期から近世期には、現代語の複文の構造に近い接続の形式が接続助詞「モノヲ」によって作られていることを述べた。

なお、形式名詞「モノ」に格助詞「ヲ」が付いた形式が接続助詞「モノヲ」として文中ではたらくようになる変化は文法化の理論で説明できると思われる。この文法化の理論については第3章で後述する。

また、接続には、ここまでに述べたような、形式名詞出自の形式である「モノヲ」を使って複文の形式を作る形式のほかに、用言の活用形に接続助詞「バ」、「ト」、「トモ」、「ド」、「ドモ」などが付いて順接や逆接の仮定条件・確定条件を表す形式もある。これらも接続の一つの型として見るべきであると考えられるため、次章ではこれらの用言活用形に接続助詞が付いた形式の意味機能について見ていくこととする。

第3章

3. 「用言活用形＋接続助詞」の形式をもつ接続形式

3. 1. はじめに

前章では形式名詞出自の形式である「モノヲ」を使って複文の形式を作る形式について述べた。そこではこれが上代より見られた形式であることを確認した。日本語の接続の形式にはこのほかに、用言の活用形に接続助詞「バ」、「ト」、「トモ」、「ド」、「ドモ」などが付いて順接や逆接の仮定条件・確定条件を表す形式もある。本章ではこれらの用言活用形に接続助詞が付いた形式の意味機能について見ていく。なお本章では、用言の活用形に接続助詞「バ」が付いた形式を以下、「活用形＋バ」とし、用言の未然形に接続助詞「バ」が付いた形式を以下、「未然形＋バ」とし、用言の已然形に接続助詞「バ」が付いた形式を以下、「已然形＋バ」などとして表すものとして、この件について先行研究で述べられていることについて確認することで、本論の前後の章に関係付けることを目的とする。

3. 2. 先行研究とその主張

まず、本章での主張を行うにあたり踏まえる先行研究として、山口堯二（1980）『古代接続法の研究』、鈴木恵（1982）「原因・理由を表す「間」の成立」、小林賢次（2005）「条件表現史にみえる文法化の過程」を挙げておく。山口（1980・同）はその第三章を「已然形＋ば」の確定条件法」とし、古代語において「已然形＋バ」で表される意味関係を挙げた。鈴木（1982・同）は古代語において原因・理由を表す形式として「間」（アヒダニ）があること、それと共に「故」（ユエニ）の形式も見られることなどを述べ、さらに同じく原因・理由を表す「ヨリテ」、「ホドニ」などの形式にも触れ、これらの形式の関係について述べた。また、小林（2005・同）は古代語の条件表現を文法化の観点³¹によってとらえて通時的に説明をしている。前述したように、本章ではこれらの先行研究の主張に基本的には沿う形でその確認を行い、前章1. 1. と後章1. 3. を関係付けることとしたい。

3. 3. 順接条件について

小林（2005・同）は、順接の仮定条件について古代語の「未然形＋バ」の形式によるもの

³¹ 小林（2005・同）はここで文法化について、「ここでは、大堀壽夫（二〇〇四）において、「語彙的要素（動詞、名詞など）が意味的に抽象化し、文法的要素になったもの」とされる典型的な事象を中心とつつも、（略）機能の「多機能化」（典型例に対する周辺例）をも含める立場によって考えていきたい。」（同 182（1）～182（2）頁）という立場を取っている。

から近代語の「假定形+バ」の形式によるものとへと移行したことを、「花咲かば見む。」「花が咲いたら見よう。」の例文を挙げて、「花が咲いたら見よう。」の例文の假定条件の「タラ」は、〈咲いたそのときに〉という事態の成立・完了を担うものとなって」（同・181（2）頁）いることを指摘し、假定条件を表す接続助詞の「たら」と完了の助動詞「タリ」との関わりを指摘する。また、「もし花咲かばこの種買はむ。」の例文も挙げ、これは「花が咲く（の）ならこの種を買おう。」と、〈「花がたしかに咲くのかどうか」という事態の判断を問うことにな」（同・181（2）頁）ることを指摘し、假定条件を表す接続助詞の「なら」と断定の助動詞「ナリ」との関わりも指摘する。そして、完了の助動詞「タリ」と存在動詞「アリ」による形式である「～テアリ」、断定の助動詞「ナリ」と存在動詞「アリ」による形式である「～ニアリ」をそれぞれ「タリ」と「ナリ」の出自として示した上で「未然形+バ」の形式に対して、新たに発達をとげた「ナラ」「タラ」は、存在動詞から助動詞化したものが、さらに接続助詞的性格のものへと転じてきたことになる。」（同・181（2）頁）とする。

さらに「ナラ（バ）」の場合、中世からの発達段階において「モノ」に接した「モノナラバ」の形式が多用されていたことが知られている。

①「この事しおほせつるものならば、国をも庄をも所望によるべし。」（覺一本平家物語・巻一・俊寛沙汰 125〔日本古典文学大系〕）

②「もし此事もれぬるものならば、行綱まづ失はれなんず。他人の口よりもれぬ先にかへり出して、命いかう」と思ふ心ぞつきにける。（同・巻二・西光被斬 151）

準体法を受ける「ナラバ」の発達をささえる形で、形式名詞「ソノ」が使用されていたものとみられる。（略）「モノ」という形式名詞は、さらに進んで、假定条件の強調形式とでもいふべきものへと転用されているのである。」（同・181（2）～180（3）頁）「コト」や「ホド」を上接した「コトナラバ」「ホドナラバ」という表現形式も見られ、それぞれ独自の意味を分担し、また「活用語+ナラバ」は、一方で「活用語+ノナラバ」の形で、準体助詞「ノ」を挿入させる用法と並行する形で使用されるようになる」（同・183（3）頁）と述べる。

「コトナラバ」「ホドナラバ」と形式名詞を用いて前部と後部を接続させる形式は、ゼ本論前章の「モノヲ」と類似した形式であると見て良いかと思われるが、小林（同）は、以下のような提示的な用法もまた「假定条件を表す用法から転じたもの」（同・180（3）頁）とする。

③姿なら面体なら、京のどなたの奥様にも誰が否とは（浄瑠璃・堀川波鼓・上）

④心だてならきりょうなら、ほんに女子のすかねへ眼といふやらうだぜ」（滑稽本・八笑人、四・下）（用例は小林（同・183（3）頁）の引用。）

そして上記のような用例は、「ナラ」「タラ」が「ともに、假定条件の形式として多用され、意味・用法を拡張しているものとして捉えられるであろう。」（同・180（3）頁）とし、この形式名詞「モノ」「コト」と「ナリ」に「バ」が付いた「モノナラバ」「コトナラバ」や用言の活用語に「バ」が付いた「モノナラバ」などの形による假定条件の強調的用法と

でも呼ぶべきものは、条件の成立を強く表現することになるため、「已然形+バ」の一つの典型的な用法である恒常条件の表現にも類似するものとなる。」(同・179(4)頁)と述べ、阪倉(1975)から以下を引用して説明する。

「…古代語における仮定条件表現が、事実の生起そのことを前件として提出し、それに導かれる事態を個別的に推測するものであったに対して、近代語のそれは、「あり」という存在を意味する要素をふくんで、前件が一つの事実として提出されるかたちをとることによってもうかがわれるように、仮定条件表現そのものが、恒常仮定的性格をおびるにいたったことを意味する。そもそも、前述のように、中世において、本来恒常仮定を表現した「用言+ならば」が、完了性未然仮定に用いられ出したことが、その表れにはかならなかった。そしてさらに、かつては恒常確定の表現形式であったものが、仮定条件表現にあずかるにいたったという事実によって、この傾向は、いよいよ明らかになるのである。すなわちそれは、近代語における仮定条件の表現というのは、現に問題とする一つの事態の背景に、つねに一般性をもった因果性を予想するという発想の形式をとるにいたったということである。(阪倉(1975)、267頁)〈下線は論者による。〉

上記の考えについては小林(2005)から、その一部について疑問が提出されている³²が、阪倉が述べんとするところは、仮定条件形式ととりわけ因果性を表す確定条件形式に意味の混濁が生じやすく、その結果、本来は別の形式で表していた仮定条件と確定条件が同一の形式を以て表されるようになり易かったということであろう。順接条件の仮定条件形式と確定条件形式は、形式と意味の両方の面が相交じり易い性質を持っていたと言える。

その確定条件の形式「已然形+バ」であるが、小林(同)によれば、原因・理由を表す必然確定条件と、ある事態の成立の契機やそのような状況となった契機を表す偶然確定条件があり、通時的に見ると特に必然確定条件は諸形式が発達、交替しており、「その用法や文体的な位置づけなどが問題になっている。」(同・179(4)頁)とされる。

ここで山口(1980)によって「已然形+バ」の形式で表される意味関係を確認しておく。山口は「已然形+バ」の形式で表される意味関係について、「因由性」、「機縁性」、「呼応性」、「志向性」の四つを挙げている。以下それをまとめ、例を割愛して挙げる。(例は全て山口・(1980) 35~43頁からの抜粋。)

「因由性」は前句が後句の原因理由にあたる関係である。

常磐なすかくしもがもと思へども世のことなれば(婆) 留みかねつも(万葉・五・八〇五・憶良)

³² 「恒常仮定」と「恒常確定」、さらには「完了性未然仮定」など、その用語と概念をめぐっては、議論の余地があるが、(小林(2005)・179(4)頁)。

事にふれてかずしらずくるしきことのみまされば、いといたう思ひわびたるを（源氏・きりつぼ）

また前句と後句の両句における因由性の関係それ自体を疑問視する疑問的な意味も表す。

吾が背子にまた逢はじかと思へばか（墓）今朝の別れのすべなかりつる（万葉・四・五四〇・高田女王）

うへはよろづの事にすぐれて絵を興ある物におぼしたり。たてゝこのませ給へばにや、二なくかゝせ給（ふ）。（源氏・ゑあはせ）

また、上記までのような前句と後句の両句が時間的に継起する事態というより、空間的に共存する二つの事態に注目し、一方の事態の様相を他方の事態を類推する理由にするような意味も表す。

かのむらさきのゆかりたづねとり給ひて、そのうつくしみに心いり給ひて、六条わたりにだにかれまさりたまふめれば、ましてあれたるやどは、あはれにおぼしをこたらずながら、ものうきぞわりなかりけると（源氏・すゑつむ花）

けふは、世を思（ひ）すましたる僧たちなどだに涙もえとゞめねば、まして女官たち女御更衣こゝらの男女かみしも、ゆすりみちてなきとよむに（源氏・わかな上）

これらの「因由性」の関係をもつ前句と後句は、後句の事態を主語とすとし、前句の事態を述語内容とする（略）主述関係に変形することもできた。

「機縁性」は「前句が主体の行為を表し、その行為を機縁として主体の遭遇する事態が後句になっているという関係」（同・39頁）である。

君待つと吾が恋ひ居れば（者）我がやどの簾動かし秋の風吹く（万葉・四・四八八・額田王）

さは侍らぬかといへば、中将うなづく。（源氏・はゞき木）

（山口（1980）35～40頁より抜粋）

山口は、上記のような「機縁性」を表す例の後句は「前句における行為の主体が遭遇し認識した事態であるが、主体の遭遇する事態は、(略) 主体の心中に形成される心理内容に傾く場合もある。」(同・39頁)とし、さらに、「機縁性の関係は、具体的な表現において因由性の関係と両立することも少なくないと考えてよい。」(同・40頁)、また「両句の事態が時間的に前後して成立する継起性の関係を前提にしていると見てよい。」(同・40頁)と、「機縁性」の関係と「因由性」の関係の両立、「継起性」の関係の前提性についても触れ、それらの関係を整理して述べている。

さらに山口(1980)を確認する。

「呼応性」は前句と後句の両句の事態が呼応的に呼応的の出現する関係である。

夏のよのふすかとすればほとゝぎすなく一こゑにあくるしのゝめ(古今・夏・一五六・貫之)

前句が外界の事象である例もある。

山のはに月傾けば(婆)いざりする海人の燈火沖になづさふ(万葉・十五・三六二三・遣新羅使人)
くるまの音すれば、わかきものどものゝぞきなどすべかめるに(源氏・夕がほ)

「志向性」は、「因由性」の関係から、その前句を根拠にして(略)推量・意志・命令・反語などの主体の志向を後句に導くこともあるといった関係をいう。

若ければ(婆)道行き知らじ賄(まひ)はせむしたへの使ひ負ひて通らせ(万葉・五・九〇五・憶良)
をのこ、はらからとて、ちかくもよせ侍らねば、ましていかでかきんだちには御らんぜさせん、ときこゆ。(源氏・をとめ)

(山口(1980)40~43頁より抜粋)

山口はさらに、「志向性の関係は、与えられた現実を対象とする因果論的な関係把握を越えた目的論的な意味関係であって、(略)「を・ものを」形式の接続法に最も顕著なものである。「已然形+ば」の志向性の表現は因由性からの発展であるが、「を・ものを」形式のそれは、いわゆる逆接である対立性の関係からの発展と考えられ、そこでは命令・禁止・反語などの強い志向を導く例ははるかに多い。(略)「已然形+ば」形式による志向性の表現には、どちらかと言えば論理に即したものが多く、強い情意を後句に導く例は少ないといつてよい。」(同・43頁)と述べている。

本論の第2章で述べた「モノヲ」による接続が、形式名詞「モノ」+助詞「ヲ」の形式から接続助詞「モノヲ」の形式となり、さらに場合によっては終助詞「モノヲ」の形式として

文中で機能した場合、調査対象の資料の用例や論中の用例において、「強い情意」を終助詞「モノヲ」の上接部分に認める場合が多かったことが確かに確認できる。

「活用形+バ」は上記山口が述べるように「因由性」、「機縁性」、「呼応性」、「志向性」といったどちらかと言えば論理関係に支えられた、複数の意味を表す接続形式であり、それに対して「形式名詞+助詞」の形式はどちらかと言えば情意関係を表す例も見られる接続形式であったと言えるが、両形式の表す関係は「活用形+バ」の接続形式は論理関係、「形式名詞+助詞」の接続形式は情意関係といったような専一的な対応関係を表すものではなく、用例を確認すると「活用形+バ」の接続形式で情意関係を、また「形式名詞+助詞」の接続形式で論理関係を表す例も存在する。接続形式とそれが表す関係は、大まかな傾向として見ておくのが良い程度のものであると思われる。

上記のような「形式名詞+助詞」の接続形式について、小林（2005）は、峰岸（1959）が述べた「間（アヒダ）」、吉田（2000）が扱った「ホド」、小林千草（1973）が扱った「ニヨツテ」などにも触れ、これらの形式名詞を使った接続形式の発生と発達について、「古代語における「已然形+バ」による多義的な形式に対して、近代語において、必然確定条件専用の形式を使用して明確化しようとする動きを表しており、「ノデ」「カラ」を中心とする現代語の表現にもつながってくるものである。」（小林（2005）・178（5）頁）と述べる。

また、順接の接続関係を表す形式が「活用形+接続助詞」から「形式名詞+助詞」へと変化した時期について、鈴木（1982）は原因・理由に代表されるようなような必然確定条件を表す形式の場合、「故に（ユエニ）」が平安初期まで、「間に（アヒダニ）」、「程に（ホドニ）」が平安中期から使用されるようになったことを述べている。また、鈴木（同）は「活用形+接続助詞」の形式の用法について以下のようにまとめている。

〈表5〉和文における接続助詞「バ」の用法

	已然形+バ		未然形+バ
	原因・理由	偶然	仮定
伊勢物語	159 (67)	47 (20)	27 (11.5)
土左日記	78 (79)	14 (14)	6 (6)
かげろふ日記	533 (52.5)	408 (40.2)	75 (7.3)
和泉式部日記	141 (56.8)	82 (33)	22 (9)

〔注〕○主として平安中期とした。

○（ ）内は百分率。和が百にならぬものは、他に逆接的なものの割合が含まれるからである。

○表に掲げないが、竹取物語に於ける三者の比率は、左から50%、35%、15%である。

（鈴木（1982）・51頁より抜粋。）

鈴木による上記〈表 5〉によれば、必然確定条件である原因・理由を表す形式として、『伊勢物語』、『土佐日記』などが著されたとされる平安初期までは「已然形+バ」の形式を以て行うものが約 70~80%であったのが、『かげろふ日記』、『和泉式部日記』などが著されたとされる平安中期には約 60%未満となっている。これは平安中期には原因・理由を表す形式として「已然形+バ」以外の形式を以て行うようになってきたという変化を表している。(鈴木(同)によれば、それは「間に」や「程に」の形式であるとのことである(同・51~52頁))。併せて、平安初期までは原因・理由を表していた「已然形+バ」の形式は平安中期には偶然確定条件を表すようになったという変化をもまた表していることが読み取れる。

順接条件において、初めは「已然形+バ」で確定条件を、「未然形+バ」で仮定条件を表していたものが、阪倉(1958)が述べたように仮定条件と確定条件の意味とそれを表す形式の混合が生じ、その結果、原因・理由の關係に代表される確定条件はその意味を特定しやすい「形式名詞+助詞」の形式で表すことが平安時代中期以降は一般的になっていく。そして従来は確定条件を表していた「已然形+バ」の形式は仮定条件を表す形式として機能するようになる。そこには従来はそうであった、「未然形+バ」の形式で仮定条件を表すという条件の表し方の仕組みの縮小、消失という変化も考えられるべきであろう³³。

3. 4. 逆接条件について

逆接条件についての説明に移る。小林(2005)は続いて、格助詞「ニ」、「ヲ」、また石垣(1942)や近藤(2000)が「ガ」が接続助詞として機能するようになる様相を、「既に文法的要素であるものがその機能を拡張する」(大堀・(2004))ということであると考え、これを「多機能化」(大堀・同)と見ている。それらを踏まえ村田(1996)や、湯澤(1929)を受けて西田(1978)は「ケレドモ」の発達について考察した。それらをまとめて小林(2005)は、「ケレドモ」の成立について、助動詞「マジケレ」が、已然形としての機能を留めながら助詞の「バ」や「ドモ」に接続したものや、係り結びにおいて係助詞「コソ」の結びとして現れていたものとは異ると考え、「マジイケレドモ」「マイケレドモ」の場合には、村田(1996)でも論じられているように「マイ」そのものが不変化助動詞としての性格を強めており、「ケレ」の部分を活用語尾としては意識しがたかったであろう。そのため、次第に「マジイ+ケレドモ」「マイ+ケレドモ」として把握されるようになったのである。したがって、「ケレドモ」の成立に関しては、やはりこの「マジイ」「マイ」の活用語尾が、「ドモ」と連結する形で一語の接続助詞となったものとして位置づけるべきであろう。」(小林・同・

³³ この原因については、平安中期から中世初期にかけて生じた係り結びの崩壊と、その原因の一つと考えられる連体形終止の一般化が考えられるが、これについては稿を改め、ここではこれ以上触れないこととする。

176（7）頁）と述べる。

また小林は併せて助動詞「ウ」に「ケレドモ」の接した「ウケレドモ」の例が見られることを挙げ（同・176（7）頁）、「ウ」や「マイ」に「ケレドモ」が下接するということは、条件表現の体系において、重要な意味を持つものと言えるであろう。すなわち、「已然形＋バ」及び「已然形＋ドモ」の形で、確定条件を表していた古代語の体系に対して、一旦文として終止する句を単位として、それを接続し、複文にするという構造を導くようになったものである。」（同・175（8）頁）とも述べている。

3. 5. まとめ

以上、本章では、接続関係について「用言活用形＋接続助詞」の形式で表すようになった経緯を見た。また、この接続形式の変化に伴う変化として、①用言活用形のみでは多機能、多意味であったものが「用言活用形＋接続助詞」の形式ではその表す機能、意味が専一的になり、形式と機能、意味とが対応的に表されるようになったこと。②接続関係を表す形式の変化が平安時代中期（中古中期）に生じていること。これら二点が確認できた。

これを踏まえ次以降では、平安時代中期以前、つまり中古中期以前は「用言活用形＋接続助詞」の形式を以て、具体的には「已然形＋バ」の形式を以て表していた接続形式を、中古中期以降から中世にかけて表すようになった、「指示副詞＋接続助詞テ」の形式、「形式名詞＋助詞」の形式－（2）－「ホドニ」の形式、同一（3）「ニヨツテ」の形式に注目して考察することとする。具体的にはこれらの形式が接続関係を表すようになった経緯と原因について用例を見つつ考察することで、用言の活用形と助詞を用いる形式から指示副詞や形式名詞と助詞を用いる形式によって接続関係を表すようになった日本語の通時期的変化を捉え、その意味を考えることとしたい。

なお、本論では「指示副詞＋接続助詞テ」の形式について考えるにあたり、その代表として「カクテ」と「サテ」の形式について考察することとする。「カクテ」と「サテ」は上代よりその使用がまとまった数で見られ、³⁴「ニヨツテ」と同じく「ーテ」の形式を持って副詞、接続詞、感動詞などとして使用された形式である。また、指示副詞「カク」、指示副詞「サ」に助詞「テ」が付いた形式という類似的な語構成をもち、対比的に論じるのに好適な形式である。

³⁴ 論文本文中で後述するが、「サテ」については上代にはその確例がなく、使用が中古から認められるとされる。

このような事情から、「カクテ」と「サテ」について考察することは本論の目的に寄与するところが大きいと考え、次章ではこの二形式について考察することとする。

第4章

4. 「指示副詞＋接続助詞テ」の形式をもつ接続形式

4. 1. 本章の概観

本章は古典散文作品における古代日本語接続形式「カクテ」と「サテ」の意味機能と用法について論じるものである。日本語接続形式は、上代から見られる「活用語の活用形＋バ」の形式に加え、準体言を使用する形式、「上接句＋形式体言＋助詞」の形式、「上接句＋副助詞＋助詞」の形式、接続助詞を使用する形式、接続詞を使用する形式が中古から中世にかけて現れ、近世にそれらが整理されて現代日本語に見られる接続助詞や接続詞を使用する形式が主たる形式となったとされる。

この諸接続形式の中で、接続詞の成立は中世以降と言われ、その固有のものではなく、他品詞からの転成によって成立したとされる。それには漢語由来の接続詞とされる「亦是」、「或は」などの名詞由来の語、「さて」、「そして」などの副詞由来の語、「だから」、「けれども」などの助動詞や助詞由来の語などが見られるが、中でも副詞由来、特に指示副詞に由来する接続詞は中世に多数成立し、その後近代日本語の接続形式として定着し使用されている語も多い。

この指示副詞由来の接続詞は副詞由来の接続詞の中でもとりわけ多いとされ、近代語まで残存した語も多い。その中でも「カクテ」と「サテ」は共に古代語からまとまった数の用例が見られ、多くの先行研究が取り上げ、渡瀬（1981）、高橋（1985）、糸井（1987）、岡崎（2010）、西田（1999）、（2010）などが主に論じているが、これらの先行研究は指示副詞から接続詞への通時的な変化を統計的に扱い、その文中での意味と機能について論じることをその目的としている。そこで、本論はそれらの先行研究を補完すべく、なぜその指示副詞が接続詞として機能することとなったかという機能の変化の原因について述べ、また、資料から先行研究の中ではふれていなかった機能による用法を以て文中ではたらく例についても考察し、指示副詞由来の接続形式「カクテ」と「サテ」の意味機能と用法について述べ、日本語接続詞の成立と展開について考察する第一歩とすることとする。

次に本章で扱う「カクテ」と「サテ」についての先行研究と問題点を述べる。高橋（1985）は中古に成立した物語文学作品を資料として、そこに見える「カクテ」と「サテ」を含む接続語の語構成について調査し、「全接続詞の異語数六〇語のうち五一語までが指示語系のもので占められていることが分かる」（同13頁）と述べた。

「カクテ」について、渡瀬（1981）は『栄花物語』正篇と『源氏物語』中の「カクテ」を調べ、「ここに見られる「かくて」は文章や記事を結び合わせているのだが、その記事の内容にいささかの偏りを見せている。これらの例に於いて、その記事の内容は袴着や立后、婚姻、賀宴、行幸など、公的な行事としての性格の強いものを扱っている。」（同・16頁）とし、西田（1999）、（2010）も『源氏物語』中の「カクテ」に着目し、『源氏物語』の「カク

テ」を、その後で重要な公のでき事を述べる部分に置かれる、物語の文脈の段落を区画する徴標と考えた。

糸井（1987）は「カクテ」、「サテ」と歌の位置関係に着目し、「（発表者注：「サテ」が）歌の直前にある一文の冒頭に位置し」（86頁）しており、「「かくて」が歌の後に用いられている」ことを指摘し、岡崎（2010）は「カクテ」と「サテ」の副詞的用法から接続詞的用法、感動詞への変化を通時的に考察した。

これらについて本章ではそれぞれについて調査、再考を行った。渡瀬（1981）、西田（1999）、（2010）、糸井（1987）については「カクテ」の後で必ずしも公の出来事が記述されているわけではないことを用例を挙げて示し、「カクテ」はその前後の文を文の内容にかかわらず関係付ける機能を持ち、それによって物語の長編化を可能にするというはたらきをすることを述べる。

岡崎（2010）は「カクテ」と「サテ」を副詞的用法、接続詞的用法、感動詞と分類するが、その内実については詳細にふれてはおらず、その点について注目することで、「カクテ」、「サテ」の意味機能と用法についてその記述を補完する。

4. 2. 古典散文作品における「カクテ」と「カカルホドニ」について

4. 2. 1. はじめに

本節は、古典散文作品における接続語³⁵「カクテ」と「カカルホドニ」の意味、用法の差異について述べるものである。従来この二形式については等質のものとして扱われることが多く³⁶、その差異については特に述べられてはこなかった。そこで本論では「カクテ」と「カカルホドニ」の、古典散文作品における使用を調査し、その意味、用法に注目してその差異を明らかにしたい。

今回行った調査によれば、「カクテ」と「カカルホドニ」は、それぞれで表される、物語の話（エピソード）と時間のかかわらせ方が異なる。「カクテ」は物語の話を日付のような客観的な時間の情報と共に区切り、整理して時間の流れと継起的に述べるときに用いられる。一方「カカルホドニ」は、物語の話を時間の流れの中で重複的に表す、数年にも渡るような長時間の時間の経過を表すなど、物語の話を時間の流れの中で経過的に述べていくときに用いられる。つまり、この二つの接続語は物語の話を時間の情報と共に述べる際に用いられる接続語である点は共通しているが、物語の話と時間の情報とのかかわらせ方に差異があると考えられる。

4. 2. 2. 先行研究と問題の所在

「カクテ」と「カカルホドニ」のような指示詞由来の接続語についての関心は1970年代から見られた。それについて三苦（1973）は「作者の一首の筆癖」（39頁）と考え、高橋（1985）は「カクテ」や「カカルホドニ」のほかのカ系接続語（「カカレバ」、「カカレド」など）とサ系接続語（「サテ」、「サルホドニ」、「サレバ」、「サレド」など）の機能について、指示内容の具体性と抽象性（14頁）という観点で整理し、説明を行った。特に「カクテ」については中野（1981）が『栄花物語』中の「カクテ」を取り上げ、その使用について「連続的に綴ろうとする（略）意識の表われ」（331頁）とし、渡瀬（1981）は『源氏物語』の「カクテ」の役割について、「違った話題の記事への転換と、質の異なる叙述への転換」（17頁）³⁷とした。

これらを踏まえ、「カクテ」や「カカルホドニ」と物語展開とのかかわりを具体的に示し

³⁵ 「文の成分の一つ。語と語、句と句、文と文とを結び合わす働きを有する成分。」（『日本文法大辞典』松村明編、三八三頁。渡辺実執筆担当による。）を、ここでの「接続語」の定義とする。

³⁶ 「作品の展開を受けとめる「かくて」や「かゝる程に」などもまた、当然ながら一記事を時間の動的な流れの上に置くのだが、」（渡瀬（一九八一）一九頁）や、「和文においては「さ」系と「か」系が中心であり」（高橋（一九八五・一三頁））のようにまとめて扱われていることを指す。

³⁷ 「会話や心理描写を中心とする精緻な叙述を、より説明的・概括的な叙述へと、（渡瀬・一七頁）変換することを、「叙述の質を変換する」（渡瀬・同頁）と述べている。

たものに糸井（1987）西田（1999、2010）がある³⁸。糸井（同）は中古の和文物語、日記、随筆を資料とし、そこで用いられている「カクテ」を「サテ」と比較して「歌の直前に用いられもする「さて」とは対照的に、「かくて」が歌の後に用いられていることが注目される。」

（同 87 頁）と述べ、和歌との位置関係から「カクテ」を考える。また西田（1999）は『源氏物語』中の「カクテ」に着目し、『源氏物語』の「葵」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」の巻において「かくて」は、巻の大段落を区画する徴標として物語の展開上重要な役割を果たしている。（同 87 頁）、「これらの巻で「かくて」以下が導くのは、かなり大きな公のでき事という共通する傾向がある。」（同 97 頁）と指摘し、次いで西田（2010）で、「かくて」は、それぞれの巻（論者注：「少女」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」の巻）において、結節点ともなる重要なできごとのはじまりを示す文を導く（同 110 頁）とし、「カクテ」を、その後で重要な公のでき事を述べる部分に置かれる、物語の文脈の段落を区画する徴標と考えた。

糸井、西田は「カクテ」が物語の文脈の中でどのように機能するかについて示したという点で、「カクテ」についての考察を彼ら以前の研究から一歩進めたと言えよう。しかし、糸井、西田共に、なぜ「カクテ」が「歌の後に用いられている」のか、また、なぜ「カクテ」が「巻の大段落を区画する徴標」として機能し、「カクテ」の後に「かなり大きな公のでき事」が述べられるのかについては示していない。また、論者の調査によれば、両氏の指摘に合わない「カクテ」の例もあり、それらについての説明も必要であるかと考えられる。

そこで本論では糸井（同）と西田（同 1、同 2）を踏まえ、中古和文物語作品中の「カクテ」と「カカルホドニ」の出現状況をまず示し、その上で二語の用法の差異について、両氏が述べた、歌物語における「カクテ」と歌との位置関係や、『源氏物語』中の諸巻における「カクテ」の機能について確認しつつ述べることとする。

4. 2. 3. 中古散文物語作品中の「カクテ」と「カカルホドニ」の分類

まず、中古散文作品に見られる「カクテ」と「カカルホドニ」についてそれぞれの用例数を示す³⁹。用例数は地の文と非地の文に分けて示す。非地の文とは、地の文以外の対話文、心内話文、消息文、歌の文を指すものとする。また、用例の検索にはコーパス検索アプリケ

³⁸以下、適宜糸井（1987）を「糸井（同）」、西田（1999）を「西田（同 1）」、西田（2010）を「西田（同 2）」とする。

³⁹本論では「カクテ」と「カカルホドニ」についてを考察対象とし、これらに係助詞や副助詞が付いた「カクテモ」、「カクテコソ」、「カカルホドニモ」、「カカルホドニコソ」などの形式は考察対象として含めない。また、本論では以降、「カクテ」・「カウテ」、「カカルホドニ」と表記を統一する。

ーション「中納言」(国立国語研究所開発)⁴⁰とジャパンナレッジL i b⁴¹を用い、その後小学館刊行の『新編日本古典文学全集』で確認した例を考察の対象とした。用例末の頁数は同全集のものである。用例に付した下線は論者による。

初めに確認できた全用例をⅠ型からⅣ型に分類して示す。

【Ⅰ型】

「カクテ」や「カカルホドニ」は文中に置かれており、両語の直後に述語用言が後接する型。

(1) [カクテ]

男は、さしも思さぬことをだに、情のためにはよく言ひつづけたまふべかめれば、ましておしなべての列には思ひきこえたまはざりし御仲の、かくて背きたまひなんとするを、口惜しうもいとほしうも思しなやむべし。(『源氏物語』賢木、90頁)

(2) [カカルホドニ]

皇子は、かくてもいと御覽ぜまほしけれど、かかるほどにさぶらひたまふ例なきことなれば、まかでたまひなむとす。(『源氏物語』桐壺、24頁)

【Ⅱ型】

「カクテ」と「カカルホドニ」は文中に置かれており、両語の後に一語以上の語が置かれ、その後に述語用言が後接する型。

(3) [カクテ]

大将に聞こえたまへば、「いとよう仰せられたり。ここにかくてわが御ままたておはします。仲忠侍り。」(『うつほ物語』楼の上 上、437頁)

(4) [カカルホドニ]

該当例なし。

【Ⅲ型】

「カクテ」と「カカルホドニ」は文頭に置かれ、両語の後に[主語(句) + 述語(句)]の構造をもつ節が認められ、なおかつ「カクテ」と「カカルホドニ」に承前性があり、作品本文中の両語で導かれる文よりも前部の文中に「カクテ」と「カカルホドニ」で表されている内容が示されている型。

(5) [カクテ]

たけとりの翁、竹を取るに、この子を見つけて後に竹取るに、節をへだてて、よご

40 コーパス検索アプリケーション「中納言」(国立国語研究所開発)

<https://chunagon.ninjal.ac.jp/>を指す。

41 ジャパンナレッジL i b (株式会社ネットアドバンス提供)

<http://japanknowledge.com/>を指す。

とに、黄金ある竹を見つくることかさなりぬ。かくて、翁やうやうゆたかになりゆく。(『竹取物語』、18頁)

(6) [カカルホドニ]

「かかる君に仕うまつらで、宿世つたなく、悲しきこと、この男にほだされて」とてなむ泣きける。かかるほどに、帝聞こしめしつけて、この男をば流しつかはしてければ、(『伊勢物語』六五段、169頁)

【IV型】

「カクテ」と「カカルホドニ」は文頭に置かれ、両語の後に[主語(句)+述語(句)]の構造をもつ節が認められ、さらに、「カクテ」と「カカルホドニ」に承前性がなく、作品本文中の両語で導かれる文よりも前部の文中に「カクテ」と「カカルホドニ」で表されている内容が示されていない型。

(7) [カクテ] (この例は「カクテ」の後の主語(句)が省略されている例。)

築地よりはじめて、新しくつきまはして、古き一つまじらず、これを大事にてつくらせたまふ。かくて「今年の賀茂祭いとをかしからむ」と言へば、衛門督の殿、「さうごうしきに、御達に物見せむ」とて、(『落窪物語』卷之二、202頁)《「つくらせたまふ」までの文と「かくて、今年の」以降の文に承接関係はない。》

(8) [カカルホドニ]

さながら習ひ取りなどして経たまふほどに、二十一なり。御妻なし、よき人の娘ども奉れども、思ふ心ありて得たまはず。かかるほどに、右近将監清原松方、琴の師、つかさの少将仲頼に、陣にていふほどに、(『うつほ物語』吹上 上、381頁)《「得たまはず」までの文と「かかるほどに、右近将監清原松方、」以降の文に承接関係はない。》

4. 2. 4. 各型の用例の扱いについて

まず、前項3. 1. 1. で示した四つの型に分類した用例数を(表1)～(表3)に示す。表では()外に用例の合計の実数を示し、()内にその内訳を(地の文の用例数、非地の文の用例数)として挙げる。

(表1) 「カクテ」の型別用例数⁴²

	カクテ				
和文作品名	I型	II型	III型	IV型	カクテ合計
『竹取物語』	0(0, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)
『伊勢物語』	0(0, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)
『土佐日記』	0(0, 0)	0(0, 0)	7(7, 0)	0(0, 0)	7(7, 0)
『大和物語』	5(2, 3)	0(0, 0)	35(35, 0)	0(0, 0)	40(37, 3)
『平中物語』	2(1, 1)	0(0, 0)	4(4, 0)	0(0, 0)	6(5, 1)
『落窪物語』	14(1, 13*)	2(0, 2)	14(14*, 0)	1(1, 0)	31(16, 15)
『うつほ物語』	67(8, 59*)	6(0, 6*)	401(400*, 1)	53(53*, 0)	527(461, 66)
『源氏物語』	94(19, 75*)	11(1, 10)	20(20*, 0)	2(2, 0)	127(42, 85)
型別用例合計	170(31, 139)	18(1, 17)	475(474, 1)	53(53, 0)	741(571, 170)

(表2) 「カカルホドニ」の型別用例数

	カカルホドニ				
和文作品名	I型	II型	III型	IV型	カカルホドニ合計
『竹取物語』	0(0, 0)	0(0, 0)	3(3, 0)	0(0, 0)	3(3, 0)
『伊勢物語』	0(0, 0)	0(0, 0)	1(1, 0)	0(0, 0)	1(1, 0)
『土佐日記』	0(0, 0)	0(0, 0)	0(0, 0)	0(0, 0)	0(0, 0)
『大和物語』	0(0, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)
『平中物語』	0(0, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)
『落窪物語』	0(0, 0)	0(0, 0)	2(2, 0)	4(4, 0)	6(6, 0)
『うつほ物語』	0(0, 0)	0(0, 0)	94(94, 0)	1(1, 0)	95(95, 0)
『源氏物語』	1(1, 0)	0(0, 0)	4(4, 0)	0(0, 0)	5(5, 0)
型別用例合計	1(1, 0)	0(0, 0)	108(108, 0)	5(5, 0)	114(114, 0)

⁴²本論でテキストとして用いた『新編日本古典文学全集』の『伊勢物語』の底本は学習院大学蔵三条西家旧蔵伝定家筆『伊勢物語』であるが、「底本になく他系統書本にある章段については、底本の百二五段の後に異一、異二、……等として掲げた。」(109頁・凡例)とあり、その異聞中の用例(「カクテ」1例)はここでは含めていない。

(表3) 「カクテ」と「カカルホドニ」の総合計数

	カクテ合計	カカルホドニ合計	総合計
和文作品名			
『竹取物語』	2(2, 0)	3(3, 0)	5(5, 0)
『伊勢物語』	2(2, 0)	1(1, 0)	3(3, 0)
『土佐日記』	7(7, 0)	0(0, 0)	7(7, 0)
『大和物語』	40(37, 3)	2(2, 0)	42(39, 3)
『平中物語』	6(5, 1)	2(2, 0)	8(7, 1)
『落窪物語』	31(16, 15)	6(6, 0)	37(22, 15)
『うつほ物語』	527(461, 66)	95(95, 0)	622(556, 66)
『源氏物語』	127(42, 85)	5(5, 0)	132(47, 85)
型別用例合計	741(571, 170)	114(114, 0)	855(685, 170)

※1 「カクテ」、「カカルホドニ」の用例には「カクテナム」、「カカルホドニハ」などの、助詞の付いた形は含めない。
 ※2 【Ⅲ型】には「カクテ」と「カカルホドニ」の後の主語(句)が省略されている例も含む。
 (例) 朝には狩にいだしたててやり、夕さはかへりつつ、そこに来させけり。かくてねむごろにいたつきけり。
 (『伊勢物語』六九段(172頁))→【Ⅲ型】に分類する。
 ※3 頭注の注記などから、他本に「カクテ」の例として確認できないものは数値に含めない。
 (具体的に「かくて待るを。」(『うつほ物語』蔵開下(604頁):「かくて」→底本「信つ」(同頁頭注))と、「限りと見えながらも、かくて生きたるわざなりけり」(『源氏物語』手習(293頁):「かくて」→「かくても」とする本もある。)(同頁頭注)の2例。
 ※4 『うつほ物語』の例にはいわゆる「絵詞」の部分の文は含めない。
 ※5 *は、「カクテ」の音便形「カウテ」も含む。「カウテ」のみの例は、
 『うつほ物語』(Ⅰ型 7(0, 7) Ⅱ型 1(0, 1) Ⅲ型 7(7, 0) Ⅳ型 3(3, 0),
 『落窪物語』(Ⅰ型 1(0, 1) Ⅱ型 0(0, 0) Ⅲ型 1(1, 0) Ⅳ型 0(0, 0),
 『源氏物語』(Ⅰ型 4(0, 4) Ⅱ型 0(0, 0) Ⅲ型 1(1, 0) Ⅳ型 0(0, 0))である。

ここで、【Ⅰ型】から【Ⅳ型】の各分類について確認しておく。前項3. 1. 1. で述べたように、【Ⅰ型】及び【Ⅱ型】に分類される〈「カクテ」・「カカルホドニ」〉と〈述語用言〉の関係は、〈修飾語〉と〈被修飾語〉の関係であり、【Ⅲ型】及び【Ⅳ型】に分類される〈「カクテ」・「カカルホドニ」の前部に置かれている文〉と〈「カクテ」・「カカルホドニ」で導かれる文〉の関係は、接続語の〈前部〉と〈後部〉の関係である。

これを踏まえて(表1)、(表2)を見ると、いずれの作品でも「カクテ」、「カカルホドニ」共に【Ⅲ型】の方が【Ⅳ型】より多く見られる。これは、本論で用例採集資料とした古典散文作品本文中では、【Ⅲ型】のような「カクテ」や「カカルホドニ」に承前性がある形で接続を行う接続語の方が、【Ⅳ型】のような、「カクテ」や「カカルホドニ」に承前性がなく、機能としてその前後文の接続の関係付けを表す形で接続を行う接続語よりも多く見られることを示している。つまり、いまだ中古期には、「カクテ」と「カカルホドニ」は「カク-」、「カカ-」で表される指示詞としての意味を保持したまま接続語としてはたらいていたと見ることができる⁴³。

⁴³ これはつまり、中古期には「カクテ」、「カカルホドニ」のような指示詞由来の接続語は、指示詞部分が実質的な指示内容をもつ、いまだ副詞として機能しており、機能語である接続詞として見るのは尚早であることを意味していると考えられる。

それを踏まえ、本論は接続語として機能する「カクテ」と「カカルホドニ」の意味、用法の差異を考えることが目的であるので、(表1)、(表2)の【Ⅲ型】、【Ⅳ型】に分類された地の文の用例を考察対象とする。それにあたり、先行研究の糸井(同)は歌物語における「カクテ」に、西田(同1, 同2)は『源氏物語』における「カクテ」に着眼して論じていることから、本論でも、まずそれらに注目し、その後に「カカルホドニ」について考察していく。

4. 2. 5. 歌物語における「カクテ」

糸井(同)は『大和物語』中の「カクテ」に注目し、「歌の直前に用いられもする「さて」とは対照的に、「かくて」が歌の後に用いられていることが注目される。」(同・87頁)と述べる。まず、この「カクテ」と歌との位置関係を確認する。今、『伊勢物語』、『大和物語』、『平中物語』中の全「カクテ」の用例と、歌との位置関係を(表4)で示す。

	歌の前	歌の後	歌の前後	歌なし	全用例数
『伊勢物語』	0	0	1	1	2
『大和物語』	4	8	13	10	35
『平中物語』	0	1	1	2	4

(表4)『伊勢物語』、『大和物語』、『平中物語』中の全「カクテ」の用例と、歌との位置関係

※1 表中の数値はそこに分類される用例数を表す。

※2 歌の前後位置の判断は、「カクテ」で導かれる文を含めその前後の二文以内に歌が置かれているかどうかを判断基準とした。

(例ア)また、(歌)嘆きのみ(略)音をのみぞなく などいひけり。かくて来たりけるを、「いまはかへりね」とやらひければ、(歌)死ねとてや(歌)心地こそすれ返し、をかしかりけれど、え聞かず。(『大和物語』六五段)→歌の前後の「カクテ」の例とする。

(例イ)返し、(歌)おくれみて(略)まづながるべく かくて、まことに、この男、ものへいなむと思ひたる気色を見て、(略)せちにのたまふ。思ひわづらひてながらふるに、(略)いひやる。(『平中物語』一段)→歌の後の「カクテ」の例とする。

(表4)より、用例の数値を比較すると、糸井(同)が述べた歌の後に置かれた「カクテ」よりも、歌の前後の位置に置かれる、または歌とは関係なく地の文中に見られる「カクテ」の方が多い。それらを挙げてみる。

[歌の前後の「カクテ」(表4)中「歌の前後」に分類された例]

- (9) むかし、男、京をいかが思ひけむ、東山にすまむと思ひ入りて、(歌) すみわびぬい
まはかぎりと山里に身をかくすべき宿もとめてむ かくて、ものいたく病みて、死
に入りたりければ、おもてに水そそきなどして、いきいでて、(歌) わが上に露ぞ置
くなる天の河とわたる船のかいのしづくか となむいひて、いきいでたりける。(『伊
勢物語』五九段、161頁)
- (10) また、箕輪の里というふ駅にて、(歌) いつとはわかねどたえて秋の夜ぞ身のわ
びしきは知りまさりける とよみて書きつけたりける。 かくて、人の国歩きありき
て、甲斐の国にいたりてすみけるほどに、病して死ぬとてよみたりける。(歌) かり
そめのゆきかひちとぞ思ひしをいまはかぎりの門出なりける とよみてなむ死にけ
る。(『大和物語』一四四段、364頁)
- (11) 返し、(歌) あはれあはれおきて頼むな白露は思ひに草の葉やかるとぞ かくてあ
りわたるに、逍遙せまほしかりければ、難波の方へぞいきける。「そのほど、たひら
かにもものしたまへ。これは、但馬の国より持て来たるたにもかくといふものをやる」
とて、(歌) かたときの別れだにかくわびしきを かくてといひたれば、(『平中物語』九段、
472頁)

[前後に歌のない「カクテ」(表4)中「歌なし」に分類された例]

- (12) 親の言なりければ、いとねむごろにいたはりけり。朝には(略)そこに来させけり。
かくて、ねむごろにいたつきけり。二日といふ夜、男、(略)といふ。女もはた、(略)
思へらず。(『伊勢物語』六九段、172頁)
- (13) これがもとの妻のもとに、(略)率て来てすゑたりけり。もとの妻も、(略)語らひ
てゐたりけり。 かくてこの男は、ここかしこ人の国がちにのみ歩きければ、ふたり
のみなむゐたりける。この筑紫の妻、しのびて男したりける。それを、(略)よみた
りける。(『大和物語』一四一段、358頁)
- (14) この女、「いづちぞ」と(略)いきける。「さりとて、(略)したりける。 かくて、
物語などあまた、をかしきやうにかたみにいひければ、をかしと思ふ。この男、(略)
寺ぞふたがりける。明くるまで、(略)ゆきけり。(『平中物語』二五段、494頁)

歌の前後や、歌とは関係ない位置に置かれた「カクテ」の用例数が多いというこの状況は、
「カクテ」を歌との位置関係から考えるのではなく、別の方向で考えるべきであることを示
唆していると思われる。

次に、「カクテ」と動詞の関係を考えてみる。岡崎(2002)が述べるところによれば、「カ
クテ」の構成要素である指示副詞の「カク」は、「①上代・中古のカク系列「カク(カウ)」
は直示・照応用法⁴⁴であった。「カク(カウ)」は近世以降、コ系「コウ」に変化するが、現

44 「直示用法…今、現場で目に見える、直接知覚・感覚できる対象があるもの。照応用法

代語まで用法は変化しない。②上代・中古にはカク系列「カク（カウ）」は直示用法において、今、目に見える、直接知覚・感覚できるすべての「こと」を指示していたと考えられる。」

（同4頁）とある。つまり、「カクテ」を構成する「カク」は中古においては直示・照応用法をもって文中で機能しており、「カクテ」という接続語として文中に置かれることで、「カクテ」以前の文中で示されている内容を「カクテ」で直示、あるいは照応の用法⁴⁵でまとめて「カクテ」以降の文に関係付けているのであり、（表4）に示される「カクテ」もそのような機能をもって文中ではたらいっていると考えられる。

歌物語において歌は「一つの語り（単位）において、核心」（糸井（同））であることにまちがいはないと考えられるが、本論で用例の採集資料とした『伊勢物語』、『大和物語』、『平中物語』においては、接続語「カクテ」の機能は歌との位置関係に着眼してとらえるよりも、指示副詞「カク」に由来する接続語「カクテ」それ自身の語彙的な機能から考える方がより適切だと思われる。つまり、『伊勢物語』、『大和物語』、『平中物語』においては、接続語「カクテ」は「カクテ」以前の文中で示されている内容を「カクテ」で直示、あるいは照応の用法でまとめて「カクテ」以降の文に関係付ける機能をもってはたらく。それが歌物語における歌のような感動の山場の後に置かれた場合、歌も含めた物語のそれまでの話をまとめて次の話に関係付ける形式となるために、前出のように糸井（同）の述べる「「かくて」が歌の後に用いられていることが注目される。」（同八七頁）」といった外観となって資料中に表れているのだと考えられる。（表4）より、「カクテ」は歌、地の文の別なく関係付けの機能をもつ。「歌の後に用いられている」「カクテ」は、偶々そのときの話においては文脈上、歌の後に置かれていたものであると考えるのが妥当であると思われる。

4. 2. 6. 『源氏物語』における「カクテ」

西田（同1）は『源氏物語』の「葵」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」の巻における「「かくて」は、巻の大段落を区画する徴標として物語の展開上重要な役割を果たしている。」（同1、87頁）、「これらの巻で「かくて」以下が導くのは、かなり大きな公のでき事という共通する傾向がある。」（同1、97頁）と指摘し、次いで西田（同2）で、「「かくて」は、それぞれの巻（論者注：「少女」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」の巻）において、結節点と

…先行する言語テキスト内に当該の指示表現と指示対象を共有する先行詞があるもの。」

（岡崎（2002）、2頁）より抜粋。

⁴⁵ なお、金水（1999）は上代のコ系列の照応用法は、直示用法と近いことを述べる。（「コ系列とア系列は、直示用法が原型的な用法であり、文脈照応用法と見られるものでも、直示的な性質を色濃く残している」（87頁）。コ系列には「カク」の形態をもつ「カクテ」も含まれるが、上代から中古初期は、話の場そのものに存在するモノやコトについてことばで表し（直示）、そのことばを指示してさらにそれを言語で表す（照応）用法、つまり直示用法と照応用法が対立的な用法として確立する以前の段階であったと考えるのが適切であろうと思われる。

もなる重要なできごとのはじまりを示す文」を導く（同2、110頁）とし、「カクテ」を、その後で重要な公のでき事を述べる部分に置かれる、物語の文脈の段落を区画する徴標と考へた。西田は（同1、同2）中で「かなり大きな公のでき事」（同1、97頁）や「結節点ともなる重要なできごと」（同2、110頁）の内容について明らかにしてはいないので、何をもってそれが「かなり大きな公のでき事」、「結節点ともなる重要なできごと」と判断しているのかは不明である。そこでまず確認のために、西田が（同1）、（同2）中でこれに該当すると判断した「カクテ」の例を挙げてみる⁴⁶。なお、西田は（同1）中で、『源氏物語大成』の索引を使い、そこで接続詞として用いられている「カクテ」と副詞として用いられている「カクテ」を区別して用例として挙げている。しかし、副詞の「カクテ」の例として挙げられているものの中には、本論では3. 1. 1. で【Ⅲ型】として分類し、【Ⅳ型】と共に文中で接続語としてはたらくと考へたものも含まれているので、本論では『源氏物語大成』の索引で接続詞の「カクテ」の例としているものは（例番号）として、副詞の「カクテ」の例としているものは（例番号）として以下にその例を挙げることにする。例中には「カクテ」の音便形の「カウテ」の例も含む。なお、西田が挙げた例については本論で挙げた例と区別するために、漢数字で示す。傍線は論者による。

（例一）「かの人もいかに思ひつらむ」とささめきあへり。かくて後は、内裏にも院にも、（略）あやしの心やと我ながら思さる。（『源氏物語』葵、75頁）

（例二）ここにも、かかることいかで漏らさじとつつみて、御使ことごとしうもてなさぬを、胸いたく思へり。かくて後は、忍びつつ時々おはす。（『源氏物語』明石、258頁）

（例三）すべて何ごとにつけても、道々の人の才のほど現るる世になむありける。かくて、后みたまふべきを、「斎宮の女御をこそは、母宮も御後見と譲りきこえたまひしかば」と大臣もことつけたまふ。（『源氏物語』少女、30頁）

（例四）老いてもおはするままに、さがなさもまさりて、院もくらべ苦しうたへがたくぞ思ひきこえたまひける。かくて大学の君、その日の文うつくしう作りたまひて、進士になりたまひぬ。（『源氏物語』少女、76頁）

（例五）いとどころせき心地して、置き所なきもの思ひつきて、いとなやましうさへしたまふ。かくて、事の心知る人は少なうて、疎きも親しきも、無下の親ざまに思ひきこえたるを、（略）よろづにあげなう思し乱る。（『源氏物語』胡蝶、191頁）

（例六）大臣の君の思しよりてのたまふことを、（略）、をかしうもありなむかしとぞ思ひよりたまうける。かうて野におはしまし着きて、（略）、六条院より、御酒、御くだものなど奉らせたまへり。（『源氏物語』行幸、292頁）

（例七）親と聞こえながらもありがたからむをと思すものから、いとなむうれしかりける。

⁴⁶ 西田（同2、2010）で挙げている例のうち、本論でも考察対象とする例について確認したところ、全て西田（同1、1999）で挙げている例に含まれているので、ここでは西田（同1、1999）の例をもって、以下考察する。

かくて後は、中将の君にも、忍びてかかる事の心のたまひ知らせけり。(『源氏物語』行幸、311頁)

(例八) されど、あるまじう、ねぢけたるべきほどなりけりと思ひ返すことこそは、ありがたきまめまめしきなめれ。かくてその日になりて、三条宮より忍びやかに御使あり。(『源氏物語』行幸、312頁)

(例九) げに宮仕の筋にて、けぎやかなるまじく紛れたるおぼえを、かしこくも思ひよりたまひけるかなとむくつけく思さる。かくて御服など脱ぎたまひて、「月立たば～十月ばかりに」と思しのたまふを、内裏にも心もとなく聞こしめし、聞こえたまふ人々は、誰も誰もいと口惜しくて、(『源氏物語』藤袴、338頁)

(例一〇) 次々の君たちにも、ことごとしからぬさまに、細長、小桂などかづけたまふ。かくて、西の殿に戌の刻に渡りたまふ。(『源氏物語』梅枝、412頁)

(例一一) 按察の北の方なども、かかる方にてうれしと思ひきこえたまひけり。かくて六条院の御いそぎは、二十余日のほどなりけり。(『源氏物語』藤裏葉、446頁)

(例一二) なほこの内侍にぞ、思ひ離れず這ひ紛れたまふべき。かくて、御参りは北の方添ひたまふべきを、常にながながしうはえ添ひさぶらひたまはじ、かかるついでに、かの御後見をや添へまし、と思す。(『源氏物語』藤裏葉、449頁)

(例一三) 尚侍の君も、(略) かく世に住みはてたまふにつけても、おろかならず思ひきこえたまひけり。かくて二月の十余日に、朱雀院の姫宮、六条院へ渡りたまふ。(『源氏物語』若菜上、61頁)

(例一四) なほ、かの下の心忘れず、小侍従というかたらひ人は、宮の御侍従の乳母のむすめなりけり、(略) かかる思ひもつきそめたるなりけり。かくて、院も離れおはしますほど、人目少なくしめやかならむを推しはかりて、小侍従を迎へとりつつ、いみじう語らふ。

(『源氏物語』若菜下、218頁)

(例一五) 御褥、上席、屏風、几帳のことも、いと忍びて、わざとがましくいそがせたまひけり。かくて、山の帝の御賀も延びて、秋とありしを、(『源氏物語』若菜下、二六六頁)

(例一六) 「かばかりのすくよけ心に思ひそめてんこと、諫めむにかなはじ、用みざらむものから、我さかしに言出でむもあいなし、と思してやみぬ。かくて、御法事に、よろづとりもちてせさせたまふ。(『源氏物語』夕霧、459頁)

(例一七) この君の御宿世にて、年ごろ申したまひしは難きなりけりと見えたり。かくて、心やすくて内裏住みもしたまへかしと思すにも、いとほしう、(略) と思しあつかふ。(『源氏物語』竹河、102頁)

(例一八) 三条殿の大君を、春宮に参らせたまへるよりも、この御事をば、ことに思ひおきてきこえたまへるも、宮の御おぼえありさまからなめり。かくて後、二条院に、え心やすく渡りたまはず。(『源氏物語』宿木、421頁)

(例一九) いとほしの人ならばしやとぞ。かくて、なほ、いかでうしろやすくおとなしき人にてやみなんとと思ふにも従はず、心にかかりて苦しければ、(『源氏物語』宿木、443頁)

(例二〇) いといたくわづらひたまへば、後の宮よりも御とぶらひあり。かくて三年になりぬれど、一ところの御心ざしこそおろかならね、(略) 御とぶらひども聞こえたまひける。
 (『源氏物語』宿木、470 頁)

(例二一) 大将殿は、かくさへ (略)、と思ふは口惜しけれど、また、はじめの心おきてを思ふにはいとうれしくもあり。かくて、その月の二十日あまりにぞ、藤壺の宮の御裳着のことありて、またの日なん大将参りたまひける夜のことは忍びたるさまなり。(『源氏物語』宿木、474 頁)

(例二二) 三日の夜は、大蔵卿よりはじめて、(略)、舎人まで録賜す。そのほどのことどもは、私事のやうにぞありける。かくて後は、忍び忍びに参りたまふ。(『源氏物語』宿木、476 頁)

(例二三) 御送りの上達部、殿上人、六位など、言ふ限りなききよらを尽くさせたまへり。かくて心やすくうちとけて見たてまつりたまふに、いとをかしげにおはす。(『源氏物語』宿木、486 頁)

(例二四) 母君は、すこしものゆゑ知りて、いと見苦しと思へば、ことにあへしらはぬを、「あこをば思ひおとしたまへり」と、常に恨みけり。かくて、かの少将、契りしほどを待ちつけで、(略)、近う呼び寄せて語らふ。(『源氏物語』東屋、22 頁)

西田が挙げたこれらの全二十四例について、「カクテ」の後で述べられている出来事を用例の番号と共に (表 5) に示す。

(表 5) 西田が挙げた、「カクテ」の後で述べられている出来事

出来事	用例番号
入内、立后	三 (梅壺女御が中宮になる)、一一 (明石の姫君の入内決定)、一二 (明石姫君の入内に際し明石の君を後見役にする)。
昇進、裳着	四 (夕霧の進士及第)、八 (玉鬘の裳着)、一〇 (明石の姫君の裳着)、二一 (女二の宮の裳着と薫が婿となることの決定)
夫婦関係の開始	一 (源氏と紫の上)、二 (源氏と明石の君)、二二 (薫と女二の宮の結婚)、二三 (薫、女二の宮を自邸三条邸に迎える)。
その他	五 (源氏に迫られた玉鬘の苦悩、玉鬘の求婚者等の様子)、六 (冷泉帝の大原野行幸)、七 (玉鬘の裳着の準備と玉鬘の素性を知った夕霧の心情)、九 (玉鬘の出仕決定)、一四 (柏木、女三の宮をあきらめきれず、小侍従に訴える)、一五 (朱雀院の御賀の延期)、一六 (夕霧が落ち葉の宮の母、一条御息所の法事を主宰)、一七 (髭黒と玉葛の娘の中の君が尚侍として出仕)、一八 (中の君の、匂宮の夜離れに対する嘆き)、一九 (中の君の、薫の態度への懊悩)、二〇 (中の君の出産の兆し)、二四 (少将、浮舟が実子でないことを知る)。

(表5)を基に、「カクテ」の後で述べられている出来事を確認する。出来事の項目は、「カクテ」の後の文の内容によって「入内、立后」、「昇進、裳着」、「夫婦関係の開始」、「その他」に分けることができる。まずその項目について見た後に、各項目に分類された用例を一つずつ確認していくこととする。

「入内、立后」と「昇進、裳着」については西田が述べる「かなり大きな公のでき事」(同1、97頁)や「結節点ともなる重要なできごと」(同2、110頁)とまずは考えてもよいのかもしれない。しかし、「夫婦関係の開始」、「その他」については、これをして「公のでき事」、「重要なできごと」と考えてよいかどうかは即断できない。そこで用例の一つずつ見ていくこととする。

「入内、立后」の項目の用例番号三は梅壺女御の中宮立后、一一は明石の姫君の入内なので、これらを公事と考えるのは問題がないと思われるが、一二の明石の姫君の入内に際し、実母の明石の君を後見役とすることについては、公事と言うよりは源氏一家の問題のように思われる。

「昇進、裳着」の項目の用例番号四の夕霧の進士及第は、朱雀院行幸という公の場での詩文作成の評価を夕霧が得、これを機に秋の司召で五位に昇叙され、侍従の官職に就いているので公事についての内容と考えると良いかと思われるが、八の玉蔓、一〇の明石の姫君の裳着については、自家の女子の成人の儀式であると同時に、結婚可能な女子の存在を周囲に知らせる意味も持っていたという対社会的な意味ももっていたという意味でこれを公事と見る考え方もあろうが、「公」性をどこに認めるかという点でいささか疑問を感じる余地もあろう。先の用例番号四の夕霧の進士及第のような、公の官職を得た内容のような朝廷社会における位置や認識の変化や相違がここには認めがたいからである。二一の女二宮の裳着と薫が婿になることの決定については、女二の宮の裳着の翌日に行われた結婚により薫は帝の婿になったわけなので、ここにある程度の公的な性格は見て良い可能性もあると思われる。

公的性質の有無について疑問になってくるのはこれ以降の内容である。「夫婦関係の開始」の項目の用例番号一の源氏と紫の上の結婚、二の源氏と明石の君の結婚については、公的性質があると見て良いのだろうか。一で源氏は紫の上と結婚し惟光に三日夜餅の準備を命じる⁴⁷。源氏自身の命令なので、紫の上との新たな関係について、源氏の側に明確にこれが結婚であるとの意識があることが確認できるが、これに公的性質を認めても良いものだろうか。さらに二の源氏と明石の君との結婚については、確かに明石の君の父、入道に勧められ、認められた結婚ではあるものの⁴⁸、ここには先の一で見たような紫の上との結婚において見

47 「君、南の方に出でたまひて、惟光を召して、「この餅、かう数々にとほろせきさまにはあらで、明日の暮に参らせよ。今日はいまいましき日なりけり」とうちほほ笑みてのたまふ御気色を、心とき者にて、ふと思ひよりぬ。」(『源氏物語』葵、72～73頁)とある。

48 「ながむらん同じ雲居をながむるは思ひも同じ思ひなるらむ となん見たまふる。」(『源氏物語』明石、249頁)と明石入道が源氏から文をもらった明石の君の代わりに返事をしている。

られた結婚後の儀式等の描写はなく、明石の君は源氏の帰京には伴われぬ。物語後半で描かれる明石一族の繁栄もこの時点ではいまだ明らかではなく、ここで描かれている結婚は源氏の私的な結婚であって、ここに公的性格を見るのは少し難しいかと思われる。一三の源氏と女三宮の結婚は女三の宮の父の朱雀院から源氏に内意があり、源氏がそれを承引したものである⁴⁹なので、これは公的なものと見て良いかと考えられる。また、二二の薫と女二の宮との結婚は、前述したように薫が帝の婿となる結婚であること、さらに二三の薫が妻の女二の宮を自邸の三条邸に迎えることは、藤花の宴の翌日の夜に行われた儀式を伴うものであり⁵⁰、物語での描写のされ方を考えても、これらは公的なものと見て良いかと思われる。

その他の項目の用例を見ると、前述のように用例番号六の冷泉帝の大原野行幸、九の玉蔓の出仕決定、一五の朱雀院の御賀の延期、一六の夕霧による一条御息所の法事の主催、一七の玉蔓の娘の中の君の尚侍としての出仕については公的性格のものと思われる可能性があるが、用例番号五の源氏に迫られた玉鬘の苦悩と玉鬘の求婚者等の様子、七の玉鬘の裳着の準備と玉鬘の素性を知った夕霧の心情、一四の柏木が女三の宮をあきらめきれず、小侍に訴える描写、一八の中の君の、匂宮の夜離れに対する嘆き、一九の中の君の、薫の態度への懊悩、二〇の中の君の出産の兆し、二四の少将、浮舟が実子でないことを知る描写といった内容については公的性格を求めがたいと思われる。

西田（同1）は『源氏物語』の「葵」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」の巻における「かくて」は、巻の大段落を区画する徴標として物語の展開上重要な役割を果たしている。（同1、87頁）根拠として「これらの巻で「かくて」以下が導くのは、かなり大きな公のでき事という共通する傾向がある。」（同1、九七頁）と指摘し、次いで西田（同2）で、「かくて」は、それぞれの巻（論者注：「少女」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」の巻）において、結節点ともなる重要なできごとのはじまりを示す文を導く（同2、110頁）とするが、「葵」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」に見られる例を見ると、「葵」の例が用例番号一、「藤裏葉」の例が一、一二、「若菜上」の例が一三、「若菜下」の例が一四、一五である。（表5）と本論の前述部分から確認すると、この中で公的性格を持つ物語の内容の例は「藤裏葉」の一（明石の姫君の入内）、「若菜上」の一三（源氏と女三の宮との結婚）、「若菜下」の一五（朱雀院の御賀の延期）の例であり、その他の「葵」の一（源氏と紫の上の結婚）、「藤裏葉」の

⁴⁹ 「かたはらいたき譲りなれど、このいはけなき内親王ひとり、とりわきてはぐくみ思して、さるべきよすがをも、御心に思し定めて預けたまへと聞こえまほしきを。」（『源氏物語』若菜上、49頁）という朱雀院のことばに源氏は『かたじけなくとも、深き心にて後見きこえさえはべらん、おはします御蔭にかはりあては思されじを、ただ行く先短くて、仕うまつりさすことやはべらむと疑はしき方のみなむ、心苦しくはべるべき』とうけひき申したまひつ。」（同）と応える。

⁵⁰ その夜さりなん、宮まかでさせたてまつりたまひける、儀式いと心ことなり。上の女房、さながら御送り仕うまつらせたまひける。廂の御車にて、廂なき糸毛三つ、黄金造り六つ、ただの檳榔毛二十、網代二つ、童、下仕八人づつさぶらふに、また、御迎への出車ども十二、本所の人々乗せてなんありける。御送りの上達部、殿上人、六位など、言ふ限りなききよらを尽くさせたまへり。（『源氏物語』宿木、486頁）

一二（明石の姫君の入内に際し、明石の君が後見となること）、「若菜下」の一四（柏木が女三の宮をあきらめきれず小侍従に訴えること）の例については、「かなり大きな公のでき事」（同1、97頁）と考えることに躊躇を感じるものである。

また西田は、「かくて」は、それぞれの巻（論者注：「少女」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」の巻）において、結節点ともなる重要なできごとの「はじまりを示す文」を導く（同2、110頁）とも述べるが、それでは、『源氏物語』の同類の例では、「結節点」を示す語として「カクテ」は使用されているのだろうか。確認を行なう。西田が挙げている「少女」に見られる例を確認すると、用例番号三は梅壺女御が立后して中宮となる内容、四は夕霧が進士に及第するという内容である。これらは確かに西田の言うように「結節点ともなる重要なできごと」であると（表5）の分類においても考えられるが、「紅葉賀」で藤壺は立后し中宮になり、源氏も宰相となるが、この部分の本文は「この御仲どもの挑みこそ、あやしかりしか。されどうるさくなむ。七月にぞ后みたまふめりし。源氏の君、宰相になりたまひぬ。」（『源氏物語』紅葉賀、347頁）であり⁵¹、本文中に「カクテ」は用いられていない。また、「若菜上」には夕霧の右大将昇進の部分の本文があるが、ここには「内裏には、思しそめてしことどもをむげにやはとて、中納言にぞつけさせたまひてける。そのころの右大将病して辞したまひけるを、この中納言に御賀のほどよろこび加へむと思しめして、にはかになさせたまひつ。」（『源氏物語』若菜上、98～99頁）とあり、ここでも「カクテ」は使われていない。つまり、西田が挙げた、「かなり大きな公のでき事」（同1、97頁）、「結節点ともなる重要なできごとの「はじまりを示す」（同2、110頁）という論は前述したように、その「かなり大きな公のでき事」の範囲が明確でなく、また西田本人が挙げた例に鑑みて考えてみても、同様の「かなり大きな公のでき事」である立后や昇進の本文内容を導く際に「カクテ」を用いずに本文が表されているという事実が確認できる。繰り返しになるが、西田は『源氏物語』の「葵」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」の「カクテ」について、「これらの巻で「かくて」以下が導くのは、かなり大きな公のでき事という共通する傾向がある。」（同1、97頁）と指摘し、さらに（同2）で、「かくて」は、それぞれの巻（論者注：「少女」、「藤裏葉」、「若菜上」、「若菜下」の巻）において、結節点ともなる重要なできごとの「はじまりを示す文」を導く（同2、110頁）としたが、（同1）で西田によって挙げられた「カクテ」の例を確認したところ「かなり大きな公のでき事」とは言い難い例もあること、また、（同2）で上げた例においても、「結節点ともなる重要なできごとの「はじまりを示す」とは言い難い例もあること、さらに西田が挙げた巻々での公的性質があると考えられる出来事を見ると、「葵」での新斎院御禊の日の物見で、葵の上と六条御息所が車の立所を巡り争いが生じたこと⁵²、

⁵¹本論でテキストとして用いた『新編日本古典文学全集』の『源氏物語』①「紅葉賀」、347頁の同本文部分の頭注（頭注番号19）には、「藤壺の立后。重大な公事なので「めりし」と婉曲に叙する。」とある。

⁵²「いとど御心の暇なくて、思しおこたるとはなけれど、途絶え多かるべし。そのころ、斎院もおりあたまひて、后腹の女三の宮あたまひぬ。（略）副車の奥に押しやられてものも見えず。心やましきをばさるものにて、かかるやつれをそれと知られぬるが、いみじう

「少女」での源氏の内大臣が太政大臣に、右大将（元頭中将）が内大臣に昇進したこと⁵³、「藤裏葉」では源氏が准太上天皇となり御封が増加、年官、年爵が加わること⁵⁴、また、内大臣が太政大臣に、さらに宰相中将（夕霧）が中納言に昇進すること⁵⁵、「若菜上」での夕霧が右大将に昇進すること⁵⁶、「若菜下」での朱雀院の五十の賀が催されること⁵⁷など、「カクテ」を置かずに「大きな公のでき事」、「重要なできごと」が表されている例もあることから、前出の西田の主張を論拠とする「かくて」は、巻の大段落を区画する徴標として物語の展開上重要な役割を果たしている。」（同1、八七頁）という主張は再考を要すると思われる⁵⁸。確かに一見「カクテ」の後で公的性格をもった内容の文が続いているように見えるが、ここで見てきたように、「カクテ」以降に公的性格をもたない内容がくる場合も見られること、また、「カクテ」を置かずに公的性格をもつ内容の文が続く場合も見られることから、「カクテ」が物語の公的内容を導く「徴標」的にはたらくというのは物語の内容を見たときに「カクテ」で導かれる文の例中の一部について結果的にそう見える例もあるということであり、さらに考える余地があると思われる。

ねたきこと限りなし。」（『源氏物語』葵、20～23頁）

⁵³ 「御幸ひの、かくひきかへすぐれたまへりけるを、世の人驚ききこゆ。大臣、太政大臣にあがりたまひて、大将、内大臣になりたまひぬ。」（『源氏物語』少女、31頁）

⁵⁴ 「明けむ年四十になりたまふ、御賀のことを、朝廷よりはじめてたまつりて、大きな世のいそぎなり。その秋、太上天皇になずらふ御位得たまうて、御封加はり、年官、年爵などみな添ひたまふ。」（『源氏物語』藤裏葉、454頁）

⁵⁵ 「かくても、なほ飽かず帝は思しめして、世の中を憚りて位をえ譲りきこえぬことをなむ、朝夕の御嘆きぐさなりける。内大臣あがりたまひて、宰相中将、中納言になりたまひぬ。」（『源氏物語』藤裏葉、454頁）

⁵⁶ 「昔物語にも、物得させたるをかしこきことには数へつづけためれど、いとうるさくて、こちたき御仲らひのことどもはえぞ数へあへはべらぬや。内裏には、思しそめてそことどもをむげにやはとて、中納言にぞつけさせたまひてける。そのころの右大将病して辞したまひけるを、この中納言に御賀のほどよろこび加へむと思しめして、にはかになさせたまひつ。」（『源氏物語』若菜上、98～99頁）

⁵⁷ 「大将は、ましていとよき御仲なれば、け近くものしたまひつ、いみじく嘆き歩きたまふ。御賀は、二十五日になりにけり。」（『源氏物語』若菜下、284頁）

⁵⁸ 「カクテ」の後に公的な行事などの内容が続く場合が多いことは、渡瀬（1981）にも指摘がある。「（論者注：『源氏物語』の「カクテ」の例を数例挙げた後で）勿論、ここに見られる「かくて」は文章や記事を結び合わせているのだが、その記事の内容にいささかの偏りを見せている。これらの例に於いて、その記事の内容は袴着や立后、婚姻、賀宴、行幸など、公的な行事としての性格の強いものを扱っている。」（16頁）。

4. 2. 7. 「カクテ」と「カカルホドニ」の「テ」と「ホドニ」

前項までで、物語中の歌や、「重大なでき事」とは独立的に「カクテ」や「カカルホドニ」を考えることの有効性を確認した。ここでは3. 2. と3. 3. を踏まえ、再び中古和文物語作品における「カクテ」と「カカルホドニ」を考えてみる。

前述したように、岡崎（2002）が述べるところによれば、「カクテ」、「カカルホドニ」の構成要素である指示副詞の「カク」（「カカ」）は、上代・中古においては直示・照応用法によって文中ではたらいていた。これは、物語の話が生じている場において「カクテ」や「カカルホドニ」の内容が実際に存在している場合（「カクテ」や「カカルホドニ」が直示用法ではたらいている場合）も、両語の内容が、両語が置かれているよりも前の文脈に存在している場合（両語が照応用法ではたらいている場合）もあると考えられるということであるが、金水（1999）は古代のコ系列の照応用法が直示用法との間が近いとする考え方について述べている⁵⁹。これらを鑑みると、中古期の「カクテ」や「カカルホドニ」は、話の場やその前文脈に「カク（カカ）」で指示される内容が存在しているという意味で、指示のしかたが実際の、具体的なものであり、具体的な物語の話の中の存在事態や実際に表されている物語の話の内容そのものを直接的に指示するのに適した接続語であると考えられることができる。⁶⁰そこで「カクテ」、「カカルホドニ」の指示詞部分に後接する「テ」、「ホドニ」に注目してみたい。

まず「テ」は完了の助動詞「ツ」の連用形から発達し、その元の助動詞の意味から時間的継続関係や完了、確認などの意味を表し、叙述を展開する場合に用いる⁶¹。また、此島（1958）は「テ」と「シテ」を比較し、上代から中古にかけての仮名文は日常語に近い口語的なもので、ここでは「テ」が「シテ」よりも優勢であったことを述べている⁶²。これらからすると、助詞「テ」は元来その意味が、時間的な継起関係を表すものであったことが確認できる。

「テ」について山口（1980）は「「て」の接続表現における最も基本的な意味関係は並列性であり、継起性・共存性も、そのうちどちらかが常に並列性と両立する点で、並列性の関係に次いで基本的であるといえる。」（268頁）と述べた上で、「「て」で示される最も基本的な意味関係は並列性の関係だと述べたが、二つの事態をただ並列するというのは、現実においてさまざまな意味関係にある事態の間に与えられる関係づけとしては、最も消極的・非限

⁵⁹（前出脚注（11）参照。

⁶⁰ これは本来カク系列と対峙するサ系列の指示詞由来の接続語「サテ」や「サルホドニ」などが古代においては直示用法をいまだ獲得しておらず、主に照応用法（観念用法も有していたが）をもって文中ではたらいていた事実（岡崎（2002）、8頁）と併せて考えるべき問題であるが、これについては別稿を用意している。

⁶¹ 塚原（1958）、87頁、奥村（1967）、87頁、吉田（1970）、67頁による。

⁶² 「上古の万葉集から平安朝の仮名文に連なる線は、日常語に近い、いわば口語的な系統であつて、ここでは「て」が優勢、宣命から漢文訓読文に続く系統は、日常語からやや離れた、文語的な特色を持ち、ここでは「して」が主として用いられたものと思われる。」（此島（1958）、318頁）。

定的なものでしかない。継起性・共存性にしても、それらが時間的と空間的という意味で対照的な関係であるだけに、その識別はすでに文脈に対応する現実の脈絡に依存していると考えてよい。」(268～269頁)とする。このように、指示詞の「カク」に、山口が述べるような「文脈に対応する現実の脈絡に依存」する形で継起関係を表す「テ」を接続させた「カクテ」は、時間の流れに沿う形で物語の文脈を展開させるのに適した接続語であるといえよう。

また、「ホドニ」については、望月(1969)が時間から必然条件表現へという通時的な意味変化を、小林(1973)が「トコロデ」、「ニヨotte」などの他形式との相違を、吉田(2000)が意味変化が生じた理由を述べた。さらに竹内(2006)はこの「ホドニ」の意味変化について語用論的視点から説明を行った。

このような先行研究で、「ホドニ」の意味について最も着目したのは前出の望月(1969)である。望月は「ホドニ」の「ホド」が奈良時代は「ホト」として時を表し、その後「徐々に動いていく時間・時の経過・時の推移をいう」(35頁)とした。また『風土記』や『日本霊異記』中の例を挙げ、そこに「時の経過を原義とするホトが、時間的な意味から空間的な意味へ、意味を広げていく過程に位置する用法」(35頁)が確認できるとし、それが平安時代には「年齢や愛情の深さなど、時の経過につれて徐々に変化をするものについて、変化の程度をいい、更に広がって、時の経過にかかわりなく、物事一般の程度が、あるものと同程度であることをもいうようになった。」(36頁)として、さらに「時の経過の意から転じて、変化の様子・具合」(36頁)や「程度の意」(36頁)、を表すようになり、『源氏物語』では、時間・空間・程度・様子の各意味分野において、新たに意味の展開がみられ、更に、接続助詞的用法も確立して、ホドの用法は、大幅に広がった。」(36頁)とする。さらに「ニ」については塚原(1958)や奥村(1967)によって、活用語の連体形に接続し、本来格助詞であるが接続助詞に転じたことが述べられている⁶³。つまり、「ホドニ」は、実質的な時間、空間から抽象的な程度、様子を表す「ホド(ホト)」と、体言や活用語の連体形に接続する助詞「ニ」(元来は格助詞であるが、接続助詞に転じた)が接続して成った語であるとしてよいと考えられる。

つまり、「カクテ」、「カカルホドニ」は共に時間とのかかわりが深い語であるということが確認できると思われる。それを踏まえ、以降では「カクテ」と「カカルホドニ」によって、時間の情報が物語の文中でどのように表されているかを見ていく。具体的には、この「カクテ」と「カカルホドニ」によって可能となる具体的、直接的な指示が《日付》、《各巻の冒頭》、《絵詞》に注目することでどのように物語中に見られるかを確認したい。

⁶³ 「活用語の連体形に接続し、「(A)に(B)」の形式において、(A)と(B)との分離を認めながらも、連続的な統一をなす機能を持つ。」(塚原(1958)、89頁)、「もともと、格助詞からの転成である故、はじめは、時・場所等を単純に示す用法が多かったが、次第にはっきりした因果関係の表現に移って行った。因果関係の表現は、奈良時代にも、或る程度存するが、平安朝に比すれば少い。」(奥村(1967)、85頁)。

4. 2. 8. 「カクテ」と《日付》

古代中国より、記録と暦は不可分の間柄であった。神野藤（1996）によれば、「古来、中国における修史の根幹をなすのは、天子の言動であった。そのような言動を受けて、校訂の日々の言動は（略）克明に記録」された。「彼らの記録は春夏秋冬の三か月ごとに一卷にまとめられ、天文・暦数をつかさどる太史令（わが国では陰陽寮に相当する）から送られてくる天文に現れた災祥の兆しの記録を加えて、史館へ送られたのである。これが（略）「起居注」とよばれるものである。（略）この史館に送られてくる記録には、「起居注」のほかに、「時政記」「日曆」などがあったが、（略）史館では「起居注」をベースにこれらの記録・報告などのドキュメントを加えて、皇帝一代の実録が編纂されたのである。さらにこれら数朝にわたる編年体の実録を基礎に、紀伝体による「国史」が編纂されてゆく。」（173頁）ということである。一方、日本の場合、その修史機構については「令」の規定によれば、所管は中務省であるが、宮中の図書保管、国史の編纂などは図書寮の任務であり、「令」の篇目で、諸規定を集めた「雑令題三〇」を見ると、そこには（略）「吉気」たる「徴祥」、「妖気」たる「災異」があれば、陰陽寮はこれを報告し、これを季、すなわち春夏秋冬の三か月ごとに記録をまとめて中務省に送る。（略）「雑令」には、記録の根本たる「暦」もまた陰陽寮が毎年これを作成し、一二月一日中務省にこれを送り、中務省は天皇に直接奏聞することが具体的に規定されている。そもそもこのような「暦」が「国史」の基礎となっていたのである。」（166～168頁）とあり、記録と暦が深くかかわっていたことが分かる。これらより、上代の『古事記』、『日本書紀』にも認められるように、日本語の文学は、内容を記録的に記載するものを、その一つの原始的な書き方と見て良いように思われる。

（表6）で『うつほ物語』中の《日付》と共起している⁶⁴「カクテ」、「カカルホドニ」を確認してみると、

⁶⁴ 「かくて、六月六日、子生まるべくなりぬ。」（『うつほ物語』俊蔭、67頁）、「かくて、七月ついたち、うちの帝、仁寿殿の、大将の御息所の御局に渡りたまひて、「などか、（略）あないとほし。」（『うつほ物語』内侍のかみ、159頁）「かくて、九日の夜は、大殿、内裏の大饗の御前のものしたまふ。」（『うつほ物語』国譲中、156頁）などの、《日付》と共起した「カクテ」の例を指す。

(表6) 『うつほ物語』中の《日付》と共起している「カクテ」と「カカルホドニ」

全「カクテ」例	全「カカルホドニ」例
443 例 ⁶⁵	95 例 ⁶⁶
内《日付》と共起例 42 例	内《日付》と共起例 11 例

「カクテ」は約9.5%、「カカルホドニ」は約11.6%あり、共に一割前後の「カクテ」と「カカルホドニ」が《日付》と共起していることが分かる。特に「カクテ」については、「かくて、この子、十二になりぬ。」(『うつほ物語』俊蔭、12頁)、「かくて、その年は立ち去りもしたまはず。」(『うつほ物語』蔵開上、332頁)、「かくて、またの日の昼つ方になりて、御乳付け帰りたまふ。」(『うつほ物語』蔵開上、385頁)、「かくて、夕暮れになりぬ。」(『うつほ物語』国譲上、122頁)など、月日が明示されているわけではないが、時間の推移を示す語と共起している例も見られる。

鈴木(1987)は稲作から発生した年中行事が中国的な行事と結びつき、宮廷での年中行事に結び付いた経緯を述べているが、ここで「年中行事は(略)何よりも政治的な恒例行事なのであった。つまり、その基本の理念としては、人心を、年時の節目節目に秩序づけることを通して、掌握しようという論理に貫かれている。」と述べる。⁶⁷『うつほ物語』で繰り返し描かれる諸行事、諸儀式は、「カクテ」や「カカルホドニ」で導かれた《日付》と共に「年時の節目節目に秩序づけ」られて物語の中に位置付けられているのだと考えられよう。

4. 2. 9. 「カクテ」と《各巻の冒頭》

次に、「カクテ」と『うつほ物語』の巻の冒頭の関係に注目したい。『うつほ物語』は全二〇巻から成るが、次の(表7)は、各巻の冒頭部分である。

⁶⁵ (表1)の「カクテ」【Ⅲ型】と【Ⅳ型】の地の文の例(400例+53例)マイナス(表3)の※5の「カウテ」【Ⅲ型】と【Ⅳ型】の例(7例+3例)453例マイナス10例=443例。

⁶⁶ (表2)の「カカルホドニ」【Ⅲ型】と【Ⅳ型】の地の文の例(94例+1例)=95例。

⁶⁷ 鈴木(1987)、26頁。

(表7) 『うつほ物語』の各巻の冒頭部分

※「カクテ」・「カウテ」に傍線、「カカルホドニ」に点線を付す。

巻名	冒頭部
俊蔭	むかし、式部大輔左大弁かけて、清原の王ありけり。
藤原の君	むかし、藤原の君と聞こゆる一世の源氏おはしましけり。
忠こそ	かくて、また、嵯峨の御時に、源忠経と聞こゆる左大臣。
春日詣	かゝるほどに、年月過ぎて、その時の帝も下り居たまひ、
嵯峨の院	かくて、右大将殿に還饗したまひければ、例のごとなむ、
吹上 上	かくて、紀伊国牟婁郡に、神南備種松といふ長者、限りなき
祭の使	かくて、殿より祭の使出で立ちたまふ。
吹上 下	かくて、八月中の十日ほどに、帝、花の宴したまふ。
菊の宴	かくて、霜月のついたちごろ、残れる菊の宴聞しめしけるに、
あて宮	かくて、あて宮、東宮に参りたまふこと、十月五日と
内侍のか	かくて、七月ついで、うちの帝、仁寿殿の、大将の御息所の
沖つ白波	六月ばかりに、内裏の帝、仁寿殿に渡りたまひて、大将の女御の君と

楼の上 下	楼の上 上	国譲 下	国譲 中	国譲 上	蔵開 下	蔵開 中	蔵開 上	巻名
かくて、つとめての御台、ここにて参らせたまひて、とばかり	三条右大臣殿の、かの一条殿の対どもに居たまへりし御方々、宮	かくて、中宮より、太政大臣に、「その日の夜さり、聞こゆべきこと	かうて、今日は左の大殿の大宴、やがてこの御方の御前にて、	右の大殿には、御婿の殿ばら、宮ばら、御子どもも、上達部に	かかるほどに、平中納言、藤大納言、藤宰相などおはしたり。	かくて、一、二日ありて、大将殿、内裏の仰せられし書ども持たせて	藤中納言は、衛門督なれど、装束清らにせずとて、非違の別当はかけ	冒頭部

(表7)より、『うつほ物語』の全二〇巻中、「カクテ」で始まる巻が一二巻(うち一巻は「カウテ」で始まる。)、**「カカルホドニ」**で始まる巻が二巻あり、両方を合わせると一四の巻の冒頭部が「カクテ」・「カウテ」、「カカルホドニ」で始まっている。特に上下、または上中下がある巻(「吹上」、「蔵開」、「国譲」、「楼の上」)については、中巻、下巻のような上巻に続く巻は必ず「カクテ」・「カウテ」、「カカルホドニ」で始まる冒頭部を持っており、物語の各巻の始まりと「カクテ」や「カカルホドニ」の相関性が観察できる⁶⁸。

これについて糸井(1987)は「かくて」が同一人物のエピソードを重ねて長編化して語るときに用いられた様子が窺えたのだが、その典型が「宇津保物語」であり、(88頁)と述べ、中野(1981)は『うつほ物語』において、「かくて」「かかるほどに」等の接続語の極端な多用が、場面の連続による長編形成に際しての強い承接意識の表われである(343頁)とし、物語で「カクテ」と「カカルホドニ」によって話が導かれる場合が多いのは、「やはり場面の連続を意図した長編形成のための稚拙で強引な初期の方法の表われであろう。」(343頁)と述べた。前述したように中古期の「カクテ」や「カカルホドニ」は、その前文

⁶⁸ 物語の構造上、「沖つ白波」以外は全て物語中の話(エピソード)の開始部にあたる。また、「内侍のかみ」と「沖つ白波」は年立(この章でテキストとして使用した『新編日本古典文学全集』の『うつほ物語』②の631~638頁)で確認すると、他の巻とは独立的な巻である。つまり、「カクテ」、「カカルホドニ」で始まる冒頭文を持たないこれらの巻は物語中で、物語の話の内容や物語中の時間が、他の巻とは連続的な関係にない巻であることが確認できる。

脈に「カク（カカ）」で指示される内容が存在していることから指示のしかたが実際の、具体的なものであると考えられ、「カクテ」や「カカルホドニ」を接続語として用いることで、物語の前文脈の内容如何によらずそれに连接的に後文脈を関係付けていくことができる。また、そのような手段をもって物語の話を長編としていくことを可能としたと考えられる。

4. 2. 10. 「カクテ」と《絵詞》

次に、「カクテ」と『うつほ物語』の《絵詞》の関係に注目したい。『うつほ物語』には、《絵詞》と呼ばれる物語の本文とは異質な文が見られる⁶⁹。そしてその詞文が何を表しているのかはいまだ解明されておらず定説を見ない。この《絵詞》に関しては、「もと画面の中に書きこまれてあった説明書きであろう」という説と、この部分について「今一度、もとの物語本文に返して、それらを〈複本文〉という観点から読み直す」べきであるという二つの見方があるようである。つまり、《絵詞》について、絵の説明書きとする見方と、別の観点による本文と見る見方があるわけであるが、今ここで、『うつほ物語』の《絵詞》の文に続く本文の始まりの部分に注目してみたい。

次の（表8）は、《絵詞》の直後の物語本文の始まりの部分である。

⁶⁹ 現存の『うつほ物語』の本文には、写本、版本を問わず、「絵詞」あるいは「絵解」と呼ばれる、物語本文とは異質な詞文が存在する。古代の物語文学の中で、このような本文の形態を持つ作品は他に例を見ないところから、それが何であるかについては早くから解明の努力が続けられてきた。そのいちおうの成果として、それらはもと画面の中に書きこまれた説明書きで、「絵解」あるいは「絵注」とでも称すべきものであろうということになっている。（『新編日本古典文学全集 うつほ物語⑥、解説』（中野幸一著、655頁）『うつほ物語』の物語本文の間に混在する「絵解」あるいは「絵詞」とされている本文については諸説あるものの、実態に合わず、まだ解明に至っていない。（阿倍（2009）、59頁）。

(表8) 『うつほ物語』の《絵詞》の直後の物語本文の始まりの部分

祭の使	吹上 上	嵯峨の院	春日詣	忠こそ	藤原の君	俊蔭	巻名
3	6	2 6	1	4	1 1	2	絵詞の数
かくて2、かかるほどに1、	かくて2、かかるほどに1、三月中の十日ばかりに1、三月つごもりになりぬれば1、そこより守のぬし1、	かくて10、かくてあるほどに1、かくて内より1、かくてあり経るほどに1、かくのみ1、かかるほどに4、御物語のついでに1、少将、義則1、御神楽の日1、御仏名果てて1、ここは政所1、仲頼、帰る空もなくて1、つとめて、父ぬし1、大将殿には1、	夕暮れのほど1、	かくて4、	かくて8、かくて、また1、かかることを1、太宰の前の帥1、	かくて後 ^{のち} 1、国々の荘より1、	《絵詞》直後の物語本文

蔵開 下 1 2	蔵開 中 4	蔵開 上 8	沖つ白波 4 (※2)	み 内侍のか 6 (※1)	あて宮 7	菊の宴 3	吹上 下 1	巻名 絵詞の数
かくて10、司召には1、次の日、はた1、	かくて3、午の時ばかりに1、	かくて5、かかることを1、また、女御の君1、おとど参りたまひて1、	かくて4、	1、かくて3、右大将は1、その日ごろは1、上、こなたに入りたまひて	かくて4、大将のおとど1、源少将は1、宰相も1、	かくて2、かかるほどに1、	かくて1、	《絵詞》直後の物語本文

下 楼の上	上 楼の上	国譲 下	国譲 中	国譲 上	巻名
2	1	18 (※4)	7	5 (※3)	絵詞の数
大将、内裏よりも1、雪、夜よりいと高う降りて1、	西の時なり1、	かくて14、かうて1、かくてまた1、かく歩き始めたまひてぞ1、 後の宮、聞こしめして1、	かくて7、	かくて3、かうて1、また、九日の夜は1、	《絵詞》直後の物語本文

- (※1) 《絵詞》後の錯簡孤立文中の16頁9行目「まかなひにも渡らせたまへりき。」1例、176頁7行目「かかるほどに」（「底本では一丁表一行目のはじめにあたる。」・176頁頭注より引用。）1例は含めず。
- (※2) 《絵詞》で巻が終わるため、次巻「蔵開 上」の冒頭の「藤中納言は」1例は含めず。
- (※3) 《絵詞》で巻が終わるため、次巻「国譲 中」の冒頭の「かうて」1例は含めず。
- (※4) 《絵詞》で巻が終わるため、次巻「楼の上 上」の冒頭の「三条右大臣殿の」1例は含めず。

前述(表8)中の「絵詞の数」は各巻中の《絵詞》の数を、「《絵詞》直後の物語本文」の後の数は、そのように始まっている本文の数を表す。『うつほ物語』中の《絵詞》は131あり、そのうち、《絵詞》直後の物語本文が「カクテ」（「カウテ」含む。以下同。）で始まる文は87、「カカルホドニ」で始まる文は7あり、合計94となる⁷⁰。約71.8%の《絵詞》直後の本文が「カクテ」または「カカルホドニ」で始まっていることになるが、本論がこれまで論じてきた「カクテ」、「カカルホドニ」はその前部にある物語中の存在事態や話の内容を直接的、具体的に指示するものであるとする考えによれば、《絵詞》の直後の物語の本文が「カクテ」、「カカルホドニ」で始まっていることは、その本文が《絵詞》と直接的に関係付けられていることを意味すると思われる。前述の、《絵詞》についての二つの見方について、《絵詞》直後の物語本文の始まりに置かれた「カクテ」、「カカルホドニ」という接続語から考えてみると、《絵詞》と《絵詞》直後の物語本文に接続関係が認められることから、《絵詞》は一つの物語本文と見なしてよい部分であると考えることが可能であると思われる。さらに、その内容が絵の説明であることも事実であることから、この部分を絵の説明書きとする考え方も有効なのであり、つまりこれは、物語の本文、絵、《絵詞》全てを指して「物語」であるとし、『うつほ物語』が言語と絵画によって成る一つの作品であると考えことで融和的に理解して良いのではないかと思われる。

前述したように、《絵詞》については、誰の手によるものであるか、またいつ成立したものかという議論がなされ、確定的な説はいまだ見られない⁷¹。しかし、「カクテ」と「カカルホドニ」に注目すると、《絵詞》とその後の物語本文との接続関係が認められ、《絵詞》の詞

⁷⁰ 《絵詞》直後の物語本文が「カクテ」である例の数には「かくて、また」や「かくてあり経るほどに」を含む。また、《絵詞》直後の物語本文が「かかることを」である例も2例見られたが、この形式は本論での考察対象ではないため、この例の数は含めて考えない。

⁷¹ 中野(1981)422頁。また室城(1996)にも、『うつほ物語』の「絵詞」あるいは「絵解」については、「絵詞」なのか「絵解」なのかということも含めて、これまでにも、さまざまな研究が積み重ねられてきた。物語本文と同一作者なのか別作者なのか、物語本文と同一時期の成立なのか後期の補入なのか、あるいは、物語を絵画化するための指示・注文なのか絵巻などについていた詞の本文への混入なのかなど、さまざまな観点から問題にされてきたが、いまだに説の一致を見ない。(429頁)とある。

文と物語本文を連続的なものとする見方が肯首される可能性も開けてくるかと思われる。⁷²

以上、先述した《日付》と共起する、また、『うつほ物語』の各巻の冒頭の文や《絵詞》の文に見られる「カクテ」や「カカルホドニ」の接続語としての機能は、既述の「カクテ」や「カカルホドニ」によってこそ可能である具体的、直接的な指示が反映されたものであると言えよう。それを踏まえ、次項で「カクテ」と「カカルホドニ」の意味、用法の差異を示したい。

4. 2. 1 1. 「カクテ」と「カカルホドニ」の意味・用法

これまでに述べたように、「カクテ」と「カカルホドニ」は共に時間とのかかわりが深く、その構成要素である「カク（カカ）」によって、それが置かれている前部で述べられている事態、内容を实际的、具体的に指示している。つまり両語の意味、用法の差異は、「テ」と「ホドニ」の差異と考えて良いと考えられる。3. 4. 1. において述べたように、「テ」は時間の継起性を表し、「ホドニ」は時間の経過性、推移性を表すことで時間とのかかわりを表しているのであり、「カクテ」と「カカルホドニ」の差異は時間の変化を何に注目して表しているかの差異にあると考えられる。両語が共に時間の流れに沿う形で物語の文脈を展開させるのに適した接続語であり、古典散文作品中で多用されるのもこの点に因るのであると考えられる。「カクテ」が「カクテ」の前部に表されている事態、内容を踏まえ、それらをまとめて総括的に「カクテ」の後部に関係付ける形の接続を行い、「カカルホドニ」が「カカルホドニ」の前部に表されている事態、内容を指しながら、それらを流れる時間の中に配して「カカルホドニ」の後部に関係付ける形の接続を行うという接続の型の差異は、両語それぞれの構成要素である「テ」と「ホドニ」の意味と機能に求められる。

故に、「カクテ」は

(15) 伊勢の君、「遊びの者どもは、えや見たばざらむ。末に和歌を詠まむやは」などの

⁷² 《絵詞》の詞文で表される内容は、実際に絵で物語世界を視覚的に描いたものという意味で、やはりこれも物語の一部であると考えてよいと思われる。例えば背景にあたる絵と、その中に配置する人物や建物、儀式のしつらえ等が文章で書かれた物語とは一揃いのものとして伝わっていた状況を仮定すると、人物や建物などを背景である絵の中で自由に配置しまた動かすなどして、平面的にはあるが現代で言うところのジオラマのようにして鑑賞することも可能であり、物語の世界をより臨場的に享受することは考えられたかもしれない。そのようにして楽しみまたは儀式等の予行練習（一種のシュミレーション）としてこれらの絵の部分を使用した可能性も考えてよいと思われる。現在、物語の文章部分のみが伝わり絵の部分がないことも、文章よりも視覚的に訴求できる絵の部分が、物語とは独立的に扱われ散佚した可能性もあるかと思われる。

たまふ。かくて、その夜になりぬ。(『うつほ物語』菊の宴、28頁)

- (16) 男皇子たちも、さまざまにいかめしうしたまへり。攤打ち、物かづきなどしたまふ。かくて、六日になりぬ。(『うつほ物語』蔵開 上、349頁)

などと時間の流れの中で継起的に生じた事態や出来事を表すのに用いられ、「カカルホドニ」は

- (17) 「乳を飲まずは、いかがせむ」といへば、「いな、今はな飲ませたまひそ」とて、飲まずなりぬ。かかるほどに、この子は、すすくと弾き伸ぶるもののやうに大きくなりぬ。(『うつほ物語』俊蔭、71頁)

のように一語で数年の経過を表したり、

- (18) かく大いなるわざをして待ちわたりたまふほどに、忠こそを恋ひ死にに隠れたまひぬ。かかるほどに、年月過ぎて、その時の帝も下り居たまひ、東宮国しりたまひて、年ごろ世の中平らかに、国栄えてあり。(『うつほ物語』春日詣、257頁)

- (19) 東宮、めづらしき君に会ふ夜は春霞天の岩戸を立ちも込めなむ とのたまふ。あて宮、寝たまへるやうにて、ものも聞こえたまはず。かかるほどに、妊じたまひぬ。(『うつほ物語』あて宮、129頁)

などのように、時の経過、推移の中に事態や出来事を配する形で表していくのに用いられる。

このように時間とのかかわりの中で物語を表していくことについて、野口元大(1958)は、「『うつほ物語』は、物語の世界を如何にして現実化するかという課題に、この日記的方法をとることによって答えようとしているわけである。作者は、自分の作品が人生における事実ありのままの真実を伝えるものであることを主張するために、できるだけその物語を日記体に近づけようとする。事実の細々とした説明、人人の一挙一動をも逐一丹念に記録することによって、その真実性が補證されると考えるのである。」(57頁)と述べる。「カクテ」と「カカルホドニ」は物語の「真実性」を支えるために、時間とのかかわりの中で物語を表すために有効な接続語であったと考えてよいと思われる。

4. 2. 12. まとめ

本論で述べたことをまとめる。本論では「カクテ」と「カカルホドニ」の、中古和文物語作品における使用を調査し、その意味、用法に注目してその差異を明らかにした。

まず、「カクテ」と「カカルホドニ」は従来その意味、用法の差異が明らかではなく、先行研究では歌物語における歌との位置関係(糸井)や物語内容の区画の提示(西田)などの観点からの説明がなされてきたが、それを検証して、それらの観点からの説明に再考の余地があることを示した。

その上で、「カクテ」と「カカルホドニ」の構成要素である指示副詞「カク(カカ)」の意味、機能を再検討することと、「テ」、「ホドニ」の意味、機能を確認することで、両語の意

味、用法の差異は表せることを示した。具体的には、

①中古期の「カクテ」や「カカルホドニ」は、話の場やその前文脈に「カク（カカ）」で指示される内容が存在しているという意味で、指示のしかたが実際の、具体的なものであり、具体的な物語の話の中の存在事態や実際に表されている物語の話の内容そのものを直接的に指示するのに適した接続語であると考えられる。

②さらに助詞「テ」は「文脈に対応する現実の脈絡に依存」する形で事態や出来事を継的に表す。また、「ホドニ」は時の経過につれて徐々に変化をする事態や出来事について、その変化を経過的、推移的に表す。「カクテ」と「カカルホドニ」の意味、用法の差異は、この「テ」と「ホドニ」の差異であり、両語は物語の話と時間の情報とのかかわらせ方が異なる語であると考えられる。

③つまり「カクテ」は「カクテ」の前部に表されている事態、内容を踏まえ、それらをまとめて総括的に「カクテ」の後部に関係付ける形の接続を行い、「カカルホドニ」は「カカルホドニ」の前部に表されている事態、内容を指しながら、それらを流れる時間の中に配して「カカルホドニ」の後部に関係付ける形の接続を行うものである。

ということを示した。

さらに、両語は時間とのかかわりの中で物語を表していく機能を持った接続語であることが、中古和文物語作品中での両語の多用につながり、それは物語の中の《日付》、《各巻の冒頭》、《絵詞》の詞文などに注目した際の、それらの箇所での使用に具体的に見ることが出来ることも示した。

4. 3. 「サテ」の直前文を跳び越す用法について

4. 3. 1. はじめに

「サテ」は、古代語にも現代語にもその使用が見られる語であり、指示副詞「サ」に接続助詞「テ」が付いた構成を持つ。これまで「サテ」は、「サテ」と同じく古代からその使用が見られる「カクテ」と比する形で、糸井通浩(1987)、西田隆政(2001)、岡崎友子(2011)らによって論じられてきた⁷³。中でも岡崎は、この岡崎(2011)において、「サテ」が指示詞から接続語に変化した過程を、タイプAからタイプEの五段階に分類して論じている。この五つのタイプ分類は、「サテ」の「サ」が有する指示機能の有無によるものであり、岡崎は「サ」に指示機能があるタイプをA・B、指示機能がないタイプをC・D・Eとしているが、中古の和文資料には、この五つのタイプのどこにも分類できない「サテ」が認められる。

- (1) 聞こえわづらひて、あこぎ返事書く。「御文は、御覧じつれど、まめやかに苦しげなる御けしきにてなむ、御返事も。さて、いと長げには、などか。いつのほどにか短さも見えたまはむ。また、頼もしげなくとも、うしろやすくのたまはむ」と書いてやりつ。帯刀、見せたてまつりたれば、「いみじくされて物よく言ふべき者かな。むげに恥づかしと思ひたりつるに、気ののぼりたらむ」と、ほほゑみてのたまふ。さて、あこぎ、ただ一人して、言ひ合すべき人もなければ、心一つをちぢらになして(『落窪物語』 卷之一 49頁)

(1)の例の「さて～」は、その直前の「帯刀～ほほゑみてのたまふ。」とは場面が転換しており、関わる人物も異なっている。つまり、この「サテ」は直前文を承けない「サテ」であると言える。それだけなら、従来いわゆる「転換」の用法として整理されてきた「サテ」と言えようが、これは直前文を跳び越し、なおかつ跳び越した直前文より前部の「聞こえわづらひて、～と書いてやりつ。」とは場面が続いており、関わる人物も同じであって、事態の時間的・空間的な連続がある「サテ」でもあるのである。つまり、これは、「直前文の場面から転換」し、かつ「直前文より前部の場面と連続」している文脈中に置かれている「サテ」なのである。

本論ではこのような用法をもつ「サテ」を『跳び越しのサテ』と名付け、このはたらきに注目する。具体的には、

- ①中古の散文資料における「サテ」の用例中で、『跳び越しのサテ』はどのように位置付けられるのか
- ②なぜ「サテ」にこのような用法があるのかについて述べたい。

⁷³ これらの先行研究では「サテ」を『接続語』として扱う。

4. 3. 2. 『跳び越しのサテ』について

まず、論者がどういう用例を『跳び越しのサテ』の例と見ているかを確認しておく。「サテ」について考えるのに、本論では先述の岡崎（2011）による「サテ」の分類の枠組みを利用したい。以下に、その分類の枠組みを岡崎（2011）より抜粋して示す。

（以下、Xは先行する言語的文脈、または現場・記憶内、Yは言語的文脈）

タイプA：（論者注：「サテ」が）指示詞として機能している。X内の事態を指示対象とし、Y内の語（句）・節、またはY（文）に係り、それらの表す事態を修飾・限定する。

タイプB：指示詞として機能している。X内の事態を指示対象とし、X内の事態（条件・原因等）によりYの表す事態が起こる、またはX内の事態に引き続きYの表す事態（XとYは関わる人物が共通する、また時間的・空間的に連続する等）が起こることを示す。

タイプC：指示詞としての機能は形式化している。X内の事態にYの表す事態を添加する（XとYは関わる人物が異なる、時間的・空間的に隔たりがある等）、または話題が転換することを示す。

タイプD：タイプCとほぼ同じであるが、Xが言語的文脈でないもの（Xが現場の状況等）。

タイプE：指示詞としての機能は形式化している。XとYの表す事態を関係づけるのではなく（Xがない場合もある）、感情を表す。

（以上、岡崎（2011）72～73頁より抜粋。）

右の岡崎の分類を踏まえ、本論で用例採集資料としている中古の和文資料から、各々のタイプに分類される用例を挙げ、（ ）内に適宜現代語訳を示す。

タイプA

（2）くらつまろ申すやう、「燕子うまむとする時は、尾を捧げて、七度めぐりてなむうみ落とすめる。さて七度めぐらむをり、引きあげて、そのをり、子安貝は取らせたまへ」と申す。（そんなふうに七度廻るときに）（『竹取物語』、52頁）

タイプB

（3）故右京の大夫の、人のむすめをしのびてえたりけるを、親聞きつけて、ののしりてあはせざりければ、わびてかへりにけり。さて、朝によみてやりける。（そうして、翌朝に歌を詠んでやる。（『大和物語』、294頁）

タイプC

（4）ある人の、この波立つを見てよめる歌、（歌）霜だにも置かぬかたぞといふなれど波の中には雪ぞ降りける さて、船に乗りし日より今日までに、二十日あまり五日になりけり。（波の中にはなんと雪が降っていることよ。さて、船に乗った日から今日までに）（『土佐日記』、31頁）

タイプD

- (5) さて、この男、その年の秋、西の京極、九条のほどにいきけり。(この男はある年の秋、西の京極、九条の辺りに行った。)(章段冒頭：『平中物語』、522頁)

タイプE

- (6)「田舎びたる人どもに、忍びやつれたる歩きも見えじとて口かためつれど、いかがあらむ、下衆どもは隠れあらじかし。さて、いかがすべき」(〈薫大将は、浮舟との仲立ちを弁の尼君に頼む。〉大将は、「田舎びた人たちに、忍びやつれた姿を見せまいと口止めをしておいたのですが、どんなものでしょう。下人たちには分かってしまうでしょう。さて、どうしたものか」(『源氏物語』、宿木、495頁)

『跳び越しのサテ』は、「サテ」直前の文との関係を見るとタイプCのようであるが、直前の文よりさらに前の部分との関係を見るとタイプBであるように見える。タイプBとタイプCは、「サテ」に指示詞機能が認められるか否かという点で一点を画する。これらを踏まえた上で、もう一度(1)の用例を見てみる。

- (1) 聞こえわづらひて、あこぎ返事書く。「御文は、御覧じつれど、まめやかに苦しげなる御けしきにてなむ、御返事も。さて、いと長げには、などか。いつのほどにか短さも見えたまはむ。また、頼もしげなくとも、うしろやすくのたまはむ」と書いてやりつ。帯刀、見せたてまつりたれば、「いみじくされて物よく言ふべき者かな。むげに恥づかしと思ひたりつるに、気ののぼりたらむ」と、ほほゑみてのたまふ。さて、あこぎ、ただ一人して、言ひ合すべき人もなければ、心一つをちぢになして(『落窪物語』巻之一、49頁)

右の(1)の例の「さて～」(実線部以降)は、その直前の「帯刀～ほほゑみてのたまふ。」(網掛け部)とは場面が転換しており、関わる人物も異なる。つまり、この「サテ」は場面や人物などの連続性がなく、直前文を承けない「サテ」である。ここに注目するとこの「サテ」は、前出の分類のタイプCに相当すると考えられる。同時に、「帯刀～ほほゑみてのたまふ。」より前部の「聞こえわづらひて、～と書いてやりつ。」(点線部)とは場面や関わる人物が続いており、点線部と「さて～」の文で表されている事態の時間的・空間的な連続が見て取れる。こちらに注目すると、この「サテ」は、網掛け部を跳び越して、それより前の部分である、点線部の「～と書いてやりつ。」と連続性があり、タイプBに相当するとも考えられる。つまり、この「サテ」は、「サテ」の指示詞機能の残存の有無に注目して見た際に、矛盾した異なる二つのタイプに属している例であるように見えるのである。

次の例も同様である。

(7)「はかなきあだ事をも、まことの大事をも言ひあはせたるにかひなからず、竜田姫と言はむにもつきなからず、織女の手にも劣るまじく、その方も具して、うるさくなむはべりし」とて、いとあはれと思ひ出でたり。中将、「その織女の裁ち縫ふ方をのどめて、長き契りにぞあえまし。げに、その竜田姫の錦には、また、しくものあらじ。はかなき花紅葉といふも、をりふしの色あひつきなくはかばかしからぬは、露のはえなく消えぬるわざなり。さあるにより、かたき世とは定めかねたるぞや」と言ひはやしたまふ。「さて、また同じころ、まかり通ひし所は、人も立ちまさり、心ばせまことにゆゑありと見えぬべく、うち詠み、走り書き（『源氏物語』、帚木、77頁）

右(7)の例も先述の(1)の例と同じである。「さて～」(実線部以降)は、その直前文の「中将～言ひはやしたまふ。」(網掛け部)を跳び越して、「はかなきあだ事をも、～思ひ出でたり。」(点線部)と連続しているのである。この「サテ」も、直前文との関係を見るとタイプCに当たるが、それを跳び越してさらに前の部分との関係を見るとタイプBに当たる。この(7)の「サテ」もBとC、二つのタイプに属している『跳び越しのサテ』の例であると考えられる。

4. 3. 3. 中古の「サテ」について

この節では、前節で示した『跳び越しのサテ』が中古の資料にどれくらい見られるのかを確認する。

[用例採集資料及び用例の分類方法について]

調査対象は下記の中古散文資料とする。

調査資料：『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』『土佐日記』『落窪物語』『堤中納言物語』『源氏物語』

なお、資料における地の文、対話文などの「サテ」の使用場面の違いは、考察対象である『跳び越しのサテ』の全用例数自体の問題(表1参照)などから、今回は特に問題としないこととする。また、分類は前出の岡崎(2011)の5分類を用いる。

[調査結果]

(表1) 中古散文資料の「サテ」の5分類

「サテ」	A	B	C	D	E	その他	計
『竹取物語』	1	1	0	0	0	(ii) 1	3
『伊勢物語』	0	10	0	0	0	0	10
『大和物語』	0	29	0	0	0	(i) 8 (ii) 1	38
『平中物語』	6	35	0	2	0	(i) 1	44
『土佐日記』	0	2	2	0	0	(ii) 1	5
『落窪物語』	3	11	3	0	0	(i) 2 (ii) 4	23
『堤中納言物語』	0	4	0	0	0	(i) 1 (ii) 1	6
『源氏物語』	43	41	4	1	1	(i) 8 (ii) 6	104

※1 数値は例数の実数を表す。

※2 その他 (i) 分類A・Bにまたがる例数。(ii) 分類B・Cにまたがる例数。

[データの扱い]

本論では(表1)中の「その他」(ii)に注目することとする。これは、『跳び越しのサテ』がタイプBとタイプCにまたがるタイプであることによる。論末に、この「その他」の(ii)に分類された『跳び越しのサテ』の用例を示す。

4. 3. 4. 「サテ」の直前文を承けない用法について－「サテ」と「カクテ」－

1. でも述べたように、先行研究では「サテ」は「カクテ」と比して論じられてきた。これは、「カクテ」も「サテ」も古代語から使用されていたこと、指示副詞「カク」、「サ」に接続助詞「テ」が付くという語構成上の類似などから、対立する語として認識されてきたことなどによる。

では、この『跳び越しのサテ』がもつ飛び越し機能は、「カクテ」も有しているのであろうか。ここではそれを検証することで、「サテ」と「カクテ」の差異について述べ、それを踏まえた上で改めて「サテ」が飛び越し機能をもつ意味を考えてみたい。

まず、「カクテ」の飛び越し機能の有無を確認する。

(表2) 中古散文資料の「カクテ」の5分類

「カクテ」	A	B	C	D	E	その他	計
『竹取物語』	0	1	0	0	0	(i) 1	2
『伊勢物語』	0	1	0	0	0	(i) 1	2
『大和物語』	5	13	0	0	0	(i) 21 (ii) 1	40
『平中物語』	1	2	0	0	0	(i) 2	5
『土佐日記』	0	0	0	0	0	(i) 7	7
『落窪物語』	16	7	5	1	0	(i) 1	30
『堤中納言物語』	3	0	0	0	0	0	3
『源氏物語』	98	18	2	0	0	0	118

※1 数値はその例数の実数を表す。

※2 その他 (i) 分類A・Bにまたがる例数。

(ii) 分類B・Cにまたがる例数。

(表2)によれば、「その他」の(ii)に分類される例は一例のみ⁷⁴で「カクテ」には跳び越し機能がほとんどない。ではなぜ「サテ」には認められる跳び越し機能が「カクテ」にはないのであろうか。それについて、次節で考察することとする。

4. 3. 5. 「カクテ」の総括性

次の表は、岡崎(2002)からの抜粋である。

古代語 (中古)	コ系列 (指示代名詞)	カク系列 (指示副詞)	ソ系列 (指示代名詞)	サ系列 (指示副詞)	カ系列(ア系 列) (指示代名詞)
照応用法	●	●	●	●	
直示用法	●	●	※	※	●
観念用法			●	●	●

※(●はその用法の例が多く見出され、※は僅かしか見られないことを示す。)

(岡崎(2002)、8頁より抜粋。)

この表より、カク系列の指示副詞は照応用法と直示用法、サ系列の指示副詞は照応用法と

⁷⁴『大和物語』九六段の章段冒頭「かくて九の君、侍従の君にあはせたてまつりたまひてけり。」の例。前段九五段を跳び越し、九四段と場面や登場人物が同じであり、物語事態の時間的・空間的な連続がある。

観念用法がその主用法であることが分かる。指示副詞「カク」と指示副詞「サ」は共に照応用法を有しているが、直示用法については「カク」は有しており、「サ」には僅かしか見られない。

金水 (1999) は、上代のコ系列の照応用法は、現代語よりも直示用法との間がより近いことを述べている。それを踏まえて、以下に「カクテ」の用例を見ていく。

- (8) 道にて、くらもちの皇子、血の流るるまで打ぜさせたまふ。祿得し甲斐もなく、みな取り捨てさせたまひてければ、逃げうせにけり。かくて、この皇子は、「一生の恥、これに過ぐるはあらず。」(『竹取物語』、36 頁)
- (9) 母北の方見るに、帥はいともものしく、ありさまもよければ、「さ言へども、やむごとなき人のしたまへることは、こよなかりけり」と喜ぶ。かくていとそがし。(『落窪物語』、卷之四、327 頁)

これらの「カクテ」は照応用法ではあるが直示用法、つまり、「カクテ」以前で述べられている物語内容を直接知覚、認識して述べている用法に近いものと考えられる。物語は話題の一つひとつを積み重ねて順に語る形で文脈を形成するので、その文脈の中で直示用法に近い照応用法で「カクテ」がはたらけば、その関係付けは、物語の文脈そのものを文脈の流れのとおりそのままに関係付けるものとなり、それは累積的、総括的な接続となる。

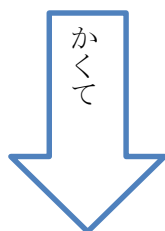
これを図示したものが下の (8') である。

(8')

道にて、くらもちの皇子、血の流るるまで打ぜさせたまふ。

+

祿得し甲斐もなく、みな取り捨てさせたまひてければ、逃げうせにけり。



この皇子は、「一生の恥、これに過ぐるはあらず。」

4. 3. 6. 「サテ」の階層性

一方、「サテ」の構成要素である指示副詞「サ」の照応用法は、前述の指示副詞「カク」の照応用法とは異なり、直示用法との近似性をもつものではない⁷⁵。

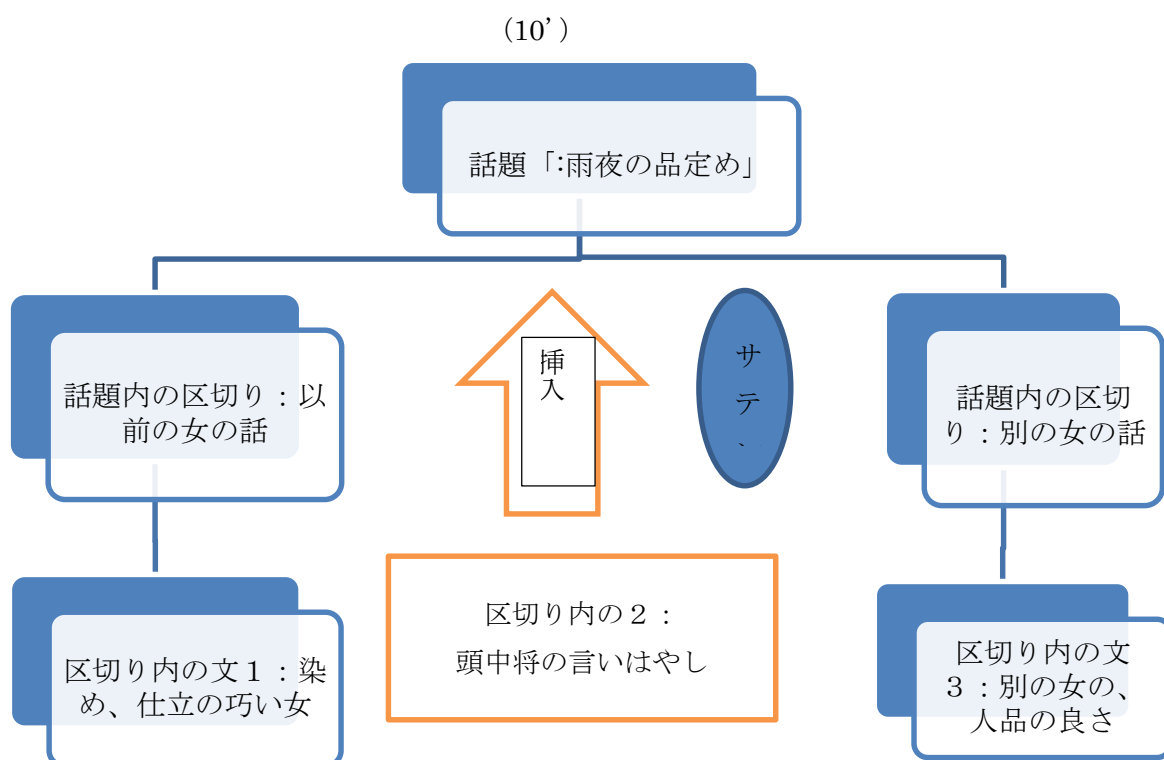
⁷⁵ 岡崎 (2002)、藤本 (2008) によれば、指示副詞「サ」が直示用法を獲得したのは、中世後期から近世期にかけてと考えられる。

まず、『跳び越しのサテ』として用いられている「サテ」の例を示す。

- (10) 「(略) 童田姫と言はむにもつきなからず、織女の手にも劣るまじく、その方も具して、うるさくなむはべりし」とて、いとあはれと思ひ出でたり。中將、「その織女の裁ち縫ふ方をのどめて、長き契りにぞあえまし。～さあるにより、かたき世とは定めかねたるぞや」と言ひはやしたまふ。「さて、また同じころ、まかり通ひし所は、人もたちまさり（左馬頭は）「染めも仕立も巧い、太した女でした。」と言って、かわいそうだったと思ひだしている。(略) (左馬頭は)「さて、また同じ頃に通っておりました別の女は) (『源氏物語』、帚木、77 頁)
- (11) 中納言、「(略) 券は何か賜はらむ。またも参らせまほしくなむ。(『落窪物語』、卷之三、241 頁) ～おとどの御返り、「やがて昨日はさぶらはむと思うたまへしかど、方の塞がりてはべりしかばなむ。今よりはいとうれしく、明け暮れもさぶらひぬべしと思ひたまへしを、命のびてなむ。さて、賜はせたる券は賜はるまじきよしは、聞こえはべりしを、なほかうせさせたまふ、御勘当の深きなめりと、かしこまり思ひたまふる。(中納言は、「地券などどうしていただけます。さらに別の土地をさし上げたく存じます。」(略)「さて、お届けいただきました地券は、いただきかねる由を申しあげましたのに) (『落窪物語』、卷之三、253 頁)

(10) (11) は共に、「サテ」以降の文はその直前の網掛け部は承けず、そこを跳び越して点線部の場面と連続している。これは、先述の「カクテ」が「カクテ」以前の文脈部分を総括的にまとめて指示して接続していたのとは異なる型の接続である。

これについて、甲田 (1995) は、「さて」と「ところで」の違いを、それによって構成される Discourse の構造の違いによって説明している。甲田は「さて」と「ところで」を含む Discourse の構造を考えるために、〈Topic〉〈Segment〉〈Detail〉という階層を用い、説明を行っている。その考え方を応用して、この『跳び越しのサテ』が用いられている構造を (10') に示す。



(10) を図示してみると (10') のように、『跳び越しのサテ』は階層性を有していると考えられる。文脈は図の最下層の「区切り内の文」として、《染め、仕立の巧い女》《頭中将の言いはやし》《別の女の、人品の良さ》と続く。それが文より上位の「話題内の区切り」を考えてみると、この文脈は《以前の女の話》《別の女の話》と、同一話題（「雨夜の品定め」）内で区切られた別の小話（エピソード）であり、それがさらに上位に位置する「雨夜の品定め」という一つの話題内に収まっており、「サテ」は大きな一つの話題の中での小話の区切り目を示すところで用いられている。(10)、(11) は『跳び越しのサテ』の例であるが、(10) の場合、《頭中将の言いはやし》が元からあった話に挿入された形を取るため、「サテ」直前文と「サテ」以降の文に連続性がないように見え、その上、「サテ」が同一話題内での小話の区切りを示す位置に置かれているので、その結果、「サテ」以降の文は、「サテ」直前文を跳び越して、直前文より前部の文と場面や人物などについて連続性があるように見えるのである。

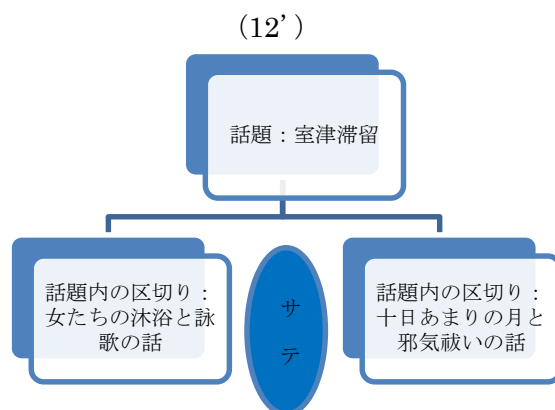
次に、『跳び越しのサテ』以外の、文中で指示詞として機能しているのではない「サテ」についても示す。【タイプA】と【タイプB】は「サテ」に指示詞としての機能があるタイプなので、ここでの目的には合わないため考察対象とはせず、【タイプC】と【タイプD】について考える。

【タイプC】

(12) 沐浴などせむとて、あたりのよろしきところに下りて行く。海を見やれば、(歌) 雲もみな波とぞ見ゆる海女もがないづれか海と問ひて知るべく となむ歌よめる。さて、十日あまりなれば、月おもしろし。船に乗り始めし日より、船には紅濃く、よき衣着ず。(『雲もみな波のように見える。海女がいるといいのになあ、どちらが海なのか聞いて知るのに』と歌を詠んだ。さて、十日過ぎなので月がとても良い。船に乗り始めた日から) (『土佐日記』、29 頁)

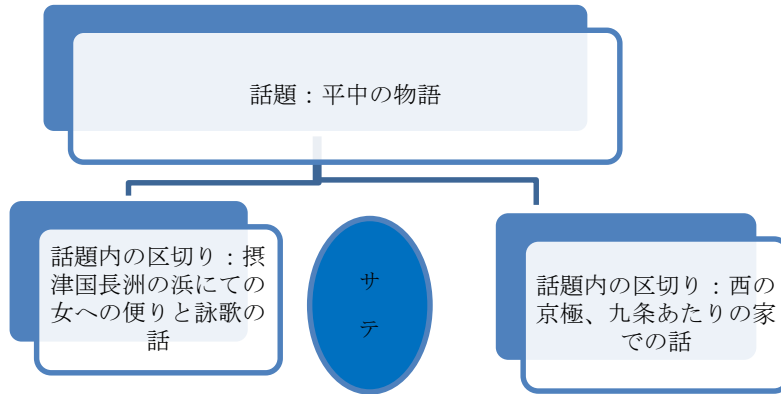
【タイプD】

(13) さりければ、久しくも長居で、帰り来にけり。(章段が変わって) さて、この男、その年の秋、西の京極、九条のほどにいきけり。(そういうわけで、長居もせずに帰って来たのだった。(章段が変わって、) この男はある年の秋) (『平中物語』、522 頁)



上図によれば、(12') は前出の (10') と同じ構造であることが示せる。紙幅の都合上、文脈の最下層に位置する「区切り内の文」は省略するが、文より上位の「話題内の区切り」を考えてみると、ここの文脈は《女たちの沐浴と詠歌の話》と《十日あまりの月と邪気祓いの話》という、《室津滞留》という同一話題内で句切られた別の小話であり、それがさらに上位に位置する《室津滞留》という一つの話題内に収まっている構造をもっており、「サテ」は一つの話題の中で、小話の区切り目を示すところで用いられている。

(13')



右図に示した(13')も前出の(12')と同じ構造である。ここでも紙幅の都合上、文脈の最下層の「区切り内の文」は省略する。文より上位に位置する「話題内の区切り」を考えてみると、この文脈は、《撰津国長洲の浜にての女への便りと詠歌の話》と《西の京極、九条あたりの家での話》という、「平中の物語」という同一の話題内で区切られた別の小話である。それがさらに上位に位置する「平中の物語」という一つの話題内に収まっている構造をもち、「サテ」は一つの話の中、小話の区切り目を示す位置に置かれている。

これらの(12')、(13')からも分かるように、『跳び越しのサテ』に限らず、「サテ」は大きな一つの話の中で、小話の区切りを示す場合に用いられている。この、同一話題内での区切られた別の小話というのは、同じ話題に属してはいるが、話題の焦点となる箇所(焦点となる人物、事態など)が異なるものと考えられる。その点において「サテ」は先述の「カクテ」とは異なる。「カクテ」はそれ以前の部分を累積してまとめ、総括的な接続を行う。一方「サテ」は一つの話内に所属していることを表明し、なおかつ小話の区切り目を示す。そして、この「サテ」のもつ、一つの話内ではたらき、その中の小話の区切りを表すことで構築していく階層性は、「サテ」の、直示用法との近似性から解放された⁷⁶用法によって保証されたものと考えられる。

以上から、「カクテ」と「サテ」は、はたらくレベルが異なると考えられる。「サテ」がもつ跳び越し機能が「カクテ」にはないことも、両者のはたらくレベルの違いにより説明できると考えられる。

⁷⁶ 金水(1999)はこれを「非直示用法」として述べている。

4. 3. 7. 『跳び越しのサテ』の意味について

前節までに、『跳び越しのサテ』について述べてきたが、ここでは『跳び越しのサテ』に区切り目を示す用法があることの意義について注目することとしたい。

4. 3. 7. 1. 「サテ」の具体的な指示対象をもたない用法について

岡崎（2002）によれば、古代語の指示副詞「サ」は、指示代名詞では「ソノ」「ソレ」「ソコ」などのソ系列であり、現代語では指示副詞も「ソウ」「ソナニ」「ソウシテ」「ソレホド」などソ系である。それを踏まえた上で考えてみることにする。

現代語では、現場にも先行文脈にも、確たる指示対象が存在しない場合にも指示詞のソ系を用いることがある。

(14) A：お出かけですか。B：ええ、ちょっとそこまで。（金水 1999、85 頁）

(15) A：私のメガネ、知らない？ B：その辺に置いてあるんじゃないの。（金水 1999、同）

(16) 彼はそこらの学者とは比較にならない学識と経験を持っている。（金水 1999、同）

金水（1999）では、これらの例で表されているソ系を、「言語外世界に確定的な値をあらかじめ持たない」ソ系列の指示詞を用いた慣用表現として、『曖昧指示のソ』としている。

岡崎は岡崎（2006）『感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現について—ソ系（ソ・サ系列）指示詞再考—』において、これらについて、田窪・金水（1996）の談話管理理論を用いて説明する。岡崎によれば、「感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現は先の照応用法と同じく、先行文脈から（時には一般知識領域内の活性化された情報を参照し）推論を行い、得られた要素を指示対象とする（指示対象は不定な部分を含むものもある）。そして、これらの指示対象は、談話情報領域内に一時的に格納されている要素である。但し、感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現の先行文脈とは、照応用法のように同一または直前のものとは限らず、また音声化・書記化されていない発話者の心内のみの言語文脈であってもよい。さらに、これらは一般知識領域内の情報だけではなく、エピソード記憶領域内の活性化された情報も参照し、推論を行う場合もある」（岡崎（2006）、82 頁より抜粋）との説明がなされている。

『跳び越しのサテ』は、金水や岡崎の述べる『曖昧指示』と関連したものと考えてよいと思われる。『跳び越しのサテ』は、直前部を跳び越えた、「サテ」前部と場面の連続はあるものの、その前部に指示対象とするべき具体的な要素、先行部があるというより、「サテ」以降の部分が直前部を跳び越えた、「サテ」前部と同一話題内に所属しているということを示すことがその本義であると考えた方が、その機能をとらえやすい。つまり、直前部を跳び越えた、「サテ」前部との間に見られる場面や人物の連続性は、「サテ」によるものではなく

文脈による連続であり、文脈中に特定の先行部をもたず、具体的に前出部分のどこをも指示しないのが、『跳び越しのサテ』であると考えられるのである。具体的な指示箇所が文脈中には求められないことに着目し、『跳び越しのサテ』は曖昧指示表現との関連を考えてよい面があると思われる。以上を踏まえ、次節ではこの『跳び越しのサテ』が物語の中でどのようなにはたらいているのかについて考えてみたい。

4. 3. 7. 2. 「サテ」の物語の構造化機能

前節で述べたように、『跳び越しのサテ』の「サテ」は、直前部ではない「サテ」前部のどこかを特定の、具体的に指示するのではなく、直前部ではない「サテ」より前部と「サテ」より後部が同一話題内に所属しているということを表す「サテ」である。ここで再び(10')を見てみる。図(10')によれば、「サテ」が用いられているのは同一話題に属する、【話題内の区切り】の境目である。しかし、境目ではあるが同一話題内であるので、話題そのものは変わっていない。つまり、「サテ」は物語中にいくつか現れる話題の下で、それに則って述べられていく物語の末端の各部をまとめ、【話題内の区切り】となる一つの話題中の[小見出し]に当たるまとまりを示すことで、物語を整理し、それを構造化する機能をもつのだと考えられる。物語は構造化されることで、その内容への複数の視点からの言及が可能となったり、同一時系列に生じた複数の場面のエピソードを述べるのが可能となったりと、様々な益を寄与される。

「サテ」によって行われる、論中でいくつか図示したこのような物語の構造化は、5. 1. で示したように、これが特定の、具体的な対象を指示していない「サテ」であることにより可能となる。『跳び越しのサテ』は同一話題中の話を区切り、区切ることで話に【話題内の区切り】としての[小見出し]に当たるまとまりをいくつか作る。そのように、同一話題内で、小さく話を区切り、まとめることで、大きな一つの【話題】に属する小さな話の終わり始まり—【話題内の区切り】としての[小見出し]を示すこと—がその機能の中核であると考えられる。そしてこれは、「サテ」が特定の、具体的な対象を指示しないからこそ、別の言い方をすれば、「サテ」が実質的な指示詞性を失って、形式化、文法化しているからこそ可能となる「サテ」の用法であると考えられる。『跳び越しのサテ』として用いられている「サテ」の存在は、このような「サテ」の形式化—指示詞ではなく接続詞に近い形式として—はたらく「サテ」の存在—の証左となりうると考えられる。

4. 3. 8. まとめ

本論では、先行研究では言及されていない、「サテ」の直前文を跳び越す用法、『跳び越しのサテ』について示した。具体的には、

①' 中古の和文資料における「サテ」の用例中には、先行研究で述べられてきた「サテ」の用法では説明できない、『跳び越しのサテ』の例がある。これは、「サテ」以降の部分が、「サテ」の直前部を承けずにそこを跳び越えた「サテ」前部と同一話題内に所属しているということを示す用法であり、物語の構造化に寄与する。

②' 「サテ」のこの用法については、「サテ」が具体的、実質的な指示詞性を失い、形式化、文法化していった結果、獲得した一用法である可能性がある。

この二点を述べた。

〈補足〉上記①' について

論者はここで扱った『跳び越しのサテ』を、佐伯（1953）が指摘する「はさみこみ」とは異なる意味を持つものと考えている。佐伯（同）は「はさみこみ」を、「通常の文は、最後の文節だけが切れる文節であって、形の上でも切れる形をとり、他はみな続く文節になっている。ところで、ときどき、明らかに切れる形をとったものが、文中にあることがある。」

（佐伯（同）・62 頁）と述べる。これについて、出雲（1985）は「はさみこみ」と陳述との関連について述べ、「はさみこみ」の衰退は、後述するように、接続助詞や並立助詞の発達と無関係ではないであろう。」（出雲（同）・23 頁）と、「はさみこみ」が接続助詞や並立助詞の発達によって衰え、形式化した語法として残ったことを述べ、小田（1990）は「はさみこみ」を「挿入句」として扱い、それが同格構文や接続句を背景とした「挿入句」である（小田（同）・44 頁）とする。これらの「はさみこみ」についての見解はいずれも、小田（同）が定義する「一つの文中に、その文と係り受けの関係をもたない、形態上独立した別の文が含まれる時、その別の文を挿入句と定義する。」（小田（同）・37 頁）といった、「一つの文中に（略）、形態上独立した別の文が含まれる」ものを指しており、論者がここで考察対象とした、「直前文の場面から転換」し、かつ「直前文より前部の場面と連続」している文脈中に置かれている「サテ」（本論 90 頁）によって導かれた、複数の文から成るまとまりとは異なるものを指す。先述の佐伯、出雲、小田などが述べるように「はさみこみ」は一つの文中に挿入された句であり、それは後代に発達した文法の形態（接続助詞や並立助詞など）に取って代わられまた一部は形式的に慣用句のように現代語に残存するものであるが、論者が述べた『跳び越しのサテ』は、本論 96～102 頁で述べたように、「同一話題に属する、【話題内の区切り】の境目」（本論 102 頁）を表して物語の構造化を表す機能を持つものである。文単位でその機能を見る「はさみこみ」と、文より大きな単位でその機能を見るべき『跳び越しのサテ』は、各々が持つ機能と、それがはたらく単位（範囲）が異なることから、本論では異なる意味を持つものと考えておく。

『跳び越しのサテ』の用例

4 (源氏・帚木)	3 (源氏・帚木)	2 (大和)	1 (竹取)	番号 (資料)
87 頁	77 頁	373 頁	56 頁	頁数
対話・文頭	対話・文頭	地・文頭	地・文頭	場面
<p>ち寄りてはべれば (87 頁)</p> <p>(8 頁)「さて、いと久しくまからざりしに、ものたよりに立ち寄りてはべれば (87 頁)</p> <p>とすかいたまふを、心は得ながら、鼻のわたりをこつきて語りなす。</p> <p>と申せば、残りを言はせむとて、「さてさてをかしかりける女かな」宿世の引く方はべるめれば、男しもなむ仔細なきものははべめる。」</p>	<p>7 頁)</p> <p>やしたまふ。(77 頁)「さて、また同じころ、まかり通ひし所は (77 頁)</p> <p>ち縫ふ方をのどめて、くかたき世とは定めかねたるぞや」と言ひは</p>	<p>この男は、くれ竹のよ長きを (373 頁)</p> <p>ながらおなじえにすむはうれしきみぎはとぞ思ふ (373 頁)さて</p> <p>織女の手にも劣るまじく、その方も具して、うるさくなむはへりし」とて、いとあはれと思ひ出でたり。(76 頁)中将、「その織女の裁</p>	<p>されば、女の墓をばなかにて、左右になむ、男の墓ども今もあなる。(370 頁)くまた、ひとりの男になりて、われとのみ契らず</p> <p>さる時よりなむ、よはひ」とはいひける。(19 頁)くそれよりなむ、すこしうれしきことをば、「かひあり」とはいひける。(56 頁)さて、かぐや姫のかたちの、世に似ず (56 頁)</p>	<p>用例</p>

8 (源氏・橋姫)	7 (源氏・常夏)	6 (源氏・若紫)	5 (源氏・帚木)	番号 (資料)
154 頁	248 頁	203 頁	106 頁	頁数
対話・文頭	対話・文頭	対話・文頭	地・文頭	場面
<p>頁)</p> <p>か見せたまはざりし。まるならましかば」と恨みたまふ。(154 頁)</p> <p>きぬべく言ひつづけたまふ。「さて、そのありけん返り事は、など</p> <p>ふ。(152 頁) 宮にも、くさればよと御気色を見て、いとど御心動</p> <p>君は、姫君の御返り事、いとめやすく児めかしきををかしく見たま</p> <p>ふ。(152 頁) 宮にも、くさればよと御気色を見て、いとど御心動</p> <p>きぬべく言ひつづけたまふ。「さて、そのありけん返り事は、など</p> <p>か見せたまはざりし。まるならましかば」と恨みたまふ。(154 頁)</p>	<p>48 頁)</p> <p>たまひつるを、しふしぶなるさまならば、ものしくもこそ思せ。(2</p> <p>46 頁) くいと云ふかひなくはあらず、三十文字あまり、本末あは</p> <p>ぬ歌、口疾くうちつづけなどしたまふ。「さて、女御殿に参れとの</p> <p>「さ思はれば、今日にても」とのたまひ棄てて渡りたまひぬ。(2</p> <p>46 頁) くいと云ふかひなくはあらず、三十文字あまり、本末あは</p> <p>ぬ歌、口疾くうちつづけなどしたまふ。「さて、女御殿に参れとの</p> <p>たまひつるを、しふしぶなるさまならば、ものしくもこそ思せ。(2</p> <p>48 頁)</p>	<p>問ひたまふ。(203 頁)</p> <p>「さ思はれば、今日にても」とのたまひ棄てて渡りたまひぬ。(2</p> <p>46 頁) くいと云ふかひなくはあらず、三十文字あまり、本末あは</p> <p>ぬ歌、口疾くうちつづけなどしたまふ。「さて、女御殿に参れとの</p> <p>たまひつるを、しふしぶなるさまならば、ものしくもこそ思せ。(2</p> <p>48 頁)</p>	<p>「かの国の前の守、新発意のむすめか、しづきたる家、いといたしが</p> <p>し。(202 頁) 大臣の後にて、くなかなか法師まさりしたる人に</p> <p>なんはべりける」と申せば、(203 頁) 「さて、そのむすめは」と</p> <p>問ひたまふ。(203 頁)</p> <p>「さ思はれば、今日にても」とのたまひ棄てて渡りたまひぬ。(2</p> <p>46 頁) くいと云ふかひなくはあらず、三十文字あまり、本末あは</p> <p>ぬ歌、口疾くうちつづけなどしたまふ。「さて、女御殿に参れとの</p> <p>たまひつるを、しふしぶなるさまならば、ものしくもこそ思せ。(2</p> <p>48 頁)</p>	<p>用例</p> <p>「かの、ありし中納言の子は、く上にも我奉らむ」とのたまへば、(1</p> <p>05 頁) 「いとかしこき仰せ言に、く睦ひはべらず」と申す。(106</p> <p>頁) さて、五六日ありて (106 頁)</p>

11 (落窪物語・ 卷之一)	10 (土佐日記)	9 (堤中納言物語・ はなだの女御)	番号 (資料)
49 頁	55 頁	475 頁	頁数
地・文頭	地・文頭	対話・文頭	場面
<p>さて、あこぎ、ただ一人して、言ひ合すべき人もなければ (49 頁)</p> <p>しと思ひたりつるに、気のぼりたらむ」と、ほほ多みてたまふ。</p> <p>さて、あこぎ、ただ一人して、言ひ合すべき人もなければ (49 頁)</p> <p>つりたれば、「いみじくされて物よく言ふべき者かな。むげに恥づか</p> <p>ろやすくのたまはむ」と書きてやりつ。(48 頁) 帯刀、見せたてま</p> <p>いづのほどにか短さも見えたまはむ。また、頼もしげなくとも、うし</p> <p>つりたれば、「いみじくされて物よく言ふべき者かな。むげに恥づか</p> <p>ろやすくのたまはむ」と書きてやりつ。(48 頁) 帯刀、見せたてま</p> <p>いづのほどにか短さも見えたまはむ。また、頼もしげなくとも、うし</p> <p>つりたれば、「いみじくされて物よく言ふべき者かな。むげに恥づか</p> <p>ろやすくのたまはむ」と書きてやりつ。(48 頁) 帯刀、見せたてま</p> <p>いづのほどにか短さも見えたまはむ。また、頼もしげなくとも、うし</p>	<p>(55 頁)</p> <p>ゆれど、志はせむとす。さて、池めいて窪まり、水つけるところあり。</p> <p>聞きしよりもまして、いふかひなくぞ、こぼれ破れたる。家にあづけ</p> <p>たりつる人の心も、荒れたるなりけり。(55 頁) くいととはつらく見</p> <p>ゆれど、志はせむとす。さて、池めいて窪まり、水つけるところあり。</p> <p>(55 頁)</p>	<p>ば、何とか定めきこえたまふ」と言へば (475 頁)</p> <p>て、久しくこそなりにけれ」とのたまへば、北の方、「さて、齋宮を</p> <p>「御方こそ。この花はいかが御覧する」と言へば、「いざ、人々にた</p> <p>とへきこえむ」とて、(472 頁) く罪を離れむとて、かかるさまに</p> <p>ば、何とか定めきこえたまふ」と言へば (475 頁)</p> <p>て、久しくこそなりにけれ」とのたまへば、北の方、「さて、齋宮を</p> <p>「御方こそ。この花はいかが御覧する」と言へば、「いざ、人々にた</p> <p>とへきこえむ」とて、(472 頁) く罪を離れむとて、かかるさまに</p> <p>ば、何とか定めきこえたまふ」と言へば (475 頁)</p> <p>て、久しくこそなりにけれ」とのたまへば、北の方、「さて、齋宮を</p> <p>「御方こそ。この花はいかが御覧する」と言へば、「いざ、人々にた</p> <p>とへきこえむ」とて、(472 頁) く罪を離れむとて、かかるさまに</p>	<p>用例</p> <p>「御方こそ。この花はいかが御覧する」と言へば、「いざ、人々にた</p> <p>とへきこえむ」とて、(472 頁) く罪を離れむとて、かかるさまに</p> <p>ば、何とか定めきこえたまふ」と言へば (475 頁)</p> <p>て、久しくこそなりにけれ」とのたまへば、北の方、「さて、齋宮を</p> <p>「御方こそ。この花はいかが御覧する」と言へば、「いざ、人々にた</p> <p>とへきこえむ」とて、(472 頁) く罪を離れむとて、かかるさまに</p> <p>ば、何とか定めきこえたまふ」と言へば (475 頁)</p> <p>て、久しくこそなりにけれ」とのたまへば、北の方、「さて、齋宮を</p> <p>「御方こそ。この花はいかが御覧する」と言へば、「いざ、人々にた</p> <p>とへきこえむ」とて、(472 頁) く罪を離れむとて、かかるさまに</p>

14 (落窪物語・卷之三)	13 (落窪物語・卷之二)	12 (落窪物語・卷之一)	番号 (資料)
253 頁	120 頁	106 頁	頁数
消息・文頭	対話・文頭	対話・文頭	場面
<p>3 頁)</p> <p>を、命のびてなむ。さて、賜はせたる券は賜はるまじきよしは (25</p> <p>「券は何か賜はらむ。またも参らせまほしくなむ。(241頁)「</p> <p>今よりはいとうれしく、明け暮れもさぶらひぬべしと思ひたまへし</p>	<p>「落窪の君をおのれに賜へれば、この御方の人にはあらすや」と言ふ</p> <p>に、(120頁)「あこぎ、よろづのことよりも、静心なきて、</p> <p>「さ、いつか」と言へば (120頁)</p>	<p>て、』使ひよし』とはしも、なのたまひぞ。(106頁)</p> <p>あし。召してむ「とのたまへば、」あやしくもともかくも御心。さ</p> <p>「あこぎをなへ、何しにさいなむ。使ひつけてはべれば、なきはいと</p>	<p>用例</p>

※1 頁数は、今回テキストとした、『新編日本古典文学全集』（小学館発行）による。

※2 実線は『跳び越しのサテ』、網掛部は跳び越し部分、点線は同一話題の先行部。

4. 4. 古典散文作品における談話分析 —話者交替の位置に現れる「サテ」について—

4. 4. 1. はじめに

本論は古典の散文作品中の登場人物等による対話場面を取り上げ、対話の話者が交替する位置に現れる「サテ」に注目してその機能を考察するものである。「サテ」は指示副詞「サ」に接続助詞「テ」が付いた語構成を持ち、古代から使用されてきた語である⁷⁷。中古物語作品において「サテ」は、

(1) 「ねむごろにも、尋ね問はで、さて、なま疑ひてぞ、ときどき、ものいひやりける。」

(『平中物語』三六段、523頁⁷⁸と、副詞的用法で、また

(2) 「むかし、男、武蔵の国までまどひ歩きけり。さてその国にある女をよばひけり。」(『伊勢物語』十段、123頁)

と、接続詞的用法で用いられた例が見られるが、そのほかに、

(3) 「この鹿の鳴くは聞きたうぶや」といひければ、「さ聞きはべり」といらへりけり。

男、「さて、それをばいかが聞きたまふ」といひければ、女ふといらへけり。」(『大和物語』一五八段、394頁)

と、対話場面の話者が交替する位置に現れる例も見られる。本論ではこのような、散文作品中の登場人物等による対話場面の話者が交替する位置に現れる「サテ」に注目し、それを「引き取りのサテ」と名付けてその機能を「サテ」の機能全体の中で位置付ける。そして「引き取りのサテ」が聞き手の発話を引き取って疑問文を後接し、質問文と応答文の組(ペア)を作って談話を展開させていく機能をもつことを示す。

なお、本論において古典散文作品とは中古、中世期に成立したとされる和文古典散文作品を指す。

4. 4. 2. 先行研究と問題の所在

古典の散文作品の談話分析を行った先行研究にはロング(1995)や信太(1995)がある。

ロング(1995)は『源氏物語』中の談話に見られる「依頼」の場面に注目し、「率直に言

⁷⁷ 中古以前の上代における例としては、「網児(あご)の山五百重(いほへ)隠(かく)せる佐堤(さて)の崎(さ)延(は)へし児(こ)が夢(いめ)にし見ゆる」(市原(いちはら)王(おほきみ)の歌一首、『萬葉集』巻第四・六六二番歌)(原表記: 網児之山 五百重隠有 佐堤乃崎 左手繩師子之 夢二四所見)が見られる。ただしこの例については、「上代語にサ・サテの確例がないため、疑問がなくもない。」(『萬葉集』①・337頁頭注、『新編日本古典文学全集6』)とある。

⁷⁸ 以下、用例は『新編日本古典文学全集』(小学館刊行)による。用例脇の傍線は論者による。頁数は同全集の用例が掲載された頁を表す。

う」、「間接的に依頼する」、「相手の対場に対する理解を示す」、「依頼の負担を小さく見せる」などの方法を取って「依頼」を行っていることを例を挙げて示し、「状況にふさわしい間接的な（あるいは直接的な）依頼が選択されること、そして、相手の立場に対する理解を示したり負担を小さく見せたりする表現（「なほ」「すこし」など）を複合的に用いることによって、依頼をより受け入れやすいものになっていることがわかった。」（ロング・同、26頁）と述べる。

また、信太（1995）は、『平家物語』覚一本と延慶本に見られる談話の会話文の引用形式について、会話主体を明示する例と非明示である例の二例の型があること、格助詞の「にして」、「にて」、「で」に注目すると、延慶本はいずれの格助詞も会話文よりも地の文の方に多く使われているが、覚一本は「にして」、「にて」は同じく会話文よりも地の文に多く使われているが、「で」は地の文よりも会話文に多く使われていること⁷⁹ また、形容詞については覚一本では地の文に三六例、会話文に七二例のイ音便形が見られるのみで、非音便形が多数を占める（助動詞は含まず）こと、推量、希望の助動詞については、推量の助動詞「う」「らう」「やらう」は引用文、会話文でのみ用いられていること、希望の助動詞「たし」「まほし」は、一例ずつの例外はあるが、地の文で「まほし」、会話文で「たし」が用いられていることを示し、「これらは言文二途の傾向を示している。」（信太・同、40頁）と述べる。

両研究は中古、中世の物語作品の対話場面に現れた人物の配慮や、地の文と比した対話文の形式について調査を行ったものであるが特に地の文とは異なる対話文であることの特性に注目した調査とは言えず、あくまでも各論者が述べたいことや調査したことを述べるために「談話分析」という体裁を取っているものであり、これらを物語作品の談話分析というには再考の余地がある。

そこで本論は先行研究と反対に、物語の対話文のまとまりである談話そのものを取り上げ、地の文とは異なる対話文であるからこそ認められるその特質から談話分析を行うこととする。

4. 4. 3. 本章での術語について

古典散文作品の談話分析を行うに際し術語について説明する。

まず、「談話」については、佐久間（2010）による、「一定のまとまりをもった言語・非言語行動の単位」を本論での「談話」の定義とする。本論では「対話文」が複数まとまった部分を「談話」と考えるためである。また西野（1993）を基に、「意味内容を伝える要素（ことば）以外に、対話の流れの中で対話の内容理解を助けるためのもの、対話者間のやり取り

⁷⁹ 信太の調査によれば覚一本地の文に24例、会話文に26例とある（信太・同、39頁表2による。）。

をよりスムーズにするためのもの、対話者間の人間関係を円滑にするためのものなど⁸⁰を「談話標識」として本論では考える⁸¹。「対話文」については、その対話文と見なされる文に対する引用符（「」）の表記の有無や、文末に「～と申す」、「～と言ふ」などのその文が登場人物の言表動作であることを表す動詞の記載の有無をもって判断するものとする⁸²。

次に中井（2003）を基に、「対話の中で、一人の参加者が話を開始してから終了するまでの連続した単位」を「発話順番」として対話を考える際の一つのまとまりを表す単位とし⁸³、この「発話順番」が替わり発話者が替わることをメイナード（1993）を基に「話者交替」とする⁸⁴。

4. 4. 4. 考察「引き取りのサテ」の用例数

まず、古典散文作品中の「サテ」の用例数を確認する。

（表1）は本論で資料とした中古の、（表2）は同中世の古典物語作品に見られる「サテ」の用例数である。用例は「サテ」が現れる文中の位置の別により、【地の文・文頭】、【地の文・文中】、【非地の文・文頭】、【非地の文・文中】の別に示す。ここで【非地の文】とは、【対話文】、【心内話文】【文（手紙）の文】を指すものとする。

資料名は表中では略して示し、『大和』は『大和物語』、『平中』は『平中物語』、『落窪』は『落窪物語』、『枕』は『枕草子』、『源氏』は『源氏物語』、『堤』は『堤中納言物語』、『浜松』は『浜松中納言物語』、『住吉』は『住吉物語』、『とりかへ』は『とりかへばや物語』、『保元』は『保元物語』、『平治』は『平治物語』、『平家覚一』は『平家物語』・覚一本、『平

⁸⁰ 西野（1993）はこの定義について、「対話」の部分を「会話」という語で述べている。

⁸¹ 西野（1993）はこれを「ディスコースマーカ」としている。「談話標識」はこの「ディスコースマーカ」の訳語として先行研究で用いられている語である。

⁸² これらは本論で資料としている『新編日本古典文学全集』の校訂者による判断に基づくとする考えもあるが、校訂を行った先行研究者に拠る学術的判断に基づく表記や記載であると考えられるため、本論ではこれを尊重し該当文が対話文であることを判断する指標としてこれらの表記や記載の有無を以てすることとしたい。

⁸³ 中井（2003）自身はこれを「ターン」とするが、本論ではこの概念を指す談話分析での元の術語「Turn」の訳語として、メイナード（1993）や李（1995）などによる「発話順番」という術語を用いる。これは本論の用例に使用した作品が古典の物語作品であることや本論の主旨を鑑みてのものである。ちなみに、「Turn」の訳語には「会話の順番」（山崎・吉井（1984））、「発話順番」（メイナード（1993）、李（1995））、「ターン」（木暮（2001）、中井（2003））などがある。また、中井（2003）自身は「ターン」の定義について、「対話」の部分を「会話」という語で述べている。

⁸⁴ これは、この概念を指す談話分析での元の術語「Turn-taking」の訳語として、メイナード（1993）が用いたものである。ちなみに、「Turn-taking」の訳語には「会話の順番取り」（山崎・吉井（1984））などもあるが、本論は発話の順番取りという行為よりも、それによって発話者が交替するという事象に注目するものであるため、「話者交替」の術語を採用する。

『家天草』は『天草版平家物語』、『狂言』は『狂言集』を指す。(以下同。)

また、本論の用例は「サテ」に注目するもので、「サテハ」、「サテモ」、「サテゾ」、「サテナム」、「サテコソ」などの「サテ」に副助詞、係助詞が付いた形式は考察の対象に含めないものとする。

(表1) 中古古典散文作品の「サテ」の用例数

位置 資料	地の文 ・文頭	地の文 ・文中	非地の文 ・文頭	非地の文 ・文中	計
『大和』	38	0	1	0	39
『平中』	35	5	4	0	44
『落窪』	4	1	16	3	24
『枕』	27	7	8	2	44
『源氏』	17	11	39	36	103
『堤』	0	1	5	0	6
『浜松』	2	1	4	5	12
計	123	26	77	46	272

(表2) 中世古典散文作品の「サテ」の用例数

位置 資料	地の文 ・文頭	地の文 ・文中	非地の文 ・文頭	非地の文 ・文中	計
『住吉』	28	0	3	2	33
『とりかへ』	0	1	4	11	16
『保元』	0	0	4	3	7
『平治』	4	0	1	0	5
『平家覚 一』	29	1	34	5	69
『平家天草』	44	3	27	2	76
『狂言集』	0	0	92	1	93
計	105	5	165	24	299

4. 4. 5. 「サテ」の分類

ここでまず、資料中に見られる「引き取りのサテ」も含めた「サテ」の用例について確認しておく。本論では、古典物語作品中の「サテ」を以下のように分類する。

①. 「サテ」前部に、その実態が語・文的要素として文中に示されている対象と、「サテ」後部との関係付けを行う「サテ」。(ここでは文中に示されている対象の部分に、波線を付して示す。以下同。)

①—A. 文中に置かれる「サテ」。

(4) 「雨いみじう降るをりに来たる人なむ、あはれなる。日ごろおぼつかなく、つらき事もありとも、さて濡れて来たらむは、憂き事もみな忘れぬべし」(『枕草子』第二七四段、425頁)

(5) さて少将わ今しばらくも念仏の功をも積みたうござれども、都に待つ人どもも、心もとなうござらうずるほどに、まづまかり上る：またこそ参らうずれと言うて、亡者にいとまごいをして、泣く泣くそこをたたれた。草のかげでもさこそ名残をしゅう思われつらう：さあれどもさてあらうずることでなければ、そこをたつて同じ三月の十九日に少将わ鳥羽え明かうつかれた。(『天草版平家物語』巻第一・第十一、79頁)

この「サテ」は副詞のようにはたらく。

①—B 1. 文頭に置かれる「サテ」。(この「文頭」とは、話者が交替する対話文の文頭以外の文頭を指す。)

(6) 「かれは、いとあやしき人の癖にて、文一くだりやりつるが、はづるるやうなければ人の妻、帝の御妻も持たるぞかし。さて身いたづらになりたるやうなるぞかし。」(『落窪物語』巻之一、93頁)

(7) 帝聞こしめして、「中納言は、いみじき姫を持ちたまふと聞きたり」と仰せあれば、やがて御請け申されつつ、かしづきたまふ。いよいよあたりも耀くほどにぞ見えたまひける。さてこの姫君、八つばかりにやならせたまふ時、母宮、例ならず悩みたまひけり。(『住吉物語』上巻、18頁)

この「サテ」は接続詞や副詞のようにはたらく。

①—B 2. 話者が交替する対話文の文頭に置かれる「サテ」。

(3・再掲) 「この鹿の鳴くは聞きたうぶや」といひければ、「さ聞きはべり」といらへりけり。男、「さて、それをばいかか聞きたまふ」といひければ、女ふといらへりけり。(『大和物語』一五八段、394頁)

(8) 「あれはいかなる鳥居やらん」と問ひ給へば、「春日大明神の御鳥井なり」と

申す。人多く群集したり。其中に法師の頸を、一つさしあげたり。「さてあのくびはいかに」と問ひ給へば、(『平家物語』覚一本、卷第三・無文、232頁) この「サテ」は、対話の話者の交替を表すマーカー（談話標識）のようにはたらく。

②「サテ」が指示する内容が「サテ」の前文脈に具体的に文や句、語などの形で認められない「サテ」。

②. -A. 「サテ」前部に、その実態が語的・文的な要素の形で文中に示されていない対象と、「サテ」後部との関係付けを行う「サテ」。(対象そのものではなく、物語自体が継続していることを表す「サテ」。)

(9) さて、この男、その年の秋、西の京極、九条のほどにいきけり。(『平中物語』三六段、522頁〈これは三六段の冒頭に置かれた「サテ」の例〉)

(10) 「侍共に矢一つ射かけ候はん」と申しければ、「年来の重恩を忘れて、今此有様を見はてぬ不当人をば、さなくともありなん」と宣へば、力およばでとどまりけり。「扱小松殿の君達はいかに」と宣へば、「いまだ御一所も見えさせ給ひ候はず」と申す。(『平家物語』覚一本、卷第七・一門都落、83頁)

この「サテ」は、文頭に置かれ、新たな物語、章段、話などが始まりを示すマーカーのようにはたらく。

②. -B. その他。感動詞のようにはたらく「サテ」。

この「サテ」は「さてさて」、「これはさて」、「さていかにせむ」、「まずはさて」、「さてこれわ」、「さてこれは」、「何がさて」などの連語の形式をとることもあり、文中で感動詞などとしてはたらく。

(11) 「男しもなむ仔細なきものははべめる」と申せば、残りを言はせむとて、「さてさてをかしかりける女かな」とすかいたまふを、心は得ながら、鼻のわたりをこつきて語りなす。(『源氏物語』帚木、86頁)

(12) 波多野、「尤もさこそ候はめ」とて、太刀を抜き、引きそばめて、近付きければ、少き者ども、太刀の影に驚きて、「これは、さて、実に失はんずるにや。暫し助けよや」とて、(『保元物語』下、義朝幼少の弟悉く失はるる事、357頁)

(表3) 中古散文作品の「サテ」の分類 (※1)、(※3)、(※4)

分類 資料	①			②-A	②-B
	A	B1	B2		
『大和』 全38例		36地頭 (※2)	1対頭	1地頭	
『平中』 全43例	1地頭 3地中	32地頭 1地中 1対頭	3対頭	2地頭	
『落窪』 全24例	1地中 2対中	2地頭 7対頭 1手頭	7対頭	2地頭 2対頭	
『枕』 全45例	8地中 1対中	27地頭 1対頭 1対中	6対頭	1対頭	
『源氏』 全104例	11地中 1対頭 18対中 18心中	17地頭 21対頭 2心頭	12対頭	3対頭	1対頭 (※5)
『堤』 例6例	1地中	3対頭	2対頭		
『浜松』 全12例	1地中 2対中 3心中	1地頭 1対頭 2手頭		1地頭 1対頭	
計	71	156	31	13	1
合計	272				

(表4) 中世散文作品の「サテ」の分類

分類 資料	①			②-A	②-B
	A	B 1	B 2		
『住吉』 全32例	2 対中	25 地頭	3 対頭	2 地頭	
『とりかへ』 全16例	1 地中 6 対中 5 心中	2 対頭	1 対頭	1 対頭	
『保元』 全6例	1 対中 1 心中	1 心頭		2 対頭	1 対中 (※6)
『平治』 全5例		4 地頭			1 対頭 (※7)
『平家覚一』 全69例	1 地頭 1 地中 2 対頭 5 対中	28 地頭 11 対頭	12 対頭	9 対頭	
『平家天草』 全88例	5 地中 1 対頭 1 対中	43 地頭 11 対頭	9 対頭	2 地頭 7 対頭	7 対頭 (※8) 2 対中 (※9)
『狂言集』 全237例		40 対頭 1 対中	68 対頭	14 対頭	110 対頭 (※10) 4 対中 (※11)
計	32	166	93	37	125
合計	453				

- (※1) (表3) (表4) 中では、「地頭」は【地の文・文頭】、「地中」は【地の文・文中】、「対頭」は【対話文・文頭】、「対中」は【対話文・文中】、「心頭」は【心内話文・文頭】、「心中」は【心内話文・文中】、「手頭」は【文(手紙)の文・文頭】、「手中」は【文(手紙)の文・文中】を指すものとする。
- (※2) 草子地・文頭の1例を含む。
- (※3) 数値は資料中に見られる用例数を表す
- (※5) 「さてさて」1例を指す。
- (※6) 「これはさて」1例。
- (※7) 「さていかにせむ」1例。
- (※8) 「さてさて」6例、「さてこれわ」1例。
- (※9) 「まずはさて」1例、「これはさて」1例。
- (※10) 「さてこれは」3例、「何がさて」23例、「さてさて」84例。
- (※11) 「何がさて」2例、「さてさて」2例。

前述したように、本論では(表3)、(表4)で①—B2に分類された「引き取りのサテ」に注目する。

4. 4. 6. 「引き取りのサテ」と疑問文

(表3)、(表4)で「引き取りのサテ」(①—B2)に分類された用例を稿末にまとめて示す。これを見ると、「引き取りのサテ」は、

- (13) そのほどに、この女は帰り来て、内裏にまゐりて、友だちどもに、志賀にまうでてありつるやうなどいひける、それを、この男ともものなどいひて知れるが、そのなかにありける、「さて、この男はたれとかいひつる」といひければ、(『平中物語』二五段、496頁)
- (14) 行綱ちかうより、小声になって申しけるは、「其儀では候はず。一向御一家の御上とこそ承り候へ」。「さてそれをば法皇もしろしめされたるか」。「子細にやおよび候。」(『平家物語』覚一本、巻第二・西光被斬、108頁)

などのように、疑問文に現れている例が目につく。そこで、「引き取りのサテ」と同じく「サテ」が文頭に置かれているという構文的な条件が同一である、①—B1、②に分類された「サテ」の用例についても調べ、「引き取りのサテ」と疑問文の相関について検証する。なおここで疑問文と考えるのは、「たれ(誰)」、「なに(何)」、「いつ」「どこ」「いづこ」「いづく」などの疑問詞、または「や」、「か」、「なう?」、「ぞ?」「の?」などの疑問の意味を表す助詞が文中に置かれている文とする。(表5)は、①—B1、①—B2、②の全用例文に占め

る疑問文の数である。

(表5) ①-B 1、①-B 2、②の全用例文に占める疑問文の数

	分類	①-B 1	①-B 2	②-A
中古	疑問文数	16 (※12)	24 (※13)	2
	全文数 (※16)	156	31	13
	割合 (%) (※15)	10.3	77.4	15.4
中世	疑問文数	22 (※14)	42	25
	全文数 (※16)	166	93	37
	割合 (%) (※15)	13.3	45.2	67.6

(※12) 反語8例を含む。

(※13) 反語2例を含む。

(※14) 反語3例を含む。

(※15) 小数点第2位以下を四捨五入した。

(※16) ①-B 1、①-B 2、②の各項目に分類された用例数(「サテ」が文頭の全用例数)を指す。

(表5)より、中古で77.4%、中世で45.2%と、中古、中世共に、①-B 1や②に比して、①-B 2に分類された、「引き取りのサテ」と疑問文に共起性があることが分かる。

次に、「引き取りのサテ」が文頭に置かれた疑問文、つまり(表5)で「疑問文」と考えた文に後続する文に注目する。通常、疑問文にはそれに対する応答文が組となって生じる。

(15) 男、「さて、それをばいかが聞きたまふ」といひければ、女ふといらへけり。われもしかなきてぞ人に恋ひられし今こそよそに声をのみ聞けと読みたりければ、限りなくめでて、(『大和物語』百五十八段、384頁)

(16) 「さてそれをば法皇もしろしめされたるか」。「子細にや及び候。成親卿の軍兵召され候も、院宣としてこそ召され候へ」。(『平家物語』覚一本、巻第二・西光被斬、108頁)

ここでは、このような疑問文と応答文の組が、①-B 1、①-B 2、②でそれぞれどの程度生じているかを検証する。なおここでいう疑問文と応答文の組とは、(15)、(16)の例に挙げたような、話し手の疑問文に対して、聞き手の返答が直接表されている例((16)など)や、聞き手が返答したという事態が述べられたり、聞き手による返答の和歌などが表されている例((15)など)の組を指す。

(表6)は、「引き取りのサテ」で始まる疑問文に対し、応答文が生じている割合を、さらに(表7)は本論で資料とした古典物語作品中に見られる疑問文に対し、応答文が生じている割合を示したものである。

(表6)「引き取りのサテ」で始まる疑問文に対し、応答文が生じている割合

	分類	①-B1	①-B2	②-A
中古	応答文が後続している疑問文数(※17)	7	22	1
	全疑問文数(※18)	16(※12)	24(※13)	2
	割合(%) (※15)	43.8	91.7	50.0
中世	応答文が後続している疑問文数(※17)	17	42	25
	全疑問文数(※18)	22(※14)	42	25
	割合(%) (※15)	77.3	100.0	100.0

(※12) 反語8例を含む。

(※13) 反語2例を含む。

(※14) 反語3例を含む。

(※15) 小数点第2位以下を四捨五入した。

(※17) 全疑問文数中のうち、応答文が後続している疑問文の数を指す。

(※18) (表5)で疑問文とした数を指す。

(表7) 本論で資料とした古典物語作品中に見られる疑問文に対し、応答文が生じている割合

中古	物語作品	大和	平中	落窪	枕	源氏	堤	浜松
	応答文が後続している疑問文数	48	46	364	102 (※19)	756	20	55
	全疑問文数	132	69	604	212 (※20)	2916	62 (※21)	260
	割合 (%)	36.4	66.7	60.3	48.1	25.9	32.3	21.2
中世	物語作品 (※22) (※23)	住吉	とり かへ	保元	平治	平・ 覚一	平・ 天草	狂言
	応答文が後続している疑問文数	70	68	45	30	300	148	676
	全疑問文数	121	308	99	99	672	295	741
	割合 (%)	57.9	22.1	45.5	30.3	44.6	50.2	91.2

(※19) 増補部分の3例を含む。

(※20) 増補部分の4例を含む。

(※21) 末尾断簡の1例を含む。

(※22) 『平家物語』覚一本は「灌頂巻」を含む。

(※23) 『狂言集』は「狸腹鼓」、「子の日」を含む。

(表7)において疑問文と考えるのは(表5)、(表6)と同様である。よって、「四位の少将とて、世にすぐれたる人おはしける。『いかで、思ふさまならんことを』とおぼしめしけれども」(『住吉物語』上巻、22頁)や、「四海浪静かにして、鳴鳳の声さだかなり。されば、誰の人かこの御位を傾くべきなれども、近衛院は第八の御弟、当腹の宮、愛子の道を受けさせましますよによって、(『保元物語』上、後白河院御即位の事、217頁)などはここでは疑問文とは考えない。

また、(表7)において疑問文と応答文の組と考えた例は、

(i) 御門「后にやありけむ」と問はせ給へば、中納言「さしもはべらじ。」(『浜松中納言物語』巻第三、266頁)

(ii) 使「いかなるぞ」と下衆女に問へば、女「上の、今宵、にはかに亡せたまひにければ、ものもおぼえたまはず。」(『源氏物語』蜻蛉、203頁)

(iii) 「主上はいづくにましますぞ」、「黒戸の御所に」(『平治物語』上、光頼卿参内の事^{付け}たり清盛六波羅上着の事、437頁)

などを指す。

(表6)より、中古で91.7%、中世で100.0%と、中古、中世共に、①—B1や

②に比して、①B-2に分類された、「引き取りのサテ」で始まる疑問文には応答文が後続する割合が高いことが確認できた。また、(表七)より「引き取りのサテ」が文頭に置かれていない疑問文は、本論で資料とした中古、中世の物語作品においては、応答文が後続している割合が「引き取りのサテ」が文頭に置かれた疑問文よりも低いことも確認できた。

疑問文と応答文は組を作って話を展開させる。これは疑問文全般に言えることであり、その疑問文の冒頭に「引き取りのサテ」が置かれているか否かとは別の問題である。しかし、それが疑問文の中でも「引き取りのサテ」が文頭に置かれている疑問文であることによって、その疑問文と疑問文前部の文中の対象とは関係付けが可能となる。「引き取りのサテ」は指示詞由来の語であるためである。

指示詞が話を関係付ける、つまり話の結束性や首尾一貫性⁸⁵を示すのに寄与することは、M. A. K. ハリデイとルカイヤ・ハサン (1997)、庵 (1996) にも言及がある。

M. A. K. ハリデイとルカイヤ・ハサン (1997) は、「(結束性)には文法的結束性と語彙的結束性の2つの種類がある。」(同・i)とし、文法的結束性を表す要素として指示詞を挙げる⁸⁶。また庵 (一九九六) は、指示詞について、「それ自体が自らの解釈を他の部分に依存し、それによりテキストに結束性 (cohesion)をもたらず指示詞」(同脚注9・41~42頁)と説明する。指示詞は本来、直示用法の場合であればその現場に、照応用法の場合であればその前文脈にその指示内容が示されているのであり、それに由来した「引き取りのサテ」は、「引き取りのサテ」が置かれた文の前部にその「サテ」で指示される対象が示されているこ

⁸⁵ M. A. K. ハリデイとルカイヤ・ハサン (1997) は結束性について、「結束性は、テキストの1つの部分と他のもう1つの部分との間に存在する連続性を表している。(略)結束性をもたらず連続性は、ごく一般的なことばで言えば、談話のそれぞれの段階で、先行部分との接触点を示すことにある。このことの意義は、そのような接触点が存在するという単純な事実の中に見いだされる。」(392頁)と定義する。また、「首尾一貫性」については、「首尾一貫性は、内容 (CONTENT) の点だけではなく、英語に備わっている意味手段の中からトータルに選択している点にも見いだされる。そういう意味手段の中には、さまざまな対人関係的 (社会的・表現的・意欲的) な要素—たとえば、ムード、モダリティー、強調、その他、話し手が発話場面へ介入する際のさまざまな形式が含まれる。(略)テキストとは、次の2点で首尾一貫性のある談話の一節である。1つ、テキストは、場面の脈絡に関して首尾一貫性があり、したがって使用域においても整合性がある。2つ、テキストは、それ自体に関して首尾一貫性があり、したがって結束的である。」(29頁)と述べる。この言及を踏まえて本論では首尾一貫性について、内容と形式の両面において整合性や共有性が見いだせる性質、と考える。なお、M. A. K. ハリデイとルカイヤ・ハサンは英文について考察対象としているため、英文で書かれた内容を持つまとまりを指して「テキスト」と言っているが、これは本稿で考察対象としている和文物語作品の「話」と考えて論考することとする。

⁸⁶ M. A. K. ハリデイとルカイヤ・ハサン (一九九七・i~ii) は文法的結束性を表す要素として、(1) 指示詞 (人称詞、指示詞、比較語)、(2) 代用 (名詞の代用、動詞の代用、節の代用)、(3) 省略 (名詞句の省略、動詞句の省略、節の省略)、(4) 接続 (付加的、反意的、因果的、時間的) な要素があり、語彙的結束性を表す要素として、(1) 再叙 (同一語、同意語、上位語のそれぞれによる再叙) (2) コロケーションを挙げる。

とによって、前部分との結束性や首尾一貫性が、「サテ」がない場合よりもより顕示的になる。

4. 4. 7. 「引き取りのサテ」と話者交替

「引き取りのサテ」の文(①—B 2)は疑問文と共起し、またその疑問文にはそれに対する応答文が後続する割合が、同様に「サテ」を文頭に置く文(①—B 1や②)や「サテ」を文頭に置かない疑問文よりも高いことが分かった。つまり、その結果ここに「引き取りのサテ」を文頭に置く疑問文と応答文の組が生じているといえる。この意味を考えてみたい。

「引き取りのサテ」は話者が交替する対話文の文頭に置かれる「サテ」を指す。つまり、「引き取りのサテ」が表れている段階で既に一回目の話者交替が生じているのである。そしてさらにその「引き取りのサテ」が、話し手から聞き手に対して問いを発することで話し手から聞き手に発話の権利の譲渡が起こり、ここで二回目の話者交替が生じる。疑問文はそれを承けた聞き手に問いに対する答えを要請するという意義を持つことから、疑問文と共起する確立が高いことにより、「引き取りのサテ」で始まる疑問文を承けた聞き手はそれに対して答える文である応答文を発する。ここに疑問文と応答文の組が成立し、話し手と聞き手のやりとりによるテンポの良い談話が構成される⁸⁷。

さらにこの組を成す疑問文に「引き取りのサテ」が文頭に置かれていることによって「引き取りのサテ」の前部と後部の談話の結束性や首尾一貫性が、「サテ」がない場合よりもより顕示的になる。つまり、「引き取りのサテ」によって、「サテ」の実態を示す「サテ」前部の文と、「引き取りのサテ」を文頭に置く疑問文と、その疑問文に対する応答文といった広い範囲に結束性や首尾一貫性を示した上で、話し手と聞き手のやりとりによるテンポの良い談話を展開させることが可能となると考えられる。

4. 4. 8. まとめ

以上、中古、中世に成立したとされる古典散文作品で、「サテ」前部に、その実態が語・文的な要素として文中に示されている対象と、「サテ」後部との関係付けを行う「サテ」の

⁸⁷ このような組についてメイナード(1993)は「隣接ペア(adjacency pairs)」とする。メイナードは、「隣接ペア(adjacency pairs)」とは、「問い」—「答え」、「挨拶」—「挨拶」、「申し出」—「受容」、「陳謝」—「軽い否定」のような、一対になった発話の組合せのことである。ある話者が次の話者を選ぶ方法の一つであり、「話者交替ルール」が会話の各部に適用される仕組みになっていること(local management organization)と深くかかわっている。」(同・14頁)と述べる。

うち、話者が交替する対話文の文頭に置かれる「サテ」を「引き取りのサテ」として、その機能を考察した。本章では、

- ・「引き取りのサテ」と疑問文には共起性がある。

- ・「引き取りのサテ」が文頭に置かれた疑問文には応答文が後続する割合が高く、「サテ」で始まる疑問文に対するその割合は、中古で91.7%、中世で100.0%である。

- ・一方、「引き取りのサテ」が文頭に置かれない疑問文に応答文が後続する割合は、中古で21.2~66.7%、中世で22.1~91.2%と、「引き取りのサテ」が文頭に置かれた疑問文よりも応答文が後続する割合が低いことが確認できた。

- ・これらの結果より、「引き取りのサテ」を文頭に置いた疑問文は、「引き取りのサテ」以外の「サテ」が文頭に置かれた文や、「サテ」が文頭に置かれない疑問文よりも、応答文が後続する割合が高いと言える。つまり、「引き取りのサテ」が文頭に置かれた疑問文と応答文は組をつくる。

- ・さらにこの組を成す疑問文に「引き取りのサテ」が文頭に置かれていることによって「引き取りのサテ」の前部と後部の談話の結束性や首尾一貫性が、「サテ」がない場合よりもより顕示的になり、「サテ」の実態を示す「サテ」前部の文と、「引き取りのサテ」を文頭に置く疑問文と、その疑問文に対する応答文といった広い範囲に結束性や首尾一貫性を示した上で、話者交替によって生じる話し手と聞き手のやりとりによるテンポの良い談話を展開させることが可能となると考えられる。

これらについて述べた。

〔「引き取りのサテ」用例〕

※用例の傍線は論者による。

・中古

- (1) 男、「さて、それをばいかが聞きたまふ」といひければ、女ふといらへけり。(うた) われもしかなきてぞ人に恋ひられし今こそよそに声のみ聞け と読みたりければ、限りなくめでて、この今の妻をば送りて、もとのごとなむすみわたりける。(『大和物語』一五八段、394 頁)
- (2) そのなかになりける、「さて、この男はたれとかいひつる」といひければ、名をいひければ、このあしと思ひける女、「あれはさこそあれ。それが憂きこと」とて、(『平中物語』二五段、496 頁)
- (3) かくいひつつ、「さて、いかで。ありしやうなることをぞよき」といへど、「ここにていかが思はむ。いま、ほかにて」とぞ、いひかはしける。(『平中物語』二九段、511 頁)
- (4) 「この、のぞきたまへる人は、この、南に宿りたまへるか」と問ふ。「さなり」「さて、その人ぞ」など問へば、(『平中物語』三六段、526 頁)
- (5) 「さてあらぬ時は、よくやは聞こえたまひてや。上の御心なつつみきこえたまひそ」と言へど、いらへもしたまはず。(『落窪物語』、卷之一、24 頁)
- (6) 「さて、それがいつかありきしたる。旅にては、縫物やあらむとする。なほ、ありかせそめじ。うちはめて置きたるぞよき」とて、思ひかけでやみたまひぬ。(『落窪物語』、卷之一、30 頁)
- (7) 「よろこびたまひて、さざめき騒ぎたまひて、文やらせたまふめり」と言へば、「いとうれしく。さて」と言ひて、いとよくほほゑみたるまみ、口つきの、灯のあかきに映えて、にほひたるものから、恥づかしげなり。(『落窪物語』 卷之一、89 頁)
- (8) 静心なくて、「さて、いつか」と言へば、「今宵ぞかし」と言へば、「今日は御忌日なるを。何か疑ひあらむ」と言へば、(『落窪物語』 卷之二、120 頁)
- (9) 「心地はいとあし、この翁の近づきたるになむ、いとわびしき、その遣戸掛けこめて、な入れそ」とのたまへば、「さて腹立ちなむ。なほなごめさせおはしませ。」(『落窪物語』 卷之二、125 頁)
- (10) 「誰かはただ今、『去りたまへ』『捨てたまへ』と聞こゆる」「さて、さにはあらずや。めあはせたてまつりたまはば」「いで、あなかしがまし。取り出でて、さまあしからむか。などかおどろおどろしうは言ふべからむは。かたへは妻を思ふなめり」(『落窪物語』 卷之二、193 頁)
- (11) 「はじめてやんごとなくのみ思ほしまさりけむ」とのたまへば、殿いとよくほほゑみて、「さて、そらごとは」とのたまひて、近う寄りて、「かの『落窪』の、言ひたてられて、さいなまれたまひし夜こそ、いみじき志はまさりしか。」(『落窪物語』 卷之四、316 頁)
- (12) 「さて、齒ぐきは、皮のむけたるにやあらむ」とて、(『堤中納言物語』「虫めづる姫君」410 頁)
- (13) 北の方、「さて、斎宮をば、何とか定めきこえたまふ」と言へば、小命婦の君、「をかしきは、みな取られたてまつりぬれば、」(『堤中納言物語』「はなだの女御」475 頁)
- (14) 三位中将、「いとなほき木をなむ押し折りためる」と聞こえたまふに、うち笑ひたまへば、みな何となくさと笑ふ声聞えやすらむ。中納言、「さて呼び返さざりつるさきは、いかが言ひつる。これやなほしたる定」と問ひたまへば、「久しう立ちてはべりつれど、ともかくも侍らざりつれば、(『枕草子』第三三段、81 頁)

- (15) 「改まらざるものは心なり」とのたまへば、「さて『はばかりなし』とは、何を言ふにか」とあやしめれば、笑ひつつ、「仲よしなども人に言はる。」(『枕草子』第四七段、106頁)
- (16) 「この事どもよりは、昼斎信がまゐりたりつるを見ましかば、いかにめでまどはましとこそおぼえつれ」と仰せらるるに、「さて、まことに常よりもあらまほしうこそ」など言ふ。「まづその事をこそは啓せむと思ひてまゐりつるに、物語のことにまぎれて」とて、(『枕草子』第七九段、144頁)
- (17) 「手を打ちてさわぎはべりつる」など言ひさわぐに、内より仰せ言あり。「さて雪は今日まででありや」と仰せ言あれば、いとねたうくちをしけれど、「『年の内、ついたちまでだにあらじ』と人々の啓したまひしに、(『枕草子』第八三段、163頁)
- (18) 「雨降りぬ」と言へば、いそぎて車に乗るに、「さてこの歌は、ここにてこそよまめ」など言へば、「さはれ、道にても」など言ひて、みな乗りぬ。(『枕草子』第九五段、186頁)
- (19) 藤侍従の、一条の大路走りつる語るにぞ、みな笑ひぬる。「さていづら、歌は」と問はせたまへば、かうかうと啓すれば、「くちをしの事や。」(『枕草子』第九五段、189頁)
- (20) 「幼き者などもありしに思ひわづらひて、撫子の花を折りておこせたりし」とて涙ぐみたり。「さて、その文の言葉は」と問ひたまへば、「いさや、ことなることもなかりきや。」(『源氏物語』帚木、82頁)
- (21) 渡殿の戸口に寄りみたまへり、いとかたじけなしと思ひて、「例ならぬ人ははべりてえ近うも寄りはず、さて今宵もやかへしてんとする。いとあさましうからうこそあべけれ」とのたまへば、「などでか。あなたに帰りはべりなば、たばかりはべりなん」と聞こゆ。(『源氏物語』空蟬、122頁)
- (22) 「おのづからもの言ひ漏らしつべき眷属もたちまじりたらむ。まづこの院を出でおはしませぬ」と言ふ。「さて、これより人少なる所はいかでかあらん」とのたまふ。「げにさぞはべらん。」(『源氏物語』夕顔、171頁)
- (23) 「しか。一昨年春の春ぞものしたまへりし。女にていとらうたげになん」と語る。「さていづこにぞ。人にさとは知らせで我に得させよ。あとはかなくいみじと思ふ御形見に、いとうれしかるべくなん」とのたまふ。「かの中將にも伝ふべけれど、言ふかひなきかごと負ひなん。」(『源氏物語』夕顔、186頁)
- (24) 「後の世の勤めもいとよくして、なかなか法師まさりしたる人になんはべりける」と申せば、「さて、そのむすめは」と問ひたまふ。「けしうはあらず、容貌心ばせなどはべるなり。(『源氏物語』若紫、203頁)
- (25) 「いとすきたる者なれば、かの入道の遺言破りつべき心はあらんかし」、「さてたたずみ寄るならむ」と言ひあへり。「いで、なにしに。さいふとも田舎びたらむ」と言ひあへり。(『源氏物語』若紫、204頁)
- (26) 「御返りはさらに。聞こえさせたまふをりばかりなむ。それをだに、苦しいことに思いたる」と聞こゆ。「さてこの若やかに結ばほれたるは誰がぞ。いといたう書いたる気色かな」とほほ笑みて御覧ずれば、「かれは、執念うとどめてまかりにけるこそ。」(『源氏物語』胡蝶、179頁)
- (27) いときよげにものものしく、はなやかなるさまして、おぼろけの人見えにくき御気色をも見知ら

ず、「さて、いつか女御殿には参りはべらんずる」と聞こゆれば、「よろしき日などやいふべからむ。よし、ことごとしくは何かは。さ思はれば、今日にても」と、のたまひ棄てて渡りたまひぬ。

(『源氏物語』常夏、246頁)

- (28) 宮いと切にかしと思いたり。さればよと御気色を見て、いとど御心動きぬべく言ひつづけたまふ。「さて、そのありけん返り事は、などか見せたまはざりし。まろならましかば」と恨みたまふ。「さかし。いとさまさま御覧ずべかめる端をだに見せさせたまはぬ。(『源氏物語』橋姫、154頁)
- (29) あまりおどろおどろしきことと耳とまりける。「さて、かの北の方にはかくとものしつや。心ざしことに思ひはじめたまふらんに、ひき違へたらむ、ひがひがしくねぢけたるやうにとりなす人もあらん。いさや」と思したゆたひたるを、「何か。北の方も、かの姫君をばいとやむごとなきものに思ひかしづきたてまつりたまふなり。」(『源氏物語』東屋、31頁)
- (30) 「わがもとにあれかし。あなたももて離るべくやは」とのたまへば、「さてさぶらはんにつけても、もののみ悲しからんを思ひたまへれば、いま、この御はてなど過ぐして」と聞こゆ。「またも参れ」など、(『源氏物語』蜻蛉、229頁)
- (31) 「一昨年のおも、ここにはべる人の子の、二つばかりにはべしをとりて参で来たりしかども、見驚かずはべりき」「さてその児は死にやしにし」と言へば、「生きてはべり。」(『源氏物語』手習、283頁)

・中世

- (1) 平判官康頼、参りて、「ああ、あまりに平氏のおほう候に、もて酔ひて候」と申す。俊寛僧都、「さてそれをばいかが仕らむずる」と申されければ、西光法師、「頸をとるにしかじ」とて、瓶子のくびをとってぞ入りにける。(『平家物語』覚一本、巻第一、鹿谷、72頁)
- (2) 行綱ちかうより、小声になって申しけるは、「其儀では候はず。一向御一家の御上とこそ承り候へ。」「さてそれをば法皇もしろしめされたるか。「子細にや及び候。」(『平家物語』覚一本、巻第二、西光被斬、108頁)
- (3) 人多く群集したり。其中に法師の頸を、一つさしあげたり。「さてあのくびはいかに」と問ひ給へば、「是は平家太政大臣入道殿の御頸を、悪行超過し給へるによって、当社大明神の、召しとらせ給ひて候」と申すとおぼえて夢うちさめ、(『平家物語』覚一本、巻第三、無文、232頁)
- (4) 「『文覚無上の願をおこして、勇猛の行をくはたつ。ゆいて力をあはすべし』と、明王の勅によって来れるなり」とこたへ給ふ。文覚声をいからして、「さて、明王はいづくにましますぞ。「都率点に」とこたへて、雲井はるかにあがりたまひぬ。たなごころをあはせてこれを拝み奉る。(『平家物語』覚一本、巻第五、文覚荒行、379頁)
- (5) 「『此使にたぶべし』と書け」といひければ、言ふままに書いて、「さて、誰どのへと書き候はうぞ。「清水の観音房へと書け。」(『平家物語』覚一本、巻第五、文覚被流、387頁)
- (6) 「閻魔の庁より、平家太政入道殿の御迎に参つて候」と申す。「さて其礼は何といふ札ぞ」と問はせ給へば、「南閻浮提金銅十六丈の盧舎那仏焼きほろぼし給へる罪によって無間の底に墮ち給ふべきよし閻魔の庁に御さだめ候が、無間の無をば書かれて、間の字をばいまだ書かれぬなり」とぞ申しけ

る。(『平家物語』 覚一本、巻第六、入道死去、450 頁)

- (7) 「かかる忘れがたみを今まで見ざりける事よ」とて、御涙せきあへさせ給はず。浄土寺の二位殿、そのときはいまだ丹後殿とて御前に候はせ給ふが、「さて御ゆづりは、此宮にてこそわたらおはしましさぶらはめ」とせ申させ給へば、法皇、「子細にや」とぞ仰せける。(『平家物語』 覚一本、巻第八、山門御幸、101 頁)
- (8) 「其上城のうちにはおとしあなをもほり、ほしをも植ゑて待ち参らせ候らん」と申す。「さてさま(やう)の所は鹿はかよふか」。「鹿はかよひ候。(『平家物語』 覚一本、巻第九、老馬、204 頁)
- (9) 『御兄弟の御なかには、備中守殿ばかり一谷にてうたれさせ給ひて候』と、申す者にこそあひて候ひつれ。『さて小松三位中将殿の御事はいかに』と問ひ候ひつれば、『それはいくさ以前より、大事の御いたはりとして、八島に御渡り候間、此たびはむかはせ給ひ候はず』(『平家物語』 覚一本、巻第十、首渡、260 頁)
- (10) 「もし中将の君達とや人の申しさぶらひけん、昨日武士のとり参らせてまかりさぶらひぬるなり」と申す。「さて武士をば誰といひつる」。「北条とこそ申しさぶらひつれ」。(『平家物語』 覚一本、巻第十二、六代、467 頁)
- (11) 「或は念仏申す者も候、或は涙をながす者も候」。「さて此子は何としてあるぞ」と宣へば、「人の見参らせ候ときは、さらぬやうにもてないて、御数珠をくらせおはしまし候が、(『平家物語』 覚一本、巻第十二、六代、471 頁)
- (12) 「よき敵三人に逢うたる心地こそし候ひつれ」と申す。「さて正明をばいかがと思しめされ候ひつる」と申せば、「それはとられなんうへは」とぞ宣ひける。(『平家物語』 覚一本、巻第十二、泊瀬六代、483 頁)
- (13) その瀬に身をもなげられなんだ心中わ、まことにをろかなことござった。右馬。さてこれわまことにあわれなことであったなう？ して少将や、康頼わそのまのぼられてあったか？ 喜一。そのをことぢや：この人々わ鬼界が島を出て、(『天草版平家物語』 巻第一、第十一、少将、康頼みやこえ帰らるる道すがらのこと、77 頁)
- (14) 平家の末わなんとあらうか？ 恐ろしいことぢや。右馬。さて誠に誰にも、かれにも清盛わ難義をかけた人ぢやの？ またその祇王がことをも聞きたい。お語りあれ。喜一 長いことなれども、申さうず。(『天草版平家物語』 巻第二、第一、祇王清盛に愛せられたこと：同じく仏という白拍子に思いかえられてのち、親子三人尼になり、世を厭うたことと、またその仏も尼になったこと、93 頁)
- (15) まづ涙を流いてそののちわうちとけて物語をめされて仰せらるるわ：さて頼朝わ勅勘を許されいでわ、何として謀叛をも起さうぞとあったれば、それわやすい事ござる(『天草版平家物語』 巻第二、第九、文覚のすすめによって頼朝の謀叛ををこさせられたことと、平家わまたこれを平げうとて、討手をくだされたこと、145 頁)
- (16) 西海の旅の空までも吹く風の声、立つ波の音につけても、ただ今の聞くやうに思われたと、聞こえてござる。右馬。さて平家の一門のうちに都にとどまられたわなかつたか？ 喜一 そのをことぢや(『天草版平家物語』 巻第三、第八、平家一門わ都を落ちらるるそのうちに池の大納言殿わ都に

- とどまられたこと：同じく福原を立たるとて、一門の人々名残を惜しまれたこと、187頁)
- (17) 高倉の院の幼いを時にそつとも違わぬと仰せられて、を涙を流させられた。そこに丹後殿と申した女房衆がいられたがこれを見まらして、さてを譲りわこの宮でこそござらうずれと申されたれば、法皇子細にも及ばぬことちやと仰せられた。(『天草版平家物語』巻第三、第九、法皇鞍馬の寺から比叡の山へ還御あったことと、平家の西国へ落ちられてからのこと、199頁)
- (18) 源氏どもに破られて、屋島へ渡らせられたと申す。さて三位の中將わ何とと、問いまらしたれば、その日の軍以前に、大事のをいたわりで屋島へ渡らせられたによって、今度のをことわ軍にわあわせられぬとこそ申してござれと申せば(『天草版平家物語』巻第四、第十、都で平家の一門の首を渡したることと、三位の中將夫婦の沙汰、287頁)
- (19) 首をはしようと思せば、申すまでもなうやがて賜わつたれば、六条河原で切って、緒方わかいがいしゅう頼まれたと申す。右馬、さてついにわ兄弟のを仲なんとなつたぞ?喜一 義経わ院の御所へ参つて、大蔵卿をもって申されたわ：義経こそ鎌倉から討たれうずるでござる。(『天草版平家物語』巻第四、第二十五、義経の都を落ちられたこと：並びに北条の上洛のこと、379頁)
- (20) 小松の三位中將殿の若君今年わ十二にならせらるるが、よにうつくしゅうござるを昨日武士に捕られてござる：あまりいとうしゅうござれば、請い取つてを弟子にさせられいかしと、申せば：文覚さて一定この山に置かせられうか?なかなかを命さえ助かせられれば、聖の御坊のをままと申した。(『天草版平家物語』巻第四、第二十六、六代を北条召しとつてのち、文覚わびことによつて頼朝放免せられたこと、386頁)
- (21) 明日こそまかりくだりまらすれとて、念仏を申すもござり、そばに向いて涙ぐむ者もござると申せば：さて六代わなんとあるぞと、仰せらるれば：人の見まらす時わ、数珠つまぐらせられ、さらぬやうにもてなさせらるるが、(『天草版平家物語』巻第四、第二十六、六代を北条召しとつてのち、文覚わびことによつて頼朝放免せられたこと、389頁)
- (22) 御前なる人々、「いなや、この昼、世に失せたまへるとののしる大將殿こそこれにおはしましつれ」と言ふに、あやしあやしと聞きたまひて、うちほほ笑みて、「さて、さて」と問ひたまへば、「狩装束にてあの小柴垣のもとにこそ立ちたまへりつれど、わづらはしさに音もしはべらざりつれば、立ちわづらひて帰りたまひぬ」と言ふに、(『とりかへばや物語』巻第三、353頁)
- (23) 喜びて、白き桂一襲、「三の君の」とて賜ひぬれば、「さて、少將殿には、もとの御心ざしの御方とこそ申しはべらめ」と申せば、「よくのたまひたり。そのよしを」とて、(『住吉物語』上巻、30頁)
- (24) 中納言殿あきれつつ、「こは何ごと」と問ひたまへば、「申し出づるにつけても、心憂し」、「さて何ごと」と問ひたまへば、「六角堂の別当とかや言ふ法師、忍び姫君のもとへ通ひけること、さらに知らず。(『住吉物語』上巻、64頁)
- (25) 中納言、「などか、これを言はずあるらん」と嘆きたまふ。「さて昨夜、この東の妻戸に御車のさぶらふを、御方々の人、御参りと思ひて、目もとどめて見はべらずさぶらひし。」(『住吉物語』上巻、95頁)

※『狂言集』の用例(六八例)は紙幅の都合で省略する。

4. 5. 中古中世散文作品における転換の「サテ」について —接続詞の「サテ」に向かうものとしての—

4. 5. 1. はじめに

本章と次章では、「サテ」の前部に「サテ」が指示する具体的な内容が見られない、その前後部で話題が変わる位置に現れる「サテ」に注目してこのような用法を持つ「サテ」を『差し込みのサテ』と名付け、その機能を考察する。この『差し込みのサテ』は話題転換の位置に現れ、接続詞的用法を以て文中ではたらくものと、話し手の感動や情意を表して、感動詞的用法を以て文中ではたらくものがあり、本章では前者を、次章では後者を取り上げる。

本章では、『差し込みのサテ』のうち、その前部と後部に直接的な事態や人物などの関わりのない文脈どうしを関係付ける接続詞的な用法を示す「サテ」を『話題転換のサテ』として取り上げる。そして、そのような「サテ」が古典散文作品中の地の文において話題が転換する位置に置かれていること、またそのような「サテ」が、中古の手紙文（特に『うつほ物語』中の手紙文）中から既に見られ、その後中古から中世にかけて物語の地の文中でも見られるようになったこと、このような話題転換の用法は、「手紙文」という書き手と読み手が確定している制限のある言語環境、別の言い方をすればそれが“一つの手紙”中の文として物理的に限りのある空間に記載された文であること、「ある特定の書き手からある特定の読み手への伝達内容がそこに記載されている」という環境の中で記された文であることが起因して、限られた空間（手紙の書面）にいくつかの複数の話題について連続する形で文を書き連ねる必要があることから生じた可能性があることについて述べる。

4. 5. 2. 先行研究と問題の所在

中古の「サテ」を扱った先行研究には西田（2001）や岡崎（2006）、（2008）、（2010）、（2011）、（2013）などがある。この時期の「サテ」は副詞的用法と接続詞的用法の両用法を以て散文作品中ではたらいっているが、西田（2001）は『源氏物語』地の文の「サテ」の用法について「転換の用法が用いられることはなかった。これは、基本的に「そのころ」によって示されており、「さて」は前文を承けて後文と結び付ける用法に限定されている。」（西田同・138頁）、「さて」は、語り出しや転換の用法は（ママ）、当時の一般的な用法として、会話文には使用されるものの、物語の語りを構成する地の文では、そのように用いられることはない。」（西田同・137～138頁）とする。

また岡崎（2006）、（2008）、（2010）、（2011）、（2013）は中古以降の「サテ」についてそ

の用法の通時的変化を統計的に扱っており、特に岡崎（2008）は『源氏物語』を中心に「サテ」の用法を〔Ⅰ副詞的〕、〔Ⅱ接続詞的 A 条件〕・〔Ⅱ接続詞的 B 列叙・転換〕・〔Ⅱ接続詞的 C 行動〕、〔Ⅲ感動詞的〕に分類しており、『源氏物語』では〔Ⅰ副詞的〕用法の「サテ」が地の文 25 例、会話文 22 例（合計で計 47 例、「サテ」全体の 44%）、接続詞的用法の「サテ」が地の文で 27 例、会話文で 33 例（合計で 60 例、「サテ」全体の 56%）、〈その内訳は、〔Ⅱ接続詞的 A 条件〕の「サテ」が地の文で 10 例、会話文で 9 例（合計で 19 例、「サテ」全体の 18%）、〔Ⅱ接続詞的 B 列叙・転換〕の「サテ」が地の文で 17 例、会話文で 24 例（合計で 41 例、「サテ」全体の 38%）、〔Ⅱ接続詞的 C 行動〕の「サテ」が地の文で 0 例、会話文で 0 例（合計で 0 例、「サテ」全体の 0%）あることを示す（岡崎 2008・197 頁表一、表二）。ここで岡崎は『源氏物語』中の「サテ」に転換の用法を以てはたらく例が 41 例（「サテ」全体の 38%）あるとする。

西田（2001）は『源氏物語』の「サテ」について転換の用法を以てはたらく例は地の文には見えず会話文には使用されていたと述べ、岡崎（2008）は地の文でも会話文でも見られたと述べており、両者の主張は異なる。しかし、岡崎の分類は上記のとおり〔Ⅱ接続詞的 B 列叙・転換〕という項目であり列叙と転換の用法をもつ例の合計を見ての結論であり、また両者の述べる転換の意味の定義が西田は「新しい話を語り出す際の決まり文句とも言えるべき例」（西田同・134 頁）、「それまでの文章の流れとは違った話を取り上げる際に用いられる」（同・135 頁）というものであり、岡崎は「トコロデ」とかなり近い働きをしているもの」（岡崎（2008）・193 頁）と、若干異なり見せていることもあり、これについては転換の意味を改めて定義した上で再考する余地があると考えられる。また、二者の両論とも「サテ」の用法について、通時的に副詞的用法、接続詞的用法、感動詞的用法（西田は「平安時代の和文において、指示語「さて」には、副詞的用法と接続詞的用法の二つの用法が見られる。」（西田（2001）・127 頁）とし、岡崎は、中古の感動詞的用法は「サテサテ」等の例では見られるが「サテ」のみの例では見られない（岡崎（2008）・197～199 頁、表一～四）ことを述べている。）の三用法の通時的な変化について論じてはいるが、なぜそのような用法の変化が起こったかについては特に述べていない。

そこで本章では、①古典散文作品中の「サテ」の用例中における『話題転換のサテ』の位置付け。②『話題転換のサテ』が発生した経緯。この二点について論じることとする。

なお、「サテ」の感動詞的用法については次章で扱うため、本章では感動詞的用法については用法の項目としてのみ扱うこととしたい。

4. 5. 3. 『差し込みのサテ』について—「サテ」の用例数—

まず、古典散文作品中の「サテ」の用例数を確認する。

（表 1）は本章で資料とした中古の、（表 2）は同中世の古典散文作品に見られる「サテ」

の用例数である。用例は「サテ」が現れる文中の位置の別により、【地の文・文頭】、【地の文・文中】、【非地の文・文頭】、【非地の文・文中】の別に示す。ここで【非地の文】とは、【対話文】、【心内話文】【文（手紙）の文】を指すものとする。

資料名は表中では略して示し、『大和』は『大和物語』、『平中』は『平中物語』、『落窪』は『落窪物語』、『枕』は『枕草子』、『源氏』は『源氏物語』、『堤』は『堤中納言物語』、『浜松』は『浜松中納言物語』、『住吉』は『住吉物語』、『とりかへ』は『とりかへばや物語』、『保元』は『保元物語』、『平治』は『平治物語』、『平家覚一』は『平家物語』・覚一本、『平家天草』は『天草版平家物語』、『狂言』は『狂言集』を指す。（以下同。）

また、本論の用例は「サテ」に注目するもので、「サテハ」、「サテモ」、「サテゾ」、「サテナム」、「サテコソ」などの「サテ」に副助詞、係助詞が付いた形式は考察の対象に含めないものとする。

(表1) 中古散文作品中の「サテ」の用例数

位置 資料	地の文 ・文頭	地の文 ・文中	非地の文 ・文頭	非地の文 ・文中	計
『大和』	38	0	1	0	39
『平中』	35	5	4	0	44
『落窪』	4	1	16	3	24
『枕』	27	7	8	2	44
『源氏』	17	11	39	36	103
『堤』	0	1	5	0	6
『浜松』	2	1	4	5	12
計	123	26	77	46	272

(表2) 中世散文作品中の「サテ」の用例数

位置 資料	地の文 ・文頭	地の文 ・文中	非地の文 ・文頭	非地の文 ・文中	計
『住吉』	28	0	3	2	33
『とりかへ』	0	1	4	11	16
『保元』	0	0	4	3	7
『平治』	4	0	1	0	5
『平家覚一』	29	1	34	5	69
『平家天草』	44	3	27	2	76
『狂言集』	0	0	92	1	93
計	105	5	165	24	299

4. 5. 4. 「サテ」の分類

ここでまず「サテ」の用例について確認しておく。本論では、古典散文作品中の「サテ」を以下のように分類する。

①. 「サテ」前部に、その実態が語的・文的な要素として文中に示されている対象と、「サテ」後部との関係付けを行う「サテ」。(ここでは文中に示されている対象の部分に、波線を付して示す。以下同。)

①—A. 文中に置かれる「サテ」。

(1) 「雨いみじう降るをりに来たる人なむ、あはれなる。日ごろおぼつかなく、つらき事もありとも、さて濡れて来たらむは、憂き事もみな忘れぬべし」(『枕草子』第274段、425頁)

(2) さて少将わ今しばらくも念仏の功をも積みたうござれども、都に待つ人どもも、心もとなうござらうずるほどに、まづまかり上る：またこそ参らうずれと言うて、亡者にいとまごいをして、泣く泣くそこをたたれた。草のかげでもさこそ名残をしゅう思われつらう：さあれどもさてあらうずることでなければ、そこをたって同じ三月の十九日に少将わ鳥羽え明かうつかれた。(『天草版平家物語』巻第1・第11、79頁)

この「サテ」は副詞のようにはたらく。

①—B 1. 文頭に置かれる「サテ」。(この「文頭」とは、話者が交替する対話文の文頭以外の文頭を指す。)

(3) 「かれは、いとあやしき人の癖にて、文一くだりやりつるが、はづるるやうなければ人の妻、帝の御妻も持たるぞかし。さて身いたづらになりたるやうなるぞかし。」(『落窪物語』巻之一、93頁)

(4) 帝聞こしめして、「中納言は、いみじき姫を持ちたまふと聞きたり」と仰せあれば、やがて御請け申されつつ、かしづきたまふ。いよいよあたりも耀くほどにぞ見えたまひける。さてこの姫君、八つばかりにやならせたまふ時、母宮、例ならず悩みたまひけり。(『住吉物語』上巻、18頁)

この「サテ」は接続詞や副詞のようにはたらく。

①—B 2. 話者が交替する対話文の文頭に置かれる「サテ」。(『引き取りのサテ』)

(5) 「この鹿の鳴くは聞きたうぶや」といひければ、「さ聞きはべり」といらへりけり。男、「さて、それをばいかが聞きたまふ」といひければ、女ふといらへりけり。(『大和物語』158段、394頁)

(6) 「あれはいかなる鳥居やらん」と問ひ給へば、「春日大明神の御鳥井なり」と申す。

人多く群集したり。其中に法師の頸を、一つさしあげたり。「さてあのくびはいかに」と問ひ給へば、(『平家物語』覚一本、巻第三・無文、232頁)

この「サテ」は、対話の話者の交替を表すマーカー（談話標識）のようにはたらく。

②「サテ」が指示する内容が「サテ」の前文脈に具体的に文や句、語などの形で認められない「サテ」。(『差し込みのサテ』)

②. -A「サテ」前部に、その実態が語的・文的な要素の形で文中に示されていない対象と、「サテ」後部との関係付けを行う「サテ」。(対象そのものではなく、物語自体が継続していることを表す「サテ」。(『話題転換のサテ』)

(7) さて、この男、その年の秋、西の京極、九条のほどにいきけり。(『平中物語』三六段、522頁〈これは三六段の冒頭に置かれた「サテ」の例〉)

(8) 「侍共に矢一つ射かけ候はん」と申しければ、「年来の重恩を忘れて、今此有様を見はてぬ不当人をば、さなくともありなん」と宣へば、力およばでとどまりけり。「扱あつか小松殿の君達はいかに」と宣へば、「いまだ御一所も見えさせ給ひ候はず」と申す。(『平家物語』覚一本、巻第七・一門都落、83頁)

この「サテ」は、文頭に置かれ、新たな物語、章段、話などが始まりを示すマーカーのようにはたらく。

②. -Bその他。感動詞のようにはたらく「サテ」。

この「サテ」は「さてさて」、「これはさて」、「さていかにせむ」、「まずはさて」、「さてこれわ」、「さてこれは」、「何がさて」などの連語の形式をとることもあり、文中で感動詞などとしてはたらく。

(9) 「男しもなむ仔細なきものははべめる」と申せば、残りを言はせむとて、「さてさてをかしかりける女かな」とすかいたまふを、心は得ながら、鼻のわたりをこつきて語りなす。(『源氏物語』帚木、86頁)

(10) 波多野、「尤もさこそ候はめ」とて、太刀を抜き、引きそばめて、近付きければ、少き者ども、太刀の影に驚きて、「これは、さて、実に失はんずるにや。暫し助けよや」とて、(『保元物語』下、義朝幼少の弟悉く失はるる事、357頁)

分類の結果を（表 3）、（表 4）に示す。

（表 3）・中古の「サテ」の分類

（※ 1）（※ 4）

分類 資料	①			②-A	②-B
	A	B 1	B 2		
『大和』 全 3 8 例		3 6 地頭 (※ 1)	1 対頭	1 地頭	
『平中』 全 4 3 例	1 地頭 3 地中 (※ 2)	3 2 地頭 1 地中 1 対頭	3 対頭	1 地頭	
『落窪』 全 2 4 例	1 地中 2 対中	2 地頭 7 対頭 1 手頭	7 対頭	2 地頭 1 手頭	2 対頭
『枕』 全 4 5 例	8 地中 1 対中	2 7 地頭 1 対頭 1 対中	6 対頭		1 対頭
『源氏』 全 1 0 4 例	1 1 地中 1 対頭 1 8 対中 1 8 心中	1 7 地頭 2 1 対頭 2 心頭	1 2 対頭	3 対頭	1 対頭 (※ 4)
『堤』 例 6 例	1 地中	3 対頭	2 対頭		
『浜松』 全 1 2 例	1 地中 2 対中 3 心中	1 地頭 1 対頭 2 手頭		1 地頭	1 対頭
計	7 1	1 5 6	3 1	9	5
合計	2 7 2				

(表4)・中世の「サテ」の分類

分類 資料	①			②-A	②-B
	A	B 1	B 2		
『住吉』 全32例	2 対中	25 地頭	3 対頭	2 地頭	
『とりかへ』 全16例	1 地中 6 対中 5 心中	2 対頭	1 対頭		1 対頭
『保元』 全6例	1 対中 1 心中	1 心頭		1 対頭	1 対頭 1 対中 (※5)
『平治』 全5例		4 地頭			1 対頭 (※6)
『平家覚一』 全70例	1 地頭 1 地中 2 対頭 5 対中	27 地頭 11 対頭	12 対頭	10 対頭	
『平家天草』 全88例	5 地中 1 対頭 1 対中	43 地頭 11 対頭	9 対頭	2 地頭 7 対頭	7 対頭 (※7) 2 対中 (※8)
『狂言集』 全237例		41 対頭 1 対中	68 対頭	13 対頭	89 対頭 (※9) 25 対中 (※10)
計	32	166	93	35	127
合計	453				

- (※1) 「地頭」は【地の文・文頭】、(※2) 「地中」は【地の文・文中】、「対頭」は【対話文・文頭】、「対中」は【対話文・文中】、「心頭」は【心内話文・文頭】、「心中」は【心内話文・文中】、「手頭」は【手紙文・文頭】、「手中」は【手紙文・文中】を指すものとする。
- (※3) 草子地・文頭の1例を含む。
- (※4) 「さてさて」1例を指す。
- (※5) 「これはさて」1例。
- (※6) 「さていかにせむ」1例。
- (※7) 「さてさて」6例、「さてこれわ」1例。
- (※8) 「まずはさて」1例、「これはさて」1例。
- (※9) 「さてこれは」3例、「さてさて」86例。
- (※10) 「何がさて」24例、「さのみ恐ろしいものでもないわ、さて。」1例。

本章で扱うのは、(表3)、(表4)で②. -Aに分類された『差し込みのサテ』の中の、「サテ」前部に、その実態が語的・文的な要素の形で文中に示されていない対象と、「サテ」後部との関係付けを行う「サテ」。(対象そのものではなく、物語自体が継続していることを表す「サテ」。)とし、前述したようにそれを『話題転換のサテ』とする。

4. 5. 5. 対話文に見られる『話題転換のサテ』

(表3)、(表4)で『話題転換のサテ』(②)に分類された用例を示す。(表3)・中古で『話題転換のサテ』に分類された例は全13例である。まず中古の『話題転換のサテ』の出現状況を示す。

(表5) 中古『話題転換のサテ』の出現状況

用例出現位置	地の文・文頭	地の文・文中	対話文、手紙文・文頭	対話文、手紙文・文中
用例数	5	0	4	0
用例数計	5		4	
	9			

以下に用例を示す。

[地の文の例] (文頭「サテ」5例)

- (11) おなじ人に、監の命婦、山ももをやりあたりければ、みちのくの安達の山ももろともにこえばわかれの悲しからじを となむいひける。さて、堤なる家になむすみける。(『大和物語』七十段、300頁)
- (12) さて、この男、志賀寺にまうでて、二月に行ひけり。(『平中物語』七段、465頁〈これは段頭の例。〉)
- (13) よき帛、糸、綾、茜、蘇芳、紅など、多く奉りたまへれば、もとよりよくしたまへりけることなれば、急がせたまふ。さて、少将の君につきたてまつりて、馬允になりたる田舎の人の徳ある、絹五十まゐらせたれば、人びとにさまざま賜はす。(『落窪物語』卷之二、167頁)
- (14) 笛、いとうつくしと思す。音もかしこし。さて、殿へ夜更けてわたりたまふ。(『落窪物語』卷之三、268頁)
- (15) さて式部卿宮は東宮うせ給ひぬれば、疑ひなき儲けの君に定まり給ふべきを、「心にまかせたる御里住みにて、」(『浜松中納言物語』卷第五、400頁)

[対話文、手紙文の例] (文頭「サテ」4例)

- (16) 少将の御許より御文あり。「いかにぞ。昨夜の縫ひさし物は。腹まだ立ち出でずや。いと聞かまほしくこそ。さて笛忘れて来にけり。取りて賜へ。」(『落窪物語』卷之一、98頁)〈手紙文の例。〉
- (17) 「なにがしが及ぶべきほどならねば、上が上はうちおきはべりぬ。さて、世にありと人に知られず、さびしくあばれたらむ葎の門に、思ひの外にらうたげならむ人の」(『源氏物語』箒木、60頁)〈対話文の例。〉
- (18) 「ものの例に引き出でたまふほどに、身の人わろきおぼえこそあらはれぬべう。さてをかきしことは、院の、みづからの御癖をば人知らぬやうに、」(『源氏物語』夕霧、471頁)〈対話文の例。〉
- (19) かの御忌日の経仏のことなどのたまふ。「さて、ここに時々ものするにつけても、かひなきことの安からずおぼゆるがいと益なきを、」(『源氏物語』宿木、455頁)

次に中世の『話題転換のサテ』の出現状況を示す。

(表6) 中世『話題転換のサテ』の出現状況

用例出現位置	地の文・文頭	地の文・文中	対話文・文頭	対話文・文中
用例数	4	0	32	0
用例数計	4		32	
	36			

以下に用例を示す。

[地の文の例] (文頭「サテ」4例)

- (20) 中の君も世にたぐひなきことにおぼしけれども、この姫君はなほ、たとへん方なくぞおぼしける。さて、姫君の乳母子に、侍従と申す女房あり。(『住吉物語』上巻、21頁)
- (21) 姫君は西の対に住ませたまへば、中の君、三の君など遊びつつ、たがひにむつましく思ひて、明かし暮らしたまひける。さて、右大臣にておはしける人の御子に、四位の少将とて、世にすぐれたる人おはしける。(『住吉物語』上巻、22頁)
- (22) 麓にわ雨が繁うて、一日片時も人の命絶えてあらうずるやうもなかつた。さて成親卿わ少しくつろぐこともあらうかと思われたところに、子息もはや鬼界が島え流されたと聞かれば、(『天草版平家物語』巻第一、60頁)
- (23) すでに源氏に同心しようずると返事をしたれば、その儀を改むるに及ばいで、みなこれを許容つかまつらなんだ。さて肥後の守と言うものを西国えくたされてあつたが、これわ鎮西の謀叛を平げて、(『天草版平家物語』巻第三、177頁)

[対話文の例] (文頭「サテ」35例)

- (24) 家弘も出家せんとしけるを、「汝出家しては、いとど罪深かりぬと思ゆるぞ」と仰せ言ありければ、しばらくは髪も切らざりけり。「さて、いつちへかわたせたまふべき」と申せば、(『保元物語』中 新院御出家の事、317頁)
- (25) 刀をば、紫宸殿の御後にして、かたへの殿上人の見られける所にて、主殿司を召して、預け置きてぞ出でられける。家貞待ちうけ奉って、「さて、いかが候ひつる」と申しければ、(『覚一本平家物語』巻第一 殿上闊討、23頁)
- (26) 少将まちうけ奉って、「さていかが候ひつる」と申されければ、「入道あまりに腹をたてて、教盛には終に対面もし給はず。」(『覚一本平家物語』巻第二 少将乞請、129頁)
- (27) 「年来の重恩を忘れて、今此有様を見はてぬ不当人をば、さなくともありなん」と宣へば、力およばでとどまりけり。「扱小松殿の君達はいかに」と宣へば、「いまだ御一所も見えさせ給ひ候はず」と申す。(『覚一本平家物語』巻第七 一門都落、83頁)
- (28) されどもあまりにかなしくて、つつむにたへぬ涙のみしげかりければ、よその人目もおそろしさに、いそぎ大覚寺へぞ参りける。北の方、「さていかにやいかに」と問ひ給へば、(『覚一本平家物語』巻第十 首渡、259頁)
- (29) 使四五日候ひて暇申す。北の方泣く / \ 御返事書き給ふ。若公姫君筆をそめて、「さて父御前の御返事は、何と申すべきやらん」と問ひ給へば、「ただともかうも、わ御前たちの思はんやうに申すべし」とこそ宣ひけれ。(『覚一本平家物語』巻第十、首渡、261頁)
- (30) 夏過ぎ秋にもなりぬ。七月の末にかの使かへりきたれり。北の方、「さていかにやい

かに」と問ひ給へば、『過ぎ候ひし三月十五日の暁、八島を御出で候ひて、』(『覚一本平家物語』卷第十 三日平氏、324 頁)

- (31) 義盛、「舌のやはらかなるままに、君の御事な申しそ。さてわ人どもは、砥浪山のいくさにおひおとされ、からき命いきて北陸道にさまよひ、乞食して泣く / \ 京へのぼりたりし者か」とぞ申しける。(『覚一本平家物語』卷第十一 嗣信最期、351 頁)
- (32) やがて田内左衛門をば、物具召されて、伊勢三郎に預けらる。「さてあの勢どもはいかに」と宣へば、「遠国の者どもは、誰を誰とか思ひ参らせ候べき。」(『覚一本平家物語』卷第十一 志度合戦、368 頁)
- (33) かた時もはなれ給はず。しかるをいくさやぶれて後は、けふぞたがひに見給ひける。河越小太郎、判官の御まへに参つて、「さて若公の御事をば、なにと御ばからひ候やらん」と申しければ、「鎌倉まで具し奉るに及ばず。」(『覚一本平家物語』卷第十一 副将被斬、412 頁)
- (34) 限あれば、鶏人暁をとなへて夜も明けぬ。斎藤六帰り参りたり。「さていかにやいかに」と問ひ給へば、「唯今までは別の御事も候はず。御文の候」とて取りいだいて奉る。(『覚一本平家物語』卷第十二 六代、466 頁)
- (35) この郎等の家貞待ちうけて、さていかがござったぞと申したれば、忠盛その様態を知らせたう思われたれども、(『天草版平家物語』卷第一、6 頁)
- (36) 少将お待ち受け奉つて、さてなにとござるぞと、申されたれば：清盛あまりに腹をたてて、(『天草版平家物語』卷第一、40 頁)
- (37) 宗盛この人々をを見つけあつてから、ちっと力づいて、よにも嬉しさうにして、さて今までわなせにをそかったぞとあつたれば、維盛そのをことござる：(『天草版平家物語』卷第三、190 頁)
- (38) 親家を召して、さて屋島の城の様体わ何とあるぞ？そのをことぢや：(『天草版平家物語』卷第四、331 頁)
- (39) 六日の夜河越義経に参つて申したわ：さてあの若君をばなにとつかまつらうぞ？義経当時暑い中にいとけないもの引き具して、関東まで下るに及ばぬ：(『天草版平家物語』卷第四、358 頁)
- (40) 北の方さればよくわ、さきに人をも上せられうが、ただ悪しゅうてこそ遅うわあるらう：さて失われうずる有様かと仰せらるれば：そのをことぢや：(『天草版平家物語』卷第四、389 頁)
- (41) 念仏を申すもござり、そばに向いて涙ぐむ者もござると申せば：さて六代わなんとあるぞと、仰せらるれば：(『天草版平家物語』卷第四、389 頁)
- (42) 太郎「まことに、末広がりになってござる。さてこれには、ちと好みもござる。すっぱ「それはまた如何様なお好みぢや。(『狂言集』「末広がり」、26 頁)
- (43) 参詣一「いかにも、今が帰るさでおりやる。さて今日はそなた一人ぢやが、お内儀

- は何と召されたぞ。(『狂言集』「栗隈神明」、59 頁)
- (44) 参詣一「これへくれさしめ。さて太郎、ちとそなたに尋ねることがおりやる。(『狂言集』「栗隈神明」、59 頁)
- (45) 栗田口「ハハア、お声からしてお大名さうにござる。太郎「クワッとしたお大名ぢや。さて頼うだお方仰せらるるには、『はるばるのところ大儀にこそあれ。さうあらば、ここに栗田口の書いた物がある。(『狂言集』「栗田口」、76 頁)
- (46) 大名「何しに忘るるものでござらうぞ。真実暇がなさに無沙汰致いてござる。さて、そなたも喜うで下されい。内々の訴訟のことも思ひのままに相叶ひ、安堵の御教書賜り、(『狂言集』「墨塗」、132 頁)
- (47) 太郎「わざと案内を乞うたことぢや。武悪「それはいつもながら、念の入ったことぢや。さて早速問はうは、頼うだお方の御機嫌は何とぢや。(『狂言集』「武悪」、147 頁)
- (48) 次郎「次第次第ににぎやかになった。太郎「その通りぢや。さて、身共も一つ受け持ったほどに、そなたも何ぞ着をさしめ。(『狂言集』「棒縛」、251 頁)
- (49) 髯「もしお客ばしござらうかと存じ、わざと案内を乞うたことござる。教え手「それはいつもながら念の入ったことぢや。さてそなたは、今日はいつにないきらびやかな出立でおりやるの。(『狂言集』「雞髯」、277 頁)
- (50) 髯「別に用はござらぬ。早う出て下されい。船頭「心得ました。エーイエーイ。エーイエーイ。さて、こなたはどれへござるぞ。(『狂言集』「船渡髯」、288 頁)
- (51) 髯「いかにも、念を入れて詰めさせてござる。船頭「エーイエーイ。エーイエーイ。さて、何と今日は寒いことではござらぬか。(『狂言集』「船渡髯」、288 頁)
- (52) 髯「さだめてさうでござらう。船頭「エーイエーイ。エーイエーイ。さて、近頃申し兼ねましたことではござるが、その小竹筒を一つ振舞うては下されませぬか。(『狂言集』「船渡髯」、289 頁)
- (53) 甲「もしお客ばしござらうかと存じ、わざと案内を乞うたことござる。乙「それはいつもながら、念の入ったことぢや。さてそなたには、もはや日も暮れに及うだに、何と申うておりやっただぞ。(『狂言集』「吹取」、326 頁)
- (54) 出家「さのみくたびれも致しませぬ。檀那「それは何よりでござる。さて只今一飯を申しつけましたによって、程なう出来ませう。(『狂言集』「魚説経」、413 頁)

中古では地の文 (5 例) でも対話文でも (4 例) 他の用法より少数しか例が見られなかった『話題轉換のサテ』は、中世には地の文 (4 例) よりも対話文 (32 例) でより見られるようになったことが分かる。これより、中世において主に対話文で『話題轉換のサテ』の用法は発達したことが分かる。

しかし、ここで中古の手紙文に見られた (16) の例に着目したい。非地の文の例の中で、ただ一例ではあるが対話文ではない環境に現れているこのような例が、『話題轉換のサテ』

から接続詞のサテに展開し、中世では主に対話文で見られたものが次代の近世においては地の文でも見られるようになったのではないかと論者は考えているためである。手紙文はその資料中の話の筋によって出現の有無が決まるものであるため、事項では手紙文が資料中にまとまった数で見られる『うつほ物語』を参考資料として扱うこととし、その中での手紙文に見られる『話題転換のサテ』について考える。

4. 5. 6. 手紙文中の『話題転換のサテ』

前項では、中世において対話文で『話題転換のサテ』の用法が発達したと考えられることを確認した。それを踏まえて、この項では論者が『話題転換のサテ』から接続詞のサテが展開する橋渡しとなったと考えている、手紙文に見られる『話題転換のサテ』の例に注目することとする。前項末で述べたように、本論で扱った資料中では手紙文に見られる「サテ」の例が少数であるため、ここでは補足資料として『うつほ物語』を用いることとする。

下記は『うつほ物語』中に見られる「サテ」の用例数である。

(表6)『うつほ物語』に見られる「サテ」の用例数

	俊蔭	藤原の 君	忠こそ	春日詣	嵯峨の 院	吹上・上	祭の使	吹上・下
①-A	1	1	1	1	0	1	0	0
①-B 1	3	3	4	1	10	2	1	1
①-B 2	0	0	0	0	0	0	0	0
②-A	1	1	0	0	1	0	2	0
②-B	0	0	1	0	0	0	0	0
計	5	5	6	2	11	3	3	1

	菊の宴	内侍の かみ	沖つ白 波	蔵開・ 上	蔵開・ 中	蔵開・ 下	国譲・ 上	国譲・中
①-A	0	9	0	2	1	1	3	5
①-B 1	3	9	2	16	9	5	13	2
①-B 2	0	1	0	2	4	2	2	4
②-A	0	0	0	3	0	2	3	7
②-B	0	0	0	0	0	0	0	0
計	3	19	2	23	14	10	21	18

	国譲・下	楼の 上・上	楼の 上・下	合計
①-A	3	2	1	32
①-B 1	3	4	1	92
①-B 2	0	3	3	21
②-A	1	1	2	24
②-B	0	0	0	1
計	7	10	7	170

※「サテハ」、「サテモ」、「サテコソ」などの「サテ」に助詞等が付いた形は除く。(以下同。)

次に上記（表6）を元に、各分類項目別に「サテ」の出現環境別の用例数を示す。

（表7）『うつほ物語』中の、各分類項目別に「サテ」の出現環境別の用例数

	地の文・ 文頭	地の文・ 文中	対話文・ 文頭	対話文・ 文中	心内話 文・文頭	心内話 文・文中	手紙文・ 文頭	手紙文・ 文中	合計
①-A	0	7	0	20	0	4	0	1	32
①-B 1	33	0	52	0	1	0	6	0	92
①-B 2	0	0	21	0	0	0	0	0	21
②-A	0	0	6	0	0	0	18	0	24
②-B	0	0	1	0	0	0	0	0	1
計	33	7	80	20	1	4	24	1	170

上記（表7）から、②に分類される「サテ」の出現環境は〔対話文・文頭〕と〔手紙文・文頭〕に集中しており、特に〔手紙文・文頭〕に現れる例が多いことが分かる。それらの用例を挙げる。⁸⁸

[手紙文・文頭の例]

- (55) しこぶちに古めきたる箱二つに、東絹一箱、遠江綾一箱入れて、肌荒く強き中紙にかく書いて奉れたまふ。(手紙) 人知れぬ宮仕へは年経ぬれど、(略) 必ず御かへりみ蒙らむ。さてこれはいとなけれど、御方の下仕へらにも賜はせよとてなむ。宮内に銭取らせて帰したまふ。(「祭の使」483頁)〈三春高基からあて宮への手紙〉
- (56) 「少将にいはむ」とて、少将にのたまふ。「いと易きことなり」とて、よみて奉りたまふ。よき色紙に書きたまふ。(手紙) 日ごろ、仲立ちなむ怠らず聞こえしむるを、(略) 嘆き申す。さてかかることは、若々しければ、若き男どものにぎはしむるを、音に聞くに。とて、(歌) 君恋ふとみなかみ白くなるたきは老いの涙の積もるなるべし 絹、綾、録に取らせて帰しつ。(「祭の使」485頁)〈滋野真菅（実は子息の少将の代筆の手紙と、代作の歌）からあて宮への手紙〉
- (57) また、北のおとどより、蒔絵の御衣櫃五掛、蘇枋の台、枅二つして、衣二掛、唐綾の類二掛、裏衣一つ、丁子一つ入れて、大宮の御文、尚侍のおとどの御もとに、(手紙) 近くものしたまひつるほどに(略) 蓬萊といふなるところは近かりけると思ふ。さてこれは、留守の人々に賜へとて。などあり。(「蔵開 上」391頁)〈大宮から尚侍への手紙〉

⁸⁸ 以下、手紙文の例については、「サテ」部に太下線を、手紙と共に送られた品物などについての記述部に下線を引いて示す。線は全て論者による。

- (58) 北の方、大宮の御返り聞こえたまふ。かしこまりて承りぬ。(略) 今むつかしきまでなむ参り来べき。さてこれは、宿守り望む人多く侍るべかめる。(「蔵開 上」394頁)〈北の方(俊蔭女)から大宮への手紙〉
- (59) 鞆負の乳母といふがもとに、御文遣はず。(手紙) 日ごろ、もの騒がしくて、聞こえずなりにけれ。(略) さてこれは、子持ちの御残りものなり。いと寒き頃なめるを、風邪をやらひたまへとてなむ。(略) とて、乳母のもとには、沈の高坏を五つ、白銀の壺の小さきに黒方入れ、蜜入れたる黄金の蒜五つばかり、沈の寄せ切りたりし、紙に一包、青き色紙どもに包みて、五葉につけて奉りたまへれば、(「蔵開 上」395頁)〈仁寿殿女御から鞆負の乳母への手紙〉
- (60) 大将、三条殿に、米一石と炭二荷奉りたまふ。(略) (手紙) 一日は、ことごとくに思ひたまへしかど、(略) いつ方にもいつ方にも、むつまじき筋にを。さてこの炭は、水尾に見比べたまへとてなむ。(略) 見るに、炭、旅籠をいと細かに組み、外に小篋を貫き立てて、錢二十貫一籠に入れて、もの覆ひて結ひたり。米は、絁糸、俵に編みて、絹五十疋、俵に入れて三俵、今一つには、いみじくうるはしき綿二十入れたり。(「蔵開 下」566頁)〈仲忠から仲頼の妹への手紙〉
- (61) いとうつくしげなる白絹どもなり。(略) 車の箔したる、されたる下簾など懸けて入れさせたまふ。納殿、贄殿の魚、鳥、果物など、よきに選らせて、炭、油など、長櫃に積ませたまひて、御文、(手紙) 一日は、見たまへしに、目もくれて、もの覚えざりしかばなむ、え聞こえざりし。(略) さて、この米は、夏衣にや。「単衣なるしも」とかいふなれば、今よりだに。とて奉りたまへれば、(「蔵開 下」570頁)〈兼雅から中の君への手紙〉
- (62) 東宮は、白銀、黄金の結びものどもこぼたせたまひて、ほかなる竹原にして、下には白銀の細皮結び、餌袋のやうにして、黒方を土にて、沈の筭間もなく植ゑせたまひて、節ごとに水銀の露据ゑさせて、藤壺に奉らせたまふ。(手紙) 昨日、一昨日は、物忌にてなむ。(略) さてこれは、小さき人々に持たせたまへとてなむ。(「国譲上」70頁)〈東宮から藤壺への手紙〉
- (63) 御返りは、(手紙) 承りぬ。賜はらせたる人の御文は、げにさも思すべきことにこそは。(略) さてこれは、(歌) きぬぎぬの(略) 露は、これにはそれをのみなむ、明け暮れ。(歌) 呉竹の(「国譲 上」71頁)〈あて宮から東宮への手紙(返事)〉
- (64) 宮より、よきほどなる白銀、黄金の橘一餌袋、黄ばみたる色紙一重覆ひて、龍胆の組して結ひて、八重山吹の作り花につけてあり。御文には、(手紙) おぼつかなからぬほどに、と思うたまへど、(略) さてこれは、幼き人々に。(国譲 中」148頁)〈東宮から藤壺への手紙〉
- (65) 蔵人の少将、「おはせや、君たち。さるべからむ人に橘食はせむ」とて、手ごとに君だちもてあそびたまふ。御返りは、(手紙) 日ごろ訪はせたまはざりつれば、(略) さて、これはさしも承らぬものを。(歌) みにもかく(「国譲 中」149頁)〈藤壺か

ら東宮への手紙（返事）

- (66) 産養したまはぬ人なく、いと清らにしたまふ。宮より、七日のは、御屏風、御座よりはじめたまひて、長持の脚つきたる三つ、唐櫃五具に、綾、錦よりはじめて、よろづの物入れさせたまへり。御文あり。(略) (手紙) 度々のは見たまへき。(略) さてこれは、旅人の料にとて。 (「国譲 中」 153 頁) 〈東宮から藤壺への手紙〉
- (67) 魚、苞苴、人の奉りたらむ、多くあり。おとどの、かかる折の料とて、鮎かがりいとをかしげに作り置かせたまへり。それ取り出でさせたまひて、苞苴添へつつ、梨壺、宮の御方、中の君に奉らせたまふ。内裏には、ただ御消息して奉らせたまふ。(手紙) まだ大将の悩ましくしたまふに、(略) さてこれは乳母たちの料に。 (「国譲 中」 198 頁) 〈兼雅から梨壺への手紙〉
- (68) 魚、苞苴、人の奉りたらむ、多くあり。おとどの、かかる折の料とて、鮎かがりいとをかしげに作り置かせたまへり。それ取り出でさせたまひて、苞苴添へつつ、梨壺、宮の御方、中の君に奉らせたまふ。(略) 中の君の御もとには、(手紙) 日ごろはいかでとなむ。(略) さて、これは桂の御荘の手づから侍りつる。 (「国譲 中」 198 頁) 〈兼雅から故式部卿の宮の中の君への手紙〉
- (69) 宰相の中将の君の御もとより、二の宮の乳母のもとに、女の装ひ一領、白張の一重襲包みて、御文あり。(手紙) 昨日のつとめて、消息聞こえたりしかど、急ぎて出でたまひにければ。(略) さて、これはいと暑き日なめるを、脱ぎかへたまへ。 (「国譲 中」 211 頁) 〈宰相中将祐澄から女二の宮の乳母への手紙〉
- (70) 左の大殿より、よい蜜、瓜、焼米、生海松、水露など奉れたまへり。北の方の御もとに御文あり。(手紙) 一日参りたりしかど、出で立ち下りしなどありしかば、わづらはしきになむ、急ぎ。さて、海松はた人のもとにとて。 (歌) わたつ海の (「国譲 中」 241 頁) 〈左大臣正頼から中納言実忠の妻への手紙〉
- (71) 宮司なさるるほどに、大将殿より、人のなるべき、御文してあり。見たまへば、(手紙) 日ごろ、宮に度々参れど、(略) さて、年ごろあひ顧みるべき者の侍るを、 (「国譲 下」 328 頁) 〈右大将仲忠から藤壺への手紙〉
- (72) 「尾張より奉りし唐櫃あらば、入り物ながらやよからむ」とて召し出でたり。片つ方に、絹二十疋、綾十疋、今一つ方には、尚侍、「ここに物入れむ」とて、のたまひて、搔練の綾の衣一襲、薄色の織物の細長、袴一具、山吹の綾の三重襲、人に賜はむとて、斑絹と入れたまふ。御文は、(手紙) あさましう、年ごろになりにけり。(略) さてこれは、ただ今人のものしたまふめる。何にかあらむ。 (「楼の上 上」 418 頁) 〈右大臣兼雅から宰相の上への手紙〉

[対話文・文頭の例]

- (73) 尋ねおはするに、見つけて、「さて、いかがありつる」とのたまへば、「尋ね得べくもあらず。(「俊蔭」 95 頁) 〈忠雅が兼雅に琴の音について尋ねる。〉

- (74) 「この春子一人なして隠れましにき。童べをぞとりてはべる。さて国王に奉るべしと聞くは、なんでふことぞ。」(「藤原の君」195頁)〈滋野真菅が殿守にあて宮のことを尋ねて非難する。〉
- (75) 「そのふみども、いとの不便なりき」と申したまふ。「さてその日、不意に人に騒がれたてまつりき。」(「嵯峨の院」312頁)〈中納言平正明から左大将源正頼への報告〉
- (76) 「いぬを見たてまつらざらむことのおぼつかなかるべきをなむ。さてこの宮を、殿の御方に渡したてまつらむとすれども、思ふ心ありてなむ。」(「国譲 上」112頁)〈仁寿殿の女御が女一の宮に、女二の宮のことについて話す。〉
- (77) 「もの習ひたまはむほども、聞かまほしきものかな。夜習ひたまはむほども。「易きこと。さて、御姫君には、何をかは教ふる。」(「楼の上 下」535頁)〈仲忠から涼への問いかけ。〉
- (78) 「むかしのもの声も、さもあはれにめづらしく聞きはべりつるかな。大将も、御樂の声も、あはれに愛しうなむ。さて、今日門に参らむ人、必ず召し入れて見たまふべき人なり」と、治部卿の御声なり。(「楼の上 下」553頁)〈夢の中での、故俊蔭から娘の尚侍への言葉。〉

上記より、[手紙文・文頭]の(55)から(72)の例は、全十八例中、十六例までが、手紙に贈り物(56、63、67の例は歌)が付いており(贈り物が付いていない残りの2例は、もらっていた手紙の返信の一例(58)、任官の推挙の手紙の一例(71))、そのうち、(55)、(57)、(58)、(59)、(62)、(63)、(64)、(65)、(66)、(67)、(68)、(69)、(72)の十三の例は「さてこれは～」(60)、(61)、(70)の三つの例は「さて(この)名詞《名詞は贈り物自体を表す炭、米、海松といった実質名詞》」という形式で始まる、それまでの話題から、手紙の出し手から受け手及び受け手の周辺に待する者たちへの何らかの贈り物について手紙の中で述べる部分となっている。その贈り物自体についてこの「サテ」の前部で述べた部分は手紙の中で見当たらず、つまり、そこで話題は転換しているといえる。また[対話文・文頭]の(73)から(78)の六例も「サテ」の前後で話題は転換している。

この項では『うつほ物語』を参考資料とし、中古の『うつほ物語』では「話題転換のサテ」が手紙文でも見られることを確認した。

4. 5. 7. 『話題転換のサテ』から接続詞サテへ

前々項4. 5. 5. では『話題転換のサテ』が中世の対話文において発達したことを確認した。また、前項4. 5. 6. では『話題転換のサテ』が中古の『うつほ物語』の手紙文にまとまった数が見られたことを述べた。

ここではこの[手紙文・文頭]の例に特に注目することで、記述文である手紙文と、口頭

表現である対話文という出現環境が異なる文に、なぜ「話題転換のサテ」が現れることが出来たのかを考えてみたい。

手紙というのは、限られた空間で、その出し手と受け手が判然とした、一方向性の下で行われる表記言語による伝達活動である。手紙の紙面はその性質上当然有限であり、手紙の出し手は様々な話題をその限られた紙面に収まるように受け手に対して示す必要が生じる。また、その手紙の中でどれほど話題変更があっても、それが同一の手紙の中での記述であれば、「当該の書き手から当該の受け手への伝達内容」であるということは、その伝達内容が手紙という媒体に表記されている以上、保証されている。つまり、手紙文は手紙の発し手から受け手への伝達内容を記述文した文である。一方、対話は口頭表現によって、話し手から聞き手に伝達内容を伝える文である。この点で、手紙文と対話文は共に、発し手から受け手に伝達内容を伝える文、伝達文としてその機能に共通性が見られると考えられる。

またその文体においても、特に中古散文作品の手紙文の場合、

(79) 北の方、大宮の御返り聞こえたまふ。(手紙) かしこまりて承りぬ。(『うつほ物語』

「蔵開 上」393頁)〈俊蔭女である北の方から大宮への手紙〉

(80) あこぎがもとに、少将の御文あり。(手紙) いかに。その部屋はあくやと、いみじくなむ。(『落窪物語』巻之一、113頁)〈少将からあこぎへの手紙〉

(81) まだいと深き朝に御文あり。例の、うはべはけざやかなる立文にて、(手紙) (歌) いたづらに分けつる道の露しげみむかしおぼゆる秋の空かな 御気色の心憂さは、ことわり知らぬつらさのみなん。聞こえさせむ方なく とあり。御返しなからむも、人の、例ならず見答むべきを、いと苦しければ、(手紙) うけたまはりぬ。いとなやましくて、え聞こえさせず とばかり書きつけたまへるを、(『源氏物語』「宿木」、431頁)

のように、その内容のみならず書きぶり自体が対話文と酷似しており、手紙文と対話文の文体の差が現代語のそれらよりも非常に小さかったと思われる⁸⁹。

このような、伝達文としての機能の共通性と文体の類似性から、特に古典語の手紙文と対話文の間には互換的な関係があった可能性を考えても良いかと思われ、よって記述文である手紙文と、口頭表現である対話文という出現環境が異なる文に、共に「話題転換のサテ」が現れることが出来、このことが次の中世で、対話文で主に用いられていた「話題転換の「サテ」が接続詞のサテとして地の文でも用いられるようになった下地になったのだとここでは考えておきたい。

⁸⁹ 橋豊 (1998) 『手紙文の国語学的研究』には、「この時代 (論者注：中古を指す。) のかなの手紙を今日に伝える材料として、物語や説話に掲載された手紙が挙げられる。」として、『源氏物語』中の「宿木」で薫が中の君からもらった手紙の返信を挙げ、「かな文であるから、敬意・丁寧の意を表す「侍り」や「給ふ」が頻繁に用いられているのは当然であると言える。その他、「うけ給はりぬ」は、「お手紙頂戴致しました」の意で、ほとんど今日の「拝復」と同じ」(同・41頁)とあり、中古の手紙文が今日の手紙文と大差なく、手紙の発し手が手紙の受け手に話すようにその内容を記述したことが述べられている。

次に、ではなぜ「サテ」が指示する具体的な意味内容が「サテ」の前部に見られないところで、「サテ」によって文どうしの関係付けが行われるのかについて考えてみたい。

本論第1章から論じてきたように、「サテ」は指示副詞「サ」が指示する具体的な内容が「サテ」の前部に見られる例(①)と、見られない例(②)がある。そのうち、「サテ」が文中に置かれて副詞としてはたらく例(分類①-Aの例)と、文頭に置かれて副詞としてはたらく例(分類①-B1の例)、「話題転換のサテ」としてはたらく例(②-Aの例)を用例を挙げて観察すると、(分類①-Aの例)、(分類①-B1の例)、(②-Aの例)の順に「サテ」の「サ」の指示詞としての概念的な意味が消失し、機能的な意味が前面化していることが分かる。

・(分類①-Aの例)

- (1) 〈再掲〉「雨いみじう降るをりに来たる人なむ、あはれなる。日ごろおぼつかなく、つらき事もありとも、さて濡れて来たらむは、憂き事もみな忘れぬべし」(『枕草子』第274段、425頁)
- (2) 〈再掲〉さて少将わ今しばらくも念仏の功をも積みたうござれども、都に待つ人どもも、心もとなうござらうずるほどに、まづまかり上る：またこそ参らうずれと言うて、亡者にいとまごいをして、泣く泣くそこをたたれた。草のかげでもさこそ名残をしゅう思われつらう：さあれどもさてあらうずることでなければ、そこをたつて同じ三月の十九日に少将わ鳥羽え明かうつかれた。(『天草版平家物語』巻第1・第11、79頁)

・(分類①-B1の例)

- (3) 〈再掲〉「かれは、いとあやしき人の癖にて、文一くだりやりつるが、はづるるやうなければ人の妻、帝の御妻も持たるぞかし。さて身いたづらになりたるやうなるぞかし。」(『落窪物語』巻之一、93頁)
- (4) 〈再掲〉帝聞こしめして、「中納言は、いみじき姫を持ちたまふと聞きたり」と仰せあれば、やがて御請け申されつつ、かしづきたまふ。いよいよあたりも耀くほどにぞ見えたまひける。さてこの姫君、八つばかりにやならせたまふ時、母宮、例ならず悩みたまひけり。(『住吉物語』上巻、18頁)

・(分類②-Aの例)

- (7) 〈再掲〉さて、この男、その年の秋、西の京極、九条のほどにいきけり。(『平中物語』三六段、522頁〈これは三六段の冒頭に置かれた「サテ」の例〉)
- (8) 〈再掲〉「侍共に矢一つ射かけ候はん」と申しければ、「年来の重恩を忘れて、今此有様を見はてぬ不当人をば、さなくともありなん」と宣へば、力およばでとどまりけり。「扱小松殿の君達はいかに」と宣へば、「いまだ御一所も見えさせ給ひ候

はず」と申す。(『平家物語』覚一本、巻第七・一門都落、83頁)

上記(1)から(8)の用例を見ると、「サテ」の「サ」の概念的な意味は段階的に消失し、「意味の漂白化⁹⁰」が起こっていることが見てとれる。(1)、(2)では文中の、(3)、(4)では文頭の「サテ」の前文までに「サテ」の「サ」が指示する具体的な内容が現れている(____部)のが、(7)、(8)では「サテ」の前文までに「サ」が指示する具体的な内容が現れず、(7)、(8)の「サテ」は「サテ」が置かれているその前後文を関係付け、文と文との結束性を示すという機能的なはたらきをしている。この「サテ」の機能の変化は「サテ」が再分析⁹¹されたことを示していると考えられ、前述の「サテ」の「意味の表白化」と共に、「サテ」が文法化⁹²したことを表していると思われる。

「サテ」の文法化による副詞から『話題転換のサテ』、つまりは接続詞のサテへの変化は、「サテ」の語用論的な拡張だと考えられ、これは主観化による変化であると説明することができ、それを引き起こす原因は「サテ」を使う話し手の推論であると考えられる。

また、「カクテ」ではなく「サテ」が接続詞として展開したことについては、金水(1999)が述べる「ソ系列、特にその文脈照応用法では、カテゴリーの関数としての機能、すなわちカテゴリーに合致する値を返す、という機能が重要であり、ソが領域として指定する言語的文脈は指示対象の存在を何ら保証しない」(同・71頁)こと、「ソのいわゆる照応用法は、言語外世界とは関係なく、先行文脈によって概念的に設定された対象を指し示す」(同・69頁)という指摘がその説明となると考えられる。つまり、言語外世界に予め固定された対象を示すのではなく、言語的文脈によって設定された変項的な値を示すソ系の「サテ」であるからこそ、言語的文脈に適応した用法を以て文中で機能することが可能となり、その結果「カクテ」よりも「サテ」の方がより「話題転換」の機能を持つ接続詞として文中ではたらくのに適していたということであると考えられる。

以上により、本論の用例によって示した『話題転換のサテ』は接続詞のサテであると考えてよいと思われるが、その発達は中世後期から次代の近世にかけてであり、それについては章を改め論じることとする。

⁹⁰「意味の表白化」(bleaching)は「脱意味化」(desemanticization)ともいわれ、実質的意味内容、概念的意味の消失として捉えられている。(Traugott (2011)「文法化と(間)主観化」62頁、(福元広二訳)『シリーズ言語学フロンティア03 歴史語用論入門』大集館書店)

⁹¹「再分析」「隣接するいくつかの構成素の文法構造を、その語順を変えることなく別の構造に変えること」(Traugott (2011)「文法化と(間)主観化」60頁、(福元広二訳)『シリーズ言語学フロンティア03 歴史語用論入門』大集館書店)

⁹²「文法化とは、文法的要素が(史的に)発達して、関連する一連の機能的・語用論的・意味的・形態統語的・音韻的变化が生じることと捉えることができる。(Traugott (2011)「文法化と(間)主観化」59頁、(福元広二訳)『シリーズ言語学フロンティア03 歴史語用論入門』大集館書店。

4. 5. 8. まとめ

本章では「サテ」の前部に「サテ」が指示する具体的な内容が見られない、その前後部で話題が変わる位置に現れる「サテ」に注目してこのような用法を持つ「サテ」を『差し込みのサテ』と名付け、その機能を考察した。この『差し込みのサテ』は話題転換の位置に現れ、接続詞的用法を以て文中ではたらくものと、話し手の感動や情意を表して、感動詞的用法を以て文中ではたらくものがあるが、本章では、『差し込みのサテ』のうち、その前部と後部に直接的な事態や人物などの関わりがない文脈どうしを関係付ける接続詞的な用法を示す「サテ」を『話題転換のサテ』として取り上げ、そのような『話題転換のサテ』が古典散文作品中の話題が転換する位置に置かれていること、用例の状況より対話文から生じたと思われることを述べた。また、対話文から生じた『話題転換のサテ』が手紙文にも見られることについては、対話文と手紙文の伝達文としての機能の共通性と文体の類似性から、特に古典語の手紙文と対話文の間には互換的な関係があった可能性を考えることで説明されることとした。

さらに、『うつほ物語』中の手紙文に『話題転換のサテ』の用例がまとまって見られることについて、このような用法は、「手紙文」という書き手と読み手が確定しており物理的に制限のある空間に記載される文であることから、限られた空間（手紙の書面）に複数の話題について連続する形で文を書き連ねる必要があることから生じた可能性があると考えられることを論じた。

また、この「サテ」の機能の変化については「サテ」の再分析の結果と考へ、「サテ」の「意味の漂白化」と共に、「サテ」の文法化によるものとし、『話題転換のサテ』が接続詞のサテであると考えられることを述べた。さらに、第1章で扱った「カクテ」よりも「サテ」の方が「話題転換」の機能を持った接続詞として展開できたことについては、金水（1999）の理論より、言語外世界に予め固定された対象を示すのではなく、言語的文脈によって設定された変項的な値を示すソ系の「サテ」であるからこそ、言語的文脈に適応した用法を以て文中で機能することが可能となり、その結果「カクテ」よりも「サテ」の方がより「話題転換」の機能を持つ接続詞として文中ではたらくのに適していたということであると考えられることを述べた。

4. 6. 中古中世散文作品における感動詞「サテ」の成立

—前文脈を踏まえない「サテ」について—

4. 6. 1. はじめに

本章は中古中世散文作品中で前文脈を踏まえない「サテ」に注目し、その一部が感動詞「サテ」として機能するようになる過程を考察するものである。語構成上では指示副詞「サ」に接続助詞「テ」が付いた「サテ」は中古から

(1) 「されど、今はすさまじうなりにてはべるなり」と申す。「すさまじかべき事か、いな」とのたまはせしかど、さてやみにき。(『枕草子』第九五段、191頁)

と、文中に置かれて、また

(2) 「これをかたみにしたまへ」とて、帯をときてとらせけり。さて、この子のしたりける帯をときてとりて、もたりける文にひき結びてもたせていぬ。(『大和物語』第一六九段、412頁)

と、文頭に置かれて用いられた例が見られる。⁹³これらは「サテ」が指示する内容が「サテ」の前文脈に具体的に認められる例であるが、同じく中古には既に

(3) 姫君おはすると見るかたに、つつみなく入り給ひて、几帳のもとに寄り給ひて、「さていかがおはします。人あまたさぶらふや」と問ひ給へど、はかばかしき人しなかりければ、おぼほれてのみこそあれ。(『浜松中納言物語』巻第四、299頁)

と、「サテ」が指示する内容が「サテ」の前文脈に具体的に認められない例も見られる。

本論ではこのような、その指示する内容が前文脈に具体的に認められない「サテ」に注目し、これを「差し込みのサテ」と名付けてその機能を「サテ」の機能全体の中で位置付ける。そして、「差し込みのサテ」の一部が対話文中の疑問文(話し手の情意、感動を表す文)を導く用法を経てその後「サテ」単独でも話し手の心情を表す感動詞として機能するようになったことを述べる。

なお、本論において中古中世散文作品とは、中古、中世期に成立したとされる、和文、和漢混淆文作品を指す。

⁹³ 中古以前の上代の用例として、「網児(あご)の山五百重(いほへ)隠(かく)せる佐堤(さて)の崎さて延(は)へし児(こ)が夢(いめ)にし見ゆる」市原王(いちはらのおほきみ)の歌一首、『萬葉集』巻第四・六六二番歌(原表記:網児之山 五百重隠有佐堤乃崎 左手繩師子之 夢二四所見)がある。しかしこの例については、「上代語にサ・サテの確例がないため、疑問がなくもない。」(『萬葉集』①・337頁頭注、『新編日本古典文学全集6』)とある。また、以下用例は『新編日本古典文学全集』(小学館発行)による。用例脇の傍線は論者による。頁数は同全集の用例が掲載された頁を表す。

4. 6. 2. 先行研究と問題の所在

古典語の「サテ」について述べた先行研究には西田（2001）、岡崎（2008）、（2010）がある。

西田（2001）は、『源氏物語』における「サテ」の用法に注目し、「平安時代の和文における指示語「さて」の接続詞的用法には、前文の内容を承けて後文につなげていく用法から、転換ともいえる話題の切り出しの用法まで、その使用例を見出すことができる。しかし、源氏物語の地の文においては、転換の用法が用いられることはなかった。」⁹⁴と述べる。

また、岡崎（2008）は、「古代語から現代語への変化の過程で「サテ」はⅠ副詞的用法、Ⅱ接続詞的用法A条件とB列叙・転換の一部の用法を失い、またⅡ接続詞的用法C行動と、Ⅲ感動詞用法を獲得したものと予想される。」⁹⁵と述べ、さらに岡崎（2010）で現代語の「サテ」の用法にも触れつつ、中古から近世の「サテ」の用法について、その歴史的变化を論じ、『源氏物語』、『平家物語覚一本』では見られなかった「サテ」の感動詞的用法が『天草版平家物語』では見られるようになり、その後『浮世風呂』でも確認できたことから、「サテが中世の間に（略）感動詞的用法を獲得した」（岡崎（2010）・72頁）と述べた。

西田、岡崎は資料における「サテ」の用法の変化—西田は副詞から接続詞にかけて、岡崎は副詞から感動詞にかけて—を例を挙げることで説明しているが、元来は副詞として文中ではたっていた「サテ」が感動詞としてはたらくようになった原因については両者とも特に述べてはいない。そこで本論では中古から中世期に成立したとされる資料中に見られる「サテ」の用例を考察し感動詞「サテ」が成立した経緯、原因について述べ、先行研究を補いたい。

4. 6. 3. 『差し込みのサテ』の中の、話し手の感動、情意を表す「サテ」の用例数

まず、古典散文作品中の「サテ」の用例数を確認する。（表1）は本論で資料とした中古

⁹⁴ 西田（2001）・138頁。

⁹⁵ 岡崎（2008）・199頁。なお、岡崎（2008）によれば、「接続詞的用法としては、前件と後件の関係から、Ⅱ—A条件、Ⅱ—B列叙・転換に分類できる。（なお、現代語で見られる行動の区切り目を示すマーカーとして働くものを、Ⅱ—C行動とする。但し中古には例を見出すことはできない。）」（同・一九二頁）として、また、「Ⅱ—A条件」、「Ⅱ—B列叙・転換」に関してはそれぞれ、「Ⅱ—A条件 前件と後件が、条件関係（岡崎注：「条件関係については山口（1980）を参照した。」（岡崎（2008）・201頁）を示すもの。現代語においては「ソレデ・デハ・ソレデモ・ソウシタラ」等と、かなり近い働きをする。」

（同・一九二頁）、「Ⅱ—B列叙・転換 現代語において列叙的用法を持つ接続詞「累加的（ソシテ、ソレデ、ソレカラ）」「並列的（及ビ、並ビニ、マタ）」（略）と、さらに「トコロデ」とかなり近い働きをしている」（同・193頁）と、説明する。

の、(表2)は同中世の散文作品に見られる「サテ」の用例数である。用例は、各資料と現れる文中の位置の別により、【地の文・文頭】、【地の文・文中】、【非地の文・文頭】、【非地の文・文中】に分けて示す。ここでいう【非地の文】とは、【対話文】、【心内話文】、【文(手紙)の文】を指すものとする。(以下同。)

資料名は表中では略し、『大和』は『大和物語』、『平中』は『平中物語』、『落窪』は『落窪物語』、『枕』は『枕草子』、『源氏』は『源氏物語』、『堤』は『堤中納言物語』、『浜松』は『浜松中納言物語』、『住吉』は『住吉物語』、『とり』は『とりかへばや物語』、『保元』は『保元物語』、『平治』は『平治物語』、『平覚』は『平家物語』・覚一本、『平天』は『天草版平家物語』、『狂言』は『狂言記』を指す。(以下同。)

また、本論の用例は「サテ」に注目するもので、「サテハ」、「サテモ」、「サテゾ」、「サテナム」、「サテコソ」などの「サテ」に副助詞、係助詞が付いた形式は考察の対象に含めないものとする。

(表1) 中古「サテ」用例数

位置 資料	地の文 ・文頭	地の文 ・文中	非地の文 ・文頭	非地の文 ・文中	計
『大和』	38	0	1	0	39
『平中』	35	5	4	0	44
『落窪』	4	1	16	3	24
『枕』	27	8	8	2	45
『源氏』	17	12	40	35	104
『堤』	0	1	5	0	6
『浜松』	2	1	4	5	12
計	123	28	78	45	274

(表2) 中世「サテ」用例数

位置 資料	地の文 ・文頭	地の文 ・文中	非地の文 ・文頭	非地の文 ・文中	計
『住吉』	27	0	3	2	32
『とりかへ』	0	1	4	11	16
『保元』	0	0	3	3	6
『平治』	4	0	1	0	5
『平覚』	29	1	34	5	69
『平天』	45	5	35	3	88
『狂言』	0	0	211	26	237
計	105	7	291	50	453

4. 6. 4. 「サテ」の分類

本論では古典散文作品中の「サテ」を以下のように分類する。⁹⁶

①「サテ」が指示する内容が「サテ」の前文脈に具体的に文や句、語などの形で認められる「サテ」。

これは、「サテ」前部に、その実態が語的・文的な要素として文中に示されている具体的な対象と、「サテ」後部との関係付けを行う「サテ」である。ここでは文中に示されている対象の部分に波線を付して示す。(以下同。)

①—A. 文中に置かれる「サテ」。

(4) この呼びに来たりける人の、筆に墨塗りて来といひたれば、さて持て来たり。(『平中物語』第一七段、482頁)

(5) 我身三位して、丹波の五ヶ庄、若狭の東宮河知行して、さておはすべかりし人の、よしなき謀叛おこいて、宮をもうしなひ参らせ、我身もほろびぬるこそうたてけれ。
(『平家物語』覚一本、巻第四、鶴、340頁)

この「サテ」は副詞のようにはたらく。

①—B. 文頭に置かれる「サテ」。

①—B 1. 話者が交替する対話文の文頭以外の文頭に置かれる「サテ」。

(6) 「かれは、いとあやしき人の癖にて、文一くだりやりつるが、はづるるやうなれば、人の妻、帝の御妻も持たるぞかし。さて身いたづらになりたるやうなるぞかし。」(『落窪物語』巻之一、93頁)

(7) 帝聞こしめして、「中納言は、いみじき姫を持ちたまふと聞きたり」と仰せあれば、やがて御請け申されつつ、かしづきたまふ。いよいよあたりも輝くほどにぞ見えたまひける。さてこの姫君、八つばかりにやならせたまふ時、母君、例ならず悩みたまひけり。(『住吉物語』上巻、18頁)

この「サテ」は副詞や接続詞のようにはたらく。

①—B 2. 話者が交替する対話文の文頭に置かれる「サテ」。(『引き取りのサテ』)

(8) 「からしや、眉はしも、烏毛虫だちためり」「さて、齒ぐきは、皮のむけたるにやあらむ」とて、(『堤中納言物語』「虫めづる姫君」、410頁)

(9) 高倉の院の幼いを時にそつとも違わぬと仰せられて、を涙を流させられた。そこに丹後殿と申した女房衆がいられたがこれを見まらして、さてを譲りわこの宮でこそ

⁹⁶この分類は拙稿「古典物語作品における談話分析—話者交替の位置に現れる「サテ」について—」(百瀬(2017)・32~33頁)で示した分類を一部修正して用いた。

ござらうずれと申されたれば、(『天草版平家物語』巻第三、199頁)
この「サテ」は対話の話者の交替を表すマーカー（談話標識）のようにはたらく⁹⁷。

②「サテ」が指示する内容が「サテ」の前文脈に具体的に文や句、語などの形で認められない「サテ」。(『差し込みのサテ』)

これは、内容には依らず、「サテ」前後部の文あるいは文脈などの関係付けを行うための「サテ」である。

②一A. 話題の転換を表す「サテ」。(『差し込みのサテ』の中の『話題転換のサテ』)

- (10) 笛、いとうつくしと思す。音もかしこし。さて、殿へ夜更けてわたりたまふ。(『落窪物語』巻之三、268頁)
- (11) すでに源氏に同心しようずると返事をしたれば、その儀を改むるに及ぶばいで、みなこれを許容つかまつらなんだ。さて肥後の守と言うものを西国えくだされてあつたが、これわ鎮西の謀叛を平げて、(『天草版平家物語』巻第三、177頁)

②一B. 話し手の感動、情意を表す「サテ」。

- (12) 「ものの例に引き出でたまふほどに、身の人わろきおぼえこそあらはれぬべう。さてをかしきことは、院の、みづからの御癖をば人知らぬやうに、いささかあだあだしき御心づかひをば大事と思いて、戒め申したまふ、」(『源氏物語』夕霧、471頁)
- (13) 声も惜しまず泣きたまふ。ためらひて、「さて、いかに聞き出でたまへりや」と問ひきこえたまふ。(『とりかへばや物語』巻第三、379頁)

分類の結果を(表3)に示す。

⁹⁷ 百瀬 (2017)。

(表3) 中古、中世の「サテ」の分類

時代	中古	中世	中古	中世	中古	中世	中古	中世
分類	地頭※1	地頭	地中※2	地中	対話頭	対話頭	対話中	対話中
① A			5 平中 1 落窪 1 堤 8 枕 1 浜松 12 源氏	1 とり 1 平覚 5 平天			2 落窪 2 枕 2 浜松 17 源氏	2 住吉 6 とり 1 保元 5 平覚 1 平天 1 狂言
① B 1	37 大和※3 34 平中 2 落窪 27 枕 1 浜松 17 源氏	25 住吉 4 平治 29 平覚 43 平天			1 平中 6 落窪 3 堤 1 枕 22 源氏 1 浜松	2 とり 11 平覚 12 平天 40 狂言		
① B 2					1 大和 3 平中 7 落窪 2 堤 6 枕 12 源氏	3 住吉 1 とり 12 平覚 9 平天 68 狂言		
② A	1 大和 1 平中 2 落窪 1 浜松	2 住吉 2 平天			1 落窪 3 源氏	1 保元 11 平覚 7 平天 14 狂言		
② B					1 落窪 1 枕 1 浜松 1 源氏※4	1 とり 1 保元 1 平治※6 7 平天※7 89 狂言※9	1 落窪	1 保元※5 2 平天※8 25 狂言※10

時代	中古	中世	中古	中世	中古	中世	中古	中世
分類	手頭	手頭	手中	手中	心頭	心頭	心中	心中
① A							3 浜松 18 源氏	5 とり 1 保元
① B 1	1 落窪 2 浜松				2 源氏	1 保元		
① B 2								
② A								
② B								

※1 「頭」は文頭。※2 「中」は文中。※3 草子地1例含。※4 「さてさて」1例。※5 「これはさて」1例。※6 「さていかにせむ」1例。※7 「さてさて」6例、「さてこれわ」1例。※8 「まずはさて」1例、「これはさて」1例。※9 「さてこれは」3例、「さてさて」86例。 ※10 「何がさて」24例。 「さのみ恐いものでも恐ろしいものでもないわ、さて。」1例。

(表4) 中古、中世の「サテ」のまとめ

※数値はそこに分類される用例数を指す。

時代	中古		中世		計
	頭	中	頭	中	
①—A	0	72	0	29	101
①—B 1	157	0	167	0	324
①—B 2	31	0	93	0	124
②—A	9	0	37	0	46
②—B	4	1	99	28	132
計	201	73	396	57	
	274		453		
合計	727				

(表3)は中古、中世の「サテ」を、(表4)はそれらをまとめたものである。各表ではその分類に該当する「サテ」の用例数を資料別に示した。これらより、中古から中世にかけての「サテ」は、2. 2. で示した①—B. 文頭に置かれる「サテ」に分類される用法が多く(「サテ」全用例727例中448例、61. 6%)、中でも①—B 1. 話者が交替する対話文の文頭以外の文頭に置かれる「サテ」が全用例中の多数を占める(「サテ」全用例727例中324例、44. 6%〈内訳は中古で157/324、48. 5%、中世で167/324、51. 5%〉)。⁹⁸この「サテ」は「サ」が指示する内容が「サテ」の前文脈に具体的に認められるものであることから、中古から中世にかけての「サテ」は、副詞的用法で用いられていた例が全用例中で半数ほど見られ、この時期の「サテ」の主用法は副詞的用法であることが分かる。

また、この中古から中世にかけての時期に用例数が躍進したのは②—A. 話題の転換を表す「サテ」と、②—B. 話し手の感動、情意を表す「サテ」である。②—A. 話題の転換を表す「サテ」は中古で9例であったが中世では37例に、②—B. 話し手の感動、情意を表す「サテ」は中古で5例であったが中世では127例にと、「サテ」全用例数に対する割合でみると、②—A. が中古1. 2%から中世5. 1%に3. 9%増加、②—B. が中古0. 7%から中世17. 5%に16. 8%増加と、①—B. 文頭に置かれる「サテ」が中古25. 9%から中世35. 8%に10%近く増加した(内訳は、①—B 1. が中古21. 6%から中世23. 0%に1. 4%増加、①—B 2. が4. 3%から中世12. 8%に8. 5%増加)のに比して、②の「サテ」が指示する内容が「サテ」の前文脈に具体的に認められない「サ

⁹⁸ ちなみに、①—B 2. 話者が交替する対話文の文頭に置かれる「サテ」は、「サテ」全用例数中の124/727、17. 1%である。

テ」の増加が著しい。本論では特にこの中古から中世にかけて用例数が著しく増加した②を「差し込みのサテ」と名付け、その機能について用例から考察する。さらに、②—A. は接続詞、②—B. は感動詞との関わりが予測されるが、本論では特にこの時期において用例数の甚だしい増加が見られた②—B. の「サテ」に注目し、この②—B. に分類される話し手の感動、情意を表す「サテ」から感動詞「サテ」が成立した経緯、原因を述べる。

4. 6. 5. 『差し込みのサテ』の中の、話し手の感動、情意を表す「サテ」の機能—副詞の「サテ」から『差し込みのサテ』の中の、話し手の感動、情意を表す「サテ」へ—

まず、副詞の「サテ」から『差し込みのサテ』までの様相を用例を挙げて確認する。

前述したように「サテ」の確例は中古から見られる。「サテ」はまず指示副詞として、①—A. に分類された用例のように、文中の述語動詞の前に置かれる。

(14) この人の苦しげさをわが身にかへばやとおぼしまどへど、六月もさて過ぎぬ。(『浜松中納言物語』巻第四、372頁)

(15) 「見る人、後れたる方をば言ひ隠し、さてありぬべき方をばつくろひてまねび出だすに、それしかあらじと、そらにいかがは推しはかり思ひくたさむ。」(『源氏物語』帚木、57頁)

これらの「サテ」は述語動詞に対して連用修飾語としてはたらく。この文中に置かれていた「サテ」は中古に既に①—B 1. に分類したように

(16) 敷物の織物ども、いろいろに染め、縫り、組み、なにかとみなあづけてせさせたまひけり。その物どもを、九月つごもりに、みな急ぎはててけり。さて、その十月ついたちの日、この物急ぎたまひける人のもとにおこせたりける。(『大和物語』三段、255頁)

(17) 「誰がともなくて、さし置かせて来たまへよ。さて、今日のありさまの見せたまへよ。」(『堤中納言物語』貝合、453頁)

と、述語動詞から離れて文頭に置かれた用例が見られる。

また、このような文頭に置かれた「サテ」のうち、①—B 2. に分類したように、

(18) 弁の御方、「落窪の君、率ておはせ、一人とまりたまはむがいとほしきこと」と申したまへば、「さて、それがいつかありきしたる。」(『落窪物語』巻之一、30頁)

(19) 「例ならぬ人はべりてえ近うも寄りはべらず」、「さて今宵もやかへしてんとする。いとあさましうからうこそあべけれ」(『源氏物語』空蝉、122頁)

と、話者が交替する対話文の文頭に置かれる「サテ」の用例も中古から見られる⁹⁹。

古代語の「サテ」は照応用法と観念用法をもってはたらいっていたが、中世に観念用法を失

⁹⁹ 百瀬 (2017)。

い、中世後期から近世に直示用法を獲得した¹⁰⁰と考えられるが、「サテ」の主用法は古代語から現代語まで照応用法であり¹⁰¹、(16)、(17)の用例のように、また(18)、(19)の用例のように特に話者が交替する対話文での用例のように、文頭に置かれて述語動詞との修飾—被修飾関係から解放された「サテ」は、「サテ」の前文脈の内容を指示して「それを踏まえて」、「そういうわけで」と、その内容を「サテ」以降の文に関係付ける¹⁰²。このような「サテ」は機能は副詞であるが文中での出現位置は文頭であって接続詞と同様であり、副詞と接続詞の両方の性質を有していると考えられる。この(16)～(19)の「サテ」は、「サテ」の前文脈に「サ」で指示される内容が、具体的に文や句、語などの形で認められる。しかし次のように②—A. に分類される、

(10・再掲) 笛、いとうつくしと思す。音もかしこし。さて、殿へ夜更けて渡りたまふ。(『落窪物語』巻之三、268頁)

のような話題の転換を表す「サテ」、また②—B. に分類される、

(13・再掲) 声も惜しまず泣きたまふ。ためらひて、「さて、いかに聞き出でたまへりや」と問ひきこえたまふ。(『とりかへばや物語』巻第三、379頁)

のような話し手の感動、情意などを表す「サテ」などの例、つまり『差し込みのサテ』の例では、「サテ」の前文脈に「サ」で指示される内容が、具体的に文や句、語などの形で認められない。これは、これらの例における「サテ」は副詞としてはたらいっていないことを意味する。

前述したように、『差し込みのサテ』は中古から中世にかけての時期に用例数が増加している。これらは、「サテ」の一部に中古から中世にかけての時期に、語として本質的な変化が生じていたことを意味すると思われる。そこで、中古の例を参照しつつ、「差し込みのサテ」に分類される中世の例を中心にさらに詳しく見ていくこととする。

¹⁰⁰岡崎 (2002)・7頁)、「サ系列「サ」は、中古では照応・観念用法であった。そして中世には観念用法を失い、中世後期から近世に現代語のソ系「ソウ」とほぼ同じ直示用法を獲得する。」による。

¹⁰¹ 岡崎 (2002)・3頁)、「ソ系列(ソ系)の中心的用法は、上代から現代まで照応用法である。」による。

¹⁰²「サテ」の文中から文頭への出現位置の変化は、「サテ」が述語動詞との結びつきよりも前文脈に対する指示という機能を強めるようになったことによると考える。言い換えればこれは、「サテ」の接続助詞「テ」よりも指示副詞「サ」の機能が強くなったことを表すと思われる。この、文の結束を表す手法が「後部と関係付ける」ことから「前部と関係付ける」ように変化したことについては、「サテ」のみでなく「サテ」と関係付けられる文の文末形式と「サテ」との関わりについても考える必要があり、今後の課題とする。

4. 6. 6. 『差し込みのサテ』の中の、話し手の感動、情意を表す「サテ」と疑問文の結びつき

(表4)を見ると、『差し込みのサテ』の用例が見られる環境には偏りがあることが分かる。②—A. の話題の転換を表す「サテ」は地の文、対話文の文頭に、②—B. の話し手の感動、情意を表す「サテ」は対話文に用例は集中している。これは同じ『差し込みのサテ』でも②—A. と②—B. の性質が異なることを意味すると思われる。前述したように本論では②—B. に分類される「サテ」を中心に述べるので、今後はこの②—B. 話し手の感動、情意を表す「サテ」について見ていく。

前述したように、②—B. 話し手の感動、情意を表す「サテ」は、対話文に用例が集中していることから、この用法は口頭表現から発生した可能性が高いと思われる。

この②—B. 話し手の感動、情意を表す「サテ」の全用例を確認すると、(表3)で最も用例数が多かった中世の対話文・文頭の例を見ると、「サテ」に疑問文が続く形式が見られる。

それらは、

・(「サテ」+疑問詞疑問文¹⁰³)の形式を持つ例(26/99、26.3%)

(20) ためらひて、「さて、いかに聞き出でたまへりや」と問ひ聞こえたまふ。(『とりかへばや物語』巻第三、379頁)

・(「サテ」+疑問詞のない疑問文)の形式を持つ例(4/99、4%)

(21) 「さて失われうずる有様かと仰せらるれば：」(『天草版平家物語』巻第四、三八九頁)のような例であり、これらの(「サテ」+疑問文)の形式を持つ例が②—B. にはまとまって見られることが分かる。

疑問文の形を取る疑問表現について山口(1990)は、「疑問表現は一般に詠嘆性を帯びやすいが、その原因はこのような疑念や問いかけの情意的側面に根ざすと考えてよいだろう。疑問表現における事態の不透明な捉え方はおのずから主体の情意的抵抗感を伴い、そのため疑念はその解消志向としての問いかけに発展することになるが、詠嘆と呼ばれているものも、いわば与えられた事態を認めるに要する情意的抵抗感の総称であるといつて誤りはないと思う」(12頁)、「詠嘆性の情意の中で最も基本的なものは、与えられた事態に対する驚きであると見てよかろう。しかし、そのありようは場合によって、はじめて気づいたこと

¹⁰³この疑問詞疑問文の疑問詞とは、「いかに」(「さて、いかに聞き出でたまへりや」(『とりかへばや物語』379頁)、「いづち」(「さて、いづちへかわたせたまふべき」(『保元物語』317頁)、「いかが」(「さていかがござったぞと申したれば」(『天草版平家物語』6頁)、「なに」(「さてなにとござるぞと、申されたれば、」(『天草版平家物語』40頁)、「なぜに」(「さて今までなぜにをそかったぞ」(『天草版平家物語』190頁)、「なんと」(「さてをのれらわなんとしようぞ」(『天草版平家物語』389頁)、「どれ」(「さて、こなたはどれへござるぞ。」(『狂言集』船渡聲、288頁)、「如何様(いかやう)」(「さて、御用と仰せらるるは如何様なこととござるぞ。」(『狂言集』狸腹鼓、503頁)などを指す。

に伴う軽い意外感にとどまるものから、強い不可解感やショックを伴う驚きに及ぶ広がりをもつであろう。(略) 与えられた事態への驚きには、その事態に対する主体の好悪によって後述の悲しみ・怒り・後悔・喜び・賞賛・羨望などの情意が両立して認められることも多い」(47～48頁)と述べる。山口(1990)が述べるように、本論でも疑問とは話し手の強い疑念、つまり感情、感動、情意であると考え。そのため、

(22) 「さていかにをのを、俊寛をばついに捨て果たさせらるるか?これほどにわ存ぜなんだ:」(『天草版平家物語』巻第一、76頁)

のような強い情意(詠嘆)の現れとも疑問(問いかけ)の現れとも受け取れる形式や、

(23) 津の国、河内の源氏も同じやうに力を合わせて、淀、川尻から攻め入るとののしれば、平家わこれを聞いて、さてこれわなんとしようぞ?ただ一所で何ともならうずると言うて、宇治、瀬田の手をもみな呼び返された。(『天草版平家物語』巻第三、178～179頁)

のような、時に反語の形で強い情意(驚き)の現れとも疑問(問いかけ)の現れとも受け取れる形式も例として見られると思われる。

そこで、口頭表現の中で「サテ」の後に疑問文が後続する形式が多く見られるという構文の形式の面からの支えと、その疑問文が結局は感動文、情意文であり、話し手の感情を表すという構文の意味内容の面からの支えの両面から、疑問文(話し手の感動、情意を表す文)を後続する「サテ」が、まず後続する話し手の感動、情意を強調するようになり、その後「サテ」自体が話し手の感動、情意を表す語、つまり感動詞としてはたらくようになった経緯が考えられる。

この後、形式としては疑問文(話し手の感動、情意を表す文)であるが、問いかけに対する返答というよりは挨拶に対する返事を要求する

(24) 船頭「さて、何と今日は寒いことではござらぬか。聲「まことに、殊のほか寒いこととござる。(『狂言集』船渡聲、288頁)〈「サテ」は話し手である船頭の実感的な情意を表している。〉

などの例や、「サテ」に疑問文が後続しない

(25) 檀那「さて只今一飯を(の)申しつけましたによって、程なう出来ませう。」(『狂言集』魚説経、413頁)〈「サテ」は話し手である檀那の認識的な情意を表している。〉

(26) 有徳「オオ、それでこそよけれ。盗人「さて、私はもはやお暇申します。」(『狂言集』蜘蛛盗人、488頁)〈「サテ」は話し手である盗人の意志的な情意を表している。〉

などの例では、「サテ」が後続部の強意、強調を表し、その後「サテ」自体が話し手の情意、感動を表す感動詞としてはたらくようになったと考えられる。

そして、それが「サテサテ」と重なる形でも用いられ、

(27) さてさて俊寛と康頼がことわなんとあらうぞと、言われたところで、(『天草版平家物語』巻第一、71頁)

(28) さてさてわれら三人わ罪も同じ罪、配所も一つところぢやに、なんとしたれば放免

の時、二人は召しかえされて、一人ここに残らうぞ？（『天草版平家物語』巻第一、74頁）

(29) さてさて果てしもないことを仰せらるる：（『天草版平家物語』巻第三、156頁）

(30) 丹波「さてさて我御料は、最前から戯れ深い人ぢや。（『狂言集』松樫、45頁）

などとそれぞれ疑問（27）、反語（28）、感嘆（29）、（30）の形も見られるようになったと思われる¹⁰⁴。

（「サテ」＋疑問文）の結びつきのうち、特に「さていかに」「さて何（なに／なん）と」の形式は中世以降定型表現¹⁰⁵となり、また、

(23・再掲) 平家わこれを聞いて、さてこれわなんとしようぞ？（『天草版平家物語』巻第三、178～179頁）

の形式から、「サテ」が文中に置かれた

(31) これはさていづくえござあるぞ？（『天草版平家物語』巻第三、185頁）

(32) まづわさて退屈も召されぬを人ぢや。（『天草版平家物語』巻第二、107頁）

などの形式、また前述した「さて何（なに／なん）と」の形式から「サテ」が文中に置かれた

(33) すっぱ「何がさて心得た。」（『狂言集』金津、430頁）

も見られるようになったと考えられる¹⁰⁶。「サテ」が感動詞としてはたらくようになる出発点としての、疑問文（話し手の感動、情意を表す文）との結びつきは、中古の用例からも認められる¹⁰⁷。初めは（「サテ」＋疑問文の形式を持つ文）という形を取り、後続する疑問文（話し手の感動や情意を表す文）を強調するようにはたらいっていた「サテ」は、次第に疑問文ではない文も後続するようになり、「サテ」自体が話し手の感動や情意を表す感動詞としてはたらくようになったと思われる¹⁰⁸。

¹⁰⁴ この「サテサテ」の形式が変化した「サアサア」の形式が『狂言集』では54例、これがさらに変化して「ヤアヤア」が3例、「ヤイヤイ（ヤイ）」が21例、「ヤンヤンヤ」が17例、「イヤイヤ」が16例、「ヤレヤレ」が8例、「エイエイヤツトナ」が11例「エーイエーイ」が7例と、中世中～後期にこの形式は豊富になる。

¹⁰⁵ 『天草版平家物語』で「さていかに」6例、「さて何（なに／なん）と」2例が見える。

¹⁰⁶ 中世の対話文・文中に見られるこれらの「サテ」の例は論中（32）の「これはさて」（1例）、（33）「まづわさて」（1例）、（共に『天草版平家物語』の例）、（34）「何がさて」（24例）（『狂言集』の例）のほか、「これは蓬萊ヶ島の鬼というて、さのみ恐いものでも恐ろしいものでもないわ、さて。」（『狂言集』節分、360頁）（1例）の例がある。

¹⁰⁷ 中古（対話文・文頭）の例は、「いと聞かまほしくこそ。さて笛忘れて来にけり。取りて賜へ。」（『落窪物語』巻之一、98頁）、「さて何事ぞ」（『枕草子』第六段、38頁）、「さていかがおはします。」（『浜松中納言物語』巻第四、299頁）、「さてさてをかしかりける女かな」（『源氏物語』簀木、86頁）、中古（対話文・文中）の例は、「また、『若菜まゐる』とて、年のはじめにすること、さて、『八講』と言ひて、経、仏かき、供養することこそあめれ。」（『落窪物語』巻之三、256頁）である。

¹⁰⁸ なお、「なんと」の形式をもつ文について、笹井（2006）は「「なんと」型感動文」として扱う。本論もこの「なんと」等の疑問詞の形式を持つ疑問文について、論じたように話し手の感動、情意などを表す感動文として考えておりその点、笹井と同じなのであるが、

『差し込みのサテ』の中の、話し手の感動、情意を表す「サテ¹⁰⁹はこのような感動詞としてはたらくようになった「サテ」であり、それには「サテ」に後続する疑問文（話し手の感動、情意を表す文）の関与が考えられる。

4. 6. 7. まとめ

以上本章で述べたことをまとめる。

本章では、古典散文作品中で前文脈を踏まえない「サテ」に注目し、その一部が感動詞「サテ」として機能するようになる過程を考察した。

まず、古典散文作品中で前文脈を踏まえない「サテ」を『差し込みのサテ』と名付けてその機能を「サテ」の機能全体の中で位置付け、それが中古から中世期にかけて増加していることを指摘した。さらにその『差し込みのサテ』の一部は『話題転換のサテ』として接続詞のようにはたらくことを第4章で論じたことを踏まえ、その『話題転換のサテ』には分類されない『差し込みのサテ』が話し手の感動、情意を表す「サテ」として感動詞のようにはたらく経緯、原因を考察した。

中世期の対話文に特に増加した用例に注目すると、初めは（「サテ」＋疑問文（話し手の感動、情意を表す文））の形式を持つ文という形を取り、後続する疑問文と結びついて疑問

「疑問詞の形式を持つ文」の意味で論中の項目では「疑問文」とした。

¹⁰⁹「差し込みのサテ」の一部は本論で述べたように感動詞としてはたらく「サテ」であるが、他の一部（感動詞としてはたらくのではない、②に分類される「サテ」）は、接続詞としてはたらくようになったと思われる。この感動詞と接続詞の「サテ」の関係であるが、論者の現段階での見通しでは、

(i) 主に中世期の「サテ」を見た際に、感動詞の「サテ」は対話文（口頭表現）に現れ、接続詞の「サテ」は地の文に現れるなど、その出現環境が異なること。(ii) 同じ中世期に感動詞の「サテ」も接続詞の「サテ」も見られ、その出現時期に差が認められないこと。(iii) 話し手の感動、情意を表す幹動詞と、文脈の前後の関係付けを行う接続詞は語としての機能が異なり、両方とも副詞由来の語であるという関係はもちろん認められるが、一方が一方の元となるような直接的な派生関係は考えがたいこと等より、感動詞の「サテ」から接続詞の「サテ」が発生したとは考えていない。これについては本論第4章で述べた。なお、本論での「サテ」のように、元来は文中に位置して命題の中で実質語としてはたらいっていた語がある種の文との結びつきのような構文的な事情等から命題の外に出て機能語になっていく（本論ではここまでを扱っているが、語によっては談話標識になっていく）変化の過程は、Elizabethan C. Traugott (1995) が述べた"indeed", "in fact"などが構文的な統語条件によって文中で実質語である副詞としてはたらいっていたものから文修飾副詞のように、そして談話標識としてはたらくようになる変化の過程とかなり重複的であると考えられ、ある種の言語の用法変化の過程としては普遍性があると思われる。

(補注)

本論では用例採集資料として扱わなかった、『竹取物語』、『伊勢物語』、『うつほ物語』中に見られる、本論中で「差し込みのサテ」の〈②—B. 話し手の感動、情意を表す「サテ」〉に分類される用例には、本論の主旨に反するものは見当たらなかった。

文が表す話し手の感動や情意を強調するにはたらいていた「サテ」は次第に疑問文ではない文も後続するようになり、「サテ」自体が感動詞としてはたらくようになったものであると考えられることを述べた。

[第4章のまとめ]

第4章についてまとめておく。

1. 「カクテ」と「サテ」は副詞として文中で機能していたものが接続詞、または感動詞として機能するようになった通時的な変化であると捉えられる。特に接続詞の成立について注目すると、この変化は文法化の観点から説明できると思われる。文中で副詞としてはたらいていた語が、語彙的意味よりも文法的機能をもってはたらく接続詞としてはたらくようになり、それに伴い日本語の文が、古代日本語の形から近代日本語の形（具体的には現代語の複文に連なる、文どうしを関係付けその関係づけの意味を語的要素に明示する形）に変化した変化であると捉えられることによる。

2. 古代語において「カクテ」よりも「サテ」が接続詞として展開したのは、「カクテ」と「サテ」の構成要素である指示副詞「カク」と「サ」の用法の差異による。

これは金水（1999）が述べる、「カク」は「言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込む」（同、68頁）ものであり、「サ」は「言語外世界とは関係なく、先行文脈によって概念的に設定された対象を指し示す」（同、69頁）ものであるという差異に基づくと考えられる。

3. 古代語の「カクテ」と「サテ」の用法を見ると、これらが文頭に置かれた例もあるが、それらはその前文や前部を具体的に指示している例がそうではない例よりも多いことから、これらは副詞として文で機能していると見られ、よって、「カクテ」と「サテ」、主に「サテ」の接続詞の成立は近代語以降と考えるのが適切であると思われる。

2) 近代語における接続形式 (第 2 部)

2) 近代語における接続形式 (第2部)

第2部は近代語における接続形式を扱う。ここでは第5章から第7章までを述べる。この第2部で扱う近代語における日本語の接続形式は、上代とは異なる「形式名詞+助詞」の形式(第5章)、(第6章)、指示詞由来の接続詞(第7章)などの形式を採っている。これらは既出の事項を形式名詞や指示詞といった形式を使って指して、それに関係付けを行う形式(第5章)、(第6章)や、既出の事項を指していた指示詞が取れて成立した接続詞の形式(第7章)で接続関係を表しているという特性がある。

これらより近代語における日本語の接続形式は、その前部にある既出事項を踏まえながら、後部にそれに関係付ける形を取ることで、また、特に第7章からは、接続関係の詳しい意味をも形式に対応させる形で表すもの(第7章で扱う接続詞「デ」であれば、順接、継起の意味)へと変化したことが分かる。

つまり、近代語における日本語接続形式は、古代語の日本語接続形式のような、その前後の関係付けを行うことが主機能であったものから、その接続関係の意味を形式に対応的に表すものに変化してきたのだと言えよう。連体形終止が一般的となり係り結びが崩壊する中古末から中世期にかけての時期は、文に助詞を顕示すること、接続関係だけではなくその接続関係の意味をも接続詞で明示して表すこと、敬語や授受表現などを形式で表すことなどの形式を文に明示するような変化が起こったが、それらは複文という新たな日本語の文の形式を作るための文作りのシステムの変化が原因であったように思われる。

また、古代語から近代語にかけて特に中世語から近世語にかけての時期には、対人的な配慮を基にことばのやりとりにおいて話し手側と聞き手側で誤解が生じる余地がなるべく少なくなるようにする方向での変化が生じているように思われる。そのような変化の原因の一つは「ことばを使ったやりとりをする」「他者と話をする」というコミュニケーションが古代語の時期以上に活発になったことであると思われ、このことはまた、近代語における接続詞の発達にも関わると思われる。

以下、既に述べた内容と重複するところもあるが、挙げておく。

第5章は「形式名詞+助詞」の形式(2)として、「ホドニ」の形式を持つ接続形式を扱う。名詞「ホド」はその意味の抽象性の高さから古代語より抽象名詞としての用例が多く見られた語である。それが助詞「ニ」と結びつき、「ホドニ」の形式となって時間を表す意味から中世期になって原因・理由を表す意味へと変化したと考えられる。その変化の様相と原因をこの章では見ていく。

第6章は「形式名詞+助詞の形式」(3)として、「ニヨツテ」の形式を持つ接続形式を扱う。これは、「助詞+動詞連用形+接続助詞」の構造を持つことから第4章で扱った「カク

テ」、「サテ」と類似した構造の接続形式であると考えられるが、第5章で扱った「ホドニ」の次に中世期の資料において原因・理由を表す形式として見られたのがこの「ニヨツテ」であるために第6章に置き、その様相を見ていく。

第7章は接続詞「デ」の成立について扱う。接続詞「デ」は近世末期から近代初期に成立したと考えられるが、「指示代名詞ソコ・ソレ+格助詞デ」の形式が副詞「ソコデ」、「ソレデ」、接続詞「ソコデ」、「ソレデ」となり、そこから「ソコ」、「ソレ」が取れて接続詞「デ」が成立した過程と原因を述べることで、一つの接続詞が成立する型を見ていく。

第5章

5. 「形式名詞+助詞」の形式をもつ接続形式(2) - 「ホドニ」の形式-

5. 1. はじめに

本章は「ホドニ」が〈原因・理由〉を表す意味を獲得した過程について、「ホドニ」の構文的条件の変化という側面から考察するものである。「ホドニ」は中古期においては「～するときに」、「～の程度で」など〈時間〉〈空間〉〈程度〉〈様子〉〈有様〉などにかかわる意味で用いられていた¹¹⁰が、中世期になると「～するので」、「～するから」などの〈原因・理由〉を表す意味で用いられるようになる。この「ホドニ」が表す意味変化については望月(1969)、小林(1973)、吉田(2000)、竹内(2006)などが論じているが、これらの先行研究では「ホドニ」の意味変化に対する「ホドニ」自体の構文的条件の変化の関与については特に述べていない。

そこで本発表では「ホドニ」が〈原因・理由〉を表すようになった意味変化について、「ホドニ」の構文的条件の変化の側面から調査と考察を行い、先行研究を補うことを目的とする。

5. 2. 先行研究と本章の主旨

まず代表的な先行研究を挙げる。望月(1969)は通時的に「ホドニ」の意味を調査し、小林(1973)は「ホドニ」の他、「バ」、「トコロデ」、「ニヨッテ」などの形式について抄物資料、キリシタン資料、狂言資料を調査した。吉田(2000)は「ホドニ」が原因・理由を表す意味を表す要因は、条件形式「已然形+バ」が必然条件から一般条件を主に表す用法へと変化し、必然条件を表す形式に空き間が生じたことであると述べた。これらは全て「ホドニ」の意味変化を通時的に考察している点で共通していると考えられる。またこれらとは異なり、「ホドニ」の意味変化に語用論的な視点から説明を行ったのが竹内(2006)である。これらの先行研究を踏まえ本章では①〈原因・理由〉の意味を表す「ホドニ」を特定する客観性のある指標の設定②「ホドニ」の、〈時〉の意味と〈原因・理由〉の意味が現れた時期の時間差についての説明③「ホドニ」の意味変化と、「ホドニ」の構文的条件の変化の関与についての説明を行う。さらにこの意味変化は文法化の考えで説明できる可能性があることを最後に述べる。

次に本章の主旨を述べる。本発表では「ホドニ」が〈原因・理由〉を表すようになった意味変化は、「ホドニ」自体の構文的条件の変化という文法的側面に、竹内が述べる「会話の含意による意味会釈」という語用論的側面が適用された結果であるとする立場をとる。¹¹¹

¹¹⁰ 望月(1969) 36頁による。

¹¹¹ 本発表の立場は、竹内(2006)が述べる語用論的側面の適用対象に足るものとして、語用論的側面とは独立的な「ホドニ」の側の構文的条件の変化という文法的側面の事情につ

「ホドニ」の要素「ホド」は、上代、中古期には実質的、抽象的な意味を表す形式名詞として機能していた可能性を「ホドニ」の構文的条件の変化を示すことで述べ、そこに助詞「ニ」が下接した形式である「ホドニ」が〈原因・理由〉を表す接続助詞として文中で機能するようになったと考え、それを論証する。

5. 3. 本章の構成と用例採集資料について

次に用例採集資料について成立推定年代¹¹²と共に示す。

- ・『平家物語』原拠本（覚一本、百二十句本、竹柏園本）[承久元年（1219年）以前]
- ・『湯山聯句鈔』[永正元年（1504年）¹¹³]・『中華若木詩抄』[天文三年（1534年）以前か。疑義あり。]
- ・清原宣賢抄『日本書紀抄』[天文五年（1536年）正月廿九日から講義開始¹¹⁴。]
- ・『天草版平家物語』[文禄二年（1592, 1593年）¹¹⁵]
- ・『天草版伊曾保物語』[文禄二年（1593年）]
- ・『大蔵虎明能狂言集』[寛永十九年（1642年）書写]
- ・『大蔵虎寛本能狂言』[寛政四年（1792年）書写]

上記資料については資料的性質の違いを考慮し¹¹⁶、成立年代が近いとされる『日本書紀

いて着目することの可能性を主張するものである。「ホドニ」の〈原因・理由〉の意味獲得に際しての、文法的側面の語用論的側面に対する先行性や優先性を主張するものではない。

¹¹² 『日本古典文学大事典』（(1998)・明治書院）、各資料本文前の〔成立〕の項等の記載による。

¹¹³ 5と同。今回資料とした三つの抄物については、小林（1973）が提示した抄物の分類AからDのうち、三つともBの抄物として考えた。Bの抄物とは小林によれば、「(略)講義聞書を基にして、後から文章語的处理を加えた抄(略)と、そのような抄を幾つか集めて一つの抄としたもの(略)で、口語要素と文章語要素とが相半ばしている抄物」(小林(同)、17頁)である。なお、『日本書紀抄』に関してはCの抄物(「講者が、講義の手控として、文章語脈で綴った抄物」(同小林、17頁))の要素もあるかと考える。判断基準は、『湯山聯句抄』は「一韓(発表者注：抄者一韓智翹)による口語注」(『湯山聯句抄』300頁)、『中華若木詩抄』は「先行の漢文注を下敷きにした和注の部分をも含む」(『中華若木詩抄』2頁)、『日本書紀抄』は「『神代抄 全』(発表者注：『日本書紀抄』のもととなった、京都大学文学部寄贈の『神代抄 全』(小林(2003)296頁)を指す。)は、「(後抄本)を手控に、天文五年(一五三六)正月二九日から開始された宣賢講義の聞書であることが判明する。」(小林(同)、296頁)による。

¹¹⁴ 4の『日本書紀抄』についての記載と同。

¹¹⁵ 『天草版平家物語』扉 序による。

¹¹⁶ 小林(1973)、16頁の「中世のいわゆる「口語資料」の代表としては、(1)抄物資料(2)キリシタン資料(3)狂言資料があるが、これらは、それぞれ、資料的性格を異にしており、」による。

抄』、『中華若木詩抄』、『湯山聯句鈔』の三点の抄物資料中の「ホドニ」の例と、これらの抄物が成立したとされる以前、以後の時期の「ホドニ」の様相を見るために、『平家物語』原拠本と『天草版平家物語』中の「ホドニ」の例を対比する形で示し、「ホドニ」が〈原因・理由〉の意味を獲得した変化について考察することとする。

5. 4. 〈原因・理由〉の意味を表す「ホドニ」の特定について

本章では〈原因・理由〉の意味を表す「ホドニ」の特定について、

A: (上接句+ホドニ+下接句) に (〈原因・理由〉ナノデ 〈結果・帰結〉ダ) の関係が見られること。

B: (下接句+ (ノ) ハ+上接句) に (〈結果・帰結〉 (ノ) ハ 〈原因・理由〉カラダ) の関係が見られること。

という(A:)と同時に(B:)の関係も成立すること¹¹⁷を、〈原因・理由〉の意味を表す「ホドニ」の特定の客観性のある指標として設定する。ここではこれを「(A:), (B:)の関係」と呼ぶこととし、以下に具体例を示す。なお、以下全ての例中に付した下線は発表者によるものであり、頁番号は用例が記載されている各資料の頁を指す。

- (1) 岩田川を渡られけるに、嫡子権亮少将維盛以下の公達、浄衣のしたに薄色のきぬを着て、夏の事なれば、なにとなう河の水に戯れ給ふ程に、浄衣のぬれてきぬにうつたるが、偏に色のごとくに見えければ、(『平家物語』覚一本、巻第三、医師問答、227頁)

上記(1)は、「ホドニ」を〈時〉の意味とも〈原因・理由〉の意味ともとれる例であると思われる¹¹⁸が、

(A:) 河の水に戯れ給ふノデ浄衣のぬれてきぬにうつたる。

(B:) 浄衣のぬれてきぬにうつたノハ河の水に戯れ給ふカラダ。

となり、「(A:), (B:)の関係」が成立する。故に(1)の例は〈原因・理由〉を表す「ホドニ」の例であると考えて良いと判断する。

この「(A:), (B:)の関係」の成否¹¹⁹を〈原因・理由〉の意味を表す「ホドニ」を特定

¹¹⁷ この判断が現代の認識、感覚を以てのものとなることについては、論証行為自体がそもそもそれによるものであることより、不問のこととしてここでは考えておく。

¹¹⁸ 用例の資料とした『新編日本古典文学全集』では、この用例の該当箇所現代語訳を「岩田川をお渡りになったところ、嫡子権亮少将維盛以下の公達が、浄衣の下に薄紫色の衣を着て、夏のことだから、なんとなく、川の水でお遊びになるうちに、浄衣がぬれて下の衣の色がすけて見えたのが、」(『平家物語』巻第三、医師問答・228頁脚注の現代語訳部分)、『新編日本古典文学全集』:下線は発表者による。)としているが、発表者の指標ではこれは〈原因・理由〉の意味と考える。

¹¹⁹ 「(A:), (B:)の関係」の成否は、先行研究で行われていた文脈上から「ホドニ」の意味を考えるよりも客観性があると考えて指標としたものである。「ホドニ」の意味が〈原因・理由〉とも他の意味ともとれるような曖昧な例や、意味について判断がつかず意味の判断が保留され、結局は分類不可となる用例を減らし、先行研究よりも精度の高い

する客観性のある指標として考えて、全資料中の全ての〈原因・理由〉の意味を表す「ホドニ」が全「ホドニ」の用例中に占める割合を次の（表1）に示す。

（表1）「ホドニ」の割合

資料名 (成立年代)	『平家物語』(原拠本) (~1219)	『湯山聯句鈔』 (1504)	『中華若木詩抄』 (~1534?)	『日本書紀抄』 (1536)	『天草版平家物語』 (1592,1593)
「ホドニ」割合 (※)	19/106 (17.9%)	173/216 (80.1%)	217/243 (89.3%)	307/408 (75.3%)	66/107 (61.7%)

資料名 (成立年代)	『天草版伊曾保物語』 (1593)	『大蔵虎明能狂言集』 (1642)	『大蔵虎寛本能狂言』 (1792)
「ホドニ」割合 (※)	12/19 (63.2%)	1752/2147 (81.6%)	741/992 (74.7%)

※1 〈原因・理由〉の「ホドニ」の用例数/全「ホドニ」の用例数を表す。()内は%で小数点第二位以下を四捨五入した。

※2 全「ホドニ」の用例数には「天ハ左迂スルソ 左ハ陽、右ハ陰チヤホトニソ」のような前後の二文で倒置の形をとって〈原因・理由〉を表す例は含むが、「サルホドニ」、「カカリシホドニ」などの「指示詞+(α+)ホドニ」の形式は含めない。

※3 〈原因・理由〉の「ホドニ」の用例数には※2で述べた、倒置の形をとって〈原因・理由〉を表す例は含めない。また「サルホドニ」等の「指示詞+(α+)ホドニ」の形式も含めない。

なお、『天草版平家物語』と『平家物語』原拠本の対応関係については清瀬(1968)よりその対応関係を

「ホドニ」の意味判断を行ってそれについて考察するところを目的として設定したものであり、これによって積極的に〈原因・理由〉の意味の「ホドニ」の用例を増やすことを目的としたものではない。

(表2) 『天草版平家物語』と『平家物語』原拠本の対応関係

『天草版平家物語』	『平家物語』原拠本	
巻第一～巻第二・一	覚一本	巻第一～巻第三
巻第二・二～巻第三・八	百二十句本	巻第四～巻第七
巻第三・九～巻第四・一	竹柏園本	巻第八
巻第四・二～巻第四・二八	百二十句本	巻第九

上記表のように考え、該当箇所を参照することとする。それぞれの底本を以下に記す。

- ・覚一本 新編古典日本文学全集45～46 市古貞次編『平家物語』①、②(小学館)
(東京大学国語研究室所蔵『平家物語』(旧高野辰之氏所蔵、通称高野本。覚一別本。)、覚一系諸本及び元和七年(1621年)板本(元和版)、屋代本、真字熱田本、正節本などを参照。(凡例より。))を使用。
- ・百二十句本 慶應義塾大学附属研究書斯道文庫編『斯道文庫古典叢刊之二 百二十句本平家物語』(汲古書院発行)を使用。
- ・竹柏園本 天理図書館善本叢書和書之部第四十五、四十六巻 平家物語竹柏園本 上・下(八木書店発行)を使用。

(表1)より、抄物資料と『天草版平家物語』中の「ホドニ」は〈原因・理由〉の意味を表す例がそれ以外の意味を表す例よりも高い割合で見られることが分かる。

5. 5. 接続助詞「ホドニ」の成立—「ホドニ」の上接句—

接続形式「ホドニ」の先行研究として山口(1996)は以下のように述べる。

「室町期の例には、次のようにその前句が形容詞・形容動詞や「名詞+指定の助動詞」を述語とする句である例もめだってくる。前句の句構造から見たそういう推移は、「ほどに」で接続される後句との間に、時間的な継起性を前提としないものが増えてきたことを示す。それも、「ほどに」が、文脈に依存しなくても、原因理由をはっきり表示できるようになったことの現れと見てよかろう。」(山口同・196頁)

ここでもこの観点をを用いて考えてみることにする。(表3)は前述の「(A:), (B:)の関係」の成否によって〈原因・理由〉の意味を表しているかと判断できる「ホドニ」を対象に、その上接句について調査した結果である。また(表3)より『平家物語』(原拠本)と抄物資料、『天草版平家物語』の「ホドニ」の上接句について、時間的な継起性を前提とする動詞終止形・連体形と、前提としない形容詞(+助動詞デヤ/チヤ)、形容動詞(+助動詞デヤ/チヤ)、名詞・体言相当句(+助動詞デヤ/チヤ・デアル・ナル・ナ・トナル・タル)、副詞(助動詞デヤ/チヤ)の比率をまとめたものが(表4)である。

(表3-1)

上接句の分類	資料名 上接句	『平家物語』(原規本) (~1219)	『湯山聯句鈔』 (1504)	『中華若木詩抄』 (1534)	『日本書紀抄』 (1536)	『天草版平家物語』 (1592)
動作性	動詞終止形・連体形 (+助動詞デヤ/テヤ)	4	91	102	115	19
状態性	形容詞(+助動詞デヤ/テヤ)		32	23	22	5
	形容動詞(+助動詞デヤ/テヤ)		8	12	4(※E)	
	名詞・体言相当句(+助動詞デヤ/テヤ・デア ル・ナル・ナ・トナル・タル)		6	29(※B)	78(※F)	15
	副詞(+デヤ/テヤ)			1(※C)	1(※G)	
受身/使役	動詞未然形(+ルル・ ラルレ/スル・サスル・ シムル)		1		4(※H)	5
過去/完了	動詞連用形(+シ/タ ル・タ/ケル/ツル)	10	21(※A)	25(※D)	65	6
	形容詞連用形(+タ)				1	1
敬語	尊敬・丁寧 給フ	2				
	★尊敬・丁寧 オデ (シ)ヤル/オシヤル					
	丁寧 候	2			1	
	謙讓・丁寧 仕ル	1				
	★謙讓・丁寧 マイル					
	★謙讓・丁寧 マラス ル					
	★謙讓・丁寧 存ル (ソズル/ソンジル)					
	★謙讓・丁寧 マセウ					
	尊敬・丁寧 ゴザル					9
	★尊敬・丁寧 ゴザア ラフ					
★尊敬・丁寧 ゴザア ル						
★尊敬・丁寧 オリヤ ル						
	打消 ス		14	14	10	
	打消 ナイ					
	★打消過去 ナンダ					
	推量 ムノウ				1	
	推量 ムノウズ、ム/ ウズル			2		3
	比況 ヤウナ			1		1
	意志 ベシ			2		
	★意志 ムノウ					
	打消推量 マイ			4	3	
	打消意志 マイ			1		
	希望 タイ(+助動詞 デヤ)			1	2	
	★希望 ナラス					
	合計	19	173	217	307	64

・ホドニ全106例。 ・ホドニ(原因・理由) 19例。 (内訳: 覚一本3例、 百二十句本(巻4-7) 10例。(巻9-12)6例。 竹柏会本0例。)	・ホドニ全216例。 ・ホドニ(原因・理由) 173例。 ・序の5例、跋の6例含 む。 ・(※A)内、動詞連用 形+シ 1例。	・ホドニ全243例。 ・ホドニ(原因・理由) 217例。 ・形容詞にはイ音便を 含む。 ・(※B)体言相当句に は「引用句」トアル、 「体言句+デヤ」など含。 ・(※C)「サテデヤホド ニ」の例。 ・(※D)内、動詞連用形 +タ 20例。	・ホドニ全408例。 ・ホドニ(原因・理由) 307例。 ・(※H)4例中、「動詞 未然形+ルル」が3例、 「動詞未然形+シムル」 が1例。	・ホドニ全107例。 ・ホドニ(原因・理由) 64例。
---	---	--	--	-----------------------------------

(全体として)

・「サルホドニ」「サアルホドニ」「カヤウニアルホドニ」「コレホドニ」「アレホドニ」は含めない。

・推量「ウズ・ウズル」には「ソズ・ソンジル」を含む。

(原因理由の「ホドニ」として)

・「隔日ニ立ツ市ヲ瘠市ト云ゾ。瘠(疾)隔日ニ交ニ起コルホドニゾ。」(『湯山聯句鈔』72聯、343頁)のような、前文以前と倒置の形である「ホドニ」は含めない。

(『日本書紀抄』について)

・(※E)「ニコト笑ト云ハ和ノ字テヤホトニ、コハモ柔テヤホトニニコト有ウ歟」の例はここに含めた。「柔」は名詞と形容動詞の二つの可能性があるが、文意から形容動詞とここでは考える。(『類聚名義抄』(観智院本)、『色葉字類抄』(前田本)に「柔」で「ヤハラカナリ」の読みの例がある。)

・(※F)「積善ノ家ニハ余慶アリテヤホトニ日神ノ子孫カ国ノ主ニナラタソ」(『日本書紀抄』(36才6))の例は、「積善ノ家ニハ余慶アリ」の部分を用句として考え、そこを体言句相当と見る。

・(※G)「コノテ日月カ会スルソ、コノテフト一月カテキタソ、是カ必ス臨朔ノ間ソ、其一日ニハ日ニサカル事カマダテトテヤホトニ、マタ光ヲ発セヌソ」の例。

(表 3 - 2)

上接句の分類	上接句 資料名	『天草版伊曾保物語』 (1593)	『大蔵虎明本』(1642)	『大蔵虎寛本』(1792)
動作性	動詞終止形・連体形〈+助動詞チヤ／チヤ〉	9	446	186(※M)
状態性	形容詞〈助動詞チヤ／チヤ〉		116	18
	形容動詞〈+助動詞チヤ／チヤ〉	1(※I)	20〈4〉	6
	名詞・体言相当句〈+助動詞チヤ／チヤ・デアル・ナル・ナトナル・タル〉 副詞〈+チヤ／チヤ〉	〈1〉	4〈184〉	〈64〉
受身／使役	動詞未然形〈+ルル・ラルル／スル・サスル・シムル〉		72(※J)	22(※N)
過去／完了	動詞連用形〈+シ／タル・タ／ケル／ツル〉		246(※K)	66(※O)
	形容詞連用形〈+タ〉			
敬語	尊敬・丁寧 給フ			
	★尊敬・丁寧 オヂ(ジ)ヤル／オシヤル		12(※L)	12(※P)
	丁寧 候		4	4
	謙讓・丁寧 仕ル		4	4
	★謙讓・丁寧 マイル		4	6
	★謙讓・丁寧 マラスル		32	18
	★謙讓・丁寧 存ル(ゾンズル／ゾンジル)		4	
	★謙讓・丁寧 マセウ			6
	★謙讓語 オマス			2
	尊敬・丁寧 ゴザル		233	156
	★尊敬・丁寧 ゴザアラフ		4	
	★尊敬・丁寧 ゴザアル		4	
	★尊敬・丁寧 オリヤル			2
肯定／否定	打消 ヌ	1	103	30
	打消 ナイ			4
	★打消過去 ナンダ		4	
モーダル要素	推量 ム／ウ		88	56
	推量 ム／ウズ、ム／ウズル		4	6
	比況 ヤウナ			
	意志 ベシ			
	★意志 ム／ウ		76	58
	打消推量 マイ		44	4
	打消意志 マイ		12	2
	希望 タイ〈+助動詞チヤ〉		24	8
	★希望 ~ナラヌ		4	
合計		12	1752	740

『天草版伊曾保物語』 (1593)	『大蔵虎明本』(1642)	『大蔵虎寛本』(1792)
・ホドニ全20例。	・ホドニ全2237例。	・ホドニ全1023例。
・ホドニ(原因・理由)12例。	・ホドニ(原因・理由)1752例。	・ホドニ(原因・理由)740例。
・(※I)「このことは浅からぬ不審ぢやほどに、思案をして答へうずる」と言うて」の例(426頁)。	・(※J)内、ラルル+ホドニ20例、ルル+ホドニ52例。	・(※M)内、22例存在動詞「ゴザル」
	・(※K)内、完了又+ホドニ 7例含む。	・(※N)内、ラルル+ホドニ8例、ルル+ホドニ12例、サスル+ホドニ2例。
	・(※L)内、オシヤル+ホドニ8例、オシヤル+ホドニ4例。	・(※O-1)内、「今ついでやる程に、夫で請さしめ。」(『樋酒』331頁)、「跡は皆求てやらう程に早う喰へ。」(『饅頭』336頁)、「二つ振舞(ふるまは)せられた程に二十疋置て御座れ。」(『饅頭』337頁)、「けふは急ぎました程に、たゞーえだ折て参て御座る。」(『花盗人』などの、やりもらいに関わる補助動詞、使役受身に関わる助動詞+タ、謙譲・丁寧の助動詞マス+タなどを含む。
		・(※O-2)この項には「中能(なかよさ)さうに軒と軒とを建(たて)ならべた程にの。」(『末広がり』92頁)のような、終助詞的用法の「ホドニ」は含めない。
		・(※P内) オシヤル 9例、オシヤル3例。

(※★印は(表3-1)には見られなかった上接句に印を付けたものである。)

(表4)

	時間的な継起性を前提とする上接句 (A)	時間的な継起性を前提としない上接句 (B)	比率[※ (B) / ((A) + (B))] × 100%
『平家物語』原拠本	4	0	0%
『湯山聯句鈔』	91	46	33.6%
『中華若木詩抄』	102	65	38.9%
『日本書紀抄』	115	105	47.7%
『天草版平家物語』	19	22	86.4%

(表4)より、抄物資料、『天草版平家物語』では、時間的な継起性を前提としない上接句の割合が増加していることが分かる。これらの代表的な例を示す。

- (2) 其詩ニ、食イ物ガ無テヒダルイホドニ、飢へタル腸ガクイクイト鳴ルト作タゾ。(『湯山聯句鈔』庚韻 77 聯注解、345 頁) <「ホドニ」の上接句が形容詞の例。>
- (3) 千朶万朶ノ花ガ雪ノ如ク雲ノ如クニシテ地ヲ押シ付クルヤウニ下リタルゾ。アマリ見事ナルホドニ、立寄リテ見、立去リテ見ル也。(『中華若木詩抄』190 聯「花下」注解、225 頁) <「ホドニ」の上接句が形容動詞の例。>
- (4) コハテドウト一月カテキタソ 是カ必ス晦朔ノ間ソ 其一日ニハ日ニサカル事カマダチトチャホトニ、マタ光(リ)ヲ発セヌソ(『日本書紀抄』第四万物造化段、53 頁) <「ホドニ」の上接句が副詞(+助動詞チャ)の例。>
- (5) ここわ山も高し、谷も深し、四方は岩石ぢやほどに、搦手えもたやすうわよもまわらじ、(『天草版平家物語』巻第三、第三、165 頁) <「ホドニ」の上接句が名詞(+ヂヤ)の例。>

「ホド」の意味について上代から振り返ってみると、

- (6) 妹が門 いや遠そきぬ筑波山 隠れぬほどに 袖は振りてな(伊毛我可度 伊夜等保曾吉奴 都久波夜麻 可久礼奴保刀尔 蘇提波布利豆奈)(『萬葉集』巻第十四、三三八九)
- (7) まだ耳馴れたまはぬ手など心やましきほどに弾きさしつつ、飽かず思さるるにも、月ごろ、など強ひても聞きならさざりつらむと悔しう思さる。(『源氏物語』明石、266 頁)
- (6) は〈時間の移ろい〉、(7) は〈程度〉についての意味を表す。これらの「ホドニ」の「ホド」は実質名詞としての用例であると考えられる。

- (8) 織物の唐衣どもこぼれ出でて、相尹の馬頭のむすめ少将、北野宰相のむすめ宰相の君などぞ近うはある。をかしと見るほどに、こなたの御手水は、番の采女の青裾濃の裳、唐衣、裙帯、領布などして、面いと白くて、(『枕草子』第一〇〇段、203 頁)

(9) 「ただ泣きに泣きたまふ。かうかうなむ侍りつる」と申せば、いとあはれと思して、
『さらに物もおぼえぬほどにて、え聞こえず。』(『落窪物語』巻之一、109頁)

(8) は〈その時のことがら〉、(9) は〈ことがらの程度自体〉の意味を表す。中古になると、「ホド」の形式名詞としての用例が見られるようになる。つまり、「ホド」は上代から中古にかけては主に名詞として用いられており、この時期の「ホド」は「ホドニ」と「名詞句＋格助詞」(「実質名詞」＋「格助詞」から「形式名詞」＋「格助詞」)としてはたらく用法が優先的であったが、中世期には上記(2)～(5)のように接続助詞「ホドニ」の形式で連用句を作る用法が優先的となった¹²⁰と考える。

5. 6. 助詞「ニ」

ここでは助詞「ニ」について考える。本発表では前項5. 1. で見てきた「ホドニ」の「ニ」は接続助詞であると考え。「ホド」に下接して「ホドニ」の形で「ホドニ」の上接句と下接句の関係を表すという機能をもって、文中ではたらいっているからである。

助詞「ニ」は元来、〈原因・理由〉の意味を表した。

(10) 降る雪は あはにな降りそ 吉隠の 猪飼の岡の 寒からまくに (零雪者 安播尔 勿落 吉隠

之 猪養乃岡之 寒有卷尔) (『萬葉集』巻第二、二〇三)

(11) 「笹分けば 人や咎めむ いつとなく 駒なつくめる 森の木がくれ わづらはしさに」とて

立ちたまふをひかへて、(『源氏物語』紅葉賀、338頁)

そこで副助詞「ホド」に接続助詞「ニ」が下接し、接続助詞「ホドニ」となり、上接句と下接句の関係を表すという機能と、〈原因・理由〉の意味を表す接続助詞「ホドニ」が成立したと考えられる。

「ホドニ」の〈時〉の意味を表す例と〈原因・理由〉の意味を表す例が現れた時期に時間差がある点もこれで説明が可能となると考えられる。「ホドニ」の「ホド」が、上代、中古期に文中で名詞として機能していたものから中世期になり連用句を作る機能が優先的である副助詞となった過程を考えることで、(表3)で示したように、上接句に用言の連体形以

¹²⁰ これについては、「ホドニ」の「ホド」を副助詞として考えることも可能であると思われる。理由は以下のとおりである。

- ・「ホドニ」の上接句に名詞や体言相当句に直ちに接する形式が見られること。
- ・尊敬、謙譲、丁寧などの意味を表す補助動詞や推量、意志、希望などのモダリティを表す助動詞などの多様な形式を「ホドニ」が上接句にとるようになったこと。これは、「ホドニ」の「ホド」が名詞であり、上接句と共に「ホドニ」の形で「名詞句＋格助詞」を作る用法が優先的であったものから、「ホドニ」の用法が変化し、多様な形式を上接句にとり、それと共に「ホドニ」の形で連用句を作る用法が優先されるようになったことを意味すると考えられること。

外の多様な句をとれるようになり、〈原因・理由〉の意味を表す接続助詞「ホドニ」が成立したと考えられる。

5. 7. 「ホドニ」の構文的条件の変化が意味すること

前項5. で見たように、中世期に「ホドニ」の構文的条件は変化し、「名詞句+格助詞」としての機能から連用句を作る機能が優先的となった。ここではその意味について改めて考えてみる。

〈原因・理由〉の関係は、元来時間的先後関係の基盤の上に成立する。

- (12) 景親御方ニ志ヲ存ル者トモ三千余騎、引率シテ押ヨセ、責候フホトニ、兵衛佐、七八騎ニ討成レ、大童ニ戦ヒナツテ、土肥ノ椋山ヘ逃コモリ候ヒヌ。(『平家物語』百二十句本、巻第五・四十四句、頼朝謀叛、322頁)

前出の先行研究、山口(1996)の述べる、「時間的な継起性を前提」とする動詞を「ホドニ」の上接句にとった、中世前期の例である。これが中世後期になると、

- (13) 夏蛇ヲ食ウ処デ臍ガ痛イホドニ、我ト爪デ臍ヲカキ出スゾ。(『湯山聯句抄』虞韻119聯注解、368頁)

- (14) ヲハヲ后ニメサレタ 非礼ナレトモ、陰陽不思義ノ神ノ上チヤホトニ、シラヌテ候。
(『日本書紀抄』第十一、52ウ4、神皇承運段)

と、形容詞や名詞+チヤといった、「時間的な継起性を前提としないもの」を「ホドニ」の上接句としてとるようになる。(12)の例の「ホトニ」を文中から消して(12^ˆ)として見てみる。

- (12^ˆ) 景親御方ニ志ヲ存ル者トモ三千余騎、引率シテ押ヨセ、責候フ~~ホトニ~~、兵衛佐、七八騎ニ討成レ、大童ニ戦ヒナツテ、土肥ノ椋山ヘ逃コモリ候ヒヌ。(12)を元にした論者による作例。)

(12^ˆ)は、「ホトニ」が文中になくても「景親～責候フ」の句の内容と「兵衛佐、～逃コモリ候ヒヌ。」の句の内容が、「時間的な継起性」により連続した内容を有した句であり、二つの句が〈原因・理由〉の意味関係を有していることが解される。つまり、この二句の〈原因・理由〉の意味を表しているのは「ホトニ」に因るものではない。しかし同様に考えた、

- (13^ˆ) 夏蛇ヲ食ウ処デ臍ガ痛イ~~ホドニ~~、我ト爪デ臍ヲカキ出スゾ。(13)を元にした論者による作例。)

- (14^ˆ) ヲハヲ后ニメサレタ 非礼ナレトモ、陰陽不思義ノ神ノ上チヤ~~ホトニ~~、シラヌテ候。(14)を元にした論者による作例。)

(13^ˆ)の「夏蛇ヲ～痛イ」と「我ト～カキ出スゾ」の二句、(14^ˆ)の「非礼ナレトモ～陰陽不思義ノ神ノ上チヤ」と「シラヌテ候」の二句は「ホドニ」、「ホトニ」がなければそれぞれの二句が〈原因・理由〉の意味関係を有していることは解しがたい。このような山口が述

べる「時間的な継起性」による連続した内容を有しているわけではない句について〈原因・理由〉の意味を表すようになったとき、つまり時間を根底とした事態の変化について言語によって描写されるという文脈から離れて形態それ自体によって意味が表されるようになるとき竹内（2006）の述べる「会話の含意によって因果解釈が可能となり、その会話の含意を形式に取り込んで意味を拡張」（70頁）したとの認識が可能となると思われる。

ここで今一度竹内（2006）の語用論的な考え方を振り返っておく。竹内（2006）は、「ホドニ」の原因理由の意味の獲得について、会話の含意による因果解釈の考え方を導入して説明を行っており、そこでは金水（2004）の理論モデルを使用している。以下、竹内（2006・61～62頁）から抜粋する。

「金水（2004）では、理論的なモデルとして、命題の集合からなる文脈と生じた出来事から文脈的結果状態が導出されるシステムが考案されている。

$$\begin{array}{c} p \\ S_0 \rightarrow Sp \end{array}$$

S_0 は初期状態を、 Sp は文脈的結果状態を表す。初期状態ないし文脈的結果状態は $\{a_1, a_2, a_3, \dots\}$ (a_n は命題) として示されるような、様々な命題の集合である。この命題群は、発話者あるいは対話の参加者にとって、発話の時点で信じられ、かつ前景化されており、文脈あるいは状況によって異なる。 p は出来事を表し、初期状態 S_0 を前提として出来事 p が完成することによって、文脈的結果状態 Sp が導出される。 Sp は p の完成が語彙の意味として必然的に含意する語彙的結果状態（略）そのものではなく、語彙的結果状態を含むより広い概念である。」

竹内（2006）は、この理論モデルに基づき「事態連鎖には因果関係が成り立つ連鎖（以下「因果連鎖パターン」と呼ぶ）が認められる」（同・63頁）とし、「ホドニ」の意味の「拡張」には、「因果連鎖パターン」の関与による会話の含意が「ホドニ」という形式に取り込まれたことが起因していると述べているが、本発表ではそれに付け加えを行う立場を取る。「ホドニ」の〈原因・理由〉を表す意味の獲得は、会話の含意という理論と、その理論が適用される対象たるにふさわしい構文の形式、つまり「ホドニ」の構文的条件の変化があったればこそ可能となったものと考え。つまり「ホドニ」の意味変化には語用論的側面のみでなく「ホドニ」の構文的条件の変化といった文法的側面も関与していると考え。

さらに、その構文的条件の変化に支えられて生じたのが「ホドニ」の「ホド」の文法化であると考え。文法化は Mirett（メイエ）など諸家によって定義されているが、ここではその考えを採る研究者の一人である Elizabeth Closs Traugott（エリザベス・クロス・トラウゴット、以後 Traugott と称す。）による、「文法化とは、文法的要素が（史的に）発達して、関連する一連の機能的・語用論的・意味的・形態統語的・音韻的变化が生じることと捉えることができる。」（『シリーズ 言語学フロンティア 03 歴史語用論入門』「第3章 文法化と（間）主観化」、59頁〈執筆担当 Elizabeth Closs Traugott、翻訳担当福元広

二)) という定義をその根本的な定義とし、さらにそれに加えて、「文法化とは、それまで文法の一部ではなかった形が、歴史的変化の中で文法体系(形態論・統語論)に組みこまれるプロセスである。」(大堀壽夫「文法化の広がりと問題点」、26頁)という考えと、「文法化」と呼ばれる現象には、自立的な品詞・形態を持つ語が付属的な品詞・形態を持つ語へと変化していく統語論的・形態的側面と、語の具体的な意味が抽象的な意味へと変化していく意味論・語用論的な側面がある。」(金水敏「日本語の敬語の歴史と文法化」、34頁)という考えをその原理として採用することとする。

上代から中古にかけて距離、時間などの意味を持っていた実質名詞「ホド」は、その有する意味が元来抽象性が高いものであったこととも関わり、中古から中世にかけて程度、人の心情などの抽象性が高い意味を持つ抽象名詞としての使用が見られるようになる。(表3-1)、(表3-2)より、「ホドニ」の「ホド」が距離や時間などの意味を表す例では「ホドニ」の上接句は距離や時間の意味の「ホド」を形容する語句であったのが、『中華若木詩抄』頃よりモーダル要素の強いものとなることが確認できるが、これは「ホドニ」の上接句が「ホドニ」の下接句とは独立した文的なものとして捉えられるようになってきている変化を示していると考えられる。この中世期の「ホドニ」の上接句と下接句の複文化が原因となり、上述したような構文的变化は起こったと考えられる。

さらに「ホドニ」の上接句と下接句の複文化を招いた原因としては、「ホドニ」の名詞部分「ホド」の文法化が考えられると思われる。「ホド」は元来抽象度が高い意味を有していたが、それが構文中で実質名詞から抽象名詞のようにより使用されるようになり、「ホド」は名詞性が稀薄になり、その単語の意味を以て文ではたらく名詞としての機能に加え、その上接・下接句を関係付ける機能を以て文ではたらく接続形式としての機能が生じてきたということであろうと考えられることによる。中世期の原因・理由を表す接続形式としては「トキニ(時に)」、「コロニ(頃に)」、「アヒダニ(間に)」などの形式もあるが、いずれも「ホドニ」ほどの数の用例は見られない。これらのいずれもが、「トキ(時)」、「コロ(頃)」、「アヒダ(間)」の名詞としての意味を以て文ではたらく名詞性が「ホドニ」に比して強く、「ホドニ」よりも名詞の抽象性が稀薄な語であり、名詞部分の文法化が進まなかったこと原因であろうと考えられる。

そもそも原因・理由の意味は時間的な先後関係をその背後に有する。そこで時間に関わる意味を持つ「名詞+助詞」の構造をもつ形式であれば、それらは原因・理由を表す形式としての用法を持つようになる可能性を持っていると思われるが、上述のような名詞部分の文法化の進行を考えたときに「ホドニ」が最もそれが進んだ形式として、文において『使用されたということであると思われる。

5. 8. まとめ

本発表では以下について述べ、先行研究を補った。

- ・〈原因・理由〉の意味を表している「ホドニ」を特定する客観性のある指標である、「(A:), (B:) の関係」を設定し、それに基づいて〈原因・理由〉の意味を表す「ホドニ」の用例を特定した。
- ・「ホドニ」の〈時〉の意味と〈原因・理由〉の意味が現れた時期に時間差がある点について、「ホドニ」の「ホド」が、上代、中古期には「名詞句+格助詞」としての機能が優先的であったものが、中世期になり連用句を作る機能が優先的となった過程を考え、〈原因・理由〉の意味を表す接続助詞「ホドニ」が成立したことを示した。
- ・「ホドニ」が原因理由を表す意味を獲得した経緯には、語用論的側面に「ホドニ」の構文的条件の変化という文法的側面も関与していることを示した。
- ・「ホドニ」の構文的条件変化という文法的変化は、「ホドニ」の上接句と下接句の複文化が原因となり、起こったと考えられる。さらに、この「ホドニ」の上接句と下接句の複文化を招いた原因としては、「ホドニ」の名詞部分「ホド」の文法化が考えられると思われる。

第6章

6. 「形式名詞+助詞」の形式をもつ接続形式(3) — 「ニヨツテ」の形式—

6. 1. はじめに

本章では〈原因・理由〉の意味を表す「ニヨツテ」と「ホドニ」の差異について述べる。「ホドニ」と「ニヨツテ」について扱った先行研究には小林千草(1973)、来田(1993)、中沢(1996)、松尾(2000)、李淑姫(2000)、(2001)、(2002)、李英児(2004)などが見られる。これらに一貫した「ニヨツテ」についての見方は、中世語において〈原因・理由〉を表していた形式としての「ホドニ」に取って代わった形式が「ニヨツテ」であるというものである。

しかし、「ホドニ」と「ニヨツテ」の関係は、〈原因理由〉を表す『旧形式』とそれに代わる『新形式』と単に考えるだけで十分なのであろうか。この点について検証するために、本章では用例を挙げつつ考察を行い、「ホドニ」と「ニヨツテ¹²¹」の関係について述べ、先行研究を補うことを目的としたい。

6. 2. 先行研究と問題の所在

まず、「ホドニ」と「ニヨツテ」の代表的な先行研究を挙げる。代表的な先行研究としては、まず小林千草(1973)の「中世口語における原因・理由を表す条件句」が挙げられる。ここで小林は「ホドニ」と「ニヨツテ」の関係について、「ホドニは、虎明本(虎清本)から虎寛本にかけて勢力を失っていったが、上接語が推量・意志・希望を表す助動詞群の場合と、後件が命令や依頼である場合には、ニヨツテを抑える力を保有していた。」(小林・同・37頁〈一部の項目番号を省略。〉)と述べる。

来田(1993)「洞門抄物に於けるホドニとニヨツテ」は洞門抄物における「ホドニ」と「ニヨツテ」を取り上げてその使用状況を考察し、「室町期成立の語録の抄は、口語性の高いものほどホドニの使用率が高い」こと、「上接語の種類を見ると、ホドニは推量系の助動詞を承るが、ニヨツテにはその例が無い」こと、「上接語が断定の助動詞の場合、ホドニはダとナのいずれをも承るにに対して、ニヨツテは専らナを承り、ダを承る例は極めて稀である」こと、「ホドニとニヨツテの使用状況によっても、語録の抄・代語の抄・門参の用語は、それぞれ異なる性格を有する」(全て来田・同・35頁)ことを述べる。

また、中沢(1996)『版本狂言記』における原因・理由を表わす表現—「程に」と「によって」を中心として—は『版本狂言記』における「程に」、「によって」「所で」、「間」を

¹²¹なお、「ニヨツテ」については本章以降、「に依て」、「ニ依テ」、「に因て」、「ニ因テ」、「に仍て」、「ニ仍テ」、「ニヨリテ」、「によりて」、「によって」、「ニヨツテ」などの表記を全て含めたものを指すものとする。

取り上げ、特に「ホドニ」と「ニヨツテ」に注目すると〈原因・理由〉を表す形式としては、「程に」が『版本狂言記』では主要な表現であったようである。それに対し新形「所で」、「によって」はまだ「程に」の勢力範囲を脅かす程には（『版本狂言記』が反映している時代の言語においては）至っていない。特に「によって」は、比較的事実の客観的描写に関するもののみと要素の範囲が狭い上に、あらたまった表現として用いられ易いという、使用範囲の限定された接続詞ということがわかった。」（中沢・同・108頁）とする。

また、松尾（2000）「天理図書館蔵『狂言六義』の原因・理由を表す条件句—ホドニとニヨツテを中心に—」は「大蔵流の虎明本・虎清本と同時期の筆録とされる、和泉流最古の狂言台本である天理図書館蔵『狂言六義』（略）の後半部の条件句の様相はむしろ虎寛本に近く、虎明本・虎清本筆録時には既にニヨツテの伸長はかなり進んでいたと考えられる」（松尾・同・57（一）頁）と論じる。

さらに、李淑姫（2000）は「ホドニ」、「ニヨツテ」だけではなく「ユエニ」、「サカイニ」、「トコロデ」、「アイダ」などの形式についても「階層的観点から、前件の述部と形式間の包含関係という二つの基準によって分類を試み」（李・同・102頁）、同論中で「ホドニ」と「ニヨツテ」については「いずれもホドニ句がニヨツテ句を含む関係であり、その逆の例はみられない。」（同・99頁）とした。また同李（2001）は同様に「虎明本における両構文（論者注：「ホドニ」を使用した構文と「ニヨツテ」を使用した構文）の構造の差は、階層的からみてニヨツテがB類、ホドニがC類に属するという立場と相通するものである」（李・同・117頁）さらに同李（2002）は「キリシタン資料、虎明本には、ホドニ句がニヨツテ句を包含する例だけが現れるが、『応永二十七年本論語抄』にはニヨツテ句がホドニ句を包含する例も現れる。このような状況から『応永二十七年本論語抄』のニヨツテは、キリシタン資料、虎明本のニヨツテよりも、階層的にホドニに近いといえる。また、口語的因由形式とされるニヨツテであるが、『応永二十七年本論語抄』のニヨツテは、両資料のニヨツテよりも文章語的に用いられていることがわかる。」（李・同・63頁）と、「ホドニ」と「ニヨツテ」の包摂関係を整理する。

そして、李英児（2004）「大蔵流狂言台本における「ホドニ」と「ニヨツテ」の推移状況—虎明本と虎寛本の比較を通して—」は、虎明本と虎寛本の「ホドニ」と「ニヨツテ」の使用環境を前後関係との共起関係に着目して考察しつつ、その使用状況を明らかに（同・3頁）したもので、「ホドニ」は願望や推量といった助詞・助動詞類と共起しやすく、「+ α 」とでも言えるような相手への働きかけを含む命令・依頼の後件を導くための接続助詞として、「ニヨツテ」は断定の助動詞と共起しやすく、情緒的含みの見当たらない事実関係を結ぶための接続助詞としてそれぞれの特徴的な機能を担うようになったのではないか」（李英児・同・15頁）と述べた。

次に、これらの問題点を述べる。これら先行研究の主張するところは、各資料の特性による「ホドニ」と「ニヨツテ」の使用状況の差異を除けば、詰まるところ小林（1973）の述べるところに帰するものと考えられる。小林（同）は前述したように、「ホドニ」と「ニヨツ

テ」の使用状況について中世期の抄物、キリシタン資料、大蔵虎明本・虎清本・虎寛本狂言集といった資料を調査して、「ホドニ」から「ニヨツテ」への勢力の交替が見られたこと、「ニヨツテ」は後件が事実の客観的な叙述を表し上接語に動詞（+指定ヂヤ）や形容詞などをとるものから使われ出すこと、また、「ホドニ」は後件に命令や依頼を表し上接語に推量、意志、希望などをとるものに限り「ニヨツテ」の侵略を抑えていたことを述べている（小林・同・37頁）。これは言い換えればその文がモーダルな意味¹²²を表す場合は「ホドニ」が使われ続け、客観的な叙述を表す場合から新興の「ニヨツテ」が使われ出したということの意味している。「ホドニ」と「ニヨツテ」二形式間に見られる交替の順序については小林の主張するとおりでであろうと考えられるが、この二形式の交替についての観察はそれで十分なのであろうか。この交替の状況を別の視点で見る余地はないのであろうか。二形式間に交替があったこと、それがあつた種の文から始まりある種の文では進まなかったことは事実であろうと考えられるが、その交替の事象を別の視点から観察し直すことでこの交替に別の意義を見つけ、それを踏まえてさらにこの交替がなぜ生じたのか、この交替にどのような意味があるのかを考える必要があると思われる。

本章ではこの点について改めて検証し、① 「ホドニ」と「ニヨツテ」には日本語の文構造への適合性に差異があること。② ①の差異は口語表現由来の「ホドニ」と漢文訓読文、和化漢文由来の「ニヨツテ」という、両形式の出自の差異に起因していると考えられること。この①、②について述べることを目的とする。

手順としてはまず、前章で「ホドニ」について論じたものと同資料における「ニヨツテ」の使用状況を確認し、用例を挙げて「ホドニ」と「ニヨツテ」の差異を述べ、それを踏まえて最後に、両形式には日本語文構造への適合性に差異が認められること、それは両形式の出自の差異によるものであることを述べる。

6. 3. 用例採集資料と〈原因・理由〉の意味を表す例の特定について

本章で用いる用例採集資料は前章と同じものとする。即ち、

- ・『平家物語』原拠本（覚一本、百二十句本、竹柏園本）[承久元年（1219年）以前]
- ・『湯山聯句鈔』[永正元年（1504年）]・『中華若木詩抄』[天文三年（1534年）以前か。疑義あり。]
- ・清原宣賢抄『日本書紀抄』[天文五年（1536年）正月廿九日から講義開始。]
- ・『天草版平家物語』[文禄二年（1592, 1593年）]

¹²²「現実との関係をめぐって文の対象的な内容としてのできごとを話し手どのように意味づけているのかといったことをモーダルな意味という。」（『日本語文法事典』「ムード」の項、603頁、宮崎和人執筆担当。）。

- ・『天草版伊曾保物語』[文禄二年（1593年）]
- ・『大蔵虎明能狂言集』[寛永十九年（1642年）書写]
- ・『大蔵虎寛本能狂言』[寛政四年（1792年）書写]

を用いることとする。

また、〈原因・理由〉の意味を表す「ニヨツテ」の特定についても、

A: (上接句+ニヨツテ+下接句) に (〈原因・理由〉 ナノデ 〈結果・帰結〉 ダ) の関係が見られること。

B: (下接句+ (ノ) ハ+上接句) に (〈結果・帰結〉 (ノ) ハ 〈原因・理由〉 カラダ) の関係が見られること。

という(A:)と同時に(B:)の関係も成立すること¹²³を、〈原因・理由〉の意味を表す「ニヨツテ」の特定の客観性のある指標として設定する。ここではこれを「(A:), (B:)の関係」と呼ぶこととし、以下に具体例を示す。なお、前章と同じく以下全ての例中に付した下線は発表者によるものであり、頁番号は用例が記載されている各資料の頁を指す。

- (1) 治承五年正月一日、内裡ニハ東國ノ兵革、南都ノ火災ニ依テ朝拝ヲ止メラレ、主上出御モナシ。(『平家物語』百二十句本、巻第六、五十一、377頁)
- (2) 運ヲ知テ雌雄ニ依テ宝祚授奉ヘシト議定事(『平家物語』竹柏園本、巻第八、5オ)

上記(1)ノ「ニヨツテ」について、

(A:) 南都が火災ナノデ朝拝が止められたのダ。

(B:) 朝拝が止められたノハ南都が火災だカラダ。

となり、「(A:), (B:)の関係」が成立する。故に(1)の例は〈原因・理由〉を表す「ニヨツテ」であると考えて良いと判断する。しかし、(2)の「ニヨツテ」については「(A:),

(B:)の関係」は成立しないので、このような「ニヨツテ」の例は〈原因・理由〉を表すものとは考えないものとする。(この(2)の例は「~次第で」の意味を表す例と考える。)

この「(A:), (B:)の関係」の成否を〈原因・理由〉の意味を表す「ニヨツテ」を特定する客観性のある指標として考えて、全資料中の全ての〈原因・理由〉の意味を表す「ニヨツテ」が全「ニヨツテ」の用例中に占める割合を次の(表1)に示す。

(表1) 〈原因・理由〉を表す「ニヨツテ」の割合

資料名 (成立年代)	『平家物語』(原拠本) (~1219)	『湯山聯句鈔』 (1504)	『中華若木詩抄』 (~1534?)	『日本書紀抄』 (1536)	『天草版平家物語』 (1592,1593)
「ニヨツテ」割合(※)	39/44 (88.6%)	0/0 (0%)	9/10 (90.0%)	27/31 (87.1%)	213/215 (99.1%)

¹²³ この判断が現代の認識、感覚を以てのものとなることについては、論証行為自体がそもそもそれによるものであることより、不問のこととしてここでは考えておく。

資料名 (成立年代)	『天草版 伊曾保物語』 (1593)	『大蔵虎明 能狂言集』 (1642)	『大蔵虎寛 本能狂言』 (1792)
「ニヨツテ」 割合 (※)	99/105 (94.3%)	288/326 (88.3%)	1201/1227 (97.9%)

※1 〈原因・理由〉の「ニヨツテ」の用例数/全「ニヨツテ」の用例数を表す。()内は%で小数点第二位以下を四捨五入した。

上記(表1)によれば、「ニヨツテ」は、「ニヨツテ」の用例自体が見られなかった『湯山聯句抄』を除き、中世期の資料においてはその用例の半数以上が〈原因・理由〉を表している。小林(1973)は「ニヨツテ」が「ホドニ」に換わる〈原因・理由〉を表す条件句であったことを述べるが、全用例数に占める〈原因・理由〉を表す用例数は、「ホドニ」に比して「ニヨツテ」の方が用例がなかった『湯山聯句抄』以外の全ての資料において遙かに高いと言える。

6. 4. 〈原因・理由〉を表す「ニヨツテ」について

(表2)は〈原因・理由〉を表す「ニヨツテ」の上接句について調査した結果である。本項ではこれを基に、〈原因・理由〉を表す「ホドニ」の上接句と比することで、「ホドニ」と「ニヨツテ」の差異を見ることとする。

(表2-1)

上接句の分類	上接句 資料名	『平家物語』(原撰本)	『湯山聯句抄』	『中華若木詩抄』	『日本書紀抄』	『天草版平家物語』	
動作性	動詞終止形・連体形 (+助動詞チヤ/チヤ)	7(※A)		6(※D)	5	33	
状態性	形容詞(助動詞チヤ /チヤ)	1				2	
	形容動詞(+助動詞 チヤ/チヤ)				1		
	名詞・体言相当句(+ 助動詞チヤ/チヤ・デ アル・ナル・ナ・トナ ル・タル)	23(1)(※B)(※C)		2	10(2)(※F)	10(12)(※I)	
	副詞(+チヤ/チヤ)				1(※G)		
受身/使役	動詞未然形(ルル・ラ ルル/スル・サスル・ シムル)				2(※H)	12(※J)	
過去/完了	動詞連用形(+シ/タ ル・タケル/ツル)	5			5	106(※K)	
	形容詞連用形(+タ)					10	
敬語	尊敬・丁寧 給フ	2					
	★尊敬・丁寧 オヂ (ジ)ヤル/オシヤル						
	丁寧 候	1					
	謙譲・丁寧 仕ル						
	★謙譲・丁寧 マイル						
	★謙譲・丁寧 マラス ル			1(※E)		4(※L)	
	★謙譲・丁寧 存ル (ソンスル/ソンジル)						
	★謙譲・丁寧 マセウ						
	尊敬・丁寧 ゴザル					10	
	★尊敬・丁寧 ゴザア ラフ						
★尊敬・丁寧 ゴザア ル							
★尊敬・丁寧 オリヤ ル							
肯定/否定	打消 ス				2	4	
	打消 ナイ					8	
モーダル要素	★打消過去 ナンダ						
	推量 ム/ウ						
	推量 ム/ウズ、ム/ ウズル						
	比況 ヤウナ						
	意志 ベシ						
	★意志 ム/ウ						
	打消推量 マイ						
	打消意志 マイ					2(※M)	
	希望 タイ(+助動詞 チヤ)						
	★希望 ~ナラス						
合計		39	0	9	28	213	
			・ニヨツテ全44例。	・ニヨツテ全0例。	・ニヨツテ全10例。	・ニヨツテ全31例。	・ニヨツテ全215例。
※1数値は用例 数を表す。		・〈原因・理由〉ニヨツテ 39例。	・〈原因・理由〉ニヨツテ 0例。	・〈原因・理由〉ニヨツテ 9例。	・〈原因・理由〉ニヨツテ 28例。	・〈原因・理由〉ニヨツテ 213例。	
※2〈 〉内の 数値は上接句 で「助動詞チヤ /チヤ」などが 付いた例の数を 表す。		・(※A)内、2例は「~ ニヨツテ也。」の、終助 詞的な用法。		・(※D)「サアルニヨリ テ」1例、「サルニ因リ テ」2例、「ソレニヨリテ」 1例含む。	・(※F)「是ニ依テ」4 例、「是ニ因テ」1例、 「ソレニ依テ」1例含む。	・(※I)「それによつて」 6例含む。	
		・(※B)「是によつて」4 例、「是に因て」1例、 「是に依て」1例含む。		・(※E)丁寧「マス+ニ ヨツテ」1例。	・(※G)「因以」(「以テ ニ因テ」)1例。	・(※J)「ルルニヨツテ」 10例、「ラルルニヨツ テ」2例。	
		・(※C)「~に依て 也。」の終助詞的な用 法も含む。			・(※H)「ラルルニヨツ テ」2例。	・(※K)「デアツタ+ニ ヨツテ」18例、「デア ル+ニヨツテ」6例。 ・(※L)「マラスル」2例 含む。 ・(※M)「マジ+ニヨツ テ」1例。	

(表2-2)

上接句の分類	上接句 資料名	『天草版伊曾保物語』	『大蔵虎明能狂言集』	『大蔵虎寛本狂言集』
動作性	動詞終止形・連体形 〈+助動詞デヤ/チヤ〉	37	73(※Q)	255(126)(※U)
状態性	形容詞〈助動詞デヤ/チヤ〉	3	4	34
	形容動詞〈+助動詞デヤ/チヤ〉	1	5	10
	名詞・体言相当句〈+助動詞デヤ/チヤ・デア アル・ナル・ナトナル・タル〉	13(7)(※N)	16(17)	65(104)
	副詞〈+チヤ/チヤ〉			
受身/使役	動詞未然形〈ルル・ラルル/スル・サスル・シムル〉	9(※O)	20(※R)	93(※V)
過去/完了	動詞連用形〈+シ/タル・タ/ケル/ツル〉	23	50	206(※W)
	形容詞連用形〈+タ〉	4		
敬語	尊敬・丁寧 給フ			
	★尊敬・丁寧 オヂ (ジ)ヤル/オシヤル		1	
	丁寧 候			
	謙譲・丁寧 仕ル			
	★謙譲・丁寧 マイル		2(※S)	
	★謙譲・丁寧 マラスル			56(※X)
	★謙譲・丁寧 存ル (ソズル/ソンジル)			
	★謙譲・丁寧 マセウ			
	尊敬・丁寧 ゴザル	1	30(※T)	72
	★尊敬・丁寧 ゴザアラフ			
★尊敬・丁寧 ゴザアル				
★尊敬・丁寧 オリヤル				
肯定/否定	打消 ヌ	2	40	102
	打消 ナイ		26	54
	★打消過去 ナンダ		3	
モーダル要素	推量 ム/ウ			6
	推量 ム/ウズ、ム/ウズル			
	比況 ヤウナ	1(※P)		
	意志 ベシ			
	★意志 ム/ウ			
	打消推量 マイ			8
	打消意志 マイ			2
希望 タイ〈+助動詞デヤ〉		1	8	
★希望 ~ナラヌ				
合計		99	288	1201

<p>・ニヨツテ全105例。 ・〈原因・理由〉ニヨツテ99例。</p>	<p>・ニヨツテ全326例。 ・〈原因・理由〉ニヨツテ288例。</p>	<p>・ニヨツテ全1227例。 ・〈原因・理由〉ニヨツテ1201例。</p>
<p>・(※N)「それに因つて」6例、「これに因つて」2例、「然るに因つて」1例含む。</p>	<p>・(※Q)「さあるによつて」4例、「それによつて」11例、「しかるによつて」1例、「～てみるによつて」1例、「～てあるによつて」1例含む。</p>	<p>・(※U)「さあるに依て」93例、「さるに依て」・「去に仍て」32例、「是が有に依て」8例含む。</p>
<p>・(※O)内、「ルル＋ニヨツテ」4例、「ラルル＋ニヨツテ」5例。</p>	<p>・(※R)「ルル＋ニヨツテ」9例、「ラルル＋ニヨツテ」11例。</p>	<p>・(※V)「ラルル＋ニヨツテの名詞」のような連体修飾用法含む。</p>
<p>・(※P)比況助動詞ゴトシ＋ヂヤ(「ごとくヂヤに」)1例。</p>	<p>・(※S)「マラスル＋ニヨツテ」1例、「動詞＋テイタダク」1例。</p>	<p>・(※W)「～タニ依テノ名詞」。「～タニ仍テノ名詞」のような連体修飾用法、「～ニ依タ所デ」の用法、「～タニ依テジヤ」の終助詞的用法含む。</p>
	<p>・(※T)「ゴザアラフ」5例、「ゴザアル」9例、存ル(ゾズル/ゾンジル)1例。</p>	<p>・(※X)「マラスル＋ニヨツテ」32例、「マラスル＋ニヨツテ」10例、「マシタ＋ニヨツテ」14例。</p>

「ホドニ」の(表3-1)、(表3-2)と、「ニヨツテ」の(表2-1)、(表2-2)を踏まえて以下を述べる。

【上接句との承接】

「ホドニ」は形式名詞「ホド」に助詞「ニ」が付いた形式であるため、中古では「ホド上接句が形式名詞「ホド」を修飾して連体修飾句となる

(前章(8)・再掲)をかしと見るほどに、こなたの御手水は、番の采女の青裾濃の裳、唐衣、
裙帯、領巾などして、(『枕草子』第一〇〇段、203頁)

が主であったものが、中世になると

(3) (奏者) いひや / \ めでたい儀ぢや程に、いそひでわらひませい (『大蔵虎明本』
「つくしのおく」、50頁)

と、「ホドニ」の上接句に助動詞などが挿入されるようになり、「ホドニ」が接続助詞として成立していく。つまり、「ホドニ」の「ホド」の前部は、当初には形式名詞「ホド」を修飾して連体修飾句とすることができるような語、句でなければならなかったのであり、その点において「ホドニ」はその前部にくる語、句に制限がある形式であると言える。

対して「ニヨツテ」は格助詞「ニ」に動詞「ヨル」と接続助詞「テ」が付いてできた形式である。この「□+ニヨツテ」という形式を持つために、「ニヨツテ」の前部の「□」の部分に

(4) (羯鼓壳) いわたくしが前にいるを、たてと申せどもたつまひと申に依ての、
申事でござる、(『大蔵虎明本』「なべやつばち」)

のように動詞述語句がくることも、

(5) 蝙蝠が野心は前代未聞の重罪ぢやによって、今日より鳥類の一文を破するぞ」と
言うて、(『天草版伊曾保物語』「鳥と、獸のこと。」、462頁)

のように名詞+助動詞の構成の述語句がくることもできる。「ニヨツテ」の「ニ」が格助詞とも接続助詞とも考えられることから、「ニヨツテ」の上接句の□部は、ここを引用句のように考えることもできる。この□部に様々な語、句、また文までをも取ることができることから、「ニヨツテ」はその上接句に形態上の制限が「ホドニ」よりも小さく、形態にかかわらない上接句を採ることができるという点で、(原因・理由)を表す形式として「ホドニ」よりも汎用性が高い形式であると言えると思われる。

以上より、「ホドニ」と「ニヨツテ」は日本語の文構造への適合性に差異があると考えられる。

【形式の出自】

「ホドニ」について小林(1973)は「(抄物資料中の「ホドニ」は)文章語の世界よりも口語の世界で、より大きく活躍していたことがうかがえる。」(同、19頁)、「(論者注:「天草版平家物語中の「ホドニ」について)右馬之允と喜一検校との会話文中に現れており、

この二人の対話には、ホドニ以外の表現形式は現れていない。(略) こういう部分に、ホドニが専ら用いられているということは、実際の口語の世界では(略) ホドニが用いられていたことを推測させる。」(同、28頁) ことを述べる。これを踏まえて考えるに、『天草版平家物語』で会話部分に他の形式を抑えて多数現れていることなどからも「ホドニ」は口頭語と見て良いかと思われる。

一方、「ニヨツテ」は

(6) 「何ニ因テカ今内輪ヲ將(も)テ翻(りて)用(て)譏ラ見ム者乎。」(「興福寺所蔵本三蔵法師傳承徳點」、八、3/11-14)(大坪併治(1981)『平安時代における訓點語の文法』、43頁)

(7) 「初地の心に依(り)て有情を利するが二地に入得ルこと障を除(き)て。」(「西大寺所蔵本金光明最勝王經初期點、二、6/5」)(大坪(同)、457頁)

など、訓点資料中に用例が見られる語であり、出自が漢文である訓読語¹²⁴と見て良いかと思われる。

つまり「ホドニ」は口頭語、「ニヨツテ」は訓読語であって、両形式はその出自が異なると言える。小林(1973)は〈原因・理由〉を表す形式として「ホドニ」が後発の「ニヨツテ」にその座を奪われ「勢力が逆転する」(35頁)と述べるが、両形式は元来その出自を異にした使用環境の異なることば、形式なのである。

(表3)

上接句 \ 形式	「ホドニ」	「ニヨツテ」
1) 対人的な上接句	982	228
2) 非対人的な上接句	2304	1649
3) 1) : 2) の値	1:2.4	1:7.2

※表中の「対人的な上接句」は「ホドニ」(表3-1)、(表3-2)、「ニヨツテ」(表2-1)、(表2-2)で「上接句の分類」において「敬語」と「モーダル要素」に分類された上接句、「非対人的な上接句」はそれ以外に分類された上接句を指すものとする。数値は用例の実数である。

上記(表3)によれば、対人的な上接句と非対人的な上接句の比が、「ホドニ」は1:2.4、「ニヨツテ」は1:7.2である。これより、「ホドニ」には「ニヨツテ」よりもほぼ3倍、非対人的な上接句に対して対人的な上接句が前接していることが分かる。「ホドニ」は口頭語であるが故に元来モーダル表現や敬語などの対人的な叙述に使用され、一方「ニヨツテ」は漢文でも使用される語であるが故にそこでの非対人的な客観的叙述に使用されてきたのであろう。

¹²⁴築島裕(2009)『訓点語彙集成』には「ヨリテ」で「仍テ/て」20例、「因テ/て」48例、「由てなり」1例「要て」1例の表記で、全70例の用例があるとする。(築島(2009)、同、第八巻、378~379頁)。同書には「ホドニ」は立項されていない。

この「ホドニ」と「ニヨツテ」の出自の差異は、両形式の使用の差異に関わるものであると思われる。上記（表3）で見たように、「ホドニ」は「ニヨツテ」に比してモーダル表現に使用される偏りがある。モーダル表現とは話し手の個人的な（personal な）感情や感覚を表す表現であるので、それを表す際に、口頭語として以前から使用されてきた形式を使うのは自然な選択であろうと思われる。

一方「ニヨツテ」は「ホドニ」に比して客観的な叙述に使用される偏りがある。客観的な叙述とは言説自体について客観的な、中立的な（objective な、neutral な）立場から述べたものである。そこでは話し手個人の感情や感覚は排除されており、それはいわゆる「ソト」の話である。それを表す際に、漢文でも使用されてきたという歴史的な事実のある訓点語を使い、その形式を以て表すこともまた、自然なことであろうと思われる。

つまり、両形式の上接句から見られるその表すところの差異は、両形式の出自の差異に求められると考えられる。

【語構成】

「ホドニ」は形式名詞「ホド」に助詞「ニ」が付いた形式である。「ニ」は格助詞とも接続助詞とも考えられ、¹²⁵ どちらであっても〈原因・理由〉を表す。『角川古語大辞典（第四巻）』（1994）には、

（8）大船の泊つる泊まりのたゆたひ二物思ひ瘦せぬ人の児ゆゑ尔（『万葉集』、122 番歌）と、格助詞「ニ」が「動作の原因・理由・機縁を示す。」（同、871 頁）の例と共に、

（9）「久にあらむ君を思ふ尔ひさかたの清き月夜も闇の夜に見ゆ」（『万葉集』、3208 番歌）

と、接続助詞「ニ」が「原因・理由を示し、その結果・帰結を導く。」（同、同頁）の例が挙げられている。これによれば、「ニ」は格助詞、接続助詞共に上代より〈原因・理由〉の意味を表していたと考えられ、それが前々章で述べたように、形式名詞「ホド」に下接して接続助詞「ホドニ」として〈原因・理由〉の意味を表すようになったものである。その変化の過程は望月（1969）に詳しいが、初めは空間、時間、程度などの意味を表していた実質名詞の「ホド」がその表す意味が抽象性が高いものであったことなどにより形式名詞「ホド」として使用され、また〈原因・理由〉の意味が時間的な先後関係をその背景として有することから、助詞「ニ」と結び付いて〈原因・理由〉を表す接続助詞「ホドニ」として使用されるようになったというものであり、これには名詞「ホド」の文法化が関わっていると見て良いかと思われる。

一方「ニヨツテ」は、助詞「ニ」に、動詞「ヨル」の連用形「ヨリ」の促音便「ヨッ」、

¹²⁵ 『角川古語大辞典（第四巻）』（1994）871 頁。

接続助詞「テ」が付いた形式を持つ。動詞「ヨル」には「それを原因・根拠とする。その理由に基づいて何かがなされる。それ次第で左右される。依存する。基づく。」(『角川古語大辞典(第五巻)』(1999))という意味の記述がなされ、この「ヨル」の語自体が〈原因・理由〉を表す意味を本来有していることが示されている。

さらに接続助詞「テ」には「①時間的に継起する事態、または、空間的に共存する事態を並列する。②二つの事態の因果関係、または、対立関係を単純に示す。③修飾句として、状態・手段・方法などを表す。④補助動詞「あり」「侍り」「候ふ」などに続いて、一つの動作の継続や状態を表すのに用いられる。」(『角川古語辞典(第四巻)』(1994)、504頁)という意味がある。この助詞「ニ」、動詞「ヨル」、接続助詞「テ」から成る「ニヨツテ」は、先述した「ホドニ」のような変化(その語構成中の一部の語の文法化など)の特段見られない、語構成に関わる語の意味の総和として〈原因・理由〉の意味を表しており、その点で「ホドニ」よりも〈原因・理由〉を表す形式としての意味が特定のであると言える。

「ホドニ」の場合、

(前章(1)・再掲) 岩田川を渡られけるに、嫡子権亮少、将維盛以下の公達、浄衣のしたに薄色の衣を着て、夏の事なれば、なにとなう河の水に戯れ給ふ程に、浄衣のぬれてきぬにうつたるが、偏に色のごとくに見えければ、(『平家物語』覚一本、巻第三、医師問答、227頁)

の例は、前々章の「(A:), (B:)の関係」が成立するという意味の確認の手続きを経た上で、本論においては〈原因・理由〉を表す「ホドニ」であるとするが、

(9) 「ここを通るはいつぞや対面した乗り馬ではないか? さてもその時の
汝が過言はいつぞの程に引き換へてかくあさましうは成り下ったぞ?」
(『天草版伊曾保物語』「馬と、驢馬のこと。」(459~460頁))

の例は、「(A:), (B:)の関係」が成立せず¹²⁶、よって〈原因・理由〉を表す「ホドニ」とは本論では考えない。

「ホドニ」の形式ではこのように、それが使用されている当該の文において表す意味が何であるかを文脈より読み手が考えて特定するといった、その「ホドニ」の意味の決定に至るまでの過程が常に生じる。

しかし一方「ニヨツテ」は上述したように、語構成上の意味の総和で〈原因・理由〉の意味を表しており、〈原因・理由〉を表す形式としての意味は特定のである。語構成上、「ニヨツテ」は「ホドニ」よりも形式と意味の対応が特定のなのであり、それだけ意味の決定について能率的な形式なのだと言えよう。

¹²⁶ この(9)の例の「ホドニ」は「間、時」といった、「時間」の意味を表す「ホドニ」であると考えられる。

以上のように、「ホドニ」と「ニヨツテ」はその語構成の差異が起因して、形式と意味の特定に至る過程に差異があると考えられる。

6. 5. 「ホドニ」と「ニヨツテ」の差異について

ここまで述べた「ホドニ」と「ニヨツテ」の【上接句との承認】、【形式の出自】、【語構成】を鑑み、両形式の差異について述べる。

小林（1973）その他先行研究では、〈原因・理由〉を表す形式として、抄物資料、キリシタン資料、能狂言集いずれにしても「絶対優勢であったホドニから、ニヨツテ（略）への勢力交替」（29頁）という見方をしてきた。本章ではこの事象を肯定しつつも別の見方を以て観察し直すことを試みた。その結果、

1) 【上接句の承認】に着目すると、「ホドニ」の「ホド」の前部は、当初には形式名詞「ホド」を修飾して連体修飾句とすることができるような語、句でなければならず、その点において「ホドニ」はその前部にくる語、句に制限がある形式であると言えることが分かった。

一方「ニヨツテ」の上接句の口部は、ここを引用句のように考えることもでき、この口部に様々な語、句、また文までも取るができることから、「ニヨツテ」はその上接句に形態上の制限が「ホドニ」よりも小さく、形態にかかわらない上接句を採ることができるという点で、「ホドニ」よりも汎用性が高い形式であると言えると思われる。

以上より、「ホドニ」と「ニヨツテ」は日本語の文構造への適合性に差異があると考えられることが分かった。

2) 【形式の出自】に着目すると、「ホドニ」は口頭語であり、「ニヨツテ」は漢文訓読語であり、その出自の差異が両形式の使用の差異に関わると思われることが分かった。

「ホドニ」は「ニヨツテ」に比してモーダル表現に使用される偏りがあり、それを表す際に口頭語として使用されてきた形式を使うのは自然な選択であろうと思われる。

一方「ニヨツテ」は「ホドニ」に比して客観的な叙述に使用される偏りがあり、それを表す際に漢文訓読語を使って表すこともまた、自然なことであろうと思われる。

以上より、両形式の出自には差異があり、それが使用される表現—個人のモーダル表現か、客観的な叙述表現であるか—の差異に関わると考えられる。

3) 【語構成】に着目すると、

「ホドニ」はそれが使用されている当該の文において表す意味が何であるかを、文脈より読み手が考えて特定する過程が必要である。

一方「ニヨツテ」は語構成上の意味の総和で〈原因・理由〉の意味を特定の表す。つま

り、「ホドニ」と「ニヨツテ」はその語構成の差異が起因して、形式と意味の特定に至る過程に差異があると考えられる。

以上を踏まえ、本章の最後になぜ「ホドニ」から「ニヨツテ」の「勢力交替」(小林(1973)、29頁)が生じたのか、この交替にどのような意味があるのかについて考えてみることにする。「ニヨツテ」は「ホドニ」と比べ、1)の【上接句の承認】の着眼点からは上接部に採る形式に制限がないこと、2)の【形式の出自】の着眼点からは漢文訓読語や書きことばの和語や話しことばに対する優勢性を認めてきた日本語についての見方があること、3)の【語構成】の着眼点からは形式と意味との特定化の簡便さがあること、これらにより小林(1973)が述べる「勢力交替」は生じたと思われる。そしてこの交替には、日本語使用者に古代から存在していた日本語に対する認識、見方(前述2)を指す。)に則った上で、より日本語を使いやすくしていこうという意識(前述1)、3)を指す。)の現れの一部であるという意味があると思われる。

6. 6. まとめ

以上、本章では、中世期の資料を用いて「ニヨツテ」の使用状況を確認し用例を挙げて「ホドニ」と「ニヨツテ」の差異を述べ、それを踏まえて両形式には日本語文構造への適合性に差異が認められること、それは両形式の出自の差異によるものであると考えられることを述べた。

さらに、【上接句の承認】、【形式の出自】、【語構成】の三つの着眼点を挙げ、それに基づき「ホドニ」から「ニヨツテ」の「勢力交替」(小林(1973)、29頁)が生じた理由とその意味を考察した。本章の調査によればそれは、1)の【上接句の承認】の着眼点からは上接部に採る形式に制限がないこと、2)の【形式の出自】の着眼点からは漢文訓読語や書きことばの和語や話しことばに対する優勢性を認めてきた日本語についての見方があること、3)の【語構成】の着眼点からは形式と意味との特定化の簡便さがあること、これらにより小林(同)が述べる「勢力交替」は生じたと思われ、この交替には、日本語使用者に古代から存在していた日本語に対する認識、見方(前述2)を指す。)に則った上で、より日本語を使いやすくしていこうという意識(前述1)、3)を指す。)の現れの一部であるという意味があると思われることを述べた。

第7章

7. 日本語接続詞「デ」の形式の成立について—文法化の観点から—

7. 1. はじめに

7. 1. 1. 第1章から第4章までを振り返って

本章では接続詞「デ」の成立過程について述べる。その前に本論で一章から述べてきた「体言+助詞」、「体言以外の形式+助詞」の形式を持つ接続形式について振り返ってまとめてみる。

- 1) 「モノヲ」などの「体言（形式名詞）+助詞」の形式
- 2) 「ホドニ」などの「体言（形式名詞）+助詞」の形式
- 3) 「カクテ」、「サテ」、「ニヨツテ」などの「体言以外の形式（指示副詞、（助詞+動詞）などの形式）+助詞」の形式

上記1) から3) の形式を以て接続形式としてはたらくものとしては他に、

- 1) では「モノノ」、「モノユエ」、「モノカラ」、また形式名詞「コト」に助詞が付いた「コトヲ」、「コトノ」、「コトユエ」、「コトカラ」などが、
- 2) では「間ニ（アヒダに）」、「頃ニ（コロニ）」、「時ニ（トキニ）」などの空間や時間を表す形式名詞に助詞「ニ」が付いたもの、「故ニ（ユエニ）」、「因/依/仍テニ（ヨツテニ）」「境/堺ニ（サカヒニ）」などの抽象名詞名詞や（動詞+接続助詞テ）に助詞「ニ」が付いたもの、
- 3) では「所デ（トコロデ）」、「ヲ以テ（ヲモツテ）」、「ニ就イテ（ニツイテ）」などの空間や時間を表す形式名詞や（助詞+動詞）に助詞「テ」が付いたもの、

などが中世期前後から見られる。これらはいずれも、名詞、動詞、副詞などに助詞「ヲ」、「ニ」、「テ」を付けた形式を持つ。

「ヲ」については形式名詞「モノ」に付いているために格助詞であると考えられるが、これが「モノヲ」のように接続助詞としてその前後の句の接続に関わっていくことも考えると、「モノヲ」の形式名詞「モノ」を、用言の連体形のように考えてこれを接続助詞と見ることも必要になるかと思われる。

助詞「ヲ」についての『日本語学研究事典』（2007）の記述を見ると、「ヲ」については、

「主として用言・助動詞の連体形に付いて、接続助詞として用いられる例も多く見られる。一般的に言えば、間投助詞→格助詞→接続助詞といった変遷が自然の流れと考えられるが、また、格助詞の「を」がもともと接続助詞の「を」の意味をその一面として含んでいたと考えることができるし、また、本来間投助詞の性格を強く持つ「ヲ」が間投助詞から転じて接続助詞となったと考えられるが、また、接続助詞が文の

終止に用いられた結果として間投助詞的色彩を強く持つようになったとも言える。」(同、236 頁、「助詞」の項。蜂谷清人執筆担当。下線は論者による。) とある。

格助詞から接続助詞への史的変遷については石垣謙二(1955)の『助詞の歴史的研究』が詳しいがこれを確認しても全ての格助詞が接続助詞と変化するわけではなく、上述の助詞「ヲ」のように格助詞から接続助詞と変化する助詞は、そもそもそのような変化を生じさせる要因を持った語であり、それが接続助詞としてはたらいたときにはその前後の語句について関係性を付けるようにはたらく、ということなのであろうと考える。

「ニ」も格助詞と接続助詞の両方に考えられる助詞である。『角川古語大辞典(第四版)』(1994)を確認すると、格助詞の意味として「状態を表す。副詞語尾の「に」や断定の助動詞「なり」の連用形の「に」に連続する。…(の)のように。…(という状態)で。として。」があり、さらに接続助詞の意味として「活用語の連体形に付いて、ある状況を示し、後句との間に種々の意味関係を構成して用いられる。」とした上で、「後句の場面を定める。格助詞に最も近い。」「継起的に起る事柄、または、出会う事柄を導く。」「前句と同趣の事柄を「その上に」という意で添加していうのに用いる。」と記述がある。(同、871 頁)

『日本語文法大辞典』(2001)の「に」の項目(山口明徳執筆担当)を確認しても同様に、格助詞の意味として「前に述べたことに更に付け加えることを示す。」としてさらに接続助詞の意味として、「前に述べたことに次のことを付け加える働きをするが、前後の内容に応じて意味が分かれる。」(同、586 頁)とある。

「テ」も格助詞と接続助詞の両方に考えられる助詞である。『角川古語大辞典(第四版)』(1994)には、「①時間的に継起する事態、または、空間的に共存する事態を並列する。②二つの事態の因果関係、または、対立関係を単純に示す。③修飾句として状態・手段・方法などを表す。④補助動詞「あり」「侍り」「候ふ」などに続いて、一つの動作の継続や状態を表すのに用いられる。」とある。

『日本語文法大辞典』(2001)を確認してみると、「て」に上接する、ある事態や状態(前件)が既に存在するものとして設定され(「て」によって示され)、後に述べる、他の事態や状態(後件)と関係づけられるのであるが、両者の関係性の違いによって、次のように整理できる。」とし、「①前件の事態・状態に続いて、後件の事態・状態が存在することを示す。事態の継起的関係を示す。「…て、それから」「…てから」の意。」「②前件の事態・状態と後件の事態・状態とが同時に存在することを示す。事態の並列的關係を示す。「…して」「…ながら」の意。」「③前件の事態・状態が、後件の事態・状態の原因・理由であることを示す。順接の関係を示す。「…ので」「…から」「…のために」の意。」「④後件の事態・状態が、前件の事態・状態から予想・期待されることに反する、又ははずれるもの(こと)であることを示す。逆接の關係

を示す。「…のに」「…けれども」「…が」の意。」(同、498～499頁、糸井通浩執筆担当。)とある。

ここで注目されるのは、格助詞「テ」の引用を表す意味と、接続助詞「テ」の原義として「テ」の前後件の事態の継起的関係(上記①)と並列的關係(上記②)が挙げられており、それらに関連が見られることである。

此島は、『国語助詞の研究—助詞史の素描—』(1966)において、

「て」の示す関係はこれを「継続的關係」と称している(略)。因果的關係、反戻的關係は、順接の別はあれ、これを広義の因果關係に含めるとすれば、「て」はその接続する上下の叙述を、因果としてとらえずに、単純に継続關係としてとらえる助詞である。しかし、継続關係はかなり広義に解せられなくてはならない。すなわち、客觀的・時間的継続に限らず、たとえ客觀的には継続していなくても、それが表現意識において継続と意識されれば、「て」の受持つところとなりうる。」

(同、157頁)とする。

此島の主張は「テ」による接続が「從属的」、「修飾的」であること、つまり言い換えれば「テ」は接続關係をつくりはするが、その接続關係の意味については明確に述べることはしない、という助詞であるということであろうと思われる。

山口も、『古代接続法の研究』(1980)において、

「て」の接続表現における最も基本的な意味關係は並列性であり、継起性・共存性も、そのうちどちらかが常に並列性と両立する点で、並列性の關係に次いで基本的であるといえる。」(同、268頁)

と述べ、

「て」自体はむしろ以下なる意味關係のあり方をも積極的には明示していないということもできる。(略)それ自体としては關係表示にきわめて消極的であるが、だからこそ、それを手段として活かせば、逆にどのような意味關係をも文脈に依存するかたちで表せるというのが、「て」の接続形式としてのいわば個性であったということができる。」

(同、268～269頁、下線は論者による。)

とする。

山口が述べるところは此島と類似しており、さらに「テ」の「意味關係のあり方を積極的に明示していない」(同、269頁)からこそその、「どのような意味關係をも文脈に依存するか

たちで表せる」(同、269頁) 点に、「テ」の意義を見ているようである。

上記から抽出されるところを取り、助詞「テ」は、接続関係をつくることがその主たる意義であり、接続関係の意味自体は特に表さない、別の言い方をすれば、それがために文脈に依存してあらゆる接続関係の意味を表せる助詞であるところでは考えておく。

以上、名詞、動詞、副詞などにこれらの助詞「ヲ」、「ニ」、「テ」を付けた形式は、当該の文において副詞句をつくるという共通した機能を以てはたらいっていると考えられる。

それを踏まえて本章では、助詞「テ」が接続詞として機能するようになったと考えられる接続詞「デ」の成立の問題を論じ、指示代名詞を基にする副詞句由来の接続形式の成立について述べる。またここで、接続形式の成立にあたってその関与が考えられる、文法化の考え方についても述べることにしたい。

7. 1. 2. 本章の目的

本章は、日本語接続詞「デ」が成立する過程について、文法化の観点から実証的に述べることを目的とするものである。『日本国語大辞典(第二版)』によれば、接続詞「デ」は、「接続詞「そこで」、「それで」などの「そこ」「それ」が略され、助詞「で」が自立語化したもの」(同、523頁)とされるものの、その過程については詳しく述べられていない。そこで本論ではそれを明らかにすべく、Traugott(1995)等が主張する文法化の観点から、「ソコデ」、「ソレデ」から接続詞「デ」が成立する過程について、形態、意味、機能の変化について通時的に用例を確認することで実証的に述べる。

7. 2. 先行研究とその問題点

「ソコデ」、「ソレデ」と「デ」について扱った先行研究には、大きく分類して6種類がある。以下、「ソコデ」、「ソレデ」の先行研究「デ」の先行研究の形式にして挙げる。重複したものは略す。

- ①意味や機能をまとめたもの。(「接続詞小辞典口語編」(1970)/吉田(1967)、(1970)石垣(1955))
- ②類語と意味、機能を比較したもの。(ひけ(1987)、(1997)、福島(1997)、林(1999)、趙(2001)、石島・中川(2004)、山口(2006)現代日本語研究会編(2011)/根岸(1969)、大竹(2000))

③言語習得上の観点から扱ったもの。(澁川 (1998)、深川 (2007) /阿刀田 (1977)、宇佐美 (2013))

④談話における機能を述べたもの。(有賀 (1993)、金 (2000)、碑田 (2004) /権 (2002)、(2005)、山本 (2004)、小出 (2009))

⑤方言などの言語変種の観点から扱ったもの。(沖 (2008))

⑥三形式の関係を述べたもの。(ひけ (1986)、田村 (2005)、竹内・岡崎 (2014)、(2018))

①～⑤の問題点として、「ソコデ」、「ソレデ」と「デ」の各々の形式についての記述はあるものの、この三形式の関わりについては特に触れてはいないことが挙げられる。そこで、本章では先行研究

⑥に注目し、これを踏まえた立場を採ることとする。具体的には、「ソコデ」、「ソレデ」などの指示詞由来の接続詞について「指示詞としての意味をすっかりすりへらして」いる(ひけ (1986)・86 頁)、ソ系列指示詞を含む接続詞に「接続詞に構成的なものとは非構成的なものとの両方が存在する」(田村 (2005)・86 頁)らの主張を踏まえ、指示詞由来の接続詞を「代示要素を構成要素とする接続詞」(竹内・岡崎 (2014)・133 頁)とし、「代示要素と助詞の組み合わせからなる名詞句と代示要素を構成要素とする接続詞の間を線引きすることよりも両者の一体性と連続性を認めることが重要である」(竹内・岡崎 (2018)・253 頁)という指摘を承け、その詳しいところを述べることで先行研究を補い、日本語接続詞研究についての記述を補足する。

7. 3. 「ソコデ」、「ソレデ」と「デ」の通時的様相 —通時的調査の範囲の指定—

まず、『日本国語大辞典 (第二版)』での接続詞「で」の項を確認すると、

「①前の事柄を受け、その結果、あとの事柄が生ずることを示す。」「『君、ねえ、本当の事を言ひたまへよ』『で、もし本当なら如何する気だね』(『多情多恨』(1896))「②会話文で、話相手に対して次の話をうながす時に用いる。それで (どうした)。それから (どうなった)。」「『国はどこじゃ』『紀州でござんす』『ムム、紀州。で』『母様と三人出ました』(『歌舞伎・幼稚子敵討』(1753))

を初出例として挙げている。①は近代、②は近世の資料の用例である。

次に、中世～近世初期に成立した辞書である『日葡辞書』(1603～4)と『ロドリゲス日本大文典』(1604～1608)を確認する。

『日葡辞書』には
「DE. デ (で)」として「この助辞には種々の用法がある。(略) [……の中で, ……において] の意。」
(同・182頁)

『ロドリゲス日本大文典』には
「助辞 DE (で) に就いて」「話しことばに使ふ。」として「1. 或場所に在るといふ意味」、「2. 道具」
「3. 理由」「4. 熱とかそのやうな物とかの為にといふ意」「5. 存在動詞で置き代へられる。」
(同・548～549頁)

と、二辞書とも「デ」を「助辞」として扱っていることが分かる(※章末補足)。

つまり、1600年代初期には「デ」は接続詞としては認識されていなかったことが確認できる。これらより、『ロドリゲス日本大文典』が刊行された1608年から『日本国語大辞典(第二版)』が接続詞「デ」の初出例として挙げる1753年の間に接続詞「デ」が成立したと考えられることとなる。しかし、『日本国語大辞典(第二版)』の②の例の「デ」はコピュラに由来するものであるとも考えられることから、本発表では②の例ではなく①の用例を接続詞「デ」の初出例と考え、1608年から1896年までの間に成立した文献資料を中心に調査の対象の範囲とすることとする。

7. 4. 「ソコデ」、「ソレデ」と「デ」の分類

前項で、接続詞「デ」の成立は1608年から1896年、つまり17世紀の初めから19世紀の終わりであると考えたこととした。そこでこの間に成立したとされる日本語の文献資料を中心に、さらに資料性による用例の有無の問題を解消するため、1608年を少し遡る中世末期の『天草版平家物語』(1592～3)、『天草版伊曾保物語』(1593)、『大蔵虎明能狂言集』(1642)を含めた資料から対話部分の「ソコデ」、「ソレデ」と「デ」の用例を採集し、その構文的な出現環境(文頭と文中のどちらに置かれるか)・指示詞性の有無(指示詞部分で表される内容が、具体的な語的要素としてその前部に現れているか)の上記二点によって、用例を【Ⅰ】～【Ⅲ】の三つの用法の型に分類し、今回使用した資料における初出例と共に示す。

・【Ⅰ】文中位置、指示詞性あり→「ソコデ」、「ソレデ」を「指示代名詞+格助詞」と考える。

- (1) まづ樋口の次郎二十余騎で搦手からまわす：残る六手わ町小路から河原え出て、そこでみな寄り合えと(『天草版平家物語』(1592～3) 卷第三 221頁、「そこで」中世末期)
- (2) (親) 〴身共ハ案内をいふほどに、汝ハそれではかまをきよ(聲) 〴畏てござ『大蔵虎明能狂言集』「二人袴」(1642) 415頁、「それで」中世末期～近世前期(この「それ」は直示用法の指示代名詞「それ」で「そこ」[場所]の意味を表す。))

・【Ⅱ】文頭位置、指示詞性あり→「ソコデ」、「ソレデ」を接続詞的用法の副詞と考える。

- (3) 「少しも牽引せいで、けんもほろろに言ひ放いて親類の許へ行って退けた。そこでイソポ シャントに言ふは、「ようこそ先は申したれ、」(『天草版伊曾保物語 (1593) 423～425 頁、「そこで」中世末期)
- (4) 「借銀が十貫匁ござります。(略)是が済みませいで、廓をお出でなさるゝ事がならぬ。それでの興茂八が、債方へ様々と詫言を致し、四分に扱ひまして、」(『傾城壬生大念仏』(1702) 76 頁、「それで」近世前期)

・【Ⅲ】文頭位置、指示詞性なし→「ソコデ」、「ソレデ」を接続詞と考える。

- (5) 何ぞ言ひ交した言葉が立たぬとやらいふやうな、むちやくちやしたことがありさうなぢや。そこでわしは家来筋の事なり。(『双蝶蝶曲輪日記』(1749) 194 頁、「そこで」近世後期)
- (6) とりわけ苗の出来もよし、南無阿弥陀仏。アノ、悦んでくれと言うたによつて、南無阿弥陀仏。それで、アノ祝うて名残の盃。(『碁太平記白石噺』(1780) 530 頁、「それで」近世後期)
- (7) 「ご存じの通り金澤には『はんけち』の刺繍が盛んでございませう。で、其をも土産の中へ加へやうと申すのですが、」(『鐘聲夜半録』(1895) 47 頁上段、「で」近代)

本章で扱った資料中で【Ⅰ】、【Ⅱ】、【Ⅲ】に分類した「ソコデ」、「ソレデ」と「デ」の用例が確認できた時期を(図1)に示す。

(図1) 【Ⅰ】、【Ⅱ】、【Ⅲ】に分類した用例が確認できた時期

	中世(～1603)	近世前期(～1751)	近世後期(～1867)	近代(1868～)
【Ⅰ】(ソコデ)	→			
(ソレデ)		→		
【Ⅱ】(ソコデ)	→			
(ソレデ)		→		
【Ⅲ】(ソコデ)			→	
(ソレデ)			→	
(デ)				→

※近世前期と後期は宝暦元年(1751年)を境とした¹²⁷。

¹²⁷ 「政治・経済に加え、文化の中心が一八世紀の半ばを境として江戸に移り、それに伴って日本語史の上でも、宝暦ごろをもって近世語は前期と後期に分かれるとする説が有力である。」(『日本語学研究事典』(2007)「近世語(後期)」の項(鈴木丹士郎執筆担当)よ

※近代は 1868 年から本発表で用例採集資料として扱った『金色夜叉』（前編～續々編）の成立時である 1903 年までを見た。

7. 5. 各時代の資料における「ソコデ」、「ソレデ」と「デ」について

[中世期の「ソコデ」、「ソレデ」]

中世期の「ソコデ」は（図 1）のように、【Ⅰ】と【Ⅱ】の用法が見られる。「ソレデ」は先述（2）の『大蔵虎明能狂言集』（1642）を書写年代から近世前期の資料と見ると、【Ⅰ】の用法の例は見つげがたい。また、『虎明能狂言集』には

- (8) 〴（略）さつまのかみの庄園五ヶ所給ひて、くんこうにはほこりたると申〴それでご
ざる（『虎明能狂言集』「青海苔」、261 頁）
- (9) 〴かた / \ ハ名取のなにがしでハなひか〴それでおりやる（『虎明能狂言集』「名取川」、188 頁）

の「ソレデ」の例があるが、(8) は「と申」が続く発話の引用部であり、(9) は「名取のなにがし」という人名であり、共に前部の体言相当部を指示する例であるので、この「ソレデ」は指示代名詞「ソレ」に格助詞「デ」が付いた例として考え【Ⅱ】の例とは見ない。よって、中世期は「ソコデ」には【Ⅰ】、【Ⅱ】の用法が見られるが、「ソレデ」には【Ⅰ】、【Ⅱ】共に用例が見つげがたいようである。

[近世前期から後期の「ソコデ」、「ソレデ」]

中世と変わらず「ソコデ」には【Ⅰ】、【Ⅱ】の用法が見られる。そしてこの時期には「ソレデ」にも【Ⅰ】、【Ⅱ】の用法が見られるようになる。ここで「ソコデ」と「ソレデ」の指示性の質の差違について考えてみたい。先述した【Ⅰ】の用法の例（1）、（2）と【Ⅱ】の用法の例（3）、（4）の「ソコデ」、「ソレデ」には指示性があるが、それを確認すると（1）、（2）とも同一の話し手による発話であり、（1）は「ソコデ」と同文中にその指示内容である「河原」が、（2）も「ソレデ」の指示内容が直示的に実際の場面（「その場で」の意味）として存在する例である。（1）の「ソコデ」、（2）の「ソレデ」の指示内容（ 部）は共に体言性の「モノ」である。

一方、（3）は同一の話し手による発話であり「ソコデ」が置かれている文の前文に「ソコデ」の指示内容（親類の許へ行って退けたコト）が、また（4）も同じく「ソレデ」が置かれている文の前文までに「ソレデ」の指示内容（借銀の返済が済むまでは廓をお出でなさる事がならぬコト）が存在する。（3）の「ソコデ」、（4）の「ソレデ」の指示内容（ 部）は共に述語の構造を持つ句であり用言性の「コト」である。

り引用。)

【Ⅰ】と【Ⅱ】の本質的な差違は、文の形式の差違ではなく、指示内容が「モノ」であるか「コト」であるかの差違にこそあり、文の形式の差違はこの本質的な差違が文の上に顕在化したものとする。【Ⅰ】は「ソコデ」、「ソレデ」によってその前部に既出の「モノ」を踏まえ、その語を文の結束の手段としているのに対し、【Ⅱ】は既出の「コト」を踏まえる、つまりその「コト」の述語部文で述べられている状況全体を踏まえてそれを文の結束の手段としているのであり、「コト」が述語の構造を持つ句であることから、それゆえに【Ⅱ】の「ソコデ」、「ソレデ」は【Ⅰ】のそれら二形式よりも接続詞に近いと考えられ、単にこれらが文頭に置かれるようになったから接続詞に近くなったということではないと思われる。さらにこの時期には、

- (10) 「もふこつちの手へにぎつたもどうぜんだものを、延喜のわりい。」「イヤそこであたるも八卦、あたらぬも八卦。」(『東海道中膝栗毛』八編中、471頁)
- (11) 「エゝなんの事じや。かごかきのほうから、ねぎるといふはめづらしい。まゝよぼうぐみ、壹〆五百でやらまいかい。サア旦那めしませ / \。」「それでいゝか。」(『東海道中膝栗毛』五編上、242頁)

などの例も見られる。これらの、複数の文に跨る形でかつ話し手と聞き手が交替する対話文の例の「ソコデ」、「ソレデ」は前置された文の内容を踏まえ、そこに指示内容が語要素として見られるものの、かなり接続詞に近い用いられ方をしていると思われる。

〔近世後期から近代の「ソコデ」、「ソレデ」〕

この時期の「ソコデ」、「ソレデ」には、上記(10)、(11)の例以上に接続詞に近い用いられ方をしている例が見られる。これらを【Ⅲ】の例と考える。

- (12) 「わたくしはゑらいたばこずき、(略) コリヤ自分でかうてのんでは、たまらんとおもふて、それからたばこ入はやめて、きせるばかり、もてあるきおります」「そこで人のばかり、のみなさるのだな」(『東海道中膝栗毛』五編下、271頁)
- (13) 弥次「(略)。卒尔ながら、おまいがたは、どこのおかたでござりやすね」 やつかいぼう「ハゝアこのあたまの御ふしんかいな。こちや空也堂の僧じやわいな。こちの宗体は、むかしから由緒があつて、こないに身には染衣をちやくしながら、天窓は大俗凡夫じやわいな 弥次「それできこへやしたが、なぜ又、おまいがたのみなさる所を空也堂といひやすね」(『東海道中膝栗毛』七編下、426頁)

(12) の話し手の発話には『たばこは自分で買わず人から貰う』ことが語要素、語的

説明として現れてはいないが、聞き手は『たばこは人から貰っているのだ』と推論して、「そこで（略）のみなさるのだな。」と発話しているのであり、この「ソコデ」は「ソコデ」前部にその指示内容が語要素として現れた副詞「ソコデ」の例というよりも、「ソコデ」の前後を関係付けた接続詞「ソコデ」の例であると考えて良いかと思われる。

(13) では、弥次郎と北八が北野天満宮に参り、紙屋川のほとりにある茶屋で休憩を取ろうとした際に茶屋で出会った僧が有髪であったのを見て不審に思い、その僧に髪について尋ねる場面である。普通、僧侶は髪を剃り無髪であるはずなのに、眼前の人物は僧侶の風体でありながら有髪であり髪を結っていることに不審を感じた弥次郎がそれについて尋ねると、件の僧侶が、自分たちは空也堂の僧侶であり、自分たちの宗体の由緒では、身には僧衣をまといながら髪は俗のままであるのだということを答えている。弥次郎の問いかけに対する僧侶の返答は「こちらの宗体は、むかしから由緒があつて、こないに身には染衣をちやくしながら、天窓は大俗凡夫じやわいな」というものであり、『（どうして有髪なのかと問われれば、）それは…であるからだ。』といった、有髪である理由についての説明ではなく、『自分たちの宗体はむかしから由緒があつて、身には僧衣をまとうが髪は（俗にあるときの）そのままだ』とその有り様をただ答えたものとなっている。僧侶から、語要素を以てする有髪であることについての理由の説明はここでは見られない。しかし、それを聞いた弥次郎は『この宗体の僧侶にとっては有髪であることは『むかしからの由緒』に適っており、何ら不審はないのだ。むしろこれ（身には法衣をまといながら有髪であること）がこの人たちの『由緒』であるのだから、そもそもこの姿に不審を感じる必要はなかったのだ』と、僧侶の「こちらの宗体は、むかしから由緒があつて、こないに身には染衣をちやくしながら、天窓は大俗凡夫じやわいな」という返答から推論をして合点し「それできこへやしたが、」と発話しているのであり、この「ソレデ」は「ソレデ」前部にその指示内容が語要素として現れた副詞「ソレデ」の例というよりも、「ソレデ」の前後を関係付けた接続詞「ソレデ」の例であると考えて良いかと思われる。

金水（1999）は、「（論者注：ソ系列の）文脈指示用法は、言語的文脈によって形成される状況を指示の領域とする。指示の値は言語的文脈に依存し、その指示対象の言語外の世界における存在が直接保証される訳ではない。」（同・87頁）と述べる。言語外の世界に既定の値としてある内容であれば、それについて推論をはたらかせる余地はない。「ソコデ」、「ソレデ」の形式に推論がはたらく余地があることが、両語が接続詞としてはたらく条件の一つであると考えられる。

[近代期の「ソコデ」、「ソレデ」と「デ」]

近代以降には「デ」の形式が見られ始める。

(14) <<(7) 再掲>> 「ご存じの通り金澤には『はんけち』の刺繍が盛んでございませう。

で、其をも土の中へ加へやうと申すのですが、」（『鐘聲夜半録』（1895）、47頁上段）

- (15) 店のものは函の彼方より、「あい / \ さやうでござい。」と大きく答ふ。秀は打笑み、「で、これにはね、ちゃんとたねがあるのでございますよ。」（『一之巻』（1896～7、98頁下段）

などである。(14)は話者交代がなく、(15)は話者交代がある例であるが、「デ」の場合そもそも指示詞部分がない形式であり、また、両例共にその前文末に助動詞、終助詞が付いていることから、これらの「デ」は接続詞としてはたらいっていると考えられる。上記のように近代以降には接続詞の「ソコデ」、「ソレデ」が接続詞の「デ」と併存する形で見られる。これらを踏まえて下に、各時代における【Ⅰ】、【Ⅱ】、【Ⅲ】の比率を示す。

(図2) 各時代における【Ⅰ】、【Ⅱ】、【Ⅲ】

	【Ⅰ】			【Ⅱ】			【Ⅲ】			計
	①	②	③	①	②	③	①	②	③	
中世	5	0	0	3	0	0	0	0	0	8
	63%	0%	0%	37%	0%	0%	0%	0%	0%	100%
近前	1	2	0	1	0	0	0	0	0	4
	25%	50%	0%	25%	0%	0%	0%	0%	0%	100%
近後	6	16	0	14	23	0	30	25	0	114
	5.3%	14.1%	0%	12.3%	20.1%	0%	26.3%	21.9%	0%	100%
近代	0	35	0	0	12	0	14	30	36	127
	0%	27.6%	0%	0%	9.5%	0%	11.0%	23.6%	28.3%	100%

※1 上段に①「ソコデ」、②「ソレデ」、③「デ」の用例数、下段に計に対するその%を表す。

※2 「近前」は近代前期、「近後」は近代後期を表す。

3. 2. (図1)、上記4. 4 (図2) より、接続詞の「デ」は接続詞「ソコデ」、「ソレデ」の成立を受けたものであることが分かる。『日本国語大辞典 (第二版)』は接続詞「デ」の成立について「接続詞「そこで」、「それで」などの「そこ」「それ」が略され」(同、523頁) たものであると説明するが、単なる省略であれば接続詞「ソコデ」、「ソレデ」が成立した近世後期と期を同じくして接続詞「デ」も共時的に成立してよいはずが近代になってから成立していることから、これは共時的な変化ではなく通時的な変化と考える方が妥当であると思われる。¹²⁸

¹²⁸なお、本章で扱った「デ」について、コピュラ由来の接続詞であるとする考え方をする説もある。時枝誠記(1950)は『日本文法口語篇』で「「それで」といふ接続詞については、なほ附加へるべき重要なことがある。「それで」は、その成立について云へば、「それ」と助動詞「だ」の連用形「で」の結合であり、」(169～170頁)とし、接続詞「デ」を指示代名詞「ソレ」と助動詞「ダ」に由来する語であると述べる。しかし、本論は論文本文で述べてきたように、接続詞「デ」の成立について時枝とは異なる立場をとる。本論で述べてきたように、論者は接続詞「デ」について、指示代名詞「ソコ」・「ソレ」に接続助詞「テ」が付いた「ソコデ」・「ソレデ」の「ソコ」・「ソレ」が取れ、そこに文法化がはたらいて成立した語であると考え。このように考えると、中古以前より日本語に見られる「カクテ」・「サテ」と接続詞「デ」を成立の系統が同じである(副詞、接続詞の「カクテ」・「サテ」が指示副詞「カク」・「サ」に接続助詞「テ」が付いてできた語であり、接続詞「デ」が、先述したように、指示代名詞「ソコ」・「ソレ」に接続助詞「テ」が付いた「ソコデ」・「ソレデ」の「ソコ」・「ソレ」が取れ、そこに文法化がはたらいて成立した語である。)と、その成立について統一的な説明が可能になるからである。

しかし、接続詞「デ」が時枝の述べるコピュラ由来の接続詞と共通するところもまたあると思われる。コピュラ由来の接続詞としては「ノダカラ」、「ダカラ」などがあるが、野田(1995)は「ノダカラ」について「「の(だ)」に接続助詞の接続した諸形式には、「(の)だ」が前件を名詞化するという目的だけのために用いられているものと、それ以上の目的で(つまり、何らかのムードをになう助動詞として)用いられているものがあり、「のだから」は後者であると考えられる。」(224頁)とする。また、「ダカラ」について、蓮沼(1991)は「自分の発言の土台となる情報や知識を、既有的のものとして扱う」(149頁)とし、岡本・多門(1998)は「因果関係を導いていると考えることができる(Schiffrinの発話行為のレベル)。ただ、その関係を言語的に明示するならば、(略)「聞き手はわかっているはずなのにわからないと言う→だから…と言うんだ」という、メタコミュニケーション的な因果関係も含意されることになると思われる。」(58頁)とする。野田、蓮沼、岡本・多門の見解は「ノダカラ」、「ダカラ」について、前件や前文を原因として話し手や聞き手が推論を行い、後件や後文にその推論の結果を述べるという、推論を経た因果関係を表す形式であると考えているところにあると思われる。この性質については本論で扱う「デ」と通じるところがあろう。

また、コピュラ由来の接続詞の元であるコピュラに注目した際に、先述の時枝が述べるように、文末形式に用いられるコピュラである「ダ」について確認すると、明治の開花期の日本語の文体として、明治20年に『浮雲』、同21年に『あひゞき』、同22年に『めぐりあひ』などに二葉亭四迷によって文末が「ダ」となる「だ調」の文体が使われたことがその始まりとされている。(山本正秀「明治以後の文体—口語文の成立と展開—① 開花期の文体をめぐって」『講座 現代語2 現代語の成立』(1964)、林巨樹「第四章 現代の文体」『講座国語史第6巻 文体史・言語生活史』(1972)等による。)また、「ダ」については此島正年(1973)『国語助動詞の研究 体系と歴史』によれば、中世の室町時代の抄物などに見られる「デアル」が『天草版平家物語』などに「デア」として見られ、それ

7. 6. 日本語接続詞「デ」の成立—文法化の観点から—

このように、本発表では日本語接続詞「デ」の成立は通時的な変化と考え説明されるべきであるとする。この変化を説明するのに文法化 (grammaticalization) の考え方を採用する。文法化の定義として本論では Traugott and König (1991) が述べた「時間の経過の中で、語が文法的・形態統語的形式として新しい立場を獲得し、以前にはコード化されていなかった関係をコード化するようになる」(同・189頁) プロセスと定義する。文法化に伴う現象として再分析や意味の漂白化が挙げられ、再分析の際には主観化もはたらくとされ、Traugott は再分析の例として *be going to* が「(「目的を伴う運動を表す動詞、〈～するために行く〉)」が(未来を表す)助動詞になったとき」(同・61頁)などを、意味の漂白化の例として「*have* が完了や未来を表す標識へと発達した際の「持っている」という所有の意味の消失」(同・62頁)などを挙げる。また音韻的弱化、語用論機能の強化も文法化の性質とし、(同・86頁)。文法化の例として *in fact*, *indeed*, *besides* を挙げるが、このうち *indeed* の名詞から談話標識への変化は本論での指示代名詞「そこで」、「それで」から接続詞「で」への変化と相似性があると考えられる。

Traugott (1995) が挙げた英語 *indeed* の変化は、13世紀に名詞 *deed* であったのが14～15世紀に節内副詞句 *in dede* となり、16世紀には文副詞 *in dede*、17世紀以降は談話標識 *in*

が西国系の抄物や同じく『天草版平家物語』などに「ヂヤ」として、また東国系の抄物などに「ダ」として見られ、それがさらに近世の江戸時代の『浮世風呂』などに「ジャ」として見られることが述べられている(70頁～)。此島はこの「ダ」について、「歌舞伎や浄瑠璃などに東国その他いなか者のことばとしてときに「だ」の見えることがある(湯澤幸吉郎『徳川時代言語の研究』三三〇頁)。(此島、同、72頁)とした上で、「好た同士は誰しもが同じ事だゆゑ、早く夫婦にして遣ふ(春色雪の梅・二三)の例を挙げて「なり」系の連体形「な」も現代語と比べてはるかにその用法が自由であったことを述べたが、「ぢや」や「だ」にもその傾向があったわけで、今の東北方言などの連体形ダの自由な用法が、通時的にこれの継承か、あるいは方言独自の闊達さがたまたま古用法と一致したのか」(同73頁)とする。さらに、「ダ」については「明治になってからは文章語に採用されて口頭語的」(同74頁)とも述べる。要するに、文末形式としてのコピュラ「ダ」は中世の室町時代から「デアル」→「デア」→「ヂヤ」(西国系抄物など) / 「ダ」(東国系抄物など) という変遷を辿って室町時代から見られたが、近代となって明治時代に「ダ」体の文体が成立して「明治になってからは文章語に採用され」たこと(同74頁)、またそれは「口語的」とであると認識されていたこと(同74頁)などから、文末形式として見られるようになったものであると思われる。

本論本章(図2)によれば、接続詞「で」が見られるようになったのは近代以降(1868年～)であり、これは文末に助動詞「ダ」を以てする「ダ」体の文体が成立した時期と一致する。「ノダカラ」、「ダカラ」が成立した時期も近世末期～近代にかけての時期[『日本国語大辞典(第二版)』(2001)によれば、「だから」の項、826頁の初出例「洗湯へはいつて帰て来ると、忽地腹はへっこりサ。然(ダ)から先熱盛にして十三盃と遣らかしたが」(『滑稽本 七偏人(1857-63)五・下』)、「やまぶきいといふ物は花がさいても実がならねへからのことをひきだしたのはおそれいったもんじゃアねへか。だから理づめほどこわいものはねへと思ふヨ」(『安愚楽鍋』(1871-72)二・下)が確認できる。]である。これらも「ダ」体の文体が成立した時期と一致する。

deede, indeed と変化したものである。日本語接続詞「デ」の場合、中世（17世紀頃）までの時期に既にあった指示代名詞「ソコ」に助詞「デ」が付いた形式であった「ソコデ」と、近世前期（18世紀前半まで）までに指示代名詞「ソレ」に助詞「デ」が付いた「ソレデ」の形式がまず存在しており、初めそれらは文中に置かれその前部に語要素として存在する内容を具体的に直接的に示す用法をもってはたらいっていた。次に、「ソコデ」は中世から、「ソレデ」は少し後れて近世前期までに二形式とも文頭に置かれ、文修飾副詞のようにその前部の状況を踏まえ、文脈的に示す用法をもってはたらくようになった。次に、近世後期（18世紀半ば頃）にまず「ソコデ」が、それに後れて（18世紀後半頃）に「ソレデ」が共に文頭で接続詞としてはたらく例がみられるようになり、さらに近代（19世紀後半頃）になって接続詞「デ」の例が見られるようになったと考えられる。

Traugott (2011) は文法化の基本的な考え方として、1980年代から1990年代初頭にかけての認知言語学の影響が大きいこと、「意味変化、とりわけメタファー化（略）が、文法化における主要なメカニズム」であること（同・61頁）を述べる。Traugott and König (1991) は「アナロジー的な志向やメタファー化に基づく変化であるように思えるものは、実は連続した会話の中で起こる語用論的含意〔福元訳注：話し手と聞き手のやりとりにおいて、文脈から生じる含意のこと〕に対話者が注意を払い、その含意を利用した結果である」と述べる。

接続詞としてはたらく「ソコデ」、「ソレデ」と「デ」がまとまってみられるようになった近代の『金色夜叉』（1897）における、【Ⅲ】に分類される各々の形式の前後での話者交替の有無を示すと、「ソコデ」（0%）<「ソレデ」（11.1%）<「デ」（24.1%）である。先述（図1）、（図2）より、接続詞「デ」は近世後期から見られた接続詞「ソコデ」、「ソレデ」に後れ、近代以降に見られるようになった例であり、そこには指示詞部「ソコ」「ソレ」の意味の漂白化、前部の語要素を具体的に示すのではなく、前部の状況を文脈的に示すようになった再分析、音韻的弱化、語用論機能の強化、接続詞「ソコデ」、「ソレデ」と接続詞「デ」の成立に時間差が認められることなどから、この変化は文法化の観点によって説明できると考えられる。また、接続詞「ソコデ」、「ソレデ」よりも接続詞「デ」の前後に目立って見られる話者交替も、先述の「連続した会話の中で起こる語用論的含意に対話者が注意を払い、その含意を利用した結果」（Traugott (2011)・62頁）成立する形式と考えられる。聞き手は言語要素として表れていない話し手の言い分を推論して発話を行っている。「文法化は「手続き型」（procedural）の用法、つまり、発話を解析し理解するのに必要となるさまざまな推論や算定を制約する用法の発達を含むということがある。」（同・62頁）とあることから、接続詞「デ」の成立は、接続詞「ソコデ」、「ソレデ」の指示詞部の省略という共時的な語形変化というよりも、文法化の観点から説明されるべき通時的变化であると言ってよいと考えられる。

7. 7. 接続詞「デ」の成立を脱文法化の観点からは考えない理由

7. 7. 1. 脱文法化の定義について

なお、この接続詞「デ」の成立については、文法化ではなく脱文法化 (degrammaticalization) であるとする考えもある。既にこれまでに述べてきたように、本論ではこの考えは採らないが、以下になぜ接続詞「デ」の成立について脱文法化の現れとは考えないかについて述べたい。

脱文法化 (degrammatialization) は、先述した Traugott and König (1991) が述べた「時間の経過の中で、語が文法的・形態統語的形式として新しい立場を獲得し、以前にはコード化されていなかった関係をコード化できるようになる」(同・189頁) プロセスであるところの、文法化を前提とした概念である。Hopper&Traugott (2003) は文法化を内容語 (content words) 又は語彙項目 (lexical item) が機能語 (functional words) 又は文法語 (grammatical words) に変化するというような可視的な変化として現れる言語の構造変化として述べ、さらに同 (2011) では「文法化とは、文法的要素が(史的に) 発達して、関連する一連の機能的・語用論的・意味的・形態統語的・音韻論的变化が生じることと捉えることができる。」(同、「文法化と(間)主観化」(福元広二訳)、59頁) とし、そこに

content item > grammatical word > clitic > inflectional affix (> ϕ)

(Hopper&Traugott (2003) ,pp.172)

という変化の行程を示す。この行程の左から右へのシフトは文法化に見られる変化とされる。先述の Norde (2010) は、この行程変化を (11) としてさらに、

On the basis of (11), degrammaticalization will be provisionally defined as a single shift from right to left on the cline. Three important properties of degrammaticalization need to be mentioned at this point.

First, there are no examples of degrammaticalization ‘all the way up the cline’ – a degrammaticalization chain from suffix all the way to lexical item has not been attested. (abbreviation)

Secondly, Haspelmath’s (1999a:1064) observation that ‘in grammaticalization the identity of the construction and the element’s place within it are always preserved’ is relevant for degrammaticalization changes as well.

(abbreviation)

Thirdly, degrammaticalization must result in a novel gram, that is, when grams can however marginalized, the change will not qualify as a case of degrammaticalization.

(Muriel Norde(2010)“Degrammaticalization”, pp.8~9)

上記 Norde (2010) によれば、脱文法化は上記 (11) の行程がたどるのとは反対に「右

から左へ」の行程をたどり、脱文法的な接辞から接辞、文法的な語、語彙的な要素と変化するとした上で、1) 脱文法化が示すこの連続的な変化の全行程をたどる語例の証明はないこと、2) 文法化における構文と語の出現位置についての同一性の保持は、脱文法化においても同じく関係があること、3) 脱文法化は新しい文法における結果としてあらねばならず、その文法状況が、(構文の主要な位置から見て) 脇や周縁的な位置に常に置かれるようになるような文法的な機能の弱化の連続を示すとしても、そのような変化は脱文法化としては見なされないとある。

脱文法化の示す変化の行程が、文法化の示す変化の行程とは反対方向であることについて Norde (2010) は、その変化の行程が *counterdirectionality* (逆方向性:後述) であるとはしながらも、

In other words, degrammaticalization is not the mirror image of grammaticalization in the sense that it cannot be the complete reverse of a grammaticalization chain, neither on the token nor on the type level.

(Muriel Norde(2010) “*Degrammaticalization*”, pp.112)

とし、脱文法化は、話しことばと書きことばのどちらにおいても、文法化の変化の連鎖の完全なる反転ではないことを明言している。

これらを踏まえて本論では脱文法化の定義として、ここでは Norde(2010) が主張する

As a superordinate definition for all types of degrammaticalization, I propose the following:

Degrammaticalization is a composite change whereby a gram in a specific context gains in autonomy or substance on more than one linguistic level (semantics, morphology, syntax, or phonology).

(Muriel Norde(2010) “*Degrammaticalization*” , pp.120)

これを脱文法化の定義としたい。

さらに、Norde(2010) は

I will briefly discuss four basic characteristics that all types of degrammatialization have in common: (i) counterdirectionality (ii) novelty (iii) infrequency (iv) discontinuity

(Norde(2010) “*Degrammaticalization*” , pp.120~121)

と、全ての脱文法化の型は普遍的に、(i) 逆方向性 (ii) 新奇さ (iii) 低頻度性

(iv) 非継続性・非連続の、4つの基礎的な性質を有することを指摘している。

そこで、論者が接続詞「で」の成立を脱文法化とは考えない理由を、その成立が上記の Norde の主張 (i) から (iv) が適応しないものであると考えるところを述べることで説明したい。

7. 7. 2. 接続詞「デ」の成立が脱文法化で説明できない理由

(i) counterdirectionality (逆方向性)

逆方向性とは、脱文法化は文法化が示す、
content item > grammatical word > clitic > inflectional affix (>φ)
(Hopper&Traugott (2003) ,pp.172)

という変化の行程と逆の方向の変化の行程、つまり上記で示した行程の逆に右から左へ *inflectional affix > clitic > grammatical word > content item* という変化の行程をたどるとするものである。しかし、本論で述べてきた接続詞「デ」の成立は、

- 【Ⅰ】 指示代名詞「ソコ」・「ソレ」 + 格助詞「デ」
- 【Ⅱ】 副詞「そこで」・「それで」(出現位置は文頭。)
- 【Ⅲ】 接続詞「ソコデ」・「ソレデ」・「デ」

と考えるものである。この各行程を確認すると、

- 【Ⅰ】 指示代名詞「ソコ」・「ソレ」の先行詞が前文に語素的要素としてあるか否かという問題。
- 【Ⅱ】 接続詞的用法を持つ副詞の「ソコデ」・「ソレデ」の先行部が前文までに語素的要素、句素的要素、文的要素としてあるか否かという問題。(【Ⅱ】の場合はあると考えられる。)
- 【Ⅲ】 接続詞的用法を持つ副詞の「ソコデ」・「ソレデ」の先行部が前文までに語素的要素、句素的要素、文的要素としてあるか否かという問題。(【Ⅲ】の場合はないと考えられる。)

なのであり、【Ⅰ】から【Ⅱ】の変化について、指示代名詞や格助詞が副詞となった点を捉えると、この場合の副詞は指示副詞であることから、*grammatical word > grammatical word* となる。また、仮にこれが指示副詞であることを問題とせず(情態副詞のような一般の)副詞に変化したと捉えるとして *grammatical word > content item*

と考えるとしても、接続詞「デ」の成立そのものである【Ⅲ】における変化は、接続詞「ソコデ」、「ソレデ」から接続詞「デ」への変化であるので **grammatical word > grammatical word** となる。つまり、接続詞「デ」の成立は上記の脱文法化に沿うものではない。

各行程をたどるのではなく【Ⅰ】の指示代名詞「ソコ」・「ソレ」＋格助詞「デ」の格助詞「デ」に注目して、接続詞「デ」の成立を〔格助詞「デ」が接続詞「デ」に変化した〕と考えた¹²⁹としても、格助詞も接続詞も **grammatical word** なのであることからこの変化もまた **grammatical word > grammatical word** となり、やはり接続詞「デ」の成立は上記の脱文法化に沿うものではないと言えよう。

また、格助詞も接続詞も、語彙的な意味ではなく文法的な機能を以て文に参加する語であると考えられるが、格助詞は文内に接続詞は文頭に置かれ、これは、先述した

Secondly, Haspelmath's (1999a:1064) observation that 'in grammaticalization the identity of the construction and the element's place within it are always preserved' is relevant for degrammaticalization changes as well.

(Norde (2010) pp.8~9)

に抵触している。さらに日本語の接続詞は文頭に位置してはいるが、当該文の命題から外れて、当該文とその前後文を関係付ける機能を以てはたらくものであって、これを語彙的な意味を持つ語 (content item) として考えることは、他の content item との整合性から言っても問題があると思われる。

元来、文法化、また脱文法化の考え方は、構文を基に文法を考える統語論¹³⁰を基にしており、それは音韻を基に文法を考える形態論¹³¹、また品詞論¹³²とは異なると思われる。

¹²⁹ 2019年度日本語学会春季大会研究発表(2019年5月18日(土)、於:甲南大学)の会場において、発表後の質疑応答時に論者が受けた指摘による。

¹³⁰ 文を対象とする研究分野を文論という。表現の形と意味の関係の解明をめざす文法研究において、文論は文における形と意味の相関の解明をめざす。その中で文の形、すなわち文の構造を扱う分野が構文論 (syntax) である。(『日本語文法事典』「構文論(統語論)」の項(217頁)、益岡隆志執筆担当。)

¹³¹ 形態論は、単語の内部構造を扱う。形態論は、単語のさまざまな文法的な語形を体系づけるものである(『日本語文法事典』「形態論」の項(175頁)、村木新次郎執筆担当。)

¹³² 単語を文の構造ととらえるための単位体としてとれ、その全てを、形態(語形・活用)、意味(語義)、構文的職能(文の成文)などの観点から類別しようとする研究。その類別の結果、得られた分類カテゴリが品詞となる。どのような品詞(種類・名称・分類基準)を設けるか、また、個々の単語の品詞認定など、「品詞体系」「品詞分類」が考察され

日本語の接続詞は統語論を基にするか、形態論、また品詞論を基にするかで異なる様相を示す。接続詞は、統語論を基にすれば実質的な語彙の意味を以てではなく、文法的な機能を以て文に参加する語なのであり、格助詞もその点は同じである。統語論で考えれば接続詞と格助詞は同じく機能語であると言える。

しかし、形態論、品詞論を基にして考えると接続詞は接続詞、格助詞は助詞であり、さらには接続詞は自立語、助詞は付属語となる。接続詞「デ」を脱文法化で考える見方はむしろこの形態論、品詞論を基にした（それが適切であるか否かは今措くとして）見方であるように思われる。橋本進吉が主張した文節¹³³の考え方からすれば、接続詞は、それ単独で文節を作ることができる自立語であり、助詞は、それ単独では文節が作れない付属語である。先述した脱文法化の行程を改めて見ると、(格)助詞「で」にのみ注目し、接続詞「で」の成立を、助詞「デ」が接続詞「デ」へと変化したと見え、助詞(付属語)が接続詞(自立語)に変化したと見えることを以て脱文法化であるとするのは、不適切であると考えられる。

文法化、また脱文法化は日本語を含む言語に普遍的な、構文論を基に考えられる理論なのであり、日本語の文節の構築に着目した日本語形態論、日本語品詞論を基に考えられる理論ではなく、ここまで述べたように、論者自身、接続詞「デ」の成立については格助詞「デ」のみに注目するのではなく、

1) 指示代名詞「ソコ」・「ソレ」 + 格助詞「デ」

→2) 副詞「ソコデ」・「ソレデ」

→3) 接続詞「ソコデ」、「ソレデ」

→4) 接続詞「デ」が成立

という過程を考えており、その一連の通時的変化は構文論を基にした文法化の考え方で説明ができることが、その理由である。

ii) novelty (新奇さ)

Norde(2010)によれば、新奇さも脱文法化の要因である。

る(『日本語文法事典』「品詞論」の項(528頁)、加藤久雄執筆担当。)

¹³³ 「私は/昨日/友人と/二人で/丸善へ/本を/買ひに/行きました。の文は、右の如くに八つに句切る事が出来るが、実際の言語としてはそれ以上に句切る事はない。かやうに文を實際の言語として出来るだけ多く句切った最短の一句切りを私は假に文節と名づけてゐる

(神保格氏の言語学概論には、之を句と名づけ、松下大三郎氏の標準日本文法には、初め之を念詞と名づけ、後に詞と改めたが、句といふ名は、英語の clause の譯語として用ゐられる事多く、詞は單語の一種類の名として用ゐられる場合が多いから、これ等と紛れない爲に新しい名稱を用ゐたのである文節の名は必しも適當であるとは考へないが、その性質が音節に似た點が少くないのでかく名づけたのである)。(橋本進吉(1934)『國語法要説』「(二) 文節」七頁、『國語科学講座 -VI- 國語法』明治書院)。

A crucial prerequisite for a case to qualify as degrammaticalization is that it must result in a novel gram, as I will now illustrate by a brief discussion of the development of English dare.

(Muriel Norde(2010)“Degrammaticalization”, pp.121)

として、英単語の *dare* が助動詞から動詞へと変化した例を挙げる。しかし、Norde はすぐに、Traugott はこれに反対したことを挙げる。

But even if modal dare had become obsolete, Traugott argues, this is not a case of degrammaticalization because main verb uses and modal verb uses had always coexisted, which means that there is no evidence that (new) main verb uses arose out of previous modal ones.

(Muriel Norde(2010)“Degrammaticalization”, pp.121)

それを受けて Norde もまた、

I agree with Traugott and Haspelmath that these are not cases of degrammaticalization. In degrammaticalization, 'less' grammaticalized functions must be shown to derive from 'more' grammaticalized functions. If they continue, or develop out of, a less grammatical function that had always been around, however marginalized, the change will not qualify as a case of degrammaticalization.

(Muriel Norde(2010)“Degrammaticalization”, pp.122)

とする。

論者も上記と意見を同じくするものである。先述したように接続詞「デ」の成立は *dare* の例とは異なり、機能語（助動詞）から実質語（動詞）へと変化するようなものではない。また、「比較的より以上に」機能的であった語から、「比較的より以下である」機能的である語への変化として見られるものでもないからである。

(iii) Infrequency (低頻度性)

A striking difference between grammaticalization and degrammaticalization, observed by grammaticalizationists and their critics alike, is that the number of degrammaticalization case studies is outnumbered by far by the number of grammaticalization case studies. Estimates of the grammaticalization/ degrammaticalization ratio range from '10:1' (Newmeyer 1998:275-6) to '100:1' (Haspeimath 1999:1046).

(Muriel Norde(2010)“Degrammaticalization”, pp.122)

Norde(2010)によれば、脱文法化の研究事例は文法化の研究事例よりもずっと多く、そしてまた脱文法化は生じる頻度が少なく、文法化の10分の1または100分の1であるというのである。脱文法化は文法化に比した際、その極めて低い頻度性のために却って活発な議論が生じているとのことであろうか。

しかし、この言及は脱文法化と文法化を対照して考察する際にはある程度の参考にはなるだろうが、論者の当該の問題には適応しない言及であろうと思われる。この頻度性の問題は、文法化、脱文法化の定義により言語事象がそれに該当するか否かの判断も異なつて来、その結果としての文法化、脱文法化の生起する頻度も当然変わつてこよう。そのため文法化と脱文法化の生じる頻度について互いを比す形でその高低を述べることは、その客観的な有効性を再度考えてみるべきであると思われる。

(iv) Discontinuity (非継続性・非連続性)

What sets apart degrammaticalization from grammaticalization is that in most cases, degrammaticalization entails a single sift from right to left on the cline of grammaticality.

(abbreviation)

This is mainly observation, not something which is inherent in the definition of degrammaticalization. The reason why there are no degrammaticalization chains is that circumstances under which a degrammaticalization can take place are very rare, and it is quite unlikely that such circumstances would arise twice in the history of a given morpheme.

(Muriel Norde(2010)“Degrammaticalization”, pp.123)

Norde(2010)の主張によれば、脱文法化は非継続性・非連続性をもつ。脱文法化を文法化から分離させて設定するのは、ほとんどの場合において脱文法化は文法化の変化の連鎖において、「ただ一つの」右から左への変化のシフトを伴うことによる。(略)これ(論者注:脱文法化のこのような特性は)は主に観察によるものであり、脱文法化の定義的な固有の性質というわけではない。こういう、脱文法化の生起は非常に稀であるという状況と、定められた(一定の)形態素の歴史の中でそのような(脱文法化の)状況が二回生じることは決してありえないということから、脱文法化の変化の連鎖というものはないのである。

脱文法化は右から左へつまり、文法化とは異なり機能語から実質語へと変化する行程をたどる。それがために文法化とは異なる変化と考えるべきであるが、右から左への行程は

「a single」(単独の)ものである。つまり脱文法化はその生起においては非常に稀であり、かつ継続的・連続的に生じるものではない。

本論で述べた(指示代名詞「ソコ」・「ソレ」+格助詞「デ」)から副詞「ソコデ」・「ソレデ」、接続詞「ソコデ」・「ソレデ」、接続詞「デ」への変遷は、(iii)で述べたように論者は脱文法化の見方が適用されるとは考えていない。接続詞「デ」が成立する行程のどの段階においても脱文法化が示す、右から左へ(機能語から実質語へ)の変化が見られないからである。

以上、Norde(2010)の脱文法化の定義と、そこに見られる四つの普遍的なところを個別に検証することで、接続詞「デ」の成立は脱文法化が適用されないことを確認した。

7. 7. 3. 日本語の接続詞は一方向性の反例であるかという問題について

なお、日本語の接続詞について一方向性の反例とする見方がある。一方向性(Unidirectionality)とは不可逆性(irreversibility)とも言われるが、ある文法構造の変化に関するメタ条件¹³⁴であり、以下があるとされる。一部を割愛して秋元実治(2002)『文法化とイディオム化』より抜粋する。

・一般化(Generalization)

Hopper and Traugott(1993:96-103)によれば、一般化には意味の一般化と文法機能の一般化がある。前者は語彙項目が文法化するにつれて、その意味の分布が広がり、多義になる。

・脱範疇化(Deategorialization)

名詞や動詞のそれぞれの持っている形態的、統語的特性を失って、前置詞や接続詞などの特性を逆に持つていくこと(Hopper 1991:22,30-31)。

・重層化(Layering)

新しい層(layer)が現れた時、古い層は無くなるのではなく、相互に共存して存在する

(Hopper1991:22)。未来を実現する will,shall,be going to の共存はその例である。

・保持化(Persistence)

語彙的機能から文法的機能へ文法化する際、その語彙の元々の意味が残っており、それが文法的分布に制約を与える(Hopper1991:22)。「will」、「shall」、「be going to」

における未来用法の相違は元来の語彙的意味の相違に起因する。(Bybee and Paliuca1985:74-5)。

¹³⁴ 秋元実治(2002)『文法化とイディオム化』6頁。なお、「メタ条件」については(1993) Hopper, Paul J. and Elitabeth C. Traugott. Grammaticalization. pp.96, Cambridge: Cambridge University Press. 参照。

・分岐化(Divergence)

Hopperによれば、ある語彙項目が文法化を受けて、助動詞や接辞になったりした時、元々の項目は独立語として残って、通常の語彙項目のように同じ変化を受けることを言う。

・特殊化(Specialization)

ある段階で多少意味の異なる語彙項目どうしが存在することがある。文法化を起こした時、これらの項目の選択が狭まり、その内小数の項目が選ばれて残るようになる。文法化の終わりの段階では、ある項目が義務的になる。

・再新化(Renewal)

Hopper and Traugott(1993:121-23)によれば、現在ある意味が新しい形を持つことで、例えば、英語の強調詞には次のように多くある：awfully, frightfully, fearfully, terribly, incredibly, really, pretty, trully, very など。しかし、特殊化によりその数は少ないものになる。

(秋元実治 (2002) 『文法化とイディオム化』「一方向性」 6～10 より抜粋。)

さらに、一方向性の概念には意味的観点、統語的観点など様々な観点によるものがある。以下の抜粋部についても確認しておく。

Traugott and Dasher(2002)は、(間)主観化¹³⁵は意味的に一方向的に進んでいくという仮説を立てている。つまり、歴史的に見ると、主観性の弱い意味がより主観的な意味になり、そして、主観的な意味から、間主観的な意味が生まれるという方向で進んでいく。(しかし、よく指摘されているように、このような一方向的な意味変化が起こらないこともあり、主観的な表現が一般化し、その後に主観性を失うこともある)。(略) また、統語的観点における一方向性も起こる可能性がある。Breban(2008)は、違いを表す英語の形容詞が文法化し、数量詞〔訳注：英語の some や many のように、数・量を表す英語の総称〕と

¹³⁵ 「主観化(Subjectification)とは、「指示的、命題の意味からテキスト的、感情表出的、あるいは、対人的 (interpersonal) への意味変化」である：
propositional>textual>expressive/interpersonal すなわち、命題に対して意味を話者の主観的態度にますます基礎に置くようになること (Traugott 1989, 1995a)。文法化に於ける一方向性仮説として、主観化の増大をあげている (Traugott 1995a:45)。(秋元実治 (2002) 『文法化とイディオム化』「主観化」、11 頁)「主観性は、話し手と聞き手との相互行為にメトニミー (換喩) (略) が関係しているものと仮説されている。そのため、主観性は間主観性へと少しずつ変化すると解釈できる。話し手は、聞き手の自己イメージや面目に対して配慮していることを言語的に明示することを選択する。その目的で、比較的中立的な、またはすでに主観的な表現を使うことが間主観化なのである。(略) また、間主観化は文法表現の発達でも見られ、例えば、垣根表現〈扱、えーと〉や、if you please(if it please you)〈よろしければ〉から please への変化、さらには日本語の対者敬語といったポライトネス表現で見られる。(高田博行・椎名美智・小野寺典子編著 (2011) 『シリーズ 言語学フロンティア 03 歴史語用論入門』大修館書店)。

して主観化し、限定語句のなかの左側の位置に移動したと述べている。例えば、several は、「別の」という意味から「いくつかの」という意味になった。

(Elizabeth Closs Traugott [福元広二訳]「文法化と(間)主観化」69頁、高田博行・椎名美智・小野寺典子編著(2011)『シリーズ 言語学フロンティア 03 歴史語用論入門』大修館書店より抜粋。下線は論者による。)

つまり、一方向性とは意味的観点、統語的観点から、文法化における変化の方向には予め定まった方向(より(間)主観性を帯びるようになる方向)があるということであると解釈できる。

Norde (2010) の言及を確認する。

Free connectives such as ga on the other hand can be used independently and are preceded by a clear pause Furthermore, a sentence-final particle such as -yo can occur before free connectives, but not before enclitic connectives, indicating that a free connective can start a new sentence. Finally, free connectives can start a new turn in discourse.

(Muriel Norde(2010)“Degrammaticalization”, ‘Japanese connectives’ pp.199)

日本語の接続詞「ガ」を例として、接続詞「ガ」が独立的に使われ、その前には明瞭なポーズが入り、その上、終助詞の「ヨ」などがその前に(前文末に)入ることもできる。しかし、接続助詞の「ガ」の前にはそれは入れない。接続詞は新しい文を始められ、また、談話の新しいターンを始めることもできる。

Since grammaticalization across clauses usually involves a transition from parataxis to hypotaxis(Hopper and Traugott 2003:175ff), unidirectionality claims would imply that the enclitic connective particles developed from the free connectives, but historical evidence clearly shows that the particles are order(Matsumoto 1988:342f).

The connective particle -ga in, for example, started as a genitive marker and a subject marker in Old Japanese and developed into a connective particle around the end of the eleventh century. The free form ga did not appear until the seventeenth century.

Hopper and Traugott(2003:210) therefore accept the Japanese case as a true counterexample to unidirectionality in clause combinig.

(Muriel Norde(2010)“Degrammaticalization”, ‘Japanese connectives’ pp.200)

節をまたがる文法化は、普通はパラタクシス（接続詞のない文、節、句の連置）からハイポタクシス（従属関係）までの連結に関係するが、一方向性の主張では、接続詞から発達した接続助詞を含む、がしかし、歴史的な証拠ははっきりと、接続助詞の方が古いことを示す。例、接続助詞の「ガ」は、古語においては属格の標識や主題の標識として始まり、11世紀の終わり辺りで接続助詞として発達した。接続詞の「ガ」が17世紀まで現れなかった。ホッパーとトラウゴットはそれゆえに、節結合における一方向性の反例として、日本語のこの事例を受け止めた。

Norde(2010)の主張によれば、日本語の接続詞と接続助詞の差異は、接続詞は文の始まりや新しいターンの始まりを示すことができ、その前にポーズや終助詞などを置くこともできる。つまり、接続詞は文頭に置かれ、文を始めることができるという接続助詞には見られない性質があることを述べ、さらに、日本語の接続詞の成立が一方向性に則ったものではなくその反対であることから、ホッパーとトラウゴットもこれを一方向性の反例として認めたとする。

接続詞と接続助詞の差異についての観察は肯首できるものの、日本語の接続詞の成立を一方向性の反例とする考え方には再考を提示したい。論者は日本語の接続詞の成立は一方向性に則った変化であると考えている。これについて以下に述べる。

青木（2016）は一方向性についてのさらなる検証の必要性を説く。青木（2016）が述べる一方向性についての考え方をここで確認する。

主観化とは、指示的、命題的意味からテキスト的、感情表出的・対人的への意味変化であり、（略）日本語においても、たとえば敬語の意味変化（素材敬語：尊敬語・謙譲語>対者敬語：丁寧語・丁寧語）などは、同様に主観化の過程として捉えることができる（金水 2004）。このように、「主観化」は一般性の高い意味変化の方向性であるといえるが、受動態の発達などの反例が挙げられるように（秋元 2002）、その一方向性についてはあらためて検証する必要がある。また、これが「文法化」とどのように関わるのかについても、なお検討の余地がある。（青木（2016）、48頁より抜粋。）

言語が示す諸現象、諸変化のどこまでを文法化によるものであると認めるのかについて、いわば文法化の範囲についてはまだ定説がない状況であるようである。青木は、

「意味の抽象化や前項動詞の選択制限がなくなったことをもって「統語的（文法的）」と言っているのであり、影山（1993）の言うような受身形や使役形、サ変動詞などの「統語的」要素が現れるかどうかは、文法化の要件ではない。またこのとき、主観化に相当する変化は見られない。」

（青木（2016）、60頁、下線は論者による。）

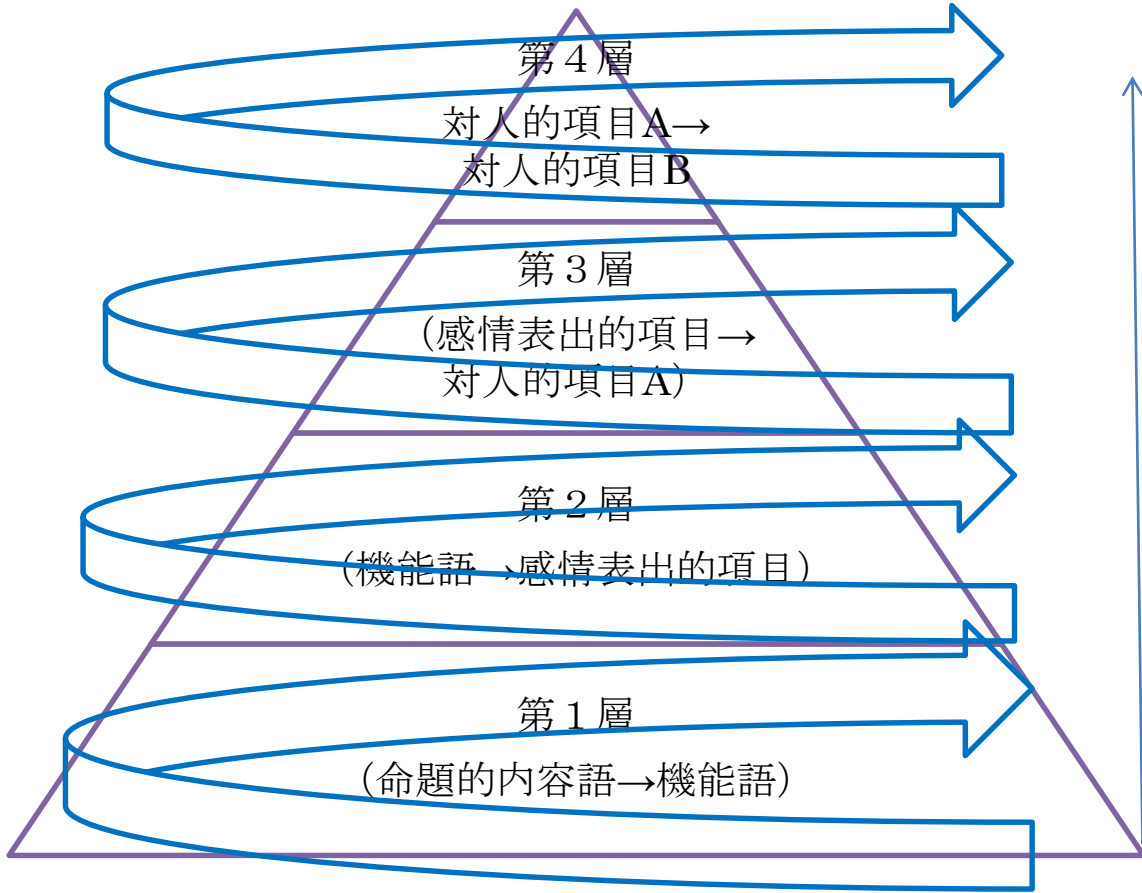
と述べるが、論者はこれとはいささか異なる考えをもつ。受身形や使役形は事象の見方、つまり受身形はその事象を動作の仕手側から見るか受け手側から見るかの問題であり、使役形はその事象を動作をさせた側（使役主）から見るか動作の仕手（動作主）側から見るかという当該の事象の捉え方の問題だと見ると、これを主観化の問題と考えることはできると思われる。また、サ変動詞の現れは本動詞としての「ス」・「スル」が複合動詞の後項の動詞として機能し、その前項の語で表される事柄や行為を行う意味を表すようになる変化であると考え、これを内容語から機能語への変化であると考えられると思われる。論者の考えでは受身形や使役形の発達は主観化に相当する変化であり、サ変動詞の現れは文法化の要件として考えられる余地があるように思われる。

ここで改めて文法化について定義したい。論者は、文法化とはらせん階層型をした、言語形式の再利用システムと考える。このようなシステムを取る目的は、人間の認知の仕組み（具体的なものから抽象的なものを認識するという普遍的な認知の順序）を利用した、形態素の再利用（リサイクル）であると考えられる。

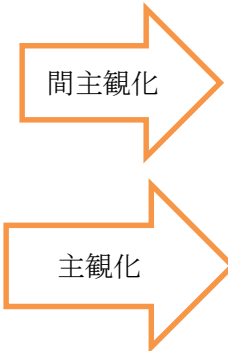
次頁にそのモデル図を示す。

[文法化の仕組みのモデル図]

抽象度が上がる。
(人の認識、判断の問題となる。)



第4層	第3層からさらに対人的な項目への変化が起こる層。 〈助動詞、終助詞など→とりたて助詞、フィラーなどの談話標識〉 －話し手と聞き手の間のやりとりで寄与する形式が生じる。
第3層	第2層からさらに対人的な助動詞、終助詞などへの変化が起こる層。 〈敬語、授受表現、命令、依頼などを表す項目〉 〈尊敬語、謙譲語→丁寧語、丁寧語〉 －聞き手へのはたらきかけを表す形式が生じる。
第2層	統語的複合動詞から助動詞、終助詞などへという変化が起こる層。 〈補助動詞後項、複合動詞後項→助動詞、終助詞〉 〈受身、使役、可能、肯定/否定などを表す項目〉 －ヴォイス、ムードなどを表す形式が生じる。
第1層	本動詞から語彙的複合動詞、統語的複合動詞などへという変化が起こる層。 〈本動詞→補助動詞後項、複合動詞後項〉 －テンス、アスペクトなどを表す形式が生じる。



(1) [モデル図についての説明]

- ・ 文法化は第1層から第4層までのらせん階層型をしている。第1層は具体的（語彙的）なレベルで第4層へ向かうほどそれが抽象的なレベルになる。
- ・ 故に、らせん階層が上に行くほど以前の段階よりも該当する項目が表す抽象度は高くなり、表されるのは人の認識、判断の問題となる。
- ・ 当該の構文中では、平面的に（二元的に）文法化が起こるのではなく、各階層でそれぞれに文法化が起こっている。
- ・ 第1層から第2層で、客観的な世界から、人の認識によって把握されて捉え方が異なってくる世界へと、表す世界が変化する（主観化）。
- ・ 第2層から第3層で、人の認識によって把握されて捉え方が異なってくる世界から、聞き手目当てにはたらいたり（敬語の項目など）、聞き手に対する働きかけを要求する世界へと、表す世界が変化する（間主観化）。
- ・ ここまでの第1層から第3層までは、階層が上に行くごとに、当該の項目は構文の位置上、（横書きにした際の）右端へ移行する。また、この第3層までの項目は当該構文を構成するための当該文内の構文要素としてはたらく。
- ・ 第3層から第4層で、聞き手目当てにはたらいたり（敬語の項目など）、聞き手に対する働きかけを要求する世界から、対人的なことばのやりとりを行う際の配慮などの伝達行為の促進、円滑に貢献するコミュニケーション、談話構成に寄与する世界へと、表す世界が変化する。
- ・ 第4層では当該項目は文末と共に文中にも置かれるようになるが、これは当該構文の命題中に再度入ってくるのではなく（それだと第1層に戻ることになる）、当該構文中に定位置を持たない、話し手が聞き手への話の伝達上適切だと考える任意の位置に置かれるということであると考えられる。単に文末に置かれていた項目が文中にまた置かれるようになるということではない。
- ・ 第1層と第2層から第4層までは、第1層が客観的事実の世界、第2層から第4層までは認識的事実（主観的事実）の世界について述べているという差異がある。
- ・ 第1層から第4層までは各層ごとに分断されているのではなく、らせん階層型である。よって、各層は緩やかにらせん型に連続している。文法化に段階があることは渋谷（2005）にも指摘がある。

(2) [文法化の仕組みがらせん階層型をしていると考えることの有効性]

- ・ らせん階層型をしていると考えることで、一方向性についての問題を解消できる可能性が生じる。文法化は第1層から第4層の各段階の層をまたがって、かつまた、第1層から第4層までの各同層内でも生じるものと考えれば、文法化では一般的とされる内容語から機能語への変化に連続的なものとして、機能語から内容語への変化があり、それがさらに

上層での内容語から機能語への変化に連続するというふうに考えられ、一方向性の考え方を採ることで生じる問題について解消できる余地が生じると思われる。

・上記の考え方を採用すると、渋谷（2005）が扱った日本語の可能形式の文法化についての問題¹³⁶や、青木（2016）が扱った日本語の推量の助動詞「げな」が中世室町期に成立した後、近世前期頃から次第に伝聞の意味で用いられるようになる際の問題¹³⁷も、解消できる余地が生じる。らせん階層は第1層から第4層が層状に展開するが、その展開のしかた

¹³⁶ 「Heine& Kuteva(2002)によれば、世界の言語の可能形式には、もともと、(a) ARRIVE、(b) GET、(c) KNOW (mental ability)、(d) SUITABLE といった概念を表す形式が変化したものがあるという。また、Bybee et al.(1994: ch.6)も、‘know how to’ (mental ability)、‘arrive at’、‘get, obtain’ (in a construction whose meaning is to manage to complete an act)などを可能形式の起源としてあげている。これらの概念を、日本語の可能形式の表した起源的な意味と比較した場合、以下のように整理することができる。(略) (b)のGETについては、ウ(得)がこれに該当する。ただし、少なくとも日本語では、獲得を表す形式から可能を表すものに直接変化してはおらず、GET と ABILITY のあいだに「COMPLETIVE/SUCCEED」といった概念領域を設けて、「GET>COMPLETIVE/SUCCEED>ABILITY」といったルートを想定するほうが妥当である。補助動詞キルやオーセルの可能形式化も、このルートのなかの、「COMPLETIVE/SUCCEED>ABILITY」の変化過程を経たものとして適切に位置づけることができる。ちなみにこの考え方は、アスペクト形式が可能(ヴォイスのひとつ)を表すものとして文法化するという点であるが、この変化は、日本語における文法化は動詞本体から文末方向へ離れるかたちで進むという一般的な図式からは逸脱している。」(渋谷(2005)「日本語可能形式にみる文法化の諸相」(『日本語の研究』第1巻3号)、40頁、下線は論者による。)

¹³⁷ これについて述べた青木(2016)から引用する。「中世室町期頃に推量の助動詞として成立した「げな」であったが、近世前期頃から次第に〈伝聞〉の意で用いられるようになる(仙波1972、山口2003ほか)。以下に、いくつか〈伝聞〉の例を挙げておく。(論者注：用例番号略)・きけば夏かやをもつらせひでねさするげなが、そのやうなどうよくな事するものか(虎明本狂言・清水)・聞けば道中双六が有るげな(丹波与作待夜の小室節) 元々「げな」が表す〈推量〉は、事実と認定される蓋然性が高いという点で〈推定〉と呼ばれる意味に近い。これは古典語であれば、「めり」や「終止なり(=終止形接続の「なり」)が表していたとされるものである。・竜田川もみぢ乱れて流るめり渡らば錦なかや絶えなむ(古今和歌集・283)・秋の野に人まつ虫の声すなり我かと行きていざとぶらはん(古今和歌集・202) 「めり」は視覚、「終止なり」は聴覚によってその情報を入手したことが示されるという、証拠的(evidential)な性格を有している。したがって、当該の様態についての話し手の認識・判断は、「む」などに比べると客観性が高いということになる。このため、「終止なり」などは、〈情報を聴覚で捉える〉という意味が拡張し、得られた情報の内容に即した推定、すなわち〈伝聞〉の意味を表すこともあったようである。・龍の首に五色の光ある玉あなり(竹取物語・龍の頸の玉)

「げな」の場合の推定から伝聞へという変化も、これとほぼ平行的に捉えることができる。すなわち、何らかの証拠(情報)に基づいて当該事態の観察の結果を述べていたものが、その情報を伝えることに重点がシフトしたわけである。このように見てくると、推定から伝聞へという意味変化は、話し手の観察・認識の関与が稀薄になっているという点で、主観化とは逆の方向をたどっているといえる。」(青木(2016)「第4章 文法化と主観化」『日本語歴史統語論序説』(ひつじ研究叢書〈言語編〉第145巻)ひつじ書房、56~57頁、用例部以外の下線は論者による。)

がらせん型を採るため、上記の先行研究で下線を引いて示したような一方向性に反する変化の方向も、それが連続的な同心円状を描くようならせん状の変化であると考えられることで解消されるからである。渋谷（2005）のアスペクト形式（文末方向への変化）からヴォイス形式への変化（動詞側方向への変化）は第1層から第2層にかけての局面違いの変化、青木（2016）の推定から伝聞への意味変化は第2層から第3層にかけて間主観化が進んだことによる変化というふうに「逸脱」（渋谷（2005））、「逆の方向」（青木（2016））と考えずとも説明が可能となる。

・青木（2016）が述べる「メリ」、「ナリ」などの知覚を表す助動詞も「証拠的(evidential)な性格」（青木（2016）、57頁）とは客観性によって保証されている世界であると考えられるが、これらは第1層から第2層にかけてのらせんの局面に位置付けられる語であると考えられる。客観性の保証をうけながら、その客観的な証拠を基に行う推量という主観的な世界を表すこれらの語を含め、知覚動詞全般は、客観と主観の橋渡しを担う語であると考えられる。

・Traugott（2011）も「しかし、よく指摘されているように、このような一方向的な意味変化が起こらないこともあり、主観的な表現が一般化し、その後に主観性を失うこともある。」（Traugott（同）、69頁）とし、青木（2016）も「「一方向性」にあまりこだわりすぎると、変化のありようを見誤ることになるのではないかと思う。」（青木（同）、61頁）と述べる。

つまるところ、文法化の観点で見たときに、一方向性の理論では説明しきれない言語変化も見られることを指摘しているようであるが、一方向性を直線的な、文字どおり変化の方向が「一方向（一方通行）」と見るのではなく、らせん階層型をした同心円状の展開をする「一方向」と見れば、一見矛盾するような「動詞側から文末へ」・「文末から動詞側へ」（アスペクト形式からヴォイス形式への変化など）、または「内容語から機能語へ」・「機能語から内容語へ」（日本語接続詞の成立など）といった変化についても説明が可能となる余地があると思われる。

以上により、接続詞「デ」の成立は、やはり文法化の観点から説明が可能である言語変化であると考えられる。

なお、いずれにせよ、Traugott（2011）や青木（2016）が述べるように、文法化、主観化、一方向性などの定義については今後も検討を重ねていく必要があると思われることも付け加えておきたい。

7. 8. まとめ

本発表は接続詞「デ」の成立が文法化の観点から説明されるべき通時的变化であると考えられることを述べた。その証左として、接続詞「ソコデ」、「ソレデ」から接続詞「デ」の成立に際して認められる一連の変化に文法化に含まれる現象があることを述べた。その具体的なものは、近世後期から見られた接続詞「ソコデ」、「ソレデ」の成立後、近代以降接続詞「で」が見られるようになったという成立時期の差異、意味の漂白化、再分析、音韻的弱化、語用論機能の強化、接続詞「ソコデ」、「ソレデ」よりも接続詞「デ」の前後に目立って見られる話者交替が聞き手の推論によって理解される対話に見られる、語用論的含意を利用した結果成立する形式であることである。

また、接続詞「デ」の成立が文法化の観点ではなくむしろ脱文法化の観点から説明されるべき言語変化ではないかと見られる余地については Norde(2010)の脱文法化の全てのタイプに見られる4つの一般性である、「逆方向性」、「新奇さ」、「低頻度性」、「非継続性・非連続性」を挙げて、これらが接続詞「デ」の成立には適用されないことを示した。さらに文法化がらせん階層型をした言語変化であると考えそのモデル図を提案することで、接続詞「デ」の成立が文法化の観点から説明できることを述べた。

(※本論第7章 201 頁の補足)

なお、「助辞」の扱いについては、

「日本語に特有で、貴重な機能を持つてには' すなわち助辞を *particula* と名づけて、ラテン語などの一般の品詞の外にこれを一品詞に立てた。」(『邦訳日葡辞書』〈4. 文法範疇、a. 助辞〉の項) 19~20 頁より引用。下線は論者による。)

「○この品詞は、あらゆる品詞に属し且あらゆる品詞に接続するので、他の如何なる品詞よりも広がる傾向を持ってゐる。又既に述べたやうに、日本人は'てには' (*Tenifa*) とかてにをは' (*Tenivofa*) とかいう語の下に、あらゆる種類の助辞、名詞の格を示す格辞、動詞の法と時のすべてにわたる活用語尾を包括するのである。(略) ○このやうに漢字に更に書き添へる格辞とか活用語尾とかを'てには' (*Tenifa*)、'てにをは' (*Tenivofa*)、'捨仮名' (*Sutegana*)、'置字' (*Voquiji*) 等と呼ぶ。」(『ロドリゲス日本大文典』〈最後にして第十の品詞 助辞に就いて〉の項) 532 頁〈原著 149 頁〉より引用。下線は論者による。)

といった記述より、現代語の文法で考えるところの助詞、助動詞、活用語尾が「助辞」に当たると考え、本論で考察対象としている接続形式の「デ」は上述二書における「助辞」に含まれないと考える。(『ロドリゲス日本大文典』には、〈助辞 DE (で) に就いて〉の項 (548 頁〈原著 153v 頁〉) もあるが、ここで扱う用例は助詞の「で」、または「それで」や「句+で (お叱りあったで)」の形式であり、本章で扱った、文頭に置かれて「で」の形式で接続詞としてはたらくものとは異なる。ゆえに、本章で考察した「デ」は上述二書が述べるところの「助辞」には当たらないと考える。

終章

以上、日本語接続詞の成立について通時的に論じてきた。ここで本論をまとめたい。
本論では日本語接続詞成立以前の接続形式を上代から通時的に眺め、

- 1) 古代語における接続形式
- 2) 近代語における接続形式

に分けて考察し、その形式の特質を用例から実証的に調査して日本語接続形式について通時的にその意味と機能を考察してきた。

1) については、前出形式の反復による形式、「形式名詞+助詞」の形式(1) - 「モノヲ」の形式 -、「用言活用形+接続助詞」の形式、「指示副詞+接続助詞テ」の形式による接続について述べた。

2) については、「形式名詞+助詞」の形式(2) - 「ホドニ」の形式 -、「形式名詞+助詞」の形式(3) - 「ニヨツテ」の形式 -、接続詞「デ」の形式について述べた。

上記について用例と共に実証的に日本語接続形式について考察し、

- 日本語接続詞の成立は近代語以降と考えられ、古代語にはまだ接続詞の成立は見られないこと。(上記1)の第1章から第4章で主に述べた。)
- 特に指示副詞由来の接続詞の場合、金水(1999)が述べる「カクテ」を構成する指示副詞「カク」と、「サテ」を構成する指示副詞「サ」の指示副詞としての用法の差異が接続詞としての展開の差(「カクテ」よりも「サテ」が接続詞として発達した原因と考えられること。(上記1)の第4章で主に述べた。)
- 特に近代語の接続詞の発達については、Traugott(1995)などが述べる文法化の観点を採用することで、統一的な説明ができること。(上記2)の第7章で主に述べた。)

以上について述べた。

ここで章ごとにまとめを行い、今後の課題も述べておきたい。

第1章は前出形式の反復による形式をもつ接続形式を扱った。上代より見られる前出の語、句などを反復することでその前後を関係付けるという、基本的な接続関係の示し方をした例を、上代と中古の韻文、散文から見た。ここでは上代、中古に成立したとされる資料に

見られる形式について見たが、これらの形式は既出の形式を反復させるためにその前後の結末が強まり、また独特のリズムやテンポが生じるものであったため、その表す接続関係が直接的でたどりやすく、その韻律の良さからも散文だけでなく韻文にも適した形式であったと考えられる。

しかし一方では表す接続関係が直接的でたどりやすく理解されやすいのはそれが発せられる場面の助けがある上での発話であったであろうという状況も考えられ、そのような発話場面の助けが望めないような複雑な発話状況の下での接続関係や、反復という方法に向かない語や句の接続を表す場合には、前出形式の反復による形式をもつ接続形式で行う接続には限界や不適切さが生じてきたことも考えられる。そこで接続関係を表す別の方法として、形式名詞を用いた方法が次に考えられるようになったことが推定されると結論付けた。

今後の課題としては前節形式を反復する形式が表す意味について、接続に関わる意味以外には何があるのかを考る必要があると思われる。特に畳語の形式と、その形式をもつ音象徴詞については、論者自身の私見としては主語と述語を含んだことばとして他のことばとは大きく異なる面があると思われる。それらを含めてさらに反復の形式が日本語の中で表す機能と意味についても考えるべきであると思われる。

第2章は「形式名詞+助詞」の形式(1)として、「モノヲ」の形式をもつ接続形式を扱う。体言、名詞、形式名詞について定義した後に「モノヲ」の形式によってその前後を関係付けた例を上代、中古などの韻文、散文から見た。

今後の課題としては今回扱った「モノヲ」のみでなく、「モノノ」、「モノカラ」、「モノユエ」などの一連の「形式名詞『モノ』+助詞」の形式を見て、形式名詞モノがどのように日本語接続詞に連なっていったかについて考察し、さらにモノに限らず日本語の形式名詞全体が日本語の接続詞にどう関わっていったかもぜひ考察するべきであると考えられる。形式名詞の全てが接続形式に連なっていったわけではないと考えられることから、どのような形式名詞が接続と関わり、どのような形式名詞が何と関わっていったのかを考察することは接続詞のみならず、形式名詞についての研究をも深めることになるかと思う。

第3章は「用言活用形+接続助詞」の形式をもつ接続形式を扱った。用言の活用形に接続助詞「バ」、「ト」、「トモ」、「ド」、「ドモ」などが付いて順接や逆接の仮定条件・確定条件を表す形式の例を見た。また、この接続形式の変化に伴う変化として、①用言活用形のみでは多機能、多意味であったものが「用言活用形+接続助詞」の形式ではその表す機能、意味が専一的になり、形式と機能、意味とが対応的に表されるようになったこと。②接続関係を表す形式の変化が平安時代中期(中古中期)に生じていること。これら二点が確認できた。

今後の課題としては、古代語における用言活用形が表す意味と機能について根本的なところを考えた上で、それらがどのような形式として現代語に連なるかを見る必要があると思われる。古代語で見られた意味、機能が全て現代語に連なっているのか、そうでないのか、そうでないとしたら現代語に連ならなかった意味、機能にはどのようなものがあるのかを明らかにすべきであると思う。また、古代語の用言活用形が表していた意味、機能が現代語では用言そのものにではなく、副詞、接続詞、助詞、助動詞などに受け継がれているところもあると思われる。それらについて通時的に見ることで、言語の発達の一つの型が浮かび上がる可能性もあると思うことによる。

第4章は「指示副詞+接続助詞テ」の形式をもつ接続形式を扱った。指示副詞「カク」、「サ」は上代より日本語に見られた形式であるが、それに接続助詞「テ」が付いた「カクテ」、「サテ」は古代語からまとまって見られた形式であり、副詞や接続詞として用いられた。また、「サテ」については主に中世期以降に感動詞としても用いられた。それらの文の中での機能の変化とその様相をこの章では見た。

ここで述べたことは、以下である。

・「カクテ」と「サテ」は副詞として文中で機能していたものが接続詞、または感動詞として機能するようになった通時的な変化であると捉えられる。特に接続詞の成立について注目すると、この変化は文法化の観点から説明できると思われる。文中で副詞としてはたらいっていた語が、語彙的意味よりも文法的機能をもってはたらく接続詞としてはたらくようになり、それに伴い日本語の文が、古代日本語の形から近代日本語の形（具体的には現代語の複文に連なる、文どうしを関係付けその関係づけの意味を語的要素に明示する形）に変化した変化であると捉えられることによる。

・古代語において「カクテ」よりも「サテ」が接続詞として展開したのは、「カクテ」と「サテ」の構成要素である指示副詞「カク」と「サ」の用法の差異による。

これは金水（1999）が述べる、「カク」は「言語外世界にあらかじめ存在すると話し手が認める対象を直接指し示し、言語的文脈に取り込む」（同、68頁）ものであり、「サ」は「言語外世界とは関係なく、先行文脈によって概念的に設定された対象を指し示す」（同、69頁）ものであるという差異に基づくと考えられる。

・古代語の「カクテ」と「サテ」の用法を見ると、これらが文頭に置かれた例もあるが、それらはその前文や前部を具体的に指示している例がそうではない例よりも多いことから、これらは副詞として文で機能していると見られ、よって、「カクテ」と「サテ」、主に「サテ」の接続詞の成立は近代語以降と考えるのが適切であると思われる。

以上である。

今後の課題として、「カクテ」と「サテ」に形態的に類似した「カカルホドニ」、「サルホドニ」などの形式についてもそのはたらきを見ることを挙げたい。指示副詞に接続助詞が付いた形式と、「形式名詞+助詞」が付いた形式の差異について考えることは、第1章の今後の課題でも述べたところであるが、日本語の形式名詞のはたらきと日本語接続詞の関わりについて考察することは、日本語の形式名詞、接続詞の両方にとって有意義であると考えられよう。また、これらの形式の差異については、「カクテ」、「サテ」に比して「カカルホドニ」、「サルホドニ」は漢文や漢文訓読文との関わりが深い軍記物資料や抄物資料に多く見られるなど、その資料性の差異も考察すべきであると思われる。文体の差異ということと関係してくる事柄であろうかとも考えられるが、和漢混淆文における接続形式を丁寧に見ることがこの問題を考える糸口になるようにも思われるので、これについても改めて調査と考察を行いたい。

第5章は「形式名詞+助詞」の形式(2)として、「ホドニ」の形式を持つ接続形式を扱った。名詞「ホド」はその意味の抽象性の高さから古代語より抽象名詞としての用例が多く見られた語であり、それが助詞「ニ」と結びつき、「ホドニ」の形式となって時間を表す意味から中世期になって原因・理由を表す意味へと変化したと考えられるその変化の様相と原因をこの章では扱った。

本発表で述べたことは以下である。

- ・〈原因・理由〉の意味を表している「ホドニ」を特定する客観性のある指標である、「(A:), (B:)の関係」を設定し、それに基づいて〈原因・理由〉の意味を表す「ホドニ」の用例を特定した。
- ・「ホドニ」の〈時〉の意味と〈原因・理由〉の意味が現れた時期に時間差がある点について、「ホドニ」の「ホド」が、上代、中古期には「名詞句+格助詞」としての機能が優先的であったものが、中世期になり連用句を作る機能が優先的となった過程を考え、〈原因・理由〉の意味を表す接続助詞「ホドニ」が成立したことを示した。
- ・「ホドニ」が原因理由を表す意味を獲得した経緯には、語用論的側面に「ホドニ」の構文的条件の変化という文法的側面も関与していることを示した。
- ・「ホドニ」の構文的条件変化という文法的変化は、「ホドニ」の上接句と下接句の複文化が原因となり、起こったと考えられる。さらに、この「ホドニ」の上接句と下接句の複文化を招いた原因としては、「ホドニ」の名詞部分「ホド」の文法化が考えられると思われる。

今後の課題としては、「ホドニ」と同様に「形式名詞+助詞」の形式をもつ「時ニ」、「頃ニ」、「間ニ」などや「ホドニ」より後に見られる形式である「サカイニ」などの形式の消長を通時的に見ることの必要性を挙げたい。中世期から近世期の日本語の接続形式の中で

これらの形式が現れ、消えていった事実が何を物語っているのかを考えることは、接続形式のみの問題ではなく、そのような接続形式を生み出すことを要請した接続形式の周辺の事情があると推察されるからである。そしてそれについて調査することは、「日本語で接続形式を生み出す元は何なのか」「何が原因で何が契機となって、接続形式は求められ、生じるのか」、「そもそも日本語における『接続』とは何なのか」を根本的に見直すことにつながると思われる。

第6章は「形式名詞+助詞の形式」(3)として、「ニヨツテ」の形式を持つ接続形式を扱った。これは、「助詞+動詞連用形+接続助詞」の構造を持つことから第4章で扱った「カクテ」、「サテ」と類似した構造の接続形式であると考えられるが、第5章で扱った「ホドニ」の次に中世期の資料において原因・理由を表す形式として見られたのがこの「ニヨツテ」であるために第6章に置き、その様相を見たものである。

この章では、中世期の資料を用いて「ニヨツテ」の使用状況を確認し用例を挙げて「ホドニ」と「ニヨツテ」の差異を述べ、それを踏まえて両形式には日本語文構造への適合性に差異が認められること、それは両形式の出自の差異によるものであると考えられることを述べた。

さらに、【上接句の承認】、【形式の出自】、【語構成】の三つの着眼点を挙げ、それに基づき「ホドニ」から「ニヨツテ」の「勢力交替」(小林(1973)、29頁)が生じた理由とその意味を考察した。調査によればそれは、1)の【上接句の承認】の着眼点からは上接部に採る形式に制限がないこと、2)の【形式の出自】の着眼点からは漢文訓読語や書きことばの和語や話しことばに対する優位性を認めてきた日本語についての見方があること、3)の【語構成】の着眼点からは形式と意味との特定化の簡便さがあること、これらにより小林(同)が述べる「勢力交替」は生じたと思われ、この交替には、日本語使用者に古代から存在していた日本語に対する認識、見方(前述2)を指す。)に則った上で、より日本語を使いやすくしていこうという意識(前述1)、3)を指す。)の現れの一部であるという意味があると思われることを述べた。

今後の課題としては、「ホドニ」のような接続助詞「ニ」、「ニヨツテ」のような接続助詞「テ」といった、異なる接続助詞で表される接続形式の差異について考察することの意義を挙げておきたい。語構成別に見た場合、接続の部分が異なる助詞などであるということは、その接続形式の意味や機能の異なりに関わってくるのが考えられることによる。接続形式を語構成から見て、その構成要素から形式の意味や機能を考える視点は、日本語の単語や形態素のはたらきについて再考察する一歩になり、ひいては日本語について考える良いきっかけとなると思うことによる。

また、「ニヨツテ」が「ヨツテニ」の形式になるような変化は、語の形態の変化が語自体のみではなく語の通時的、共時的環境によって「これまでに」または「周囲に」、「合わせ

る」ことで成立するという、語の成立事情上の意味がある場合もあると思われる。そのような場合を細かく調査することで、一つの形式が出現し成立していく、そして形式によっては他の形式に替わっていく様相を見ていくことも、言語研究には必要であると考えられる。

第7章は接続詞「デ」の成立について扱った。接続詞「デ」は近世末期から近代初期に成立したと考えられるが、「指示代名詞ソコ・ソレ+格助詞デ」の形式が副詞「ソコデ」、「ソレデ」、接続詞「ソコデ」、「ソレデ」となり、そこから「ソコ」、「ソレ」が取れて接続詞「デ」が成立した過程と原因を述べることで、一つの接続詞が成立する型を見た。

論証においては、その証左として、接続詞「そこで」、「それで」から接続詞「で」の成立に際して認められる一連の変化に文法化に含まれる現象があることを述べた。その具体的なものは、近世後期から見られた接続詞「ソコデ」、「ソレデ」の成立後、近代以降接続詞「デ」が見られるようになったという成立時期の差異、意味の漂白化、再分析、音韻的弱化、語用論機能の強化、接続詞「ソコデ」、「ソレデ」よりも接続詞「デ」の前後に目立って見られる話者交替が聞き手の推論によって理解される対話に見られる、語用論的含意を利用した結果成立する形式であることであることを述べた。

また、接続詞「デ」の成立が文法化の観点ではなくむしろ脱文法化の観点から説明されるべき言語変化ではないかと見られる余地については Norde(2010)の脱文法化の全てのタイプに見られる4つの一般性である、「逆方向性」、「新奇さ」、「低頻度性」、「非継続性・非連続性」を挙げて、これらが接続詞「デ」の成立には適用されないことを示した。さらに文法化がらせん階層型をした言語変化であると考えそのモデル図を提案することで、接続詞「デ」の成立が文法化の観点から説明できることを述べた。

今後の課題としては、接続詞の成立について「デ」以外の型をもつものについても事例を集めて分析し、それらが文法化で説明できることを示した上で、文法化のモデル図を改善することを試みたい。文法化にはレベル（階層）の差があるというのが論者の現段階での考えであるが、これは今後変化することも大いにあると思われる。外国語の文法化の事例と共にそれについて考えることは、言語の変化や言語そのものについて更なる考察を深める一助になると考えられることによる。

本論全体を通しての今後の課題として、日本語の接続形式の誕生に大きく関わった、準体言の形式と、日本語の接続形式のかかわりについて述べられなかったこと、また、訓点語の中に見られる日本語接続詞の初期の形について触れられなかったことを挙げておく。

この博士論文を書き上げた現段階での論者は「接続」について、複数の文を関係付ける

際にその文どうしの関係について、その構成、構造といった枠組みを語要素として示しながら関係づけを示すのが接続形式であり、その語要素のうちそれが一品詞として成立しているものが接続詞であると考えている。接続詞の場合はその多くが副詞や接続助詞からの変化であると言える。中世語以降様々な接続形式が現れたが、それら後続の形式は先行の形式に形態などが照応的に類似していく、先行の形式よりも統語的に制約が少ない出現環境に現れるなど、ある局面を先行の形式と重複させながら、それとは別のある局面を先行の形式よりも適応力が高い形にして発展をしてきたように見受けられる。これが接続形式に特徴的な変化の仕方であるのか、またはなべて言語変化というものはこういう面があるのかについては今後さらに研究を重ねて考察していきたい。

最後に、今後についての論者の考えを述べる。

言語変化は一つの形式が消えて次の形式が現れるような単線状のものではなく、諸現象や諸事態が原因となってそれらが複雑にかかわりながら発展していくものであるので、それをときほぐす気持ちをもって上記の課題についても今後は取り組んでいきたいと考える。また、研究中に強く感じた接続と修飾のかかわりについても外国語の事例も見据えつつ更に考察し、日本語における接続とは何かについて改めて考察してそれについての理解を深め、まとめていきたいと考える。

(了)

●参考文献

- 青木博史 (2007) 『日本語の構造変化と文法化』(『ひつじ研究叢書〈言語編〉第55巻』)
ひつじ書房
- 青木博史 (2016) 『日本語歴史統語論序説』(『ひつじ研究叢書〈言語編〉第145巻』)
ひつじ書房
- 秋元実治編 (1994) 『コロケーションとイディオム—その形成と発達—』英潮社
- 秋元実治(2002) 『文法化とイディオム化』(『ひつじ研究叢書〈言語編〉第28巻』、ひつじ
書房
- 秋元実治・前田満編 (2013) 『文法化と構文化』(『ひつじ研究叢書〈言語編〉第104巻』)
ひつじ書房
- 安達太郎 (2002) 「現代日本語の感嘆文をめぐって」『県立広島女子大学国際文化学部紀要』
10、広島女子大学、107-121頁
- 安倍素子 (2009) 『うつほ物語の成立と絵解の研究』風間書房
- 有田節子、蓮沼昭子、前田直子 (2001) 『条件表現 日本語文法セルフ・マスターシリーズ
寺村秀夫企画7』くろしお出版
- 有田節子 (2007) 『日本語条件文と時制節性 Frontier series 日本語研究叢書20』くろし
お出版
- 出雲朝子 (1985) 「「はさみこみ」について—文法史的考察—」『国語学』143集、国語学会、
14-26頁
- 有田節子 (2017) 『日本語条件文の諸相：地理的変異と歴史的変遷』
- 庵 功雄 (1996) 「「それが」とテキストの構造—接続詞と指示詞の関係に関する一考察—」
『阪大日本語研究』8 大阪大学文学部日本語科言語系、29-44頁
- 市村太郎 (2014) 「副詞「ほんに」をめぐって—「ほん」とその周辺—」『日本語の研究』
第一〇巻第二号、日本語学会、1-16頁
- 糸井通浩 (1979) 『大和物語』の文章—その「なりけり」表現と歌語り—『愛媛国文研究』
第29号、愛媛国語国文学会、10-18頁
- 糸井通浩 (1987) 「中古文学と接続語—「かくて」「さて」を中心に—」『日本語学』第6巻
第9号、明治書院、84-94頁
- 糸井通浩 (1999) 「古典にみる「時」の助動詞と相互承接—『枕草子』日記章段における—」
『国語と国文学』(一〇三二号)、東京大学国語国文学会、1-11頁
- 池上禎造 (1947) 「中古文と接続詞」『国語国文』第十五卷第十二号京都帝国大学国文学会、
1-9頁
- 石垣謙二 (1955) 『助詞の歴史的研究』岩波書店
- 井手至 (1967) 「形式名詞とは何か」『講座日本語の文法3 品詞各論』明治書院、37-52
頁
- 伊原昭 (1965) 「物語における色紙と文付枝の配色—特に源氏物語について—」『季刊文学・

- 語学』第三七号、全国大学国語国文学会編、三省堂、58-71 頁
- エリク・ロング (1995) 『源氏物語』における談話分析の試み』『日本語学』vol 14、2 月号、明治書院、20-27 頁
- 大木恵美子 (1976) 「大和物語における「かくて」の考察」『二松学舎大学人文論叢第9輯』二松学舎大学人文学会、1-14 頁
- 大鹿薫久 (1988) 「感動文の構造一句と文についての把握一」『ことばとことのは第五集』、和泉書院、96-101 頁
- 大鹿薫久 (1989) 「感動文の構造 (承前) 一句と文についての把握一」『ことばとことのは第六集』、和泉書院、77-82 頁
- 大堀壽夫 (2004) 「文法化の広がりと問題点」『月刊言語』4、vol.33,No4(393)大修館書店、26-33 頁
- 岡崎友子 (2002) 「指示副詞の歴史的変化について一サ系列・ソ系を中心に一」『国語学』第五三卷三号、国語学会、1-17 頁
- 岡崎友子 (2006b) 「指示副詞のコ・ソ・ア体系への推移について」『国語と国文学』第八三卷第七号、東京大学国語国文学会、59-74 頁
- 岡崎友子 (2006a) 「感動詞・曖昧指示表現・否定対極表現について一ソ系 (ソ・サ系列) 指示詞再考一」『日本語の研究』第二卷第二号、日本語学会、77-91 頁
- 岡崎友子 (2008) 「指示語「サテ」の歴史的用法と変化について一『源氏物語』を中心に一」『国語語彙史の研究』二十七、国語語彙史研究会編、183-202 頁
- 岡崎友子 (2009) 「接続詞「サテ」について一現代語の用法とテキスト一」『就実論叢』第三八号、就実大学、63-78 頁
- 岡崎友子 (2010) 「サテの歴史的変化について一中世天草版平家物語を中心に一」『語文』第九二・九三輯、大阪大学国語国文学会、65-73 頁
- 岡崎友子 (2011) 「指示詞系接続語の歴史的変化一中古の「カクテ・サテ」を中心に一」『日本語文法の歴史と変化』青木博史編、くろしお出版九号、明治書院、67-87 頁
- 岡崎友子 (2013) 「中古における接続語の使用傾向について」『第4回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』、2013年9月、国立国語研究所、167-176 頁
- 荻野千砂子 (2000) 「接続詞「サテ」に関する一考察」『純真紀要』四一、純真女子短期大学、89-98 頁
- 小田勝 (1990) 「挿入句 (はさみこみ) の構造一『源氏物語』を資料として一」『國學院雑誌』第91卷第2号、國學院大學、37-46 頁
- 尾上圭介 (1986) 「感嘆文と希求・命令文一喚体・述体概念の有効性一」『松村明教授古稀記念国語研究論集』、明治書院、555-582 頁
- 小野寺典子 (2011) 「談話標識 (ディスコースマーカー) の歴史的発達 英日語に見られる (間) 主観化」『シリーズ言語学フロンティア03 歴史語用論入門』大修館書店、73-90 頁

- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』 (『日本語研究叢書第 2 期第 4 巻』) ひつじ書房
- 神谷かをる (1986) 「中古語の文と句の接続—源氏物語の頃まで—」 『日本語学』 vol 5、10 月号、明治書院、13—26 頁
- 川越菜穂子 (1995) 「ところで、話はかわるけど—Topic shift marker について—」 『複文の研究 (下)』 仁田義雄編、くろしお出版、463—479 頁
- 来田隆 (1993) 「洞門抄物に於けるホドニとニヨッテ」 永尾章曹、山内洋一郎編 『研究叢書 138 (継承と展開 2) 近代語の成立と展開』 和泉書院
- 清瀬良一 (1968) 「天草版平家物語における口語訳の存立状態」 『国語学』 74 国語学会
- 金水敏 (1986) 「連体修飾成分の機能」 『松村明教授古稀記念国語研究論集』 明治書院 602—624 頁
- 金水敏・木村英樹・田窪行則 (1989) 『日本語文法セルフ・マスターシリーズ 4 指示詞』 くろしお出版
- 金水敏・田窪行則 (1990) 「談話管理理論からみた日本語の指示詞」 『認知科学の発達 3』 日本認知科学会、講談社、85—116 頁
- 金水敏・田窪行則編 (1992a) 『日本語研究資料 1 指示詞』、ひつじ書房
- 金水敏・田窪行則 (1992b) 「日本語指示詞研究史から／へ」 『日本語研究資料 1 指示詞』 ひつじ書房、151—192 頁
- 金水敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」 『自然言語処理』 6—4、言語処理学会、67—91 頁
- 金水敏 (2000) 「指示詞—「直示」再考—」 中村明編 『現代日本語必携』 『別冊國文學』 53、學燈社、160—163 頁
- 金水敏・岡崎友子・曹美庚 (2002) 「指示詞の歴史的・対照言語学的研究—日本語・韓国語・トルコ語—」 『シリーズ言語科学 4 言語科学』 東京大学出版会、217—247 頁
- 金水敏 (2004) 「文脈的結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」 影山太郎・岸本秀樹 (編) 『日本語の分析と言語類型—柴谷方良教授還暦記念論文集—』 くろしお出版、47—56 頁
- 金水敏 (2004) 「日本語の敬語の歴史と文法化」 『月刊言語』 4、vol.33,No4(393)大修館書店、34—41 頁
- 金水敏 (2005) 「日本語敬語の文法化と意味変化」 『日本語の研究』 第 1 巻 3 号、日本語学会、18—31 頁
- 此島正年 (1958) 「接続助詞「て」と「して」」 『國學院雑誌』 第 5 9 巻、國學院大學、313—319 頁
- 久野暉 (1978) 『談話の文法』 大修館書店
- 甲田直美 (1995) 「転換を表す接続詞「さて」「ところで」「では」をめぐって」 『日本語と日本文学』 2 1、筑波大学日本語日本文学会編、31—42 頁
- 甲田直美 (2001) 『談話・テキスト展開のメカニズム—接続表現と談話標識の認知的考察—』、

風間書房

- 此島正年（1966）『国語助詞の研究—助詞史の素描—』桜楓社
- 小林賢次（1996）『日本語条件表現史の研究』ひつじ書房
- 小林賢次（2005）「条件表現史にみる文法化の過程」『日本語の研究』第1巻3号、182（1）—172（11）頁
- 小林千草（1973）「中世口語における原因・理由を表わす条件句」『国語学』94 国語学会、16—44 頁
- 権田直助原著・近藤瓶城編（1871 以前？または 1894）『語学自在』（『續史籍集覧』）東京近藤活版書
- 佐伯梅友（1950）『奈良時代の國語』三省堂
- 佐伯梅友（1953）「はさみこみ」『国語国文』第22巻第1号 京都大学文学部国語学国文学研究室、62—66 頁
- 阪倉篤義（1966）『語構成の研究』角川書店
- 阪倉篤義（1975）『文章と表現』角川書店
- 阪倉篤義（1993）『日本語表現の流れ』岩波書店
- 佐久間鼎（1952）『現代日本語法の研究』恒星社厚生閣
- 佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編（1997）『文章・談話のしくみ』、おうふう
- 佐久間まゆみ（2010）『講義の談話の表現と理解』、くろしお出版
- 笹井香（2006）「現代語の感動文の構造—「なんと」型感動文の構造をめぐって—」『日本語の研究』第二巻第一号、日本語学会、16—31 頁
- 佐藤喜代治編（1967）『国文学解釈と教材の研究』第12巻2号（臨時増刊号）、10—15 頁
- 佐藤喜代治・前田富祺・寿岳章子・林巨樹・橋本四郎・杉本つとむ・森岡健二編（1972）『講座 国語史6 文体史・言語生活史』大修館書店、10—15 頁
- 信太知子（1995）『「平家物語」における談話』『日本語学』vol14、2月号、明治書院、36—42 頁
- 鈴木一彦・林巨樹編（1973）『品詞別 日本文法講座6 接続詞・感動詞』明治書院
- 鈴木一彦・林巨樹（1984）『研究資料日本文法第4巻 修飾句・独立句編 副詞・連体詞・接続詞・感動詞』明治書院
- 鈴木恵（1982）「原因・理由を表す「間」の成立」『国語学』128、国語学会、41—54 頁
- 高橋太郎（1965）「「場面」と「場」」『国語国文』第二五巻第九号、591—599 頁（後に金水敏・田窪行則編（1992 a）『指示詞』日本語研究資料集；第1期第7巻、ひつじ書房、38—46 頁に再録。）
- 高橋尚子（1985）「中古接続詞の機能と意味—物語文学作品を資料にして—」『愛文』第21号、愛媛大学法文学部国語国文学研究会、8—17 頁
- 高山善行・青木博史編『ガイドブック日本語文法史』ひつじ書房
- 田窪行則・金水敏（1996）「複数の心的要素による談話管理」『認知科学』VOL.3,N0.3、

59-74 頁

- 田窪行則・金水敏（1997）「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』音声文法研究会編、くろしお出版、257-279 頁
- 竹内史郎（2006）「ホドニの意味拡張をめぐって—時間関係から—因果関係へ—」『日本語文法』6 卷 1 号、56-71 頁
- 竹内史郎・岡崎友子（2014）「日本語接続詞の捉え方—ソレデ、ソシテ、ソレガ/ヲ、ソコデについて—」『日本語学会 2014 年度春季大会予稿集』日本語学会、127-134 頁
- 竹内史郎・岡崎友子（2018）「日本語接続詞の捉え方：ソレデ、ソシテ、ソレガ、ソレヲ、ソコデについて」『国立国語研究所論集（14）、国立国語研究所、241-254 頁
- 橘豊（1998）『手紙文の国語学的研究』風間書房
- 玉上琢彌（1966）『源氏物語研究 源氏物語評釈別巻一』角川書店
- 田村早苗（2005）「日本語接続詞の構成性/非構成性—ソシテ・ソレデ・ダカラについて—」『京都大学言語学研究』24、京都大学大学院文学研究科言語学研究室、85-115 頁
- 塚原鉄雄（1958）「接続助詞—ば・と・ども・とも・とて・つつ・で・を・に・が—」『国文学解釈と鑑賞』（二六三号）、至文堂、73-89 頁
- 塚原鉄雄（1961）『国語史原論』塙書房
- 塚原鉄雄（1967）「接続助詞」『国文学解釈と教材の研究』第 1 2 卷 2 号（臨時増刊号）、61-89 頁
- 塚原鉄雄（1979）『思考と表現』共文社
- 坪井暢子（1991）「源氏物語の消息文に関する一考察」『人間文化研究年報』第 15 号、お茶の水女子大学人間文化研究科、53-64 頁
- 時枝誠記（1950）『日本文法 口語篇』（『岩波全書 114』）岩波書店
- 中井陽子（2012）『シリーズ言語学と言語教育シリーズ 25 インターアクション能力を育てる日本語の会話教育』
- 中川正之、西光義弘、益岡隆志編（2006）『条件表現の対照 シリーズ言語対照；外から見る日本語 6』くろしお出版
- 中沢紀子（1996）『『版本狂言記』における原因・理由を表わす表現：「程に」と「によって」を中心として』『国語国文論集』25、学習院女子大学、117（十八）-108（二十七）頁、
- 中野幸一（昭和 48 年）「『うつほ物語』の叙述の方法—長編物語への試み—」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』19、45-62 頁
- 中野幸一（1981）『うつほ物語の研究』武蔵野書院
- 永山勇（1970）「接続詞の誕生と発達」（『月刊文法』10 月号）明治書院、19-27 頁
- 西周（1870-71）『百学連環』『西周全集 大久保利謙編第 1 卷』東京：日本評論社（1945 年刊行版）
- 西田隆政（1999）「指示語「かくて」と源氏物語の段落構成」『国語語彙史の研究』十八 国

- 語彙史研究会、和泉書院、87-99 頁
- 西田隆政 (2001) 「源氏物語の指示語「さて」の用法—平安和文での接続詞的用法の展開をめぐって—」『国語語彙史の研究』二十、国語語彙史研究会、127-139 頁
- 西田隆政 (2010) 「源氏物語の地の文における指示語「かくて」の用法について—「転換」の用法の問題を中心に—」『源氏物語の展望』第八輯 森一郎、岩佐美代子、坂本共展編、三弥井書店、85-113 頁
- 西野容子 (1993) 「連載：語用論の現在と将来 (3) —会話分析について—ディスコースマーカーを中心として—」『日本語学』12 巻 5 号、明治書院、86-96 頁
- 仁田義雄編 (1995) 『複文の研究』(上)、(下) くろしお出版
- 野口元大 (1958) 「うつほ物語の構造」『宇津保物語新論』宇津保物語研究会編、39-70 頁
- 橋本進吉 (1934) 『國語法要説』(『國語科学講座—VI—國語法』) 明治書院
- 橋本進吉 (1969) 『助詞・助動詞の研究』(『橋本進吉博士著作集 第八冊』) 岩波書店
- 長谷川哲子 (2000) 「転換の接続詞「さて」について」『日本語教育』一〇五号、日本語教育学会、21-30 頁
- 浜田麻里 (1999) 「ソシテとソレデとソレカラ—添加の接続詞—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』、くろしお出版、575-583 頁
- 浜田麻里 (1999) 「サテ、デハ、シカシ、トコロデ—転換の接続詞—」宮島達夫・仁田義雄編『日本語類義表現の文法 (下) 複文・連文編』、くろしお出版、600-607 頁
- 濱千代いづみ (2007) 「『平家物語』における「さて」の用法」『岐阜聖徳学園大学国語国文学』第二六号、岐阜聖徳学園大学国語国文学会、(左) 84-61 頁
- ひけひろし (1986) 「接続詞「そこで」「それで」」『教育国語』第 86 号、教育科学研究会・国語部会、秋季号、季刊、中央世話人会編、74-88 頁
- 藤井俊博 (2003) 『今昔物語集の表現形成』研究叢書三〇六、和泉書院
- 藤井俊博 (2016) 『院政鎌倉期説話の文章文体研究』研究叢書四六八、和泉書院
- 藤本真理子 (2008) 「ソ系列指示詞による聞き手領域の形成」『語文』九〇輯、大阪大学国語国文学会、40-53 頁
- ポリー・ザトラウスキー (1993) 『日本語研究叢書 5 日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』、くろしお出版
- 益岡隆志編 (1993) 『日本語の条件表現』くろしお出版
- 松尾捨治郎 (1940) 『國語法論攷』文學社
- 松尾弘徳 (2000) 「天理図書館蔵『狂言六義』の原因・理由を表す条件句—ホドニとニヨッテを中心に—」『語文研究』第八十九号、九州大学国語国文学会、57 (一) -45 (十三) 頁
- 松下大三郎 (1930) 『改選標準日本文法』東京：中文館書店
- 三苫浩輔 (1974) 「現存宇津保物語の文体と作者—「かくて」類語句を中心に—」『國學院雑誌』4, 國學院大学、37-48 頁

- 宮島達夫・仁田義雄編（1995）『日本語類義表現の文法（上）単文編』『日本語類義表現の文法（下）複文・連文編』くろしお出版
- 宮谷聡美（2004）『伊勢物語』という「歌物語」一六五段「在原なりける男」の長編的性
格から一』『国文学研究』第一四二集、早稲田大学国文学会、11-19 頁
- 室城英之（1996）『中古文学研究叢書2 うつほ物語の表現と論理』若草書房
- メイナード・K・泉子（1993）『会話分析』、くろしお出版
- 望月郁子（1969）「類義語の意味領域—ホドをめぐる—」『国語学』第78号、国語学会、
34-51 頁
- 本宮洋幸（2009）『うつほ物語』の語りと時間』『国語と国文学』平成21年2月号、（一
〇二三号）、東京大学国語国文学会、16-28 頁
- 森一郎・岩佐美代子・坂本共展（2007）『源氏物語の展望 第一輯』三弥井書店
- 森重敏（1955）「接續副詞における助詞性副詞の成立」『国語国文』第24巻7号、京都大学
文学部国語国文学研究室、1-16 頁
- 森重敏（1964）『日本文法通論』風間書房
- 森山卓郎（2006）「「添加」「累加」の接續詞の機能—「そして」「それから」などをめぐっ
て」益岡隆志、野田尚史、森山卓郎編『日本語文法の新地平3』、くろしお出版、187
-207 頁
- 山口堯二（1960）「動詞の重複形式について—「に」「と」を介する形式を主に—」『国語国
文』第二十九巻第六号（三一〇号）京都大学文学部国語国文学研究室京都大学国文学
会、46-56 頁
- 山口堯二（1980）『古代接續法の研究』明治書院
- 山口堯二（1990）『日本語疑問表現通史』明治書院
- 山口堯二（1996）『日本語接續法史論』（研究叢書183）和泉書院
- 山口堯二（2000）『構文史論考』（研究叢書254）和泉書院
- 山田孝雄（1908）『日本文法論』宝文館出版
- 山田孝雄（1936）『日本文法學概論』宝文館出版
- 山本正秀（1964）「明治以後の文体—口語文の成立と展開—①開化期の文体をめぐる」
『講座現代語2 現代語の成立』明治書院、102-130 頁
- 吉川泰雄（1964）「形式名詞」『講座現代語第六巻 口語文法の問題点』明治書院、210-219
頁
- 吉田金彦（1970）「接續助詞 て（とて）・して・で・つつ・ながら・や〈し〉〈ても）」『国
文学解釈と鑑賞』第35巻第13号、至文堂、67-77 頁
- 吉田永弘（2000）「ホドニ小史—原因理由を表す用法の成立—」『国語学』第51巻3号（203
号）国語学会、16-87 頁
- 李英児（2004）「大蔵流狂言台本における「ホドニ」と「ニヨッテ」の推移状況—虎明本と
虎寛本の比較を通して—」『麗澤大学大学院言語教育研究科論集『言語と文明』第2巻』

3-17 頁

- 李淑姫 (2000) 「キリシタン資料における原因・理由を表す接続形式ーホドニ・ニヨッテ・トコロデを中心にー」『筑波日本語研究』第五号、筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室、92-104 頁
- 李淑姫 (2001) 「文の焦点から見たホドニとニヨッテー大蔵虎明本狂言集を中心にー」『筑波日本語研究』第六号、筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室、117-138 頁
- 李淑姫 (2002) 「『応永二十七年本論語抄』の因由形式の階層」『筑波日本語研究』第七号、筑波大学文芸・言語研究科日本語学研究室、63-81 頁
- 渡瀬茂 (1981) 「『栄花物語』正篇における歴史叙述の時間ー「かくて」の機能をめぐってー」『国語と国文学』第 58 巻第 9 号、東京大学国語国文学会、12-23 頁
- J.C.Hepburn (1974) 『和英語林集成 [第 3 版] = 復刻版 =』講談社 (1886 年刊行のものの復刻版)
- M.A.K.Halliday & Ruquaiya Hasan 『言語学翻訳叢書第 8 巻 テクストはどのように構成されるかー言語の結束性ー』、(安藤貞雄・多田保行・永田龍男・中川憲・高口圭輔訳 原題 “Cohesion in English”) ひつじ書房
- Muriel Norde (2009) “ Degrammaticalization ” OXFORD UNIVERSITY PRESS
- P. J .Hopper & E.C.Traugott (2003) 『文法化』九州大学出版会 (日野資成訳 原題 “Grammaticalization”)
- Traugott, Elizabeth Closs & Ekkehard König (1991) “The semantics-pragmatics of grammaticalization revisited In” :Traugott/Heine(eds.), 189-218 頁
- Traugott, Elizabeth Closs (1995) THE ROLE OF THE DEVELOPMENT OF DISCOURSE MARKERS IN A THEORY OF GRAMMATIKALIZATION Paper presented at ICHL XII, Manchester 1995 ; Version of 11/97 ([http : //www.stanford.edu/~traugott/ect - papersonline.html](http://www.stanford.edu/~traugott/ect - papersonline.html) より 2019 年 12 月 3 日最終閲覧 。)
- Traugott, Elizabeth Closs (2011) 「文法化と (間) 主観化」(福元広二訳) 『シリーズ言語学フロンティア 03 歴史語用論入門』大修館書店、59-70 頁

●参考資料

- 大曾根章介、檜谷昭彦、堀内秀晃、服部幸雄、森川昭、久保田淳、山口明穂、三木紀人、遠藤宏（1998）『日本古典文学大事典』明治書院
- 築島裕編（2007－2009）『訓点語彙集成』汲古書院
- 土井忠生・森田武・長南実編訳（1980）『邦訳日葡辞書』岩波書店
- 中村幸彦、岡見政雄、阪倉篤義編（1999）『角川古語大辞典』角川書店
- 日本国語大辞典第二版編集委員会 小学館国語辞典編集部編集（2000～2002）『日本国語大辞典（第二版）』小学館
- 日本古典文学大辞典編集委員会編（1984）『日本古典文学大辞典第四卷』岩波書店
- 日本語文法学会編（2014）『日本語文法事典』大修館書店
- 飛田良文・遠藤好英・加藤正信・佐藤武義・蜂谷清人・前田富祺（2007）『日本語学研究事典』明治書院
- 松村明編（1971）『日本文法大辞典』明治書院
- 室町時代語辞典編集委員会編（1985～2001）『時代別国語大辞典 室町時代編』三省堂
- J・ロドリゲス原著、土井忠生訳注（1955）『ロドリゲス日本大文典』三省堂

●主な用例採集資料と使用したコーパス

【上代】

- ・『古事記』山口佳紀 神野志隆光校注・訳（1997）『新編日本古典文学全集 1』（小学館）
- ・『日本書紀』小島憲之 直木孝次郎 西宮一民 蔵中進 毛利正守 校注・訳（1994）『新編日本古典文学全集 2』（小学館）
- ・『萬葉集』小島憲之 木下正俊 東野治之校注・訳（1994～1996）『新編日本古典文学全集 6～9』（小学館）

【中古】

- ・『竹取物語』『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』片桐洋一 福井貞助 高橋正治 清水好子 校注・訳（1994）『新編日本古典文学全集 12』（小学館）
- ・『土佐日記』『蜻蛉日記』菊地靖彦 木村正中 伊牟田経久 校注・訳（1995）『新編日本古典文学全集 13』（小学館）
- ・『落窪物語』『堤中納言物語』三谷栄一 三谷邦明 稲賀敬二 校注・訳（2000）『新編日本古典文学全集 17』（小学館）
- ・『うつほ物語』中野幸一 校注・訳（1999～2002）『新編日本古典文学全集 14～16』（小学館）
- ・『源氏物語』阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男 校注・訳（1994～1998）『新編日本古典文学全集 20～25』（小学館）
- ・『古今和歌集』小沢正夫 松田成穂校注・訳（1994）『新編日本古典文学全集 11』（小学館）

【中世】

- ・『住吉物語』『とりかへばや物語』三角洋一、石埜敬子校注・訳（2002）『新編日本古典文学全集 39』（小学館）
- ・『新古今和歌集』峯村文人校注・訳（1995）『新編日本古典文学全集 43』（小学館）
- ・『平家物語』市古貞次校注・訳（1994）『新編日本古典文学全集 45～46』（小学館）
- ・『狂言集』北川忠彦、安田章校注（2001）『新編日本古典文学全集 60』（小学館）
- ・大塚光信（2006）編『大蔵虎明能狂言集 翻刻 註解』（上巻）（下巻）清文堂出版
- ・笹野堅校訂（1942～1945）『大蔵虎寛本能狂言集』（上）（中）（下）巻 岩波文庫 岩波書店
- ・『中華若木詩抄・湯山聯句抄』大塚光信 尾崎雄二郎 朝倉尚校注（1995）『新古典日本文学大系 53』岩波書店

- ・松本隆信解題・校訂慶應義塾大学附属研究書編（1970）『斯道文庫古典叢刊之二 二百二十句本平家物語』汲古書院
- ・天理図書館善本叢書和書之部編集委員会編集（1978）天理図書館善本叢書和書之部第四十六番『平家物語』竹柏園本、下、八木書店
- ・小林千草（2003）『清原宣賢抄「日本書紀抄」本文と研究』勉誠出版
- ・江口正弘（2011）『天草版伊曾保物語影印及び全注釈言葉の和らげ影印及び翻刻翻訳』『新典社注釈叢書 21』新典社
- ・江口正弘（1986）『天草版平家物語対照本文及び総索引 本文篇』明治書院

【近世】

- ・『仮名草子集』谷脇理史 岡雅彦 井上和人校注・訳（1999）『新編日本古典文学全集 64』（小学館）
- ・『近世和歌集』久保田啓一 校注・訳（2002）『新編日本古典文学全集 73』（小学館）
- ・『浄瑠璃集』鳥越文蔵、長友千代治 大橋正叔 黒石陽子 林久美子 井上勝志校注・訳（2002）『新編日本古典文学全集 77』（小学館）
- ・『近松門左衛門集』鳥越文蔵、山根為雄 長友千代治 大橋正叔、阪口弘之校注・訳（1997～2000）『新編日本古典文学全集 74～76』（小学館）
- ・『洒落本 滑稽本 人情本』中野三敏 神保五禰 前田愛校注・訳（2000）『新編日本古典文学全集 80』（小学館）
- ・『英草紙 西山物語 雨月物語 春雨物語』中村幸彦 高田衛 中村博保校注・訳（1995）『新編日本古典文学全集 78』（小学館）
- ・『東海道中膝栗毛』中村幸彦校注（1995）『新編日本古典文学全集 81』（小学館）
- ・浦山政雄 松崎仁校注（1960）『壬生大念仏』（『歌舞伎脚本集上』『岩波古典文学大系 53』）岩波書店
- ・『一谷嫩軍記』国立劇場芸能調査室編（1985）『国立劇場上演資料集 245 一谷嫩軍記』東京 国立劇場
- ・『都鳥廓白浪』国立劇場芸能調査室編（1980）『国立劇場上演資料集 175 安宅の関；京鹿子娘道成寺；都鳥廓白浪』東京 国立劇場
- ・『当世下手談義』中野三敏校注（1990）『田舎荘子 当世下手談義 当世穴さがし』（『新日本古典文学大系 81』）岩波書店
- ・水野稔代表編者洒落本大成編集委員会（1978～1988）『洒落本大成』（全二十九巻、補

卷)

中央公論社〈全巻調査を行い用例があつた話のみを挙げる。〉

『新月花余情』 (『洒落本大成』第二巻〈作品解題中野三敏〉)

『遊子方言』 (『洒落本大成』第四巻〈作品解題中野三敏〉)

『妓者呼子鳥』 (『洒落本大成』第七巻〈作品解題浜田啓介〉)

『方言河東箱まくら』 (『洒落本大成』第二十七巻〈作品解題神保五彌〉)

- ・ 中村通夫校注 (1957) 『浮世風呂』 (日本古典文学大系 63) 岩波書店
- ・ 神保五彌 (2000) 『柳髪新話浮世床』 (中野三敏、神保五彌、前田愛校注・訳『洒落本滑稽本 人情本』新編日本古典文学全集 80) 小学館
- ・ 中村幸彦校注 (1962) 『春色梅兒誉美』 (岩波古典文学大系 64) 岩波書店

【近代】

- ・ 假名垣魯文 (1871~1872) 『牛店雑話安愚楽鍋』 (『明治開化期文学集 (一)』、明治文学全集 1) (1966) 筑摩書房
- ・ 坪内逍遙 (1885) 『一讀三歎當世書生氣質』 (『坪内逍遙集』、明治文学全集 16) (1969) 筑摩書房
- ・ 二葉亭四迷 『新編浮雲』 (1887~1889) (『二葉亭四迷 嵯峨の屋おむろ集』、明治文学全集 17) (1971) 筑摩書房
- ・ 嵯峨の屋おむろ 『くされたまご』 (1889) (『二葉亭四迷 嵯峨の屋おむろ集』、明治文学全集 17) (1971) 筑摩書房
- ・ 幸田露伴 (1892) 『五重塔』 (『幸田露伴集』、明治文学全集 25) (1968) 筑摩書房
- ・ 泉鏡花 (1895) 『夜行巡査』 (『泉鏡花集』、明治文学全集 21) (1966) 筑摩書房
- ・ 泉鏡花 (1895) 『鐘聲夜半録』 (『泉鏡花集』、明治文学全集 21) (1966) 筑摩書房
- ・ 泉鏡花 (1896~1897) 『一之巻・二のまき・三之巻・四の巻・五の巻・六之巻・誓之巻』 (『泉鏡花集』、明治文学全集 21) (1966) 筑摩書房
- ・ 尾崎紅葉 (1897~1902) 『金色夜叉』 (『尾崎紅葉集』、明治文学全集 18) (1965) 筑摩書房

【コーパス】

- ・ 国立国語研究所 『日本語歴史コーパス (CHJ)』 (コーパス検索アプリケーション『中納言』) <http://chunagon.ninjal.ac.jp/>
- ・ 検索サイトジャパンナレッジ <http://japanknowledge.com/> (共に 2019 年 12 月 10 日最終閲覧。)

●初出一覧

第1章 書き下ろし

第2章 書き下ろし

第3章 書き下ろし

第4章

- ・「古典散文作品における「カクテ」と「カカルホドニ」について」
(『詞林』第六十三号(2018年6月発行)大阪大学古代中世文学研究会、36-64頁に掲載。原題「中古和文物語作品における「カクテ」と「カカルホドニ」について」)
- ・「「サテ」の直前文を跳び越す用法について」
(『語文』第百五輯(2015年12月発行)大阪大学国語国文学会、59-73頁に掲載。原題同じ。『日本語の研究』第12巻3号「特集 2014年・2015年における日本語学会の展望」の「文法(史的研究)」の項<<仁科明氏執筆>>にて採り上げ。24頁。))
- ・「古典散文作品における談話分析―話者交替の位置に現れる「サテ」について―」
(『詞林』第六十二号(2017年10月発行)大阪大学古代中世文学研究会、28-49頁に掲載。原題「古典物語作品における談話分析―話者交替の位置に現れる「サテ」について―」『日本語の研究』第14巻3号「特集 2016年・2017年における日本語学会の展望」の「文法(史的研究)」の項<<宮地朝子氏執筆>>にて採り上げ。21頁。))
- ・「中古中世散文作品における転換の「サテ」について―接続詞の「サテ」に向かうものとしての―」
(『詞林』第六十五号(2019年4月発行)大阪大学古代中世文学研究会、28-49頁に掲載。原題同じ。))
- ・「中古中世散文作品における感動詞「サテ」の成立―前文脈を踏まえない「サテ」について―」
(『詞林』第六十四号(2018年10月発行)大阪大学古代中世文学研究会、47-62頁に掲載。原題同じ。))

第5章 「形式名詞+助詞」の形式をもつ接続形式(2)―「ホドニ」の形式―

(日本語文法学会第18回大会〈2017年12月2-3日:於筑波大学筑波キャンパスにて実施。)予稿集に加筆修正。原題「「ホドニ」の原因・理由を表す

意味の獲得について))

第6章 書き下ろし

第7章 「日本語接続詞「デ」の形式の成立について—文法化の観点から—」
(日本語学会 2019 年度春季大会 (2019 年 5 月 18—19 日 : 於甲南大学岡本キャン
パスにて実施。) 予稿集 41—48 頁に大幅に加筆修正。原題同じ。)